

# TS百合短編集

くえん

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

作者が欲望のままに書いたTS百合を掲載する予定です。

TS百合ということで、男とTS女の恋愛チックな絡みはないと思ってもらって間違いないです。というか作者が書きたくありません。

主に一話完結の短編形式で、各作品に繋がりはありません。あつたりなかつたり。

※この作品は、ノクターンノベルズにてマルチ投稿しております。

## 目次

冴えた倦怠期の乗り越え方	1 (短編)	1
斬新な方法で倦怠期を乗り越えた夫婦の、その後のお話	2 (短編)	34
TSしたせいで自殺まで考えた俺が、上司のお陰で立ち直るまで	3 (前編)	66
	4 (後編)	112
愛しても愛されたりない彼女を持つ彼氏が、彼女の彼女になるまで	5 (前編)	130
	6 (後編)	150
7 (エピローグ)		167
責任を取ろう		
8 (前編)		172
9 (中編)		182
10 (後編)		195
後編 (エロ)		215
11 (エピローグ)		234
おまけ作品集		
男の子の日 (幸平&美衣) Draft. ver		249
エピローグのその後 (アキ&amp; 凧咲)		254
エロ挟めなかったし分けなくていいよね? なエセ魔法少女編		276

## 冴えた倦怠期の乗り越え方

### 1 (短編)

朝起きてシャワーを浴びて、ご飯を食べて出社する。言葉にすればたった一行で片付く朝のルーティンが、人生を共にする人が一緒に居ることで別物のように風景が変わる。大学の頃から通算して8年ほど一人暮らしを続けてきた東幸平は、妻という存在の大切さを十分理解しているつもりだ。

一年の交際期間を経て結婚した妻と、お互いが出社するまでのわずかな時間一緒に過ごすだけで、一日精力的に働く活力を得られる実感があるからだ。つらい残業も、共働きとはいえ彼女との幸せな生活が自身の双肩にかかっているのだと思うと頑張れる。ただただ惰性で就職し、汗水たらして働いて、目的もなく生きながらえている状態だった頃より、格段に良い生活ができていると彼は思っていた。だから、妻には本当に感謝している。結婚式で初めて妻の顔を見た友人たちからはタコ殴りにされる勢いで揉みくちゃにされたし、妻の友人たちからはしっかりと彼女のことを頼まれた責任もある。ようやく案件も一人で任せられるようになってきたし、ここが一番の頑張りどころなのだとは彼は張り切っていた。

そんな、幸せの絶頂にいるはずの彼の朝はというと。

「……」

「……」

小鳥が囀る声と朝のニュース番組の音が、空しく耳朵を打つ。彼女の用意した朝餉を、二人とも笑みを浮かべることなく言葉を交わすこともなく、ただただ口元に運んでいる。

この夫婦が言葉を交わしたのは、たった三言のみだ。おはよう、いただきます、美味しいね。そして返答にありがとう。ここ最近、朝はこれの繰り返しである。

…別に喧嘩しているわけではないのだ。勿論嫌いになったわけでもないし、一緒に居ることが嫌なわけがない。ただ単に、何も話すこ

とがないだけで。モヤモヤした思いを抱えながらも、口に出すことはない。

「……ちそうさま」

「もう行くの?」

「うん。朝一会議があるからね。準備もあるし」

「そっか…今日も遅い?」

「10時までには帰るさ。帰るときは連絡するよ」

「わかった。いつてらっしやい、幸平さん」

「いつてきます。美衣ちゃんも気を付けてね」

僕にはもつたいない、と心底思っている綺麗な彼女とフレンチキスを交わして、彼は家を出るのだった。ここ何か月か繰り返しになっている、朝的一幕。

いつからだろうか、自然と笑顔が減り、口数が減り、あれだけ明るい色で彩られていた部屋が、どんよりとした雰囲気に含まれるようになったのは。何がきっかけだったのだろうか、僕が自然と彼女を避けてしまうようになったのは。考える限り理由があつたわけではないし、お互い嫌いあつているわけでも絶対はない。なぜって、夜の行為はしっかり致しているのだ。……まあ、昔に比べて格段に回数は減ってしまったけれども。

昔は彼女のことを頭に浮かべるだけで、些細な事で一喜一憂し毎日が楽しかったのに、今ではこれからの心配ばかりが連想されてくる。

早めに出たことで比較的空いている電車で揺られ、誰もいない会社一番乗りで出社すると、さつさと会議の準備を終えて、会議までの時間を休憩所でぼーっと過ごす。

自然と重たいため息が出てくる。ここ数か月ですっかり癖になつてしまった行為は、白い吐息となつて外気で冷え切った休憩所の空気に溶けていく。左手に嵌っている結婚指輪を撫でながら、暖代わりに買ってきたコーヒを開けずに手で持ちつつ余つた時間を無為に過ごしている。

「おいおい、朝から景気の悪い奴だな…今日も残業確定だつてのに、お前のため息でお出迎えとは気分が悪いぜ」

「ああ、ごめん。おはよう、高橋」

ベンチに腰掛けていた僕に声をかけてきたのは、同僚の高橋雄吾。180はあるかというガタイの良いスポーツマン然とした佇まいの男である。話すようになってきたきつかけは何だったか、健康診断の折に何かをあつたような気もするが、詳しくは覚えていなかった。

高橋は口に煙草をくわえた状態で、片手をあげて挨拶を返してきた。昨今の禁煙の流れはうちの会社にも襲い掛かり、今では室内は全室禁煙で、タバコは屋外に設置されたこの休憩所でしか吸えないのだ。

「最近浮かない顔ばかりしやがって、あの美人のかみさんと喧嘩でもしたのか？ それとも遂にお前の浮気がばれたか」

「お前と一緒にするなよ、別に喧嘩なんてしてないさ…聞いたぞ、また彼女と別れたんだってな。学習しないよね、高橋も」

「痛いところつくなあ。仕方ないだろ、向こうから誘ってきたんだ」

バツが悪そうに顔を背けながら煙草に火をつける。もし自身が女なら、ぽんぽん浮気するような軽い人間のどこが良いのかと思わんばかりだが、人付き合いは良いし実際悪い男ではないのだ。仕事で困っていれば真っ先に手を差し伸べるし、いざとなれば上司に噛みつく勇氣もある。プライベートはだらしない奴だが、どうにも憎めない男。いまだに名字でお互いを呼ぶ間柄ではあるが、それはあだ名や下の名前前で呼ぶタイミングを失っただけであり、十何人かいる同僚の中でも、幸平はこの高橋を人一倍信頼していた。

「俺の話は良いんだよ、お前のかみさんの話だ。喧嘩じゃないっていうと、一体何があつたのさ。これで子供ができたとか、のろけだったらぶん殴るぞこの野郎」

「違うつてば、そんな大事じゃないよ。うーん、なんて言ったら良いか…嫌いになったわけじゃないけど、なんだか口数が減ってるというか、ちよつと距離を置いちやつてるというか」

いろいろ思うことはあるのに、いざ言葉に出そうとすると口が詰まってしまう。表現に困るといふか、現状を的確に表す言葉が思いつかないのだ。

もごもごしている僕を見て答えを察したのか、高橋は呆れたような表情を浮かべながら口を開く。

「それ、倦怠期じゃないの?」

「…倦怠期、かあ」

結婚する知り合いが増え、耳にする機会が増えてきた言葉。喉に刺さった魚の骨が取れるように、途中で引つかかって出てきそうになかった言葉が出てきてすつきりすると共に、なんだか陰鬱とした気持ちが始まる。

冷気で若干冷めてきた缶コーヒーのプルタブを起こしながら、とつとつと思いを語る。

「倦怠期なんて、来るわけがないと思ってたよ。普通結婚する前に来るって聞いてたし…」

「んなわけないだろ…倦怠期が来ないなんて、幻想の中の話さ。本人たちが気づかないレベルでも、少なからずあるもんさ。お前、北野さんと付き合いだしてから何年経ってると思ってるんだ。十分お前は来なかった方だよ」

今の会社に入社し、意気投合した高橋と、もう一人同僚を含めた男三人女三人でやった初めての合コン。東夫妻の出会いはこの合コンだった。北野美衣。長い黒髪の良く似合う、笑顔の可愛い美人で、家事炊事もそつなくこなし、友人も多い。気立てもよく、悪口を言っている人間などであったことがない。全く隙のない、男性の理想のお嫁さんを体現したような素晴らしい女性である。

そんな人と付き合えば結婚できたことは、幸平にとって望外の幸せであることは疑いようがない。だからこそ、愛しい美衣の事は何よりも優先するし大切にしてきたのだが…

最近、確かに少し距離を置きたがっているというか、手を出すのに躊躇っている自分があるのも間違いじゃなかった。夜の相性だつて悪くない。が、自然とここ一か月ほどはご無沙汰だった。

日頃、一緒に居るだけで幸せで、飽きるわけもないのに、しばらく距離を置きたいと思っっている自分がある事に自己嫌悪が止まない幸平に、高橋も鬱屈とした空気が伝染したようにため息を吐き出す。

「倦怠期くらいでそんなに落ち込むなよ。嫌いあつてるわけでもなし、それは向こうもわかつてるさ。」

……はあ、初めて見たぜ、こんな奴。これが別れたたかなら、合コンセツティングしたり、風俗にでも誘って一発なんだがな。

今日お前がプレゼンする会議があんだろ？ 当面はこれでも飲んで気合入れろ、俺からのおごりだ」

高橋が下投げで何かをこちらに向かって投げ渡す。俯き気味で前をよく見ていなかった僕は、慌てて顔を上げ、飛んでくる飛行物体をキャッチする。まじまじと手の中に納まったものを観察すると、それは缶ジュースと同じくらいの大きさの瓶に入った栄養剤だった。くりりと回してパッケージを見るが、CMですら見たことのない商品名である。

「……何だこれ、こんな製造メーカー、見たことも聞いたことも無いぞ」

「ウチの傘下のメーカーらしいぞ。今度新しいのを出す試供品なんだと」

「ふうん……。わざわざありがとう、高橋。結構高かったんじゃないか？」

「気にするなよ。廊下に沢山置いてあつたからな」

「そうか廊下に沢山……。うん？ おい、それ会社に来てる差し入れだろう!？」 試供品ってそういうことか!？」

「ははは、会議には遅れるなよ!!」

高橋は吸っていたタバコを吸い殻入れに叩きこむと、高笑いを残し逃げるように休憩所を去っていく。

怒った風を装ってはいたが、それは高橋なりの励ましなのだ、長い付き合いである僕はよくわかつていた。倦怠期、改めて意識するその課題はひとまず置いておき、まずは目の前の会議だと、僕は有難くその差し入れをぐいっとい一飲みにし、高橋の後を追って休憩所を出るのであった。



栄養剤の効果が効いたのか、プレゼンも無事に終了して円満に会議は終わり、幸平は達成感と共に残りの業務を片付けていたのだが。

「おい東、大丈夫かお前」

「……うん？」

時刻にして3時ごろだろうか。タイピングとコピー機の稼働する音が響く、適度に緊張感で引き締まったオフィスの空気を割いたのは、そんな高橋の言葉である。

「顔真っ赤だぞ。熱でもあるんじゃないか？」

集中していたのか、掛けられた声にぼうつとした顔で体面に座る高橋の顔を見る幸平は、確かに酒でも飲んでるかのようになり潮が紅潮していた。

確かに異様に喉は乾くし、タイピングも安定せず誤字が多いなど思っただけだ。だが、病気だとは露ほども考えていなかった幸平にとっては寝耳に水である。

「全然大丈夫だけど、そんなに赤い？」

「いやいやいや、誰がどう見ても大丈夫とは言わないでそれ」

「顔真っ赤じゃないですか!?! 東さん大丈夫です!?!」

高橋の言葉に集まるオフィスの目。真っ先に、事務の女の子がそう幸平に声をかける。

多少の風邪ならうつる恐れはあるものの、無茶して出勤くらいはするだろうが、明らかに異常だとわかる発汗に、ふらふら上体を揺らしている姿はどう見ても正常ではない。

今にも倒れそうな幸平の姿に気づいた上司が、さっさと帰るように命令を下す。

「これが昨日なら話は別だがな。その様子はただ事ではなさそうだし、無理はするな。高橋、悪いがこいつの仕事継いでやれ」

「流石にそれは断れませんね……おい東、そういうことだ。さっさと帰る準備しろ」

「いや、別に大丈夫——」

先程の会議の議事録も作りかけである。せめてこれは仕上げると、

抗議しようとして席を立とうとするが、くらみが幸平の意識を襲い、体の制御を失った幸平はイスに再び座り込んでしまう。

「言わんこつちやない。ほら、ロッカーのキー貸せ。コートとカバン取ってきてやる。久美ちゃん、悪いけどタクシー呼んどいてもらえない？」

「わ、わかりました！」

パタパタとかけていく事務の久美ちゃんを見送りつつ、ロッカーのカギを高橋に渡す。

「わ、悪い……」

「気にするなよ。根を詰め過ぎてこつた。いい機会だし、治るまではかみさんとゆっくりしとけよ」

「……すまん」

「治ったら酒でも奢ってくれりやそれで良いさ」

こういう行為をサラツとできる辺りが、浮気性のくせに女性にもてる秘訣なのだろう。虚ろな意識で幸平はそう思いつつ、高橋に感謝するのであった。

とんとん拍子で決まった退社準備はあつという間に終わり、幸平は10分後にやってきたタクシーで早めの帰宅の途に着いたのだった。

幸平さんとの出会いのきっかけでもあり、結婚式の仲人も務めた高橋さんから久しぶりに連絡を受けた私は、務めている勤務先から早めに退社し、急いで帰宅している最中だった。

幸平さんが会社で倒れかけ、半休を取って早退した……

気が急いで仕方なかった。事前に調子が悪かったならまだわかるが、朝は何ともなかったのに、半休を取らなければいけない程症状が重いとは思わずびっくりするとともに、心配で仕事が手につかず、結局私も早退する羽目になってしまった。

私は事務仕事だし、早退はそれなりに嫌な目は向けられるもの容易である。しかし、基本的に残業で忙しい上に繁忙期である幸平さん

の会社は、事前に申請していたとしてもなかなか許可が下りないくらい、そう簡単に休暇は取らせてくれない会社である。それが早退を促すくらいだというと、病状はかなりのレベルのはずで、余計私の心配は募っていくのだった。

最近、気持ちのすれ違いが続いていた幸平さんに、不満が無いとは言わない。それでも朝と夜のキスは欠かさずしてくれるし、仕事が終わったら家にすぐ帰ってきて、美味しそうに夕食を食べてくれる幸平さんを嫌いになるなんてことは絶対にならない。そう、倦怠期なのは何となくわかつているのに、それでもちやんと私を気遣ってくれる優しい幸平さんを、私は好きになったのだから。

幸平さんが倒れるというきっかけのおかげで改めてそう思えた私は、熱冷ましや薬などを薬局で買い込み、熱が出ていても食べやすそうなものを中心にスーパーで食料品を買おうと、ビニール袋を両手に下げて帰宅した。

「ただいま。幸平さん……？」

幸平さんの靴が脱いであつたことから、家には無事帰れたみたいだ。リビングに入ると、寝苦しそうな幸平さんの寝息が寝室から聞こえてくる。部屋に脱ぎ散らかされたスーツやYシャツが、熱を持ったまま放置されている。なんとか寝間着には着替えたようだが、片付ける余裕はなかつたようだった。

荷物をまずテーブルの上に置き、脱皮したように抜け殻だけが放置された服をハンガーにかけてから寝室の扉を開けると、敷かれた布団で寝ている幸平さんの姿があつた。

大量の汗をかき、息苦しそうに呼吸を繰り返す幸平さんを見て、急いで駆け寄る。

掌を額に当てると、かなりの熱が伝わってくる。九度近い、いや、九度は確実に超えている熱だろう。

「幸平さん、大丈夫ですか？ 意識はありますか？」

頭もとに座り、買ってきた薬等を手早く用意しつつ幸平さんに声をかける。起こすのは悪いと思つたが、私が傍にいと伝えるだけでも大分違うと思つたのだ。

呻き声を上げていた幸平さんは、うつすらと目を開けると、私に視線を合わせる。

「美衣、ちゃん……？」

「はい。幸平さんが心配で帰ってきちゃいました。熱は大丈夫ですか？」

「ダメ、みたい。熱で身体中が痛いよ…寝返りもきつい」

「そうですか、何かあったら言ってくださいね、すぐ駆け付けますから」

「ありがとう……」

苦しそうにしていた表情が、私を確認して安心したのか、心なしか安らかな表情になる。私がいるというだけで楽になるなら、帰ってきた甲斐があった。熱冷ましを張ったり身体を拭いてあげたりと幸平さんの世話を焼いてあげていると、すぐに目を閉じて寝息を立て始める。私は一安心すると、枕元にスポーツドリンクなどを置き、音をたてないように部屋を出た。

しばらくはぐつすりと寝ていたのだが、高熱のせいか、熟睡していてもすぐに起きてしまうようだった。食欲は無いようで、その都度なんとか水分だけは取らせることにして、治ることを祈るしかなかった。とても動けそうにないため、病院に行くにしても症状が落ち着いてからになりそうだった。苦しそうな呻き声が時折聞こえ、直接の助力にはなれない自分に歯がゆさを感じつつも、看病を続けるしかない私。

二人で選んだ時計の針が頂点で重なり合う。日付の変更を知らせる小さめの音楽が鳴り始め、軽く仮眠を取っていた私は目が覚める。気づけば、目を跨いでしまったようだ。

秒針が時を刻む音と、症状が大分落ち着いたので、幸平さんの静かな呼吸音が私の鼓膜を打つ。

様子を見に行くとともに、症状が悪化してはいけないと、汗を拭くべくタオルをもって部屋に入る。

日頃は清潔にしている幸平さんでも、流石にあれだけ汗をかけば、流石に部屋中に汗の匂いが充満している。空気清浄機のおかげでか

なりマシなもの、入った瞬間に鼻につく程度には気になってしま  
う。

その中に感じる、甘い匂い。それはチョコや甘いお菓子のようなあ  
からさまなモノではなく、街中ですれ違った瞬間、さり気無く香る香  
水のような。何と形容すれば良いのか……そう、高校時代、バレエ部  
だった私が部室で感じていたような、あの微かな匂いだ。

「……幸平さん？」

匂いの発生源になりそうなのはスポーツ飲料くらいだが、零れてい  
るわけでもなさそうだ。じゃあ誰かが何か持ち込んだのかと言われ  
ればそれも違うだろう。いくら私も寝ていたとはいえ、誰か来たのな  
ら気づかない訳が無い。

幸平さんは顔の半分まで覆い隠すように布団を被り寝ているよう  
だった。

何ともなさそうではっきりとする。私の掛けた声で起きてしまったの  
か、幸平さんは目を覚まして私に視線を向ける。

「美衣ちゃん？」

「すみません、起こしてしまって。体を拭きに来ましたけど、起きられ  
ますか？」

「うん、熱は引いたみたいで大分楽だよ。今度は、ちよつと寒くなつて  
きたけど」

「そうですか、なら少しエアコンの温度を上げ……？」

布団の中でもぞもぞと体を私の方に向けながら、幸平さんはぶるり  
と震えていた。慌てて、適温で稼働させていたエアコンの温度を上げ  
ようと幸平さんに近づくとつれ、違和感は増大していく。寝返りした  
際に、布団からこぼれた髪の毛。

（幸平さんの髪の毛って、あんなに長かったかしら？）

布団から覗く幸平さんの顔にも違和感が。妙に、睫毛が長くて女性  
的に感じられる気がするのだ。けほ、とたまにせき込む声にも妙な色  
気があるような……いや。そもそも、その声だ。幸平さんの声を、僅  
かにハイトーンにしたような声。風邪をひいて声が枯れてしやがれ  
ることはあつても、声が高くなるなんてことは無い。

「ありがとう美衣ちゃん。今、身体を起こすから…」

幾つもの疑問を抱えつつも、目の前の幸平さんは、寒そうにしながらも体を起こす。そして、露になるその身体に私は驚きを隠せず、思わず大きな声を出してしまおうった。

「ええ!？」

「ありがとう美衣ちゃん。今、身体を起こすから…」

美衣ちゃんの看護のおかげで、随分と軽くなった身体を布団の温もりから無理矢理引きはがす。

「本当にごめんね、美衣ちゃん。早退までさせちゃった上に、風邪ひいた僕の世話までさせちゃって……」

「え、ええ、それは良いんですが、その。幸平さん？」

今までの僕の態度に思うところもあるだろうに、それを押し隠して親身に看護してくれている事に、申し訳なさで、胸が圧迫されているかのように息が苦しかった。

「僕はずっとあんな態度してたのに、美衣ちゃんはこんなにも優しく……僕、何してるんだろうって」

「幸平、さん……」

意識がもうろうとするほどの熱が引き、今度は大切なものを失ってしまったかのような寒気ばかりが、弱った僕の身体を襲う。自分への不甲斐なさで自己嫌悪が止まず、両手で身体を抱えて、一人寒気に何とか耐える。

「僕が悪いのに、ここ最近ずっと美衣ちゃんに迷惑かけてるのに……謝る言葉すら出てこない僕が、情けなくて仕方ないんだ。」

こんな良いお嫁さん貰って、絶対幸せにするんだってあの時誓ったのに……病気がきっかけじゃなかったら、今でも言い出せてなかった。僕は、美衣ちゃんの夫として失格だ」

弱り切った身体に引つ張られたのか、美衣ちゃんを前に弱音ばかりが口を突いて出てくる。今までの行いは後悔ばかりで、嫌われても仕

方ない。

エアコンは効いているのに、寒空の中、着の身着のまま放り出されてしまったかのように、全身の身震いが止まらない。美衣ちゃんには嫌われたらうな、そう思うだけで悪寒は更に増し、僕に一人の寂しさを思い出させる。

そのどうしようもない喪失感に感情が制御できず、涙腺が緩んだのか、目元からぼたりと、胸の前で交差した腕の上にしずくが一滴落ちた。

一人、幸平さんらしき女性の独白を聞いていた私は、気づくと笑みを浮かべていた。それは、泣いているこの人の涙を見て悦に浸っていると、そんな人でなしな理由ではない。

やっぱり、私がこの人を選んだのは間違いないんじゃないかじゃなかった。

その安心感が、私の心の内に暖かな感情を抱かせ、動揺し固まっていた表情を緩めていた。

最早私は、幸平さんの面影を見せるこの娘が、幸平さん本人だということとは疑っても居なかった。性別が一晩で変わるといふ非日常極まる現象でも、私が目の前の女の子を幸平さんだと信じた理由なんて、夫婦の絆としか言いようがなかった。口調くらいはいくらでも真似できるだろうが、気になった点はそこではない。言動と共にそこかしらに表れている、彼女の癖や思いが、自然と彼女を幸平さんだと認識させたのだ。

すれ違う日常に幸平さん自身が一番傷ついていたのは、私が寝てしまった後、一人起きてやけ酒を飲んでいたので知っていた。毎日少しずつ減っていく、戸棚に隠したお酒。私に負担をかけないようにという気づかいは、隠しているようでしっかり私に伝わっていた。

今でもそうだ、凍えて身体を抱きかかえている幸平さんの左手の薬指には、しっかりと私との結婚指輪が嵌っている。お風呂に入るとき以外四六時中付けているそれは、毎日磨かれ今でも新品同様であり、

たつぷりと彼の愛が詰まっている。寝ている最中ですら外さないそれを他人に渡す訳もなく。幸平さんと同じように、無意識にその指輪を擦っている癖を見せる彼女が幸平さんだと断定するのに、これ以上の証拠は私的には無かったのだ。

……それに。結構強がりな幸平さんの弱音なんて、初めて聞いたというテンションも私を手伝っているのかもしれない。何かあっても飲み込んで我慢しがちな幸平さんの本音、恐らくは病気で弱った精神に加え、根本から変わってしまった身体への不安が彼を揺るがしているのだろう。初めて見る弱気な彼の姿に、私は可哀想と言う感情を抱くと共に、愛しい思いが溢れてくる。

だからこそ私は、普段と同じかそれ以上の愛情を、目の前の彼女に捧げられるのだ。

「そんなことありませんよ。幸平さんは、私の最高のお婿さんです」  
後ろから、ぎゅっと抱きしめる。背丈と共に肩幅も小さくなり、すっぽりと私の胸の中に納まる小さな体が、びくつと震える。

「毎日毎日、今の関係をどうかしようと思っていて、頑張ってくれてたのは伝わってます。そんな幸平さんだから、私は大好きになったんですから」

幸平さんの冷え切った身体に、むにゆり、と背中に押し付けられる私の乳房越しに、とくんとくと私の体温が伝わっている。

こんなコミュニケーションさえ、最近では取れていなかった。肌が触れ合うこの暖かさは久しぶりで、無性に嬉しさがこみ上げてくる。それは幸平さんも一緒なのか、恐る恐る、自分を抱きしめている私の手に、冷たい手を重ねてくる。

「美衣ちゃん」

「はい。なんですか？」

「ごめんね……？」

「ふふ。私、謝られるようなことされてませんよ」

謝罪の言葉は、私は好きではない。日本人は言いがちだが、私はそれよりも大好きな言葉がある。謝意ではなく、感謝を示す言葉。

すりすり、私の薬指に嵌った結婚指輪を撫でる幸平さんが、いつも



私に言ってくれている言葉。

「…ありがとう、美衣ちゃん」

「どういたしまして、幸平さん」

倦怠期を迎えていた時でも繰り返していた言葉、いつもと同じ光景なのに、今では言葉に籠る感情がこんなに違う。伝わる思いがこんなにもある。悲嘆に暮れていた言葉に正の感情が宿る。私と幸平さんの心は温まり、表情から笑顔があふれだす。

その表情を見て私は、改めてこの人を好きになって良かったと、心の底から思えた。

——そう。まさか、こんな娘が私のお婿さんだなんて、夢の様だ。

「幸平さん。まだ寒いですか？」

「そう、だね。美衣ちゃんが抱き着いてくれて、少し気恥ずかしいし暖かいけど。まだちよつと寒い、かな」

幸平さんの首元に顔を寄せると、すっかり馴染んだ女の子の香りが私の鼻孔をくすぐる。幸平さんの体臭にも似た女の子の、汗の香り。肺一杯に満たされる幸平さんの香りに、陶醉にも似た高揚感が私に満ちる。

「んんっ。」

「しゃ、シャワーも浴びてないのに、匂うでしょ？」

「んーん？ とつても、良い匂いですよ……」

「良い匂いって、恥ずかしいよ美衣ちゃ——ひゃうっ!？」

ぺろり、と首筋に舌を這わせると、幸平さんから初心な女の子のような悲鳴が上がる。

寝汗で少し塩辛い味と、女の子の甘い体臭が合わさり、何とも言えない感覚が舌に走る。

「寒いなら、暖を取らないといけませんよね。でも、エアコンも効いていないようですし、布団の中に潜っても寒いなら。身体の中から温めるしか、ないですよね」

「み、美衣ちゃん……?」

後ろから抱き着かれている幸平さんに私の表情は見えていないだろうに、何か良からぬ予感を覚えたのか、幸平さんは身じろぎして、抱

擁から拘束と化した私の腕を振りほどこうと身じろぎする。が、熱で弱り、身体がすっかり変わってしまったことでその抵抗に力はなく。私のいたずらを受け入れるがままになってしまっていた。

肩辺りに回していた腕は徐々に高度を下げていき、一日前は引き締まっていた胸筋に手を添えると、今では柔らかな双丘と化した胸をやわやわと揉みしだく。

「ん、んんっ。」

な、なんか胸が変なんだけど……」

鼻から抜ける甘い声に、私の機嫌は更に上昇していく。

「大丈夫です、安心してください。その身体の扱い方は、私が良く知っていますから。」

幸平さんは、私に身を任せていただければそれで良いんですよ……？」

「任せるって、美衣ちゃん何を……ひうつ!?!」

するり、と空いたパジャマの胸元から両手を突っ込むと、下着と言う防護服を着たこともない、はち切れんばかりに期待してしまっている突起を、同時に刺激してやる。そうするだけで、見知らぬ快樂にビクン、と幸平さんの身体が跳ねる。その声が、動きが、ここ一か月お預けを喰らっていた私の性欲に火をつけてしまう。もっと言え、女の子相手は何年と間が空く。それも、相手は初めてと言つても良い。何という幸運、据え膳食わぬはなんとやらだ、と期待に胸を膨らませ、唇をぺろりと舐める。

「力を抜いて、私に委ねてください……悪いようにはしませんから」

突然豹変した美衣ちゃんの様子に気が動転しつつ、僕は未知の感覚と戦っていた。夜の行為となると貪欲になる彼女だが、病気の僕を無理矢理襲う程肉食系ではなかったはずだ。そして、肌を舌でなぞられる感覚に、胸を揉まれ、終いには乳首をつねられて変な声を漏らす始末。病気が原因で敏感になっているのだろうか、と美衣ちゃんの手が

侵入する胸元を見下ろすと。そこには、僕が男として二十数年生きてきた経験をもつてしても、見たこともない光景が広がっていた。

大きく開かれたパジャマから覗く胸元は、ふつくらと膨らみ柔らかそうな丘を形成していた。その頂点には、ピンと隆起したピンク色の物体が美衣ちゃんの手でこりこりと虐められている。その度に、胸から脳に駆ける快感と、その光景による衝撃で、僕は目を白黒させながら喘ぐしかない。

「んふうっ！」

み、美衣ちゃんなにこれえ……」

「なにこれって、……もしかして、気づいてなかったんですか、幸平さん？」

僕の声にピタリと手を止める。今でこそマシになっているが、今も少し意識は霞みがかつてるし、ちよつとの変化なんて気づくわけないじゃないか、という言葉を飲み込みつつ、静かに頷くと、美衣ちゃんは部屋に置いてある手鏡を僕の前に持つてくる。

「すみません、結構大胆に変わっていますし、てつきり気づいているものだとばかり……」

心して見てくださいね、幸平さん」

差し出された手鏡を受け取り、その中を覗くと、その中には。

美衣ちゃんの横に映っている、少し青ざめた顔をした僕によく似た女の子が目についた。

「……」

びつくりしているのか、ぽかんとした様子で目を見開きこちらと目を合わせるその女の子。睫毛は長く、肩にかからない程度のセミロング気味の黒髪は汗でべったりと額に張り付いていたが、その美貌を損なわせてはいなかった。町ですれ違えば、振り返りはしないものの、印象には確実に残りそうな美人だった。少なくとも、あの高橋なら粉はかけそうだ。僕も、興味はひかれるだろう。……それが、非常に自分に似ていることを除けば。

頬に手を当ててみると、全く同じ動きを返してくる様子から察するに。色々と疑問に思うことはあるが、まず間違いないだろう。この女

の子。

「これ、僕……？」

僅かにトーンの高くなった声が、女の子の口から零れる。

鏡の中の女の子は自身の思うままに動かせるが、明らかに別人だ。いたずらにしては手が込みすぎているが、ただ女装させられたわけでもなさそうだった。明らかにウィッグでは済まない指通しの良い髪の毛に、美衣ちゃんにいられて敏感に未知の快感を送り込んでくる、以前に比べて随分ふつくらとした胸部装甲。下半身はどうしても怖くて見ることはできないが、感触から男の象徴が無いのは明らかである。以上、状況証拠から推察するに、どう考えても、今の僕の身体は女の子の生身であった。

、感触から男の象徴が無いのは明らかである。以上、状況証拠から推察するに、どう考えても、今の僕の身体は女の子の生身であった。

こんな小説や漫画みたいな現象、普通ならあり得ないと一蹴してしまうところだが、不思議と、これが現実なのだと思えて止めている自分も居たし、現状を受け入れつつあった。それは、僕の面影を残しつつ絶妙に様変わりしてしまったせいなのか、それとも、面影があるとはいえ明らかに性別すら違う今の僕を、当たり前のように東幸平だと認識して受け入れてくれていた彼女の存在があるからなのか。

「みたいです。帰ってきてからずっと幸平さんの傍で看病していましたが、気づいたら女の子になってしまっていて……」

現実感のない僕を引き留めているのは、手鏡を渡した後、再び抱き着いている美衣ちゃんの柔らかな胸から伝わる、美衣ちゃんの心音だった。普段なら興奮で動機が凄い事になっている筈だが、その一定で刻まれるリズムは、不安で乱れていた僕の心を徐々に沈めていく。

「よく、性別も違うのに僕って信じてくれたね」

「それはもう、大好きな幸平さんの事ですから。」

いつも私の事を心配してくれていることや、不安な時、考え事してる時に無意識に結婚指輪を撫でる癖なんかも、全部知っています。

ちよつと見た目が変わったくらいで嫌いに成る程、私は簡単な女じゃないですよ」

「全然ちよつとじゃないと思うんだけどな……」

苦笑しつつも、その無茶苦茶な理論が今は頼もしかった。最初は身体の変化等全く気付かず美衣ちゃんと話していたわけだが、もし僕が東幸平だと信じてもらえていなかったらと思うとぞつとする。僕は本当に、良い女性をお嫁さんに貰った。

——僕は感謝を胸に抱きながら、必死に襲い来る美衣ちゃんの魔の手を払いのけていた。

「そんなことないですよ、今も昔も、幸平さんったら昔からとっても可愛くて、可憐で……私とセックスしてる時、気持ちよくてだらしなく緩んじやいそうな顔を、必死に男らしく見せようと頑張ってる時も、先程の私に謝ってくれた時の涙目で潤んだ顔も、きゅんときて私はとっても好きですよ」

「いやいや、今はともかく前はちゃんと男だったからね!! 別に可愛くなかったからね!! だから服を脱がせようとする手を止めなさい美衣ちゃん!」

美衣ちゃんは明らかに興奮している様子で、荒い鼻息と時折漏れるはあ、という色っぽくも熱い吐息が、僕の首筋に当たり、二人の体温を上げていく。

話は終わった、さあ続きだと言わんばかりに、美衣ちゃんの左手は僕の胸をはだけさせ、右手はまだ見ぬ下半身に潜り込もうと侵攻を繰り返していた。

興奮のあまり美衣ちゃんの口から涎が垂れ、完全に無警戒だった僕の背中に流れ込むと、背筋を伝う自分の体温以外の温度を持つ液体の感覚に僕は情けない声を漏らす。

「ひゃっ!」

「ああ、とっても可愛い声……」

大丈夫です、全部私に任せてください。私が手ずから、女の子の身体の扱い方も、気持ち良い所も、全て教えて差し上げます……」

「いいから、やめて!! 女の子になっちゃった僕を、僕だってわかってくれたのはすごく嬉しかったけど!!」

変わっちゃった本人よりすんなり、この身体を受け入れるのはやめ

てくれないかなあ!？」

まるでケダモノのように、僕の身体を貪らんと魔手を伸ばそうと間違った方向へ努力を繰り返す美衣ちゃん。ああ、これは完全にスイツチが入っちゃってる……下着なんてつけているわけが無いから、実質最終防衛ラインであるぶかぶかになったパジャマを守るべく、布団上で美衣ちゃんと攻防を繰り返しているが、そう遠くない未来陥落する予感に、僕は遠い目をするばかり。

そう、美衣ちゃんは昼間は一步下がって夫を立てるような大和撫子のような女性なのだが、夜はかなりがつく肉食系女子になってしまふのだ。倦怠期になる前は最低でも週に4日は欠かさずそういう行為をしていたし、多い時は毎日盛っていたこともある。僕自身、嫌いではないが特段好きでもなかったし、大好きな美衣ちゃんに求められているからやっている節があった。それが倦怠期になってからは格段に回数は減り、直近で美衣ちゃんとやったのは1か月前だっただろうか。そう、この美しい野獣は、とても性欲に飢えているのだ。そんな前に放り出された、仲直りしたばかりのとっても可愛い女の子。しかも、これが僕自身でなければドキっとしてしまう程、疲労でくたつたとしていて、何とも言えない色気を感じさせているのだ。時折、昼間でも可愛い系のアイドルを見ると、ボソツと美味しそう、だなんて呟く彼女である。恐ろしくて聞いたことは無いが、たぶん女性でも美味しく頂けるのであろう美衣ちゃんが、こんな娘を見てしまったならば、そりやもう食いづくに決まっていた。

一度火のついた美衣ちゃんはそう簡単に止まらない上に、今は病み上がりで慣れない身体というハンデを負っている。その上、今まで僕が美衣ちゃんを避けていたという罪悪感があり、この見知らぬ身体で襲われるという僕の抵抗感を少し軽減してしまっていた。

そんなことを考えていたからか、油断していた首筋にすーつと舌を這わせられると、ぞくぞくとした快感が全身に走り、力が抜けてあっさりとして勝敗は決する。

「ひうっ」

「んんん」

ようやく手中に収めた獲物に、ケダモノはいかにも嬉しそうな声を出すと、脱力しきつた両手を左右によけ、パジャマのボタンを一つずつ外していく。徐々に露になる肌、美衣ちゃんは舌なめずりしながら、その絶景を僕の肩越しに眺めている。かくいう僕も、美衣ちゃん以外では初めて見る女性の胸に、今では自分の物なのに胸の高鳴りが止まらない。

「程良い大きさに綺麗な形。大きすぎず小さすぎず、私好みの美乳です」

「は、恥ずかしいよ美衣ちゃん」

「でも幸平さん、恥ずかしがってる割には貴方の出来立っておっぱいは、期待に満ち溢れているみたいですよ……?」

耳元で囁きながら、美衣ちゃんは僕の胸に愛撫し始める。布越しではない、肌と肌が直接触れ合つての刺激は格別の心地で、ただ触られているだけで強烈な快感を僕に送り込んでくる。

びくり、と肩が跳ね、その様子に美衣ちゃんが更に笑みを深める。

「怖い、ですか?」

「そりや、気づいたらこんな身体にされて、いきなりえっちだなんて、その、心の準備は出来てないけど……」

美衣ちゃんが初めての相手なら、良いかなって」

「……」

これが男相手に襲われているのなら死ぬまで抵抗するが、今僕を抱きしめているのは大好きな美衣ちゃんである。この頼り気のない身体を託すのに、これ以上信頼を置ける相手はいないのだ。嘘偽りのない正直な気持ちを吐露すると、美衣ちゃんは突然黙り込む。え、何か変なこと言ったかな、と首を傾げて訝し気に美衣ちゃんを見ていると、美衣ちゃんはぶるぶると震えだし、突然僕の胸の突起をぎゅむつと握りつぶす。

「んぎゅあつ!?!」

「ああ、ああ!! 幸平さんったら可愛すぎです!! 可愛い通り越して尊い、もう離しません!! 幸平さんの顔がだらしなく蕩けて、幸せくつて言うまで、可愛がってあげますからね!! 今日寝かしません

よ……!!」

「ひっ!? ちよ、ちよつと待たない美衣ちゃん? やっぱり初心者だからじつくりと手解きを……あつ」

我慢の限界だったのか、暴走を始める美衣ちゃんに判断を誤ったかと後悔するものの、時すでに遅し。

流れるような動作で起こしていた身体をベッドに横たえさせると、するりと背後から抜け出て僕のお腹辺りに乗っかりマウントポジションを取る。

「うふふ、これで幸平さんの顔、良く見えます」

「お、お手柔らかにお願いします……」

眼を血走らせにつこりと微笑む彼女に、僕は確信した。ああ、これは話を聞いてないな。体勢を変えて再開した愛撫に僕は女の子のような声を上げさせられながら、諦めに身を任せるのだった。

「ふああっ!! ひゅあっ! は、はげしいよおみいちゃんっ」

しばらく愛撫されてみてわかったのは、この体はとても敏感だということだ。胸をやわやわと揉まれ、横腹辺りをつーつと指でなぞられるだけで、頭が真っ白になりそうな快感が走り抜ける。身体が変わったせいか、一度肌が更新されて真っ新になっているかのように、外部からの刺激に対していちいち敏感に反応してしまっているようだった。

桃色の突起を口に含み、ころころと口の中で転がしている美衣ちゃんは、それはもう楽しそうにイキイキとしている。だって、自分の一挙一動で過敏に反応するおもちやが目の前にあるのである、そんなおもちやを与えられて、喜んでいないわけがなかった。

かりつと噛まれ、かと思えば飴でも舐めるように舌でぺろぺろと丁寧に磨かれる。乳首で感じるなんてすっかり女の子だ、そう思うと恥ずかしくなってきた余計に快感が増した気すらする。

「あつあつ、だめ、何か来そうなんだっ!! おかしくなりゆっ!」



その間も空いた乳首は手で絶妙に刺激されており、感じすぎて呂律が回らなくて自然と女の子みたいな喘ぎ声と台詞になってしまい、それがまた僕の羞恥心を煽る。

美衣ちゃんは蕾を口に含んだまま口角を吊り上げると、軽く吸い上げながらちゅぽん、と音を立てて口を離す。

「あひっ」

「今日はおかしくなっちゃいましたよ？」

「大丈夫ですよ、私が最後まで付いてますから」

美衣ちゃんの涎でてかてかぬら光る、興奮と愛撫で大きさを増した乳首。自分の物ではないように思えるこの感覚に、想像以上の厭らしさを感じる。

美衣ちゃんは少し体制を変え、寝転ぶ僕と重なり合うように僕の上に横たわると、口付けを交わす。

「んふふ。少し甘いですね」

「んん……」

いつも挨拶の様にキスはしていたが、舌を絡めるキスはかなり久しぶりである。その上、普段とは違い積極的に僕の口内へ攻めに攻めてくる美衣ちゃんに戸惑いながらも、その行為を受け入れる。しかし、わざとらしく音を立てながら吸い付き、口内を蹂躪するように暴れまわるその巧みな舌遣いは、今まで手加減されていたのだと明らかな腕前に、僕はあつと今に虜にされていく。

「んふあ、んんっ、んぶっ」

視線を逸らすことを許さないかのように、美衣ちゃんの綺麗な瞳が僕をじっと見つめる。その圧迫感と、いつもと違う強気な美衣ちゃんの様子にすっかり受け身になってしまった僕は、更に鼓動を早める。

最早愛撫と称しても良い程の口での交尾に、敏感な突起への刺激で既に仕上がっていた僕の意識はふわふわと浮かび始め、頂点に達しそうな気配を見せ始める。口から洩れる吐息が切羽詰まり激しくなるその瞬間、ぎゅっつと握られる両手。お互いの指と指を絡ませ、絶対に離さないという意思表示。ふわふわと揺蕩う意識に現実感が無くなりそうところへ、美衣ちゃんが与えてくれたその安心感が、僕の女

の子の快樂への最後の抵抗感を破壊し、初めての絶頂へと導かれる

……  
「~~~~~」  
「!!!」

甘い、蕩けるような絶頂。瞬間的に高まる男性の射精よりも、長くピークの続く、脳を溶かすような至福の時間に、身体の制御が僕の手から離れ、ビクビクと全身が痙攣する。口を塞がれ手を握られ、身体の上に押し掛かれ身体の自由を奪われた僕の、精いっぱいの気持ち良さの表現に、美衣ちゃんは嬉しそうに鼻で笑う。

気を良くしたのか、いつている最中も攻め手を緩めない美衣ちゃんの愛撫はその高まりをさらに継続させ、かろうじて残っていた意識をぐずぐずに溶かしていく……ようやく止んだ絶頂の兆しに、僕は遠くなる意識を手放す……が。

くちゅり……

「んあぁっ!」

股間から脳へ一直線に奔る強烈な快感の電撃に、僕のフェードアウトしていた意識は一気に目覚める。

「な、なにっ?!」

「まだまだお眠の時間じゃないですよ、幸平さん。」

女の子の大切な所、一度も弄ってあげてないんですから……」

顔だけ起こして下半身を見下ろすと、気絶していた間に脱がされたのだろう、いつの間にか全身裸にされていた。露になった僕の女性器に、恥ずかしさで顔が真っ赤になる。毛の生えていない初心なそこは、身体の年齢だけで考えるなら年相応だろう。だが、毛で守られていないそこを美衣ちゃんに見られ、あまつさえ弄られているのだと考えると、恥ずかしさが更に増す。

「これからずっと付き合っていくかもしれない大切な所ですから、しっかりと勉強しましょうね……」

「で、出来るなら男に戻りたいんだけど……」

語尾にハートマークでも付きそうなくらいうっとりとした口調で、妖艶な笑みを浮かべて僕の性器周辺を指でなぞりながら言う美衣ちゃん。思わず苦笑しながらせめても抵抗を示すが、僕の話など聞

いてやしない美衣ちゃんは笑顔で封殺する。

「男の子のカッコイイ幸平さんも、今の可愛らしい女の子な幸平さんも、どんな姿でも私は大好きですから関係ないですよ」

「んああっ!!」

いや、それ何の解決にもなっていないんだけど……

そう返事をする間もなく、再び愛撫を始める美衣ちゃんの手つきに僕の返事は塞がれる。

先程の絶頂ですっかり湿っている僕の雌蕊は、既に美衣ちゃんの指を受け入れる準備を完了させていた。当然ながら異物を飲み込んだことなどないその秘裂は、とろりと粘性のある液体を垂れ流しながら、美衣ちゃんの指を飲み込まんと僅かに開き歓迎を示していた。その上に鎮座する下半身の突起も、いつの間にか皮を剥かれ、震えながら刺激される時を今か今かと待ち望んでいた。

っぷり……

「ふああ……」

割りいる美衣ちゃんの指の感触。自分の穴の中に指を入れられる、普通の男性なら感じたことのない感覚に、僕は自然と背筋を登る悦楽を止められない。

指一本差し入れるだけが限界のその雌穴は、きゆうきゆうと美衣ちゃんの人差し指を締め付け、その形状を容易に僕に悟らせる。くい、と指の関節を曲げる動きも容易に理解でき、それだけで先程の胸への愛撫とは比較にならない悦びが僕を襲う。

「ひゃああっ!!」

だ、だめ、これだめみいちゃん、きもちよすぎて、ちからが……」  
「初めてですし、最初はじっくり馴らしていきましょうね。

ゆっくり指で馴らして、次はお口でしてあげて、最後は双頭ティルドも入れられるくらいに開発して……うふふ」

「あっ、ふやあっ!!」

完全に自分の世界に入り切っている美衣ちゃんは、バラ色の、いや、この場合は百合色の将来でも想像しているのか、珍しくにへら、と緩み切った笑みを浮かべているが、それでも手は緩めない。男性がよく

肉棒の気持ち良い所を知っているように、女性も女性器への気持ち良いポイントなどは把握しきっているのだろう。それにしても、何の躊躇いもなくスムーズに進んでいる開発の手つきに、暴力的な快感に押し流されつつも、僕は戦慄を隠せなかった。

「ああっ!! んおおっ!! や、やあっ!!」

美衣ちゃんの指の動き一つで簡単に喘がされる淫らな楽器と化した僕は、美衣ちゃんの思惑にされるがままで、気づけば挿入される指が二本に増え、時間間隔を喪失するほど長い時間、絶頂を極めさせられていた。あそこはお尻の下に引いたシャツがぐしょぐしょになり、口元は涎塗れで胸元が涎で汚れきって、全身体液塗れで、始めに感じていた寒さなど無縁の状態になるまで徹底的に喘がされていた。変化したばかりの身体は敏感で刺激に弱いのだろう。

「きゅあああっ!!」

時折、慣れさせないためなのか乳首を捻られたり、刺激に飢えたクリトリスにキスを落とされたりと変化を付けるのだが、その変化の1つ1つでいちいち高みに上らせられた僕らの精神は、すっかりとろとろに蕩かされてしまっていた。もう寒さなど微塵も感じないし、溺れる程の美衣ちゃんからの愛情に、胸がいつぱいで笑顔が止まらなかった。

「みいちゃん、きしゆ、きしゆう」

「うふふ、はーい」

呂律の回らない口でおねだりすると、ちゅ、つと唇を合わせるだけの軽いキスを美衣ちゃんはしてくれ、高まった身体はそれだけで絶頂へと至ってしまう。きゅ、とシャツを握りしめ、止まらない痙攣に、頭が真っ白になる。

美衣ちゃんから与えられる幸福感に、僕は眩く。

「みいちゃん、だいすき……」

「私も大好きですよ、幸平さん」

もう一度、美衣ちゃんとキスを交わす。背中に手を回して美衣ちゃんを抱きしめながら味わう絶頂感に、僕はゆっくりと意識を手放したのだった。

「最初から最後まで僕だけイキっぱなしだったんだけど……美衣ちゃん、満足してる?」

目を覚ました後、僕たちは汗と色んな液体でドロドロになった体を洗い流すべく、二人でお風呂に入っていた。マンションの狭い浴槽は、二人がやつと入るくらいのサイズなので、自然と美衣ちゃんと密着して入ることになる。昔とは逆に、身体の小さい僕が美衣ちゃんの上に座る形で浴槽に納まっていた。

ちなみに、お風呂に入るまでの道中では別にイベントなどはなかった。最初にあれだけ乱れておいて、何を女の子の身体に戸惑うことがあるのか。美衣ちゃんから女の子の身体の洗い方を指南される程度で、すんなりとお風呂へとインしていた。

「ええ、勿論。幸平さんもとっても可愛らしかったですし、実は、ところどころなってる幸平さんの姿だけで何回もイっちゃってました」  
「……恥ずかしい」

ばしやりとお湯の中に顔を突っ込む僕に、美衣ちゃんは隙だらけのうなじにちゅ、とキスを落とす。

「うふふ。でも、この後はちゃんと幸平さんの手でイかせてもらいたいです。もともと幸平さんって前戯もセックスもとっても上手かったですけど、女の子になった後も腕前は変わっていないのか、楽しみにしていますよ」

「え、ま、まだやるの……?」  
ギクリ、と動きを固める僕に、美衣ちゃんは当たり前です、と言わんばかりに続ける。

「勿論ですよ。私、明日も休み取りましたし、幸平さんもそんな身体じゃ出勤できないでしょう……? いつ元に戻るかもわからないんですから、今のうちにたっぷり楽しんでおかないと」

「いや、どちらかというと元に戻るかの心配をした方が……」

「あら、それなら逆に、早く慣れておかないといけませんね。先ほどは

手加減しましたが、みつちり女の子を教え込んであげないと」

「あ、藪蛇……」

や、優しくしてね？」

「うふふ。私はいつでも、幸平さんに対しては優しくしてますよ」

お湯の中に沈む身体は、すっかり変わり果ててしまっている。だが、それでも僕と美衣ちゃんの愛情は変わらずそこに存在していた。指と指を絡め、ぎゅ、と僕が握りしめると、美衣ちゃんも握り返してくれる。

美衣ちゃんとの関係は美衣ちゃんの深い愛情で解決したが、それ以外にも仕事や人間関係、戸籍など、不安なことは山の様にある。心にぽつと灯る火は、こんな体になって行き先不安だった僕の未来を明るく照らしてくれていた。二人なら、この難局もきつと大丈夫だと、確信できる。

「美衣ちゃん、君が僕のお嫁さんで良かった。

愛してる」

「私も、幸平さんみたいな人が私の旦那さんで幸せです。

愛してます」

お風呂の中で立ち上がると、美衣ちゃんの顎をクイッと持ち上げ、唇同士を優しく合わせた。ぽつと見、年下が無理にリードをしようと頑張っている構図に見え、お互い自然と笑みが零れる。

夫が女の子になる、こんな斬新な方法で倦怠期を脱した夫婦はいないのではないだろうか。世界唯一な自信がある。会社や両親にこのことをどう説明するのか、色々問題があつて、前途多難ではあるけど。僕も美衣ちゃんも、確かに幸せだった。

結局、僕の身体が変化してしまった原因はあの栄養剤だった。しかし、ブラック会社がのさばる現代の日本社会において、栄養剤という気軽に摂取出来る物が犯人だというのに、被害者は片手で数えられるほどと驚く程少なかった。

まだ試作段階であり、関係グループにしか配っていなかったのも、被害が拡散しなかった理由の1つであるが、最大の理由は、身体が変化してしまった原因が、とある珍しい血液型とのみ化学反応が起き、想定していなかった作用が発現してしまったから、なんだとか。

その珍しい血液型の持ち主というのが、何を隠そう僕の事である。その珍しさと言えば、健康診断で血液型を書いた際に、血相を変えて献血をお願いされるレベル、と言えばその貴重さがわかるだろうか。僕自身、ケガをして輸血が必要になった際に困る事もあるので積極的に協力しているのだが、それがこんな形で仇になるとは夢にも思わなかった。

栄養剤の開発元である薬品会社は、被害者の血液とDNAサンプルを元に、原因の調査兼、僕たちを元に戻すための薬の開発兼、その効果のみの抽出が出来ないか解析を進めているそうだ。それが任意で可能になれば確実に世界を変える革命レベルの発見であるため、元の薬品会社は躍起になって解析を進めているそうだ。

そんなこんなで、性転換手術によらない、男が完璧な女性になるという一大ニュースは盛大に報じられ、僕は一躍時の人となったわけだが、マスコミに被害者が誰かは伏せてもらえたとし、日本政府主導で戸籍は用意してもらえたとし、箝口令が敷かれ元の会社には復帰できた。事が穏便に済み、殆ど元の生活に戻れた。そこに製薬会社の損害賠償金も加わり、これからの生活の心配をしていた僕たちにとって、何よりの朗報となった。

穏便に済みすぎて、会社に復帰した後も相変わらず忙しいが、女性の身体になったことで色んな方面の扱いが少し良くなったのも朗報だと言えるだろうか。

それでも疲れは溜まるので、今日も僕は会議の前にコーヒー片手に寒い休憩室でぼーっと朝の余り時間を無駄に浪費していると。

「やっぱここにいたか」

「ああ、高橋か。おはよう」

タバコとライター片手に高橋が休憩室へと入ってくる。新調したスーツの袖を擦りながらタバコに火をつけ吸うと、端に設置してある

空気清浄機に向かって白い煙を吐き出す。

「おはようさん。うー、骨身に染みるなあ今年の寒さは……この間まで半袖着てた気がするのにも、もう雪が降る季節とは恐れ入るぜ」

「タバコ辞めればこんなところに来る必要もなくなるぞ？」

「今ニコチン切らしたらストレスで倒れるわ……ただでさえ最近妹がうるさいんだ、お前まで喧しいこと言わないでくれ」

タバコさえやめればこんな寒い所に来ることもあるまいに、ご苦労な事である。別に僕は嫌煙家ではないので、高橋の懐事情が問題ないなら構うことは無いが。

「同居し始めたんだっけ？ 妹さん」

「ああ……あの事件があつてからな、お兄ちゃんが心配く、なんだと」

「良い妹さんじゃないか」

この部分だけ切り取って聞けば、だらしない兄の生活を心配した、立派な妹さんである。感心しないわけがないが、わざわざ僕が迂遠な言い回しをするからには裏があるに決まっている。

僕が心にも無い事を言っていると、高橋は、以前よりぱつちりとした目元を細め、半目でじろりとこちらを睨む。

「東、それ本気で言ってるか？ 本気なら、女になった兄の処女を何の躊躇いもなく奪う妹なんて、いくらでもくれてやるぞ」

「僕が愛してるのは美衣ちゃんだけだよ」

「ああそうだと思つたよ、ご馳走様!!」

遠回しに断ると、高橋は苛立ちにロングの髪の毛を振り乱し、美しい顔を歪めながらそう吐き捨てる。

……そう、何を隠そう、数少ない被害者のもう一人は、この高橋なのである。10cm以上も身長が縮まった僕とは違い、高橋は高身長をキープしたまま、身体全体がメリハリのあるモデル体型の、キャリアウーマンとでも称するのが似合う女性になった。側だけで判断するなら、中身があの高橋だとは、誰も思うまい。両親や知り合いなど、どうしても事情を説明しておかなければいけない人たちと会う度、一瞬で誰か分かった、と言われる僕と違い、身長以外元の面影すら残さず別人の様に变化した高橋は、それはもう苦労しているようだった。



両親との面会も、一度では信じてもらえず、DNA鑑定や製薬会社の人を引き連れて説得してようやく納得するレベルだったらしい。普通はそうだろう、すんなり受け入れてくれた美衣ちゃんや僕の両親がおかしいのだ。

あの後、急病で倒れた僕の仕事を一手に引き受けた高橋は、当たり前如く遅くまで残業しており、気合を入れるのに手に取ったのが、あの栄養剤。ただで飲めるものを飲まないわけがなかった。その結果、見事に女性へと変わってしまい、高橋は、只より高い物はない、という世の中の真理を味わった同志になったと言うわけだ。

「くそつ、未だかつて、処女を妹に食われた兄なんて何処の世界にいるってんだ……」

「しかも、妹さんから告白されたんだろ？ 良かったね、二冠だよ」

「嬉しかねえよ此畜生!! しかも嫁になるんじゃないかって、嫁にするだなんていいやがった。あいつめ、思い出すだけでも腹が立つわ!!」

そして、性別が変わった直後に女性に美味しく頂かれた同士でもある。それが嫁さんと妹という違いはあれど、かなりの低確率である。しかも、最初に僕だと確信してから襲われた僕と違い、完全に別人だと思っただけ欲望の赴くままに食われたらしいから、僕より災難である。

あまりの怒りに、高橋は手に持っていたタバコのケースを握りつぶす。

「ほら、缶コーヒー奢ってやるよ」

「ああ、サンキュ……」

この前とは逆に、僕が飲み物を奢ってあげる。流石に栄養剤ではないけれど。高橋は受け取ると、ホットの甘めのコーヒーに口をつける。

身体が女に変わってしまった者にしかわからない、その連帯感。あれ以来、僕の中で高橋の地位は、信頼できる友人から親友にまで昇格していた。味覚の変化から始まり、化粧や下着への抵抗感や、どっちつかずの存在である僕達専用の更衣室など、鬱憤を吐き出しわかつてくれる同性の知り合いと言うのは、美衣ちゃんでも代われない貴重な

存在だった。お互い、朝のこの時間は愚痴の言い合いは、今ではなくてはならない貴重な時間である。

「そういや、何で高橋と仲良くなっただっけ……?」

「覚えてないのか? 俺は鮮明に覚えてるぞ。良くも悪くも、この身体のせいだな……」

相も変わらず愚痴の言い合いをしていた最中、ふと思いついた疑問に、嫌そうに顔を歪めながら高橋が答える。

「健康診断の時、お前と俺だけ看護婦に呼び出されて、献血のお願いをされたんだよ。二人共、貴重な血液型なので献血してくれませんか? っつてな」

「ああ……」

そう言われて思い出す。こいつも、僕と同じ血液型だったなど。それが原因で、二人仲良く女になるとは、どんな巡り合わせなのか。運命を呪いたくなってくる。

「俺と同じ、簡単に病気でできない災難な体質だな、と最初に思ったのがきつかけだった……まさか、こんなところまで一緒になるとは思わなんだ」

「そうだね……」

はあ、と二人揃って重くろしい吐息を休憩所の寒空に吐き出す。今の美衣ちゃんとの生活も楽しいが、元の身体に戻れる保証もない暮らしと言うのは、それなりにストレスが溜まるものだ。女の身体でも、例え毎日美衣ちゃんに布団の上で喘がされていようが、あくまで僕は男なのだ。それは高橋も同じことだが、特に、ナンパしまくっていたこいつとしては、女性を抱けないこの体はストレスフルなのだろう。かといって男を受け入れるのも気持ちが悪いと高橋は言うが、それは同感だ。何が悲しくて、と高橋は嘆く。

「ああ、男の身体が恋しいな……いい加減、抱かれる方じゃなくて抱く側になりたい」

「そうだね……」

たかが一か月、されどひと月。30日という日数の間に、数えるのがおつくうに成る程女性にイカされている同志としてシンパシーを

感じずにはいられず、万感の思いを込めて同意した。

「……なあ、ついでに俺も1つ聞いていいか？」

「何？」

「お前、クリスマスに用事って何かある？」

出社してくる人が増え、ざわめきが耳を打ち始めた頃。そろそろ始業の合図がありそうなのでベンチから立とうかなと思った時に、高橋が質問してくる。

クリスマス、一般的に恋人同士が仲良く過ごす聖夜の事である。毎年お祝いはしていたので今年もすると思うが、今年は少し様子が変わったな、と僕は今朝の出来事を回顧する。

「うーん、今朝、美衣ちゃんから25、26は開けておいてね、とだけ言われたけど。昨日どつかに電話してたから、泊まりで旅行なんじゃないかなあ」

行先は秘密です、と人差し指を唇に当てしーつと秘密にする美衣ちゃんはとても可愛くて、思い返している今でも気持ちりがほんわりとしていたが、高橋はそれを聞いて黙りこくる。なんだ、そんなに嫁さんがいる僕が羨ましいのか。

「俺も、妹と泊まりで出かけるんだけどさ。誰かと話しながら、いやに楽しそうに、旅館の4人部屋を予約してたんだ。誰と行くのかは秘密、お兄ちゃん楽しみにしててね、って今朝不吉な事も言いやがってたんだけど」

「……」

「俺の妹とお前のかみさん、確か、面識あったよな」

「……」

そういえば昨日、美衣ちゃん宛に荷物が届いてたな。宅急便で、何やら得体のしれないものが沢山。思わず目をそむけたくなるものばかり入っている段ボールを抱えて、とつても楽しそうに邪悪な笑みを浮かべる美衣ちゃんの姿を、僕は確かに目撃していた。

どうせ、被害は僕一人なのだと思って見て見ぬふりをしていたそれが、色んなフラグを立てつつ僕に迫りつつあった。

「……さあ、今日も忙しくなるぞ。頑張ろう高橋!!」

「そうだな東!!」

過酷な現実は、見て見ぬふりをするに限る。何事も無かったかのようになんげやかな笑みを浮かべてすつくと立ちあがると、僕たちは仲良く肩を組みながら休憩所から室内へと戻るのであった。

クリスマス？ さあ、どうだろうね。言及はしないけれども。二人そろって二人に美味しく頂かれたのだけは、間違いないと言っておく。

斬新な方法で倦怠期を乗り越えた夫婦の、その後のお話

## 2 (短編)

「確かに、ご本人の免許証のようですね……大変失礼しました。この後も良いご旅行を」

「いえ、お気になさらず」

何回も見比べ、生年月日を再確認し、それでも納得いかなさげな表情を浮かべる警官は、免許を僕に返すと、首を傾げながら前方に止めたパトカーの中へと戻っていく。はあ、と僕の深いため息が車内に木霊するとともに、後部座席から笑い声上がる。

「あははははは!! これで警察に止められるの、何回目だよ。ひい、腹が痛い」

「くう、他人事だと思って好き勝手言いやがって……」

すらりとした足を活かすパンツルックで、男物っぽくも見える派手なジャケットを着こなし、体を揺すって笑い転げている女性を、僕はバックミラー越しに睨むが、まったく効果は無いようだった。動きすぎて、シートベルトのロック機構が作動するほど笑っているのは、僕の会社の同僚である高橋である。

先月、男性が女性化してしまうという世間を騒がせた性転換事件。僕の友人でもある高橋は、その被害者の一人だ。だから当然、元の性別は男性である。程よく大きい胸にすらりと伸びた手足、どんな服でもばっちり着こなしそうなスタイル。黙っていればかつこいい系の女性モデルにも見えるその美貌を崩し、遠慮なくケラケラ笑っているのは、この空間がプライベートだからではなく、その肉体を持て余している証左に他ならない。

車内でなければ一発ぶん殴ってやるのに、と僕も筋肉の少ない拳を握りこんで怒りをため込むが、その怒りは全く高橋に伝わっていないようだった。

「もうお兄ちゃん、幸平さんに悪いよ。折角運転してくれてるのに

……」

「そうは言ってもな……自分から運転を買って出ておいて、1時間の運転で警察に止められること3回だぞ？　これはもう笑うしかないだろ」

そう高橋を止めつつも、自身も笑みを隠しきれていないのは、その高橋の妹さんだ。高橋沙織ちゃん、国立大学の3年生で、現在は高橋と同居している、高橋とは5歳違いの明るい女の子である。170cmちよつとと、女性にしては身長が高いほうで、女性になった高橋と同じく、可愛いより綺麗という言葉が似あう、美人さんな妹である。

二人並ぶと、以前は美女と野獣という形容詞が似合う光景が広がっていたが、今ではうり二つの美人姉妹である。姉妹と呼ばれるのを非常に嫌っているらしいが、先日は2人並んで歩いている際、姉妹でどうですか、と芸能事務所にスカウトされたらしいし、今では認めざるを得ない事実である。

「幸平さん、やっぱり運転変わりましたよ？」

「大丈夫だよ。こうなったら、何回止められようが、到着するまで絶対に運転は変わらないぞ!!」

運転席に座っている僕の横、助手席に座っているのは、僕の奥さんである美衣ちゃん。美衣ちゃんは心配そうな表情で僕を見つめているが、僕はその視線を振り切る。立て続けに警察相手に馬鹿にされ、意地になった僕は、美衣ちゃんとペアルックな可愛らしいセーターをまくり、再びハンドルへと向かうのだった。

先程高橋の紹介で性転換事件の被害者だと言ったが、かくいう僕もその一人である。すらりとかっこいい女性になった高橋とは裏腹に、手の平サイズの可愛い女の子になってしまった僕。元々平均よりちよつと高いくらいだった身長は、女性の平均をぶちぎる程縮み、美衣ちゃんと並ぶと最早美人母娘である。そんな姿だからか、先程から警察に何度も止められていることからわかるように、未成年として扱われることが多くなった。仕事でスーツを着ている時でさえ、背伸びをした子供に見える有様である。プライベートでもかなりのストレスだったが、まさか運転中でもそんな扱いをされるとは思わず、完

全に頭に来てヤケになっていた。

「後何回止められるかはわからんが、帰りは俺が運転してやるから、行きはなんとか頑張れよ」

「くっそー、自分はそんな美人になったからって馬鹿にして……!!」

「幸平さんも十分美人ですよ」

「そうですよ!! 幸平さん、ぬいぐるみみたいに抱っこして、一緒に寝たいくらい可愛いですもん!!」

「それ僕にとつては誉め言葉じゃないから!!」

座席の高さを上げ、座席を思いつきり前に出し、ようやくまともなアクセルを踏み込めるようになる。流石に運転歴は長いので危なっかしくはないのだが、また止められそうという別ベクトルの心配をされている僕は、今度こそは、という決意を抱いて、路肩に寄せていた車を再び発進させるのだった。

今日はクリスマス。イブの夜もたっぷり啼かされた僕が朝早く、美衣ちゃんに連れられて訪れたのは、レンタカー屋さん。今日明日、泊りで旅行に行こう、とのことだった。一泊の筈なのに大量の荷物を抱える美衣ちゃんには嫌な予感を覚えつつも、倦怠期だった頃を無事脱却できた記念ということで、喜んで参加することにした、のだが。

事前に高橋と抱いていた危惧は、駅前で高橋姉妹を拾った時点で濃厚となり、高橋の妹さんも何泊する気なのかと言いたくなる大きさのキャリアケースを引いてきた時点で確定となった。そんなに楽しみ？ と笑顔で美衣ちゃんに聞かれる程度には、僕の表情が無かったらしい。さもありません。

そうやって始まったクリスマスの旅行だったが、その後は何の邪魔も入ることなく、無事に目的地へと到着したのだが……

「なあ高橋。こゝ、僕の目には旅館に見えるんだけど……」

「奇遇だな東。俺の目にもそう見えるぞ」

ナビが目的地に近づくにつれて、通りすぎる地名や看板で何となく察知していたが、嫌な予感は当たるものである。目の前に広がるのは、有名な温泉地の中でも、一等地に建つ立派な高級旅館。玄関に入るだけでその荘厳さと威容に気圧され、たたり、と背中を流れる冷や

汗。

「まずいよ、こんなところに来てても、僕たちが女風呂に入れるわけないだろ……!!」

予約していた東ですが、と言ってチェックインの手続きをしている美衣ちゃんを尻目に、ロビーの隅で辺りを見回していた高橋に、焦りながら小声で耳打ちする。

辺り一面温泉しかないこんな旅館に来てすることなど、火を見るより明らかである。温泉につかる、それしかあるまい。これがひと月前だったなら何の問題もないが、今は違う。そう、今の僕は、外は女性で入るならば女風呂になるが、かといって中身は男性なのだ。そりゃ、事故に際して政府に用意してもらった身分と戸籍は女性だが、悪用は避けるように、との言葉も頂いているし、それを免罪符にみだりに振りかざしていいものではない。

焦った僕がまずいぞどうする、と高橋に声をかけると、僕と同じく窮地に置かれたはずの高橋は、きよとんとした顔でこう言った。

「え、入らないの？ お前」

「高橋イ!!」

本気でぶん殴るが、じんわりと僕の拳に痛みが帰ってくるだけ。やわになった僕の筋力では、女になった今でも鍛えているらしい高橋の腹筋を超えることはできなかった。傍から見れば、年下の女の子がお姉さんに甘える図にでも見えているのか、周囲の人間から生暖かい視線を送られているが、今はそれどころではない。

「何考えてるんだ!! 流石に犯罪だぞそれは!!」

「何でだ、大チャンスだろ……!! 流石の俺も、わざわざ銭湯に行つて覗くのは気が引けるが、機会が向こうからやってきたんなら話は別だ。大手を振って女風呂を覗ける、無二の機会を逃すわけにはいかん……!!」

整った顔をキリリと引き締め、まるで使命感に燃える正義漢のように静かに闘志を燃やす隣のろくでなしの姿に、僕が頭を抱えていると。僕の反対側で話を聞いていた沙織ちゃんが僕らの話に割って入ってくる。妹さんは止めてくれるのだろう、と思っていたら。



「そうですよ！　こんな機会逃せないですよ幸平さん!!」

「え、沙織ちゃんそっち？」

「当り前じゃないですかあ!!　ここの温泉はですね、美肌になる作用がたっぷり含まれた美人の湯と言われているんです。近くの旅館に泊まっている方でもわざわざこの旅館の温泉に入りに来る程有名なので、女風呂に入ったらそれはもう、あちらこちらに美人さんがより取り見取りで……えへへ」

ぐ、つと右手を握りしめて力説していたかと思えば、突然にへらと表情をだらしく崩す沙織ちゃんに、ああ、やっぱり血は争えないなあ、と遠い目になる。

よくよく考えてみれば、沙織ちゃんは栄養剤を飲んだ後、自宅で倒れていた高橋本人を、高橋の彼女か何かだと思っただけ、看病するふりをして美味しく頂いた、美衣ちゃん以上の強者である。むしろこうなることは、当然の帰結であった。

「マジかよ……そんなに期待感煽って大丈夫か、妹よ。これでお婆ちゃんばかりとかだったらただじゃおかないぞ?」

「そりやあもう、大いに期待して頂いても大丈夫ですよお代官様げへ。お年を召された方は、ここの向かいの旅館の長寿の湯に行かれますからねえ。若い子は自然、ここに全員集うといった次第ですよ」

「ぬふふ……お主も悪よのう」  
「ぐふふ……悪代官様程ではありませんよお」

日頃はあれだけ文句言ってるくせに、いざとなれば一致団結してこんな猥談をしだすのだから、どう見てもただの仲良し姉妹である。話してる内容はとんでもないけどね。

その光景を想像しているのか、両手を合わせてうっとりとしている沙織ちゃん。

「ああ、夢だったんです私、お兄ちゃんと一緒に女性ナンパするの」  
「え、何言い出したの急に!？」

「ほら、お兄ちゃんのガタイで私連れて女の子ナンパしたら、ただの怪しい人たちじゃないですか。でも、今の女の子になったお兄ちゃんなら違うんですよ。どこからどう見ても、ただの女の子が大好きなだけ

の美人姉妹じゃないですか。

低い声で、今日は君とベッドインしたいんだ……そう言ったらイチコロですよお!! 私一人じゃ無理でも、お兄ちゃんと二人掛かりならどんなにお高い美人高いハードルでも乗り越えられる、私はそう信じているんです」

そこだけ切り取れば、難局を兄を信じて切り抜けようとする美しい姉妹愛が垣間見れる名場面だったろうが、きつと妖しいルビがふられていいるであろう事実が、それを台無しにしていた。

どうやってテンションの上がり切ったこの馬鹿姉妹を止めてやろうか、と思案している僕に助け舟を出してくれたのは、手続きを終えてこちらにやってきた美衣ちゃんだった。

「残念ながら、今回は皆で家族風呂だけどね」

「あ、そうなんですな美衣さん……残念だなあ」

「まあ、そりゃあね……でも、問題なのは俺たちだけなんだから、別にお前は入ってきていいんだぞ沙織？」

至極残念がる沙織ちゃんに対して、コロツと態度が変わる高橋。まあ、評判や態度とは裏腹に、比較的常識を弁えている高橋なので、ただの悪乗りみたいなもんだとは思っていたけどね……高橋の場合、流れてそのまま行きかねないのが、僕に怖さを感じさせる理由なのだが。

「まあそれは入るけどさあ……うーん、お兄ちゃん一緒じゃないなら別に良いや。今回もお兄ちゃん得我慢しとくー」

「いや、その流れで俺で鬱憤晴らそうとするのは違うくないか……？」  
流れるように決まった高橋の夜の処遇に、手を合わせるしかなかったが。

「幸平さんも、今日の夜は楽しみにしててくださいいね……」

真後ろにいる女将さんに聞こえないように、僕だけが聞き取れる音量で囁かれた誘い文句に、僕はあそこが湿り気を帯びたのを感じ顔を真っ赤にしてしまう。

「ふふ、女将さんがお部屋に案内してくれるみたいですよ、さ、みんな行きましょうか」

女将さんが襖を開くと、目の前に風情のある和室の景色が広がる。4人部屋だけあってとても広く、一面に敷かれた畳の匂いがふわっと香り、どこことなく懐かしさを感じさせるその光景は、昔の子供のころを思い出させた。

「何かありましたら遠慮なくお申し付けください」

女将さんは手慣れた様子で用意を整えると、丁寧に頭を下げ、部屋を辞していった。

「ふわあ……とつても豪華なお部屋ですね」

豪華といつても、華美過ぎず品を失わない程度のもので、とても雰囲気の良い和室である。これは、温泉の件がなくても人気になるのはよくわかる。

沙織ちゃんが思わず、といった様子でこぼす。

「こんなすごいお部屋、よく取れましたね美衣さん」

「ふふ、ちよつと伝手があつて、ね？」

沙織ちゃん、早速お風呂行つてみない？」

「行きます!!」

荷物を置いて一息つく間もなく、女性陣は美肌の湯とやらに入る準備を始めた。運転していて疲れた僕は、コロンと畳の上に寝転んだ。高橋も気疲れか、座り込んでタバコに火をつけ始める。

「俺たちは部屋でゆっくりしてるから、沙織と美衣さんもゆっくりしてきて良いですよ」

「じゃあお言葉に甘えて……幸平さん、行つてきますね?」

「うん、いつてらっしやい。沙織ちゃんもごゆっくり」

「はい! じゃあねーお兄ちゃんに幸平さん」

あつという間に準備を終えた二人は、きやいきやいと盛り上がりながら部屋を出て行った。

「……はあ」

「あれ、寝るのか? 折角こんな景色の良いところにきたつてのに」

あつという間に煙草を吸いつくすと、枕を持ってきて横になる高橋。まだ3時にもなつてないのに、気が早いな。窓から外を覗くと、すっかり雪化粧を終えた山々が視界に入ってくる。雪は降っていないものの、普段住んでいるところでは積もることが少ないので珍しい光景だ。来たからには楽しまないと、と思い外を眺めながら高橋にそう問うたが、寝転がったままの高橋は横目で僕を見つめる。

「ああ、夜は長いからな。どうせ、今日もまともに眠らせてくれる気がしないし」

「……」

心が落ち着く白銀の世界が、急激に色あせた気がした。旅行気分で浮かれていた気分が現実一気に引き戻される。別に愛されるのは嫌いじゃないが、今日は高橋にその痴態を聞かれかねないのだと考えると、気持ちは一気にブルーになった。わざわざ、同じ境遇にある高橋とその妹さんを美衣ちゃんが誘ったあたり、嫌な予感しかしないけども。それは、高橋もお互いさまだろう。

「僕も、ちよつと寝ておくかな」

「それが良い」

高橋と並ぶように寝転ぶと、僕は日も高いのにお昼寝を敢行するべく、目をつぶるのだった。

美衣ちゃんたちが大浴場から帰ってきて、しばらく部屋で歓談して過ごしていると、あつという間に食事の時間となった。1つ山を越えるとすぐそこは海であるここは、山の幸と海の幸を同時に味わえるという絶好の立地である。その調理も見事で、味だけではなく見た目も見事なその料理に舌鼓を打ち、素晴らしい時間を過ごしていると、あつという間に日は落ち、世界は暗がりへと転落していた。

「そろそろ良い時間ですし、家族風呂に入ってみます?」

「良いですね!!」

腹ごなしに持ってきていたトランプも一段落し、皆も美衣ちゃんの

提案に乗る。僕も、別に美肌が気になるわけではないが、温泉地の温泉にはつかつてみたいと思つていたところだった。ただし、高橋は違ふようで、なんとか重い腰を上げる、といった風。

「仕方ないなあ」

「どうしたのお兄ちゃん、毎日毎日、お風呂入らないと気が済まないつてくらいお風呂いつも沸かすくせにー」

「そりやお前が汚すからだろ、涎やら汗やら色んなもので!! 今入つてもどうせ後で入り直しになるのに、気が進まないだけだよ」

確かに間違つていないが……そのド直球な言い様に、ちよつと顔が赤くなる。

「こういうのは風情というのが大切ですから……折角一緒に来ましたし、そう言わずに」

「まあ……そうですね。沙織とじゃなくて、東とそのかみさんも一緒に入るつてのは妙な気分だが、折角だしなあ」

改めて考えれば、男同士の裸の付き合いはまだわかるものの、家族でもないのに美衣ちゃんを含めて一緒に風呂に入るとは中々抵抗感がある。美衣ちゃんは女の子になつてしまった高橋は無警戒なのか、それとも沙織ちゃんの知り合いの女の子、とでもカウントしているからか、別に気にしてない様子でニコニコと笑つていた。まあ、美衣ちゃんが良いなら僕が言うまでもないか……

「勿論、私の一番は幸平さんですから、ね?」

時折、美衣ちゃんは僕の心を読んでもるんじゃないかと思う時がある。美衣ちゃんは、びくり、と肩を跳ねさせた僕に笑いかける。

「さ、行きましよう?」

まるで紳士の様に、さりげなく肩を抱く美衣ちゃんに僕は逆らえず、うぶな少女のように頷く他なかった。手慣れすぎだよ美衣ちゃん……最近すっかり受け側の精神が染みついてしまった自分に情けなくなりつつも、従うしかない僕であった。

如何な初心者であろうとも、流石に一月も経てば自分の下着姿や裸くらいでは動じなくなってくる。最初こそ女装してる感が半端なくて違和感しか感じなかった女物の服も、今では一応着こなすくらいは出来るようになってきた。ブラもスムーズにつけられる。まあ、僕の胸はあまり大きくないのでスポーツブラだけだね。……ただ、美衣ちゃんが買ってくれたふりふりの、女の子趣味な可愛らしい下着を履かされた時は、恥ずかしくて死んでしまおうんじゃないかと思ったが。生で見ると、服越しに見るよりも予想以上にでかかった高橋の胸部装甲に驚愕しつつも、服を脱ぎ去り脱衣所から中に入ってみると。

「うわあ、凄く広いね」

「そうですね。大浴場程とはいきませんが、十分広いです」

売りにしているだけあり、湯舟は家族風呂の範疇の中でも十分広く、4人が広々とくつろげるほどのサイズだった。マンションの狭苦しい風呂桶とは違い、手足をゆったりと伸ばし、美衣ちゃんと面を向かい合って話せるのは新鮮な気分だった。

これはのんびり羽を伸ばせそうだと僕は顔を綻ばせていたがしかし、クリスマスのお祝いは前日に済ませている二組であるからして、今日の宿泊の主目的はそのお祝いでも温泉でもない。夜の行為が目的であることからして、裸になって何か起こらないわけがなかった。

基本的なマナーとして、湯舟に入る前には身体を洗うわけだが、男の頃とは勝手が違い、髪の毛の洗い方や大切な所の洗い方など、どうにもなれず手間取っている僕を見かねたのか、美衣ちゃんが代わりに洗ってくれることになった。僕が美衣ちゃんに髪を洗ってもらっていると、手慣れた手つきであつという間に洗い終え、湯舟につかる姉妹から笑い声上がる。

「んふふつ、お母さんと娘……」

「ふふつ、もうお兄ちゃん、笑わせないでよっ!!」

二人してけらけら笑っている。その二人の胸元には、大きな乳袋が2つお湯に浮かんでおり、その迫力に、僕はDNAの格差というものを味わい、落胆を隠せなかった。

僕と高橋の姿であるが、DNA的には性別以外全く差が無いらし

く、今の姿はもし性別が違う状態で育っていたら、という姿に変化しているらしい。高橋の家系はみんな胸がでかいらしく、東家はその逆。つまりはそういうことである。折角ならでかい方が良かったな、なんて思ってしまうのは男の性だった。

そんな風に視線を逸らしていたのがいけなかったのだろう。美衣ちゃんの指先が、僅かに赤みを帯びている胸の先端を狙っていることに気づけなかったのは。

「んひゅあっ!!」

「大きい胸も私は大好きですけど、幸平さんのこの、育て甲斐があつて、敏感に反応してくれて、私への期待に胸を膨らませてるちっちゃなお山も大好きですよ」

「もう美衣ちゃん!!」

きゅっつまみあげられた突起からの刺激に思わず声を上げてしまい、恥ずかしさで顔が真っ赤になる。振り返って美衣ちゃんを睨みながら抗議の声を上げるが、美衣ちゃんほうふふ、とお茶を濁すばかり。

そんな美衣ちゃんのイタズラを見ていた観戦者たちはと言うと。

「わぁー、ロリっ子が顔真っ赤にして喘いでるのって、すごくエッチで背德的ですねえ。美衣さん良いなあ」

「うーん、確かにエロいんだけど、あれが東だと思うと妙な気分だよなあ」

目をギラつかせ僕の未成熟な肢体を舐めまわすように視線を這わせる沙織ちゃんと、微妙な顔をしつつそれでもしっかりと観察している高橋。ああそうだ、刺激で瞬間的に忘れてたけど、ここにはもう二人いるんじゃないか……

更なる恥ずかしさで胸元まで肌を真っ赤にしつつ、僕はその後の魔のボディウオッシュを終えた時には、息も絶え絶えになっていた。

「み、美衣ちゃんの意地悪……」

「とってもエッチなおっぱいで私を誘ってる、幸平さんが悪いんですよ?」

「流石にそれは言いがかりだよお!!」

入る前からぐったりしてしまった僕は、美衣ちゃんに抱きかかえられてお風呂に入っており、折角広いお風呂に来たのに、結局いつも通りの体制に。

「幸平さんったら、お風呂入る前から全身真っ赤ですね……どうしよう、ちよつとなら味見してもばれないかな……」

「やめとけやめとけ、美衣さんはたぶん独占欲強い方だぞ」

そんな様子を、僕の耳に入る距離で話しているエロ姉妹の会話が、余計羞恥を擦る。百歩譲って同性の高橋に見られるのはまだわかるが、何でほぼ初対面に近い沙織ちゃんにまで、恥ずかしい姿をさらけ出さないといけないのか。

「うろう、死にたい……」

「あ、沙織ちゃん、良かったら幸平さん弄ってみます？」

「良いんですか!？」

「良いわけあるかあ!!」

ザパン!! と波を立てて勢いよく立ち上がる沙織ちゃん。突然の美衣ちゃんの提案暴言に思わず抗議の声を上げるものの、がしり、と美衣ちゃんは僕の背後から拘束し、胸から上をお湯から外に出して沙織ちゃんに向かってその突起を掲げる。

「え、嘘でしょ美衣ちゃん……!？」

「ほら幸平さん、近所付き合いつて大切じゃないですか？ お隣さんにお裾分けです」

「いやいやいやいや!? 離して美衣ちゃん!？」

唐突に降ってわいた更なる羞恥の機会に、じたばたとお湯を跳ねさせて暴れるものの、か弱くなった腕力ではやはり振りほどけず。目を輝かせて迫りくる沙織ちゃんの向こうでは、高橋が目を瞑ってこちらに祈りを捧げていた。

「ひい、や、やだあ」

「大丈夫ですよ、沙織ちゃんもとっても上手ですから……」

ほら、緊張しないで?」

じゆる、じゆるるる……

「ふ、ふあああ……」



僕の耳元に吸い付き、舌を入れたり、わざとらしく音を立てる美衣ちゃん。厭らしい水音で満たされる聴覚に、今までの美衣ちゃんとの愛し愛されを思い出した僕は、全身の力が抜けて、上げていた手がぼちちゃんとお湯の中に落ちる。美衣ちゃんはその後も攻め手を緩めることなく、ちゅぱちゅぱと送り込まれ続ける淫成らな音。この一か月、みつちりと美衣ちゃんから嬲られ続けた代償か、あの快樂の味を全身が思い出して、思考も蕩け始める。

僕が意識をふわふわと飛ばしている最中にも、ぎっぱぎっぱとお湯をかき分けながら沙織ちゃんが僕に近づいてくる。

「ひ、や、やめてえ」

美衣ちゃんの過剰な夜のご奉仕のせいでもあるのだが、慣れない感覚に元々敏感だった体は、今では胸の突起をいじられるだけで軽く達してしまうほどに育て上げられてしまった。そんな体を美衣ちゃんではない他人に弄られるなど、どんな目にあうかわからない。

全身に甘く痺れる快樂の記憶に、体は成すすべもなくびくつくだけで、言葉での抵抗が限界であった。しかしそれは、沙織ちゃんの氣勢を削ぐどころか却って燃えさせてしまったようで。

「嫌よ嫌よも好きのうち。そんなに涙目で言われちゃあ、逆に誘ってるみたいで私、火が付きました！」

「ひい」

「えへへえ。それじゃ美衣さん、いただきまーす」

瞳のぎらつきが増し、完全に獲物を狩る獣に変貌した沙織ちゃんは、ペろりと唇の端を舐めると、僕の胸元へその顔を近づけていく。

ピチャ……

「っふあ!!」

わざとらしく音を立てた、最初の一舐め。指で刺激されるのとは違う、乳首を上から下までなぞり上げた、ざらりとした舌の感触が脳に伝わってくると、僕は快樂のうめきを抑えることは出来なかった。

「んふ、良い声」

沙織ちゃんはそのまま啞え込むと、チュパチュパと激しい愛撫の音を立てながら乳首を舐め回す。美衣ちゃんの緩急を付けた攻めとは

また違う、ひたすら激しい攻めの応酬が僕を襲う。

「あつ、あつ、あ——!!」

脳を揺さぶるその快感の波に、僕は成すすべなく喘がされる。

乳首を激しく舐る一辺倒なのかと思いきや、刺激が強いのは変わらないものの、こちらを慣れさせないよう刺激するリズムを変えたり、歯ですりつぶしてみたりと、とにかく多彩な方法でこちらを攻め立てていた。

「——!!」

「お兄ちゃん、胸大きいからか知らないんですけど、あまり胸じや感じてくれないんですよねえ。それに比べて幸平さんは、何しても敏感に反応してくれてとってもやりがいがあります」

「うふふ、幸平さんの体は毎日しつかり磨き上げていますからね。性感帯はもちろんですけど、ほら、こうやって背筋をなぞり上げるだけで……」

「ひやあああああ……」

静かな、しかし確かに脳に伝播するぞくぞくとした感覚。沙織ちゃんは喋りながらもピンク色の突起を弾く手は止めておらず、暴力的な快感と合わさり再び絶頂を迎えてしまう。既に僕は何度も頂点を極めており、沙織ちゃんに割り開かれた足の付け根からは、ねっとりとした液体が風呂の中へと混じっていく。

何度もイカされて沸騰する頭と、風呂のお湯で温められる体温のせいで、茹でだった思考はだんだん霞が掛かってくる。それでも、沙織ちゃんの愛撫にいつまでたっても満足出来ない僕がいた。さもありません。

「ひ、ひだりもいじってくださいいい、おねがいしましゅ……」

「あれ？ 右だけでこれだけイければ十分じゃないです？ 幸平さん」

左手でくりくりと乳首を弄りながら、右手は股間から愛液を救い上げ、僕の目の前にその粘り気の強い液体をかざす沙織ちゃん。年下の子にここまで感じさせられる僕自身と、そんな恥知らずなおねだりをしてしまう僕に対しての羞恥で、快感とお風呂による熱以外で顔が赤

くなってしまう。そう、沙織ちゃんはひたすら右の乳首だけを弄り倒しているのである。沙織ちゃんの激しい愛撫で赤くなり始めた右の乳首に対して、いくらおねだりしても刺激が加えられない左の突起は、いつまでたつても来ない。褒美に辛抱しきれず、充血しきりびくびくとひくついていた。

「やあ……これだけイってるのに、まだ切ないの……」

「あああ、幸平さんの蕩けた顔も、泣きそうな声でのおねだりもとっても可愛いなあ!!」

あの美衣さんが結婚したのも頷けますね!!」

思考回路は仕事を放棄し、早く楽になりたいと快楽のみを追及していた。何をどんなふうに喋っているかなんて、最早僕自身把握できていなかった。

「じゃあ最後に思いつきりイかせてあげますが、最後に一つだけお聞きしたいことがあるんです」

「な、なあに?」

「私と美衣さんの愛撫、どっちの方が気持ちよかったです?」

蕩けた思考に、浴びせられる冷や水のような質問。正直、どちらも気絶しそうなほどに気持ち良い。それでも選ぶのは、大好きな美衣ちゃんなのだが。しかし。

「正直に答えてもらって良いですけど、もし美衣さんだなんて言ったら、私悲しくてこのまま辞めちゃうかもなあ」

「う、ううう……」

沙織ちゃんのこんな言葉が僕を悩ませる。時間感覚なんてもうあやふやだから、どれだけの時間イカされ続けていたのかはわからないが、それはイコールそれだけの間我慢させられ続けていたということでもあり、もう我慢できそうになかった。でも、これで沙織ちゃんと答えるのも美衣ちゃんを蔑ろにしようで嫌だった。雁字搦めになって追い詰められた末、僕が出した結論は……

「み、美衣ちゃんの方が気持ち良いです……」

「あれ、幸平さん、それで良いんです? ずっとお預けになっちゃいますよっ。」

愛撫の手を止めて、くるくると乳輪の周りを指でなぞっている。決定的な快楽ではないそのむずむずする感覚に、僕は焦燥感を煽ぶられる。それでも結論は変えない、一度決めた結論を覆すのは、男らしくない。

「お預けはいやだけど、だって、だってえ……沙織ちゃんもすごい気持ちよかったけど、やっぱり美衣ちゃんの方が大好きなんかも……」  
「……」

快感でピンクがかった脳みそから出てきた言葉は随分子供らしくなってしまうのだが、それでも僕の意味はしっかりと伝わったはずだ。ぐすぐすと無図がりながらもそう答えた僕に、沙織ちゃんはいと。

「もう可愛いなあ幸平さんったら!! 嘘ですよ、いくらでもイかせてあげますってえ!! ……愛しの美衣さんがね!!」

「ふへっ」

ぎゅ、と後ろから強烈なハグをかまされたと認識する間もなく。ぐり、と摘ままれる左の乳首から送り込まれる待望の快感に、包皮越しにぐりぐりと刺激されるクリトリスの暴力的な快感が合さり、僕の思考回路はあっけなく吹き飛びそうになる。

「幸平さん、幸平さん幸平さん幸平さん……私も、大好きですよ」

「~~~~~!!」

声なき声を上げる喉に、明滅する視界。大好きな美衣ちゃんの体温が直接僕に伝わり、安心しきった僕は、ゆっくりと意識を手放すのであった。

「うう、ううは……」

僕が目を開くと、木目の天井を見上げていた。どうやら脱衣所のベンチに寝かされていたようだ。いつの間にもやら、旅館の浴衣に着替えさせられている。

先ほどの快楽の余韻がまだ残っているのか、体の動きが覚束ない。

気絶する前の行動を思い出して恥ずかしくなるが、この一か月間で慣れてしまった僕にとっては今更の話である。行為中に、何故か言動が幼くなる。男の頃はこんなことなかったし、恥ずかしいし止めたいのだが、原因不明で抑えようがないのである。根本的な対策としてはそもそもしないという選択もあるが、興奮した美衣ちゃんに勝てないという腕力的な面でも敵わなければ、今日はちよつと……と断った時の寂しそうな表情からくる、精神的な圧力でも敵わないからもうどうしようもない。

さすがに、高橋や沙織ちゃんの前ですら致すことになるとは思ってもみなかったが。

「美衣ちゃん達、まだ入ってるみたいだな……」

籠の中には美衣ちゃん達の洋服が入ったままである。気絶した僕を先にお風呂から上げて、そのままお風呂タイムを続行しているのだろうか。ぴたぴたと素足で床を歩きながらお風呂の扉を開けるべく近づいて行ったのだが……

「イ、イつくうううう……!! だ、だめ、これ以上イつたらおかしくなるっ!! つひああああああ!!」

「うわあ、美衣さん凄。お兄ちゃんが媚薬無しにここまで乱れてる姿、初めて見た……」

「さおり、そんなこと言ってないで助けっふあ!!」

「沙織ちゃんはテクニクは十分あるんだけど、ちよつと逸りすぎね。イかせてあげる直前に焦らす様に一瞬止めてあげたり……」

「っふあ!! はあ、はあ、はあ、なんで——」

「油断したときに一気にこうやって攻め上げてあげると」

「っあ——!!」

「イった時のピークが長く深くなるから、こういうことも覚えていくと良いわね」

「流石美衣さん、勉強になります!!」

一体何の勉強をしているのだろうか、彼女らは。教材が高橋なのは何となくわかる。楽器の勉強だろうか。うん、きつとそう。だってほら、高橋も美衣ちゃんにチューニングされていろんな高さの声上げて

るし。

「触らぬ神に祟りなし……」

よし、まだ起きてないふりをして横になっていようかな。まだ頭がぼーっとしてるし、体はまだ重いし。……高橋の嬌声で、あそこが濡れちゃって来てるし。いや違うんだこれは、高橋に欲情しているわけではなく、あの高橋がこれだけ声を上げる、美衣ちゃんの愛撫を思い出しているだけなのだ。

……誰に言い訳しているのだろうか、これ以上はいろんな意味で危ない。

あ、ちなみに、これはさつき高橋に見捨てられた仕返しでは断じてない。ただ単に、この状況に介入する勇気がないだけである。

「おやすみなさい」

ころんと椅子の上で横になると、僕は再び気持ちの良い午睡に身を任せるのであった。

そして、そんな見捨てるような真似をした罰が当たったのか。僕が再び目を開けると、そこは既に脱衣所ではなく、部屋へと場所が移っていたのだが……

「……んう?」

「あ、起きました? 幸平さん」

「うん、おはよう美衣ちゃん」

座った状態で寝かされていた僕に、美衣ちゃんが僕の後ろでござこそと何かをしながら声をかけてきた。返事をしつつ、反射的に体を動かそうとするのだが、腕やら足が動かない。まるで縛られているようだ。

「あの、美衣ちゃん? 僕に何したの?」

「え? 縛ったんですよ?」

「縛った!?!」

「よし、出来ました」

ぎゅ、と手首が閉まる感覚。体を見下ろすと、僕は真っ裸で胡坐をかいた状態で、縄で縛られているようだった。手は後ろに縛られ、全身に走る縄、縊りだされ、強調された胸の先端では、相変わらず元気な乳首が自己主張をしていた。これが自分でなければ、そんな性癖が無い自分でもごくりと生唾を飲んでしまいそうな光景であったのだが。

「どうですか、幸平さん？ これなら痛くないと思うんですけど」  
「いや、確かに痛くはないけどさ」

それ以外にもっと気にしてほしいところがあるというか……  
体を捻ろうとすると、縄が軋む音が耳につく。しっかりと専用の縄で拘束されているらしかった。

美衣ちゃんが縛ったのであろうが、態勢のキツさ以外に縄で締め付けられて苦しいところはない。動かないといっても、ある程度稼動するくらいは緩められており、適度な拘束感を僕に与えてくる。

「縛るのは久しぶりで心配だったんですけど、忘れていないみたいで安心しました」

「え、美衣ちゃん縛ったことあるの!？」

「勿論ですよ。昔取った杵柄ってやつですね」

開いたキャリーケースの中に余った縄を片付けながら、美衣ちゃんは事もなげに僕の驚愕に答える。家事から始まって美衣ちゃんは何でも出来るイメージだったんだけど、こんなことまでできるなんて衝撃だった。僕が女の子になる前はそんな素振りすら見たことなかったから、余計である。

「学生の頃に少し縁がありました、この女将さんから教えていただいたんです。今でこそ引退されていますが、昔は緊縛界ではその名を知らない人はいない程で、その人に教えを受けられた人は皆から羨ましがられるくらい凄い方なんですよ」

「ええー!?! あの女将さんが!?!」

驚くべきところは色々があるが、まず処理すべきはここだと突っ込む。女将さんと聞いて殆どの人が想像する通りの、お客さんを立てて肅々と仕事をこなす、着物の似合う50代くらいの理想的な年の取り

方をしたご婦人だったのだが、そんな裏があるとは誰が想像できるだろうか。というか、美衣ちゃんの言ってた伝手ってそういうことか！

ぽかんと口を開けて衝撃を隠せない僕に、美衣ちゃんはすつと隣の部屋の襖を指さす。昼間は開かれていた部屋は、夜になると布団が敷かれ、襖で仕切つて僕たちと高橋達のプライベート空間となる。とはいえ、ただの木枠に紙を貼っただけのものに防音効果など期待できるわけもなく、音はこちらに筒抜けなのだが。

「あいたたたたたた!? むね、胸が締まってる!!」

「ああ沙織さん、それじゃすぐに鬱血して解かないといけなくなりますよ。その縄はこの間を通してですね……」

「おお、こつちの方がよりお兄ちゃんの胸が強調されて、卑猥でやらしいですね!! さすが女将さん!!」

「アレンジも良いですが、生兵法は大怪我の基ですからね。今日でしっかりと基本を学んで、自分の技を身に着けてくださいね」

「はーい!! くふふ、これさえ覚えてしまえば、お兄ちゃんからの反撃なぞ怖くない……!! お兄ちゃんに縄の味を覚えさせて、私から離れられなくさせてやるのだ……!!」

「女将さん、こいつにいらん知恵付けさせるのやめてくれませんかね?! これ以上激しくなると俺の身が持たないんですが!!」

「しかし、お兄さんも縄化粧の似合うお方ですね。これ程のお客様は未だかつて出会ったことがない。

……いけません、縄師としての血が騒いできました。これは、沙織さんのご指導が終わった後は私の特別技をかけて差し上げるしかありませんかね……」

「ひい、今度は女将さんまで!? いや、お願いだから話を——いああつ!!」

「もう、お兄ちゃん、今は私の番なんだから集中してよ!! うふふ、今夜は寝かさないぞ♥」

「今夜も、の間違いだろ!? くふう、そこ弱いからあ、変な癖ついちゃうからあ!!」

「お兄ちゃんは私のものだもん、今日は徹底的に、私のものだって印つ



「けちやうもんねー!!」

助けて誰かー!! という高橋の悲鳴が、嬌声になるところで耳をふさぐ。いや、縛られてるから耳塞げないし、聞こえてないフリなだけだ。これ以上聞いてたら僕もダメになりそうだし、何なら僕も今からおいしく頂かれるところだし……高橋が教材の勉強会その2から目を背けると、満面の笑みの美衣ちゃんと目線があう。

「女将さんも楽しんでるみたいで、何よりですよね」

「そ、そうですね」

気づけば、美衣ちゃんの手にはキャリーケース一杯に詰まっていた、色とりどりの大人のおもちやが握られていた。冷汗が止まらない。いつも抵抗できているとは言い難いが、それでも一応動ける状態で受け入れるのと、全く抵抗できない状態で責められるのでは大きく違う。

「さつき、私の方が気持ちよかったって言うてくれてとっても嬉しかったです」

じりじりと僕に迫り来る美衣ちゃんは、憂いのある表情を浮かべる。

「私、昔から女の子も好きになれる子だったんです。家族以外に言ったことはないですけどね。男の人を見てかつこいいなって思うことはあつても、恋人にするならやっぱり可愛い女の子が良いなって、いつも思っていました。」

そんな私が初めて好きになった男の人が、幸平さんだったんです。ういんういん、とバイブを動かしながら美衣ちゃんは続ける。

「二目見て、この人だつて確信しました。幸平さんが女の子っぽいわけではないですよ。付き合ってきた人の中で初めて、この人となら結婚できる、一生を添い遂げられるって、そう思えたんです。」

実際、幸平さんは素敵な人でしたし、後悔なんてありませんでした。女の子とエッチするときはいつもリードしてあげてましたから、初めてされる側になってみて、いつも私を気遣ってくれる幸平さんを見て、やっぱり素敵な人だつて。

でも、やっぱり女の子を可愛がりたいて思っちゃう自分も居て、

幸平さんと倦怠期になっちゃった時、それがピークになっちゃって。町を歩く女の子にいろいろ目移りしちゃったりして……」

抵抗する気力をなくした僕を呆気なく制すると、ぶつぶと振動するピンクローターを僕の乳首に取り付けながら、美衣ちゃんはしょんぼりとした顔で言う。

「幸平さんが女の子になっちゃった時、大変だっと思って思う前に、実はご褒美だっと思ってしまいました。そんな私が情けなくて。幸平さんが先に泣いてなかったら、私の方が泣いちゃいそうでした。」

でも、そんな私を受け入れてくれて、女の子には攻めたがりな私も受け入れてくれて。やっぱり、私は幸平さんの事が大好きなんだなって思っただけです」

ころんと、僕を布団の上に寝ころばせて。僕を覗き込んだ美衣ちゃんは、満面の、花が咲いたような笑みを浮かべるのだった。

「えへへ。私、女の子としても、男の人としても、貴方を愛しています」  
「ずるいよ美衣ちゃん。そんなこと言われたら、抵抗出来ないよ……」  
笑みを交わした僕らは、静かに唇を合わせる。絡み合う舌、お互いの吐息だけが部屋に響き、時折混ざる水音に、否応なしに僕の興奮は高まっていく。

たつぷりと一分以上愛し合った後、どちらからということもなく、自然に口を離すと。頬を上気させ、妖艶な笑みを浮かべる美衣ちゃんと目が合う。

「今日は、いろんな道具でたつぷり愛してあげますね、幸平さん？」  
問いかけではない宣言に、僕は初心な少女のように頷くしかなかった。

つぶ、と口に割り入れられた指にちゅばちゅば音を立てて吸いつくと、不自由な体と合わさってまるで赤子に戻ったかのような心地になってくる。

かちり、とスイッチを入れる音が鳴ると、ピンク色の突起にテープで張り付けられたピンクローターが、ぶつぶと振動を始める。

「んぶあ……」

一定のリズムで振動し続ける、無機質な快樂。美衣ちゃんや沙織

ちゃんのテクニクに比べれば天と地ほどの差があるその刺激は、最早物足りなさしか感じず、僕は手慰みに美衣ちゃんの指を吸って耐えしのぐしかなかった。

「幸平さんのこころ、物欲しそうに口を開いていますよ。お布団にまでお汗が垂れちゃって、とつても恥ずかしいですね」

そんなえつちな幸平さんが、私は大好きなんですけどね。そう耳元でささやかれ、恥ずかしさで死にそうだった僕は、一気に発情する。つつ、と女性器から零れた雫が背中を伝って布団を濡らし、背中の内と外、両方からぞくぞくとした刺激が僕の脳に駆け上ってくる。くい、と指の腹で舌を押さえつけられて、無理やり口を開かれると、自然と懇願の声漏れ始める。

「みいひゃん、おねがいます、ぼくのおそこに……その。うう、恥ずかしい」

「ううう、幸平さんが可愛すぎるう……折角縛ったのに、もつと虐めて一杯やらしいおねだりさせたいのに、もう幸平さんに入れたくて仕方ない……」

地味に毎回やらされているこのおねだり。しかし、すっかり少女のような声色になってしまった僕が、その卑猥な単語を口に出す事にとっても慣れず、毎回このように最後まで言えずに断念してしまうのだ。顔を真っ赤にして美衣ちゃんから顔を背ける。そして、毎回美衣ちゃんも僕のあられもない姿に悶絶しているようで、結局最後は美衣ちゃんが折れてしまうのだが。

「今日は、旅行に来たんですもの。せめて、せめて幸平さんのおねだりを聞くまでは絶対、入れてあげませんからね!!」

美衣ちゃんはあたりに転がっていた道具をぶこそと触っていると、ずい、といきなり黒い物体を僕の視界に差し入れる。それが何かを理解した時点で、僕は生唾を飲み込む。

男性のあそこを横したおもちゃである。ただ、それは単なる dildo ではない。片側だけではなく、本来持ち手になっているはずの場所にも男性器が聳え立っていた。双頭デイルド、女性同士が愛しあう際に使われることもあるおもちゃだ。今まで、幾度となく使われてき

た、あのおもちや。

見えなくてもわかる程とろとろになっているあそこに、それを入れられる感触を思い出す度、息が荒くなり熱い吐息が僕の口から吐き出される。

「ほら、幸平さんが大好きな、私のおちんちんですよ。我慢できなくて、私の方は入れちゃいました。後は、幸平さんの中に入れるだけなんですけど、その前に、おねだりだけ、聞かせてくれませんか？」

作り物のおちんちんと、僕の女性器が接触する。少し腰を動かすだけで中に挿入されるという段階で、美衣ちゃんはそう僕に囁きかけるのだ。

興奮に喘いでいるのは僕だけではなかった。美衣ちゃんも、普段の潇洒な姿からは想像もつかない程興奮しきり、荒い息と欲望の視線を僕に向けてくる。愛しい人が僕で興奮してくれている、それだけで、理性のブレーキは容易に破壊され、先ほどまで考えるだけで恥ずかしかった言葉が口をついて出る。

「ぼ、僕のおまんこに、美衣ちゃんのおちんちん、ください」

「あああ、最高に愛してます、幸平さんっ!!」

ずぶずぶ、と音を立てて僕の中に入ってくる。開発されつくした膣内を摺り上げながら奥へ奥へと進んでいくその異物に、僕はただ口をぱくぱくと開閉させることしかできない。いつまでたつても慣れない異物感、自分の中に何かが入ってくるという感覚。普通の男性なら一生味わうことの無いその感覚は、美衣ちゃんの懇切丁寧な開墾作業によって、切り開かれ植え付けられ、とつくの昔に快樂へと変換されるよう開発されつくしていた。

「ああ、幸平さんのおまんこもすっかりおちんちん飲み込むのも慣れたみたいですね。最初はあんなに嫌がってたおちんちんも、今では入っただけでイけるようになるだなんて……私、感動してます」

「んああ……」

美衣ちゃんと僕の腰がくつつき、デイルドが狭い膣一杯に埋め尽くされている。とてつもない圧迫感に呼吸が浅くなるが、それでも、美衣ちゃんと繋がっていると思うだけで苦しさすらも愛おしさの中に

溶け込んでいく。

「じゃあ、動きますね」

ずち……パアン!! パアン!! パアン!!

「んひいいいいっ!! あ、ひああっ!!」

美衣ちゃんはその一言でピストンを開始する。音だけで容易に激しさが想像がつく程、えげつない音を伴う壮絶なピストンに、僕はもう微かな呼吸を繰り返す他ない。

引き抜く際はデイルドのエラの部分が、愛液で淫らにぬら光る膣壁からその液体をこそぎ落とし、外に掻き出したかと思つた次の瞬間には、その長大な陰茎の全てを膣内に収めんと猛烈な勢いで、子宮へと向かつて迫ってくるのだ。

「あつ、あつ、気持ちいいです、幸平さんっ……!!」

前傾姿勢で僕に覆いかぶさってきている美衣ちゃんも、その快樂で全身汗濡れで、時折ぼたりと僕の肌や縄に滴り落ちてくる。その艶やかな姿に、下半身からの快感とは別のベクトルの心地よさを感じていた。攻められているのは僕の筈なのに、まるで自分も美衣ちゃんを攻めているかのような錯覚。指や舌で攻められている時とは決定的に違う、一方通行な快樂ではなく、お互いが気持ちよくなれる男女のセックスのような。

「あああつ!! ぼ、僕も、気持ち良いよおっ!!」

「はあ、はあ、幸平さん、幸平さん……!!」

「美衣ちゃん、美衣ちゃん……!!」

お互いの名を呼びながら、淫蕩に耽る僕たち。お互いの性器から零れ落ちる蜜が混じり合い、股間はぐちゃぐちゃになっていった。

ごりごりと膣の中の気持ち良いポイントをこすられ続け、まともに喋ることすらできない状態になっていた。溺れているのは間違いなく女性の快樂なのに、愛しい人と繋がれているという幸福感が合わさり、僕はもう何度も意識を飛ばしかけていた。

「全身ビクビクしてます、幸平さんも、いきそうなんですっ!! いきますよ、一緒にいきますよっ!! ああ、止めのガン突き行きま

すよ、おおっ!!」

「美衣ちゃ、あっ!! 美衣ちゃあ、いちやあ……!!」

より激しさを増した美衣ちゃんの腰のグラインドに、視界がチカチカと明滅し始める。体感でわかる、ありもしない美衣ちゃんの精液欲しさに、子宮がちよつとずつ下に降りてくるのが。それは、自意識が男である僕が覚えてはいけない禁断の感覚。当初はデイルドですら入れられることを拒んでいた僕なのに、今では忌避感は無かった。

それは、抗いがたい快感に屈した訳ではない。今でも、少しは嫌悪感が浮かばないことはない。それでも、僕が偽物でもおちんちんを女性器に入れるだなんて事を決心できたのは。これが、僕を攻めてばかりで全く満足できていないだろう美衣ちゃんを気にしていた僕が、唯一美衣ちゃんと一緒に気持ちよくなれる行為だからだ。

大好きな美衣ちゃんが、僕で気持ちよくなってくれているんだという喜び。人によつては物扱いだと怒る人もいるのだろうが、弱い存在になってしまった僕にとってはそれが、何物にも代えがたい充足感を与えてくれていたのだ。

拘束された足が一人でに暴れだす。僕の腰を掴む美衣ちゃんの手も、びくびくと痙攣し始める。

「あ、あ、イク、イクツ、イっちゃいますっ!!」

「一緒に、一緒にいっ!!」

体が浮き上がるほどの衝撃に、単純な言葉を繰り返す事しかできない。ふわふわと飛び始める僕の意識に止めを刺す様に、美衣ちゃんは腰をぐつとつかむと、最後に一際強く僕の中に突き上げる。

「~~~~~!!」

「イっくううううっ!!」

ごちゅ、とデイルドが子宮口にめり込む音が僕の中に響き渡り、僕はその激しい快樂の濁流に、全身を激しく痙攣させ、唯一動かせる頭を仰げ反らせ、その快樂の度合いを不自由な全身で精一杯表現する。未だかつて感じたことのない程の悦楽に、喋るという機能を忘れた口は、ただただ絶頂で失った思考回路を回復すべく、反射的な呼吸を繰り返すのみ。

「あっ、はあっ!! イ、いってるうっ!!」

時を同じくして、僕の痴態に興奮していた美衣ちゃんも同様に絶頂を迎えていた。しかし、女の子歴一か月で息も絶え絶えな僕とは違い、深い絶頂にもまだ余裕がある様子で……

「んひいっ!!」

遠のきかけていた僕の意識は、ぎゅ、と摘ままれたクリトリスから脳にダイレクトに伝わる快樂で、再び現世へと呼び戻される。

「えへへ……まだ、夜はこれからなんですよ。まだお家でも使っていない道具、沢山あるんです。ここでしか使えない道具も、一杯あるんです。幸平さん、今日は寝かさないんだから……」

餓えた獣のように、半開きになった唇から零れ落ちる涎が、未だ絶頂の余韻でびくびくしている僕のお腹に滴り落ちる。そのひんやりとした感覚でまた軽くイってしまった僕が、反論なんて出来るわけもなく。縛られていた気分と、ちよつとした思い付きで、雰囲気流された僕はとんでもない言葉を口走る。

「ご主人様あ……」

その声色は絶頂を極めた余韻で蕩け切っており、まるでご主人様に甘える奴隷のように淫蕩に沈み切っていた。正常な意識など残っていない、もつと美衣ちゃんに満足してほしい、そんな思いが出したこの言葉に、美衣ちゃんが誘われなわけがなく。

「幸平さんが誘ったんだもの、私はやりたくないけど、仕方ないよね。そう、きつとそう。うふ、ふふふふ……」

こんなえつちな格好でご主人様を誘う奴隷ちゃんには、朝までたっぷりお仕置きですよ……後悔してもおそいですからね。もう、何を言っても、止まらないんですから……」

普段なら寒気すら覚えるその言葉にも期待感しか抱けない程、美衣ちゃんとの同時絶頂に呆けていた僕には、愛のささやきも同然だった。

「ご主人様、大好きい……」

「私も、大好きですよ、奴隷ちゃん」

既に世界観に入り切っている僕たちは、その言葉を合図に、再び淫欲に満ちた世界へと落ちていくのだった。

山々の間から顔を出した朝日が、部屋の窓から布団の上で重なり合うように倒れこんでいた僕たちに差し込む。

寢息を立てて眠る美衣ちゃんの顔に朝日があたり、その美しい顔がかんばせ一際輝く。僕の自慢のお嫁さんは、絶世の美人だと思う。僕には勿体ない人だと、何度思ったか。人に紹介するのも、釣り合わないな、なんて言葉が怖くて言えない程、劣等感を抱いていて。それに見合う男になろうと頑張りすぎて、一時期はすれ違ってしまったけれども。今では、自信をもって彼女が僕のお嫁さんなんだと皆に自慢できる。……女の子になった後で実感するだなんて、情けない男だとは思うけれども。彼女を世界で一番愛せるのは僕だし、彼女の情熱的な愛を受け止めきれぬのも、世界で僕しかないんだと、ようやく思えるようになった。

起こさないよう、そっと、彼女の頬に僕の小さな白い手をあてる。かわいらしい寝顔に、僕の顔は綻ぶ。終始縛られていたせいとか、痛む体を押しすぎて、つと彼女を抱きしめる。身長差で彼女の豊かな胸に顔を沈めているせいとか、ぱつと見は母に甘える娘なのだろうが、この際気にはしまい。

「素敵なクリスマスプレゼントだったよ、ありがとう、美衣ちゃん」  
気恥ずかしさから、仮に起きていても聞こえないような小声でお礼を言う。

女の子になってからというもの、男の頃とは付き合い方が変わる人たちが多し。付き合いがほぼ無かったのに、馴れ馴れしく話しかけてくる人や、逆によそよそしくなったり。パターンは様々だったが、性別が変わったのだからそれは当たり前前の話である。同じ境遇である高橋や、沙織ちゃんが特殊なのだと頭でわかっているつもりでも、それでも僕が少なからずショックを受けているのを、美衣ちゃんはよくわかっていた。僕が隠せているつもりでも、落ち込んでいる日の夜は、いつにもまして激しかった。快樂で乱れる中で、隠れて涙を流し



た事が何度あっただろう。美衣ちゃんがいなかったら、きっと僕は耐えられなかった。僕からのクリスマスプレゼントは、ちよつと高いお店でのディナーと、新しいペアの指輪だなんて即物的な物で申し訳なかったのだけれど。美衣ちゃんからは、気の置けない仲間と、愛しい人と。とても楽しい思い出を貰った。……途中、美衣ちゃんの欲望が暴走してたところもあるけれど、僕もとっても気持ちよかったから、これで良いのだ。美衣ちゃんには、感謝しても仕切れない。

「んふふ」

突然、ぎゆう、と美衣ちゃんが僕を抱きしめる。起きたのかと思つてドキリとしたけれど、寝息は安定していて、たまたまなのだと思つと一息つく。

とくん、とくんと一定のリズムで刻まれている、美衣ちゃんの鼓動を聞きながら、僕はもう一度まどろみの中に落ちていくのだった。

「私こそありがとうございます、幸平さん」

朝起きて、今度はエッチな行為は無しでゆつくりと温泉につかり、女将さん特製の絶品の朝食を食べて。旅館での一泊二日の旅を満喫した僕らは、女将さんから見送られながら帰路についた。帰りの運転は勿論、高橋である。

疲れていたのか、後部座席で熟睡している女性陣をさておき、僕は助手席に座り、高橋のナビをしながら他愛のない会話を交わしていた。

「最初はどうかと思っただけど、最終的には楽しい旅だったね」

「ああ、食事も美味かったし、風呂も気持ち良かったしな」

「2回目はね」

「言うな、それを……考えないようにしてるんだから」

顔を赤らめ煙草をふかしながら、見事なハンドルさばきで車を走らせている高橋の姿は、まるでドラマのワンシーンと間違う程様になっている。小学生に間違えられかねない僕と比べて、何でこんなに差があるんだと悲しくなりつつ、今朝からずっと気になっていたことを切り出す。

「なあ高橋。今朝死にそうだったけど、そんなに良かったの？ 女将さんのテクニック」

「それ、聞いてちょうかあ……」

僕の問いに、顔を歪めてかなり嫌そうにつぶやく高橋。

今朝、高橋達より僕たちの方が先に起きたわけだが、満足げな表情を浮かべ寝付く沙織ちゃんとは対照的に、憔悴した様子で沙織ちゃんに抱き着かれて布団に倒れ伏す高橋の姿に、思わず美衣ちゃんと顔を見合わせていた。部屋には、美衣ちゃんが持参したものより更にえげつない道具が高橋の周辺に散らばっており、高橋による勉強会は盛況のうちに終わったのだと否応が無しに理解させられたのだ。

聞こうにも切り出すタイミングが無く、女性陣が寝付いたこんな場面で聞くことになったのだが、高橋は苦虫を潰したような表情を浮かべて、苦しそうにこう吐露した。

「俺、ずっと、自分はどちらかというところだと思ってたんだよ。布団の上じゃ女性は悦ばせてなんぼだし、満足させてやるのが男の甲斐性だってな。だから、沙織にいつもやられてる時は何か納得行かなくてな……そりゃ、今は女なんだし、確かに女性になった影響で感じやすくなってるのはあるけどさ、それでも俺らの自意識じゃ男なわけだし。早く、元に戻りたいって思ってたわけさ」

「思ってた？」

常日頃から高橋が漏らしている、早く男に戻りたい、という一言。正直、美衣ちゃんさえいればどうなっても良いと思いは始めている僕には薄い感情だが、高橋にとっては何にも譲れない思いである。それを覆すような発言に驚く僕に、高橋は昨晚の光景を思い出したのか、再び赤くなった顔を隠す様に右手を顔に当てる。

「……あの女将さん、やべえよ。お前のかみさんの師匠なだけあるわ。風呂場でお前のかみさんにやられた時も既に陥落気味だったのに、あの人の手にかかったら、俺なんてまな板の上の鯉だったわ。マジで半端ない、沙織なんて下の下、お前のかみさんですら霞むくらい、やばかった」

「え、そ、そんなに?」

「そんなにだよ。」

……初めて、女のままでも良いなって、思っちゃった。

いよいよ俺も終わりかもしれない……」

右手の下から覗く赤らめた表情。それは最早、羞恥から来る赤さでは無かった。昨晚の痴態を思い出し、発情していたのだ。

男に戻ることに固執していた高橋にこうまで言わせるとは、女将さんって一体何者なんだ……

「おい東、お前も気を付けた方が良いぞ」

「え、何で僕が?」

戦慄が隠せない僕に、高橋が僕に突然そう忠告してくる。その女将さんの弟子であるっぽい美衣ちゃんが奥さんだからか? それなら、もう既にその片鱗は味わってるし問題ないが。

「あの人、去り際にお前のかみさんに秘伝の書的なの渡してたぞ」

「え……」

そう余裕ぶっこいていた僕の表情を、凍り付かせるような一言。はっと思いつき出し、後部座席を振り向くと。熟睡している美衣ちゃんが書き抱いているのは、一冊の手書きのノートである。表紙の隅っこには、あの女将さんの名前。たたり、と冷汗が流れ出す。え、今でも十分すごいのに、あれ以上になるの……?」

「俺はもう諦めた。男に抱かれるよりはマシだと考えることにした。お前も諦めた方が良くぞ、人生、諦めが肝心だつて偉い人も言ってるしな」

「は、ははは……」

悟ったような事を言う高橋に、乾いた笑いしか出てこない。折角良い気分で行先を終えようとしていたのに、完全に藪蛇だった。

「まあでも、僕の奥さんだからね。こんな姿になっても受け入れてくれる、僕の自慢の奥さんだから。何されても、僕も受け入れるまでさ」  
「ははは、強がりさんめ。美衣さんのことご主人様く、なんて言っただけでなくせに、良く言うぜ」

「あれ聞いてたのお!？」

「ああ、当たり前だろ。むしろ、あんな大声で喘いで聞こえてないと思っただお前の方が不思議だよ。襖一枚だぞ?」

「うう、穴があつたら入りたい……」

「はっはっは、これからも末永くご主人様から喘がされることだな。お幸せに」

「高橋に聞かれるとは、恥ずかしすぎる……でも美衣ちゃん好き……」

「この状況で惚気られるとは、強くなったなお前……」

「私も大好きですよ幸平さんっ!!」

「うわあ!! 美衣ちゃん、起きてたの!？」

「私も、私も大好きだよお兄ちゃん!!」

「ひああっ!! やめろ沙織!! 運転中だぞ胸揉むな!! 隣のドライバーガン見してるだろうがっ!!」

こうして、姦しく旅行は終わりを告げるのであった。男に戻るかは定かではないけれど。少なくとも、美衣ちゃんや高橋達がいる限り、後悔のない日々が送れるに違いなかった。

……明日からの夜の生活については、頭を抱えているけどね。

「年末年始の休みに入ったら、女将さん直伝のノート、片っ端から試していきますから……楽しみにしててくださいね、幸平さん」

「お、お手柔らかにね?」

語尾にハートマークでも付きそうなほどうきうきし踊っている美衣ちゃんの言葉に、やはり僕は乾いた声を上げることしかできないのであった。

TSしたせいで自殺まで考えた俺が、上司のお陰で立ち直るまで

### 3 (前編)

子供の頃、生まれ変わるなら男女どっちが良い？ だなんて話をしたことはないだろうか。なんだかんだ言って、皆一度くらいは考えたことがあると思う。ちなみに、俺は考えたことがある。それもつい最近、かなり真剣に。

現実的にはありえない話だが、子供の頃は割と真面目に考えた人も多いだろう。とはいえ、大半が今と同じ性別を選ぶと思う。それには友人の手前、異性を選ぶなんて気恥ずかしいといった理由もある程度含まれるが、大抵はまだ異性に興味がないのが理由じゃないかと思う。だが、大人になり色々と経験すると、一概にそうも言えなくなる。

社会に出てみると、色んなところで起こる男女臍尻に、異性が羨ましいと考えることも多くなる。それと同時に、今の性別で良かったと思うことも多々あり、結局は半々くらいになるのではないかと思う。

正直、善し悪しだ。女性じゃ入りにくい場所もあれば、女性だけサービスを受けられるお店があったり、女性特有のよくわからない仲違いにいじめ、男は痴漢の疑いをかけられやすいなど、考えればきりがない。総合して、最終的にはどっちのメリットをとるか、という個人の好みになると思うのだが。あの事件以来、割とよく聞く命題だ。他人の意見なんて正直どうでもよくて、結果は覚えていないが。

じゃあ俺はどっちなのかって？ 俺としてはどっちでも良いんだけど……出来るなら男、少なくともどちらかに固定してほしいとは、切実に思うね。

本人に自覚はなくとも、傍から見れば、俺は仕事人間という人種に分類される方だと思う。

何せ、残業は全然苦じゃなかったし、休みは欲しいが、必要とあれば休日出勤も何の躊躇いもなくやっていたから、間違いないだろう。

嫌な上司の鼻を明かすという意図もあったが、そこまで頑張れた最大の要因は、出世欲というより単純に営業の成績が伸びていくのが楽しかったからである。仕事をなめているわけではないが、ゲーム感覚というか、時間をかければその分成果が上がるその仕組みが俺に合ったのだろう。気づけば、営業成績一位の座を手に入れるまでになっていた。

だからこそ、唐突な配置転換は堪えた。何せ、気づかぬうちに半分生き甲斐にまでなっていた仕事を奪われたようなものだから、当然である。だが、抗議はしなかった。いや、出来なかったのだ。その異動は、俺自身も納得した上での異動だったからだ。

俺自身の努力では、もつと言えれば現代の医療でさえも手出しの出来ないかなり深刻な事情。俺は、人生で初めて運命とやらを恨んだ。どうして、何故。よりによって俺なのか、と。

営業の電話が飛び交う、がやがやと騒がしい活気のあるオフィスの一角に、俺の席はある。異動になり仕事内容は変わったものの、オフィス自体は変わってない。精々、席が変わったくらいのものだ。以前よりも随分楽になった仕事をこなしていると、上席から俺宛に指示が飛んでくる。

「慶介君、悪いんだけど、今午後からの会議で使う資料送ったから、一時までにコピーして会議室に並べておいてくれる？」

「わかりました」

声をかけてきたのは、長い髪を後ろで縛り、メガネで強調されたつり目気味の目から厳しい視線をこちらに向け。メリハリのある美しい肢体を見事に着こなしたスーツ姿で覆うその女性は、今の俺の上司の名瀬部長。年は若干20代後半にして部長職に就く、この部きつての出世頭である。

俺に向けてくるその険しい視線からは想像しにくいが、彼女はとても良い上司だ。部下の面倒はしっかりと見るし、仕事も投げっぱなしにせず最後までフォローしてくれ、何かあれば率先して動く。その上男女関係なく部の皆から慕われており、正に理想の上司と言えるだろう

う。

「それと慶介君、昨日出してもらった書類だけど。」

大きなミスはないけど、言葉の表現だったりまだまだ細かいミスが目立つわ。私で全部訂正して置いたけど、次からは気をつけてね」

「……はい、すみません」

……ただし、俺以外にとっては、という枕言葉がつくののだが。

名瀬部長は、俺に対してだけ、何故か無駄に当たりが強いのだ。雑用を任せられるのはまあ、今の俺の立場だと仕方ないことだと納得するとして。普段の仕事のチェックが、他の社員よりも明らかに厳しいのだ。いくら（俺以外には）寛容な名瀬さんだって、客先に謝りにいくレベルのミスがあれば流石に部下を叱責するが、俺に関しては全く違う。その重箱の隅をつつくようなハイレベルなチェック体制は、異動以来、俺が一度もお叱りなしでチェックを通過したことがない、と言えばよくわかるだろうか。仮にも、以前は営業部のエースを張っていたこの俺が、だ。最早揚げ足取りも良いところなのだが、睨みつけるようなその鋭い視線に結局は逆らえず、平謝りである。

指示通り、名瀬部長からメールで送付された資料を開き、会議の人数分印刷をかける。部長直々に作成された書類は、相変わらず理路整然とした文調でわかりやすくまとめられていた。これを営業職の時見かけていれば、さぞ参考になったことだろう。今となってみれば、ただの無駄なのだが。

「慶介君、業務が昼休みに食い込みそうなら、その分ずらして昼休憩取ってもらって良いからね？」

「わかりました」

今の時刻は11時半。部長の言葉に頷き、軽く礼を返しておく。

嫌っている人間に対しても、この細やかな気遣い。気にせず午後からも業務を任せる人間が多い中、良くそこまで気が回るなど感心する。

最新機種で、以前よりも随分静かになった印刷機の前で佇みながら、思考に耽る。

何がきっかけで嫌われたのかはさっぱりわからないし、色々と溜

まっているものはあれど、これでも前の強欲の塊みたいな糞部長よりは100倍マシだった。人に自分のミスを押し付けてきたり、手柄を奪ってみたり、良い案件をお気に入りの子にまわしてみたりと、あからさまに鼻屑しないだけまともな方だ。何より、仕事をサボっていない。これだけで、やつより遥かにマシである。その点において、今の部署は以前よりかなり恵まれた環境にあるといつて良い。統制が取れているのか、部員もまともな奴が多いしな。

だから、今の環境に不満を抱いているとすれば、原因は俺自身にある筈なのだ。

気づけば時刻は12時を過ぎていた。同僚たちは仕事を程々に切り上げると、弁当を持って休憩室かオフィス街の飯屋に消え、オフィスは閑散としていた。印刷機から印刷した容姿を取り出し、一部ずつクリップで纏めた資料を会議室の各席に置き、ようやく俺の昼休みは始まる。

「……別に食べなくても良いか」

最近、あまり食欲が無い。栄養剤はトラウマがあるから避けているが、それ以外のサプリやゼリーなどの、カロリーを簡単に摂取できるようなもので食事を済ませることが多くなった。今日はそれすらも抜くことにし、俺は喫煙所へと直行する。

引き戸になっている喫煙所のドアをがらりと開け、タバコ特有の淀んだ空気が俺の全身を包み込む。この重苦しい雰囲気以前の職場を思い出させ、どこか安心感すら湧いてくる。

設置されたイスにどつかと座り込み、胸ポケットからタバコを一本取り出し口元に咥えた所で、視界の横から火が差し出された。

察しがついた俺は有難く火を頂き、タバコはゆっくりと紫煙をくゆらせ始める。軽く吸い込み、はーつと吐き出す。

「サンキュ」

「よう慶介、今日も昼は抜きか」

「まあな」

隣にいたのは、営業部での同僚だった。部屋にいたことすら気づかなかった。流石にボーっとしすぎたか。



「相変わらず景気悪そうな顔してるな。飯食わないと持たないぞ？」  
「そつちに居た時より暇してるからな。これでも元氣余ってる方なのさ」

「嘘付けよ。そんな死んだ魚みたいな目しやがって、鏡見て同じ言葉言えるか？」

「言えるさ、空元氣だからな」

営業部の殺伐とした空気の中、この同僚とはそれなりに仲が良かったほうである。だからこそ、こうやって心配してくれているのだろうが。

体に悪い煙を肺一杯に取り込み、地面に向かって吐き出す。目線は床に落としたままだ。俺を心配してくれてる手前、後ろめたくて直視はできない。

「全く……」

お前が居なくなってから仕事に張り合いが無いぜ。前はお前と競争し甲斐があったもんだが、今はただ追われるだけだからな。

……なあ、戻ってこないか？ 皆心配してるぞ。最近のお前には、覇氣が無さ過ぎるってな」

「心配は有難いし、戻りたいのは山々だがな。部長にああ言われちゃ、どうしようもないだろ」

胸に手を当て、あの糞部長の言葉を頭の中で反芻する。

『電話中や取引中に発作が起こってみろ、お前の正体がばれる云々の前にうちの信用問題だ。もしそうになったらどう責任を取るつもりだ？ 正直言つて迷惑なんだよ。お前の代わりなんぞいくらでも居る、辞めろとまでは言わん、さっさと異動してしまえ』

あのハゲに今まで言われてきた文句は、営業成績や実績で黙らせてきた。だが、こればかりは俺の意思や行動でどうにかなるものではなかった。

手を胸にやり、その内に忍ばせた紙に意識を向ける。常に抱いている、思いを吐露する。

「お前と競いながら、部長の鼻を明かして、ようやく築き上げてきたポジションだ。それをみすみす逃すなんて、俺だって悔しいさ。でも、

どうしようもないだろ。発作なんて、どう言い訳すりや良かったんだよ……」

この体質が、心底恨めしい。全身を巡る血液を、体を構成する細胞を、この症状を欲する人と全て交換することが出来たら、どれだけ良かったことか。

「……すまん」

「良いんだ、別に。過ぎたことは仕方ないんだ。そう、次に切り替えていかないといけない。いい加減、吹っ切らないと……」

失って初めてわかった生き甲斐を、みすみす逃す。未練が無いわけが無かった。気の持ちよう一つなのだと思っても、俺の根底にこびりつくその思いが邪魔するのだ。

あの時、あんなものに手を伸ばさなければと、後悔してもし足りない。

空気清浄機が全力で稼動する中、ぱさりと灰が床に落ちる音で、没入していた意識がはつと戻る。

「そうだな、いい加減次の彼女も見つけないといけないしな。慶介にその気があるなら、合コンくらいいくらでもセッティングしてやるぞ。相手は誰が良い？ ナースか、OLか？ 大学生という手もあるぞ」

「馬鹿言え、最後のは下手したら懲戒解雇になるぞ」

同僚は空気を呼んで、笑い話に切り替える。この辺りの気配りがこいつの営業成績を伸ばす一因である。資料を揃えて相手を論破しがちだった俺には、とても真似できない芸当だ。とはいえ、今回に関してはその変更先がちと悪い。

「それともお前、まさかまだ探してんのか？ 前に言ってた、お前のストライクゾーンど真ん中とかいう」

「当たり前だろ……あんな綺麗な人放っておいて誰を好きになるってんだ」

思わず熱くなり顔を上げた俺に、容赦なく呆れ交じりの冷めた視線を向ける同僚。

こいつが言っているのは、以前俺が街中で一度だけ見かけた、俺の

女神の話である。

ぼたん雪が降りしきる中、雪に混じるように真つ白な息を溶かしながら走る最中、ふと目線があった。如何にもガラの悪い若い男二人に絡まれ、強気に出られないのか助けを求めようこちらを見たその女性は。白い背景に映えるロングの艶やかな髪と、まるでモデルのように、しかし女性らしい可愛らしさを残したその整った容姿は、一度見たら忘れようがない程、俺の脳裏に焼き付いていた。完全に一目惚れだった。急いでいた理由さえもすっぽりと抜け落ちてしまうほどに、俺はその一瞬の視線の交差で、その美しい女性に恋慕を抱いていた。だからこそ、今でも後悔している。どうして俺は、あそこで連絡先を聞いておかなかったのかと。

「二年前に見てから、未だに会えてないんだろ？ 仮にフリーだったとしても、そんなに美人なら、今頃彼氏でも作ってるって。さっさと諦めたらどうだ？」

それ以来ずっと同じことを言い続け、未だにそれ以外の出会いを求めない俺にいい加減うんざりしているのか、同僚は窘めるような口調で俺に新たな出会いを提供しようと言い募る。だが、そうあっさりと言命を諦められるほど俺は簡単ではないのだ。

再び心の内で起こるその熱情に身を任せ、反論しようと口を開きかけたその時、その思いにつられるようにどくん、と心臓が大きく脈動を始める。

心の内に燻った火とはまた別の熱が、体を襲う。締め付けられるような痛みが胸に走り、その鼓動は俺の全身を侵し始める。

「あ、ぐ……!!」

「お、おい大丈夫か?！」

「大丈夫、いつものやつ、だから……つく!!」

その痛みに胸元を抑え、うずくまった俺に駆け寄ろうとした同僚を、俺は手で押しとどめる。そう、言葉通り、定期的に来る発作のようなものだ。命に別状はないが、俺の生活には多大な影響を与える、あれ。まだ社内ではよかった、これが出先ならまた大騒ぎになるところだ。

「わるい、さっきの話……」

「ああ気にするな、早く行けよ」

言葉を出すのも辛い俺は、軽く手を振りつて更衣室へと急いだ。

胸を押さえながら小走りに駆ける俺と廊下ですれ違う人々は、心配そうだったりびびったりとした目だったり様々な視線を向けてくるが、大丈夫ですか、と声をかけてくる人は一人もいない。俺が痛みを喘ぐ光景など、最早社内では珍しくもない光景だからだ。しかし、これは俺が陰湿ないじめにあっているなどということでは決してない。俺は発作と称したが、命に別状はないと知れているからだ。

男女別に別れた更衣室を通り越し、元は倉庫として使われていて、今では俺専用の更衣室となった部屋の扉を乱暴に開くと、壁に手をつき全身に走る痛みを耐える。

「はっ、はっ、はっ……!!」

骨が軋み、筋肉が悲鳴を上げる。心臓から送り出された新たな血液が全身を駆け巡る度、通過した部位が強烈に痛む。その痛みは、例えるなら中から火で炙られているようなもので、その苦しみは顔中から噴き出る汗の量で察することができるだろう。

「つぐ、つああああ!!」

ひんやりとした壁についた手を握り締め、甲高い声を上げ耐える。急に楽になった首元に、緩まりぱさりと落ちるスーツのパンツ。

大量の汗でぐっしよりと濡れたYシャツの胸元は、僅かに隆起していた。

「はあ、はあ、はあ……」

長い時間そうしていただろうか。徐々に痛みは治まり、体には熱だけが残る。顔から滴る汗で小さな水たまりのようになっていて足元を見ながら、静かに息を整える。

酷使していた肺によく余裕が出来た頃、俺は顔を上げた。何かを引きずっているかのように、やけに重い後頭部。頼りなさそうな、白い肌の細い腕。丸みを帯びた、女性的なボディライン。全身のシルエットは、明らかに小さくなっていった。

「……………くそっ」

俺は苛立ちを吐き捨てると、足に引つかかっていたメンズ用のパンツを足で振り払い、部屋に2つあるロッカーの内、右の方に近づく。ロッカーを開けると、そこには何着かの女性用のスーツがハンガーにかかっていた。勿論盗んだわけでもなければ、女装趣味があるわけでもない。これは俺が用意し、今の俺に必要なものだ。

内扉に付いている鏡に今の俺の顔が映り込む。ただ、そこに映り込む姿は、20何年来の付き合いである俺の顔ではなく。肩ほどまである黒髪を汗で湿らせ、睫毛は長く可愛らしいという表現が合いそうな端正な顔を不機嫌そうに歪める女性。

そう、これが今の俺だ。たまに起こる発作で性別が変わった後の、女性の姿の俺。俺の人生を大きく変えた、元凶そのもの。

「こんな姿誰が望んだっていうんだよ……」

諦めと絶望に濡れた台詞は、ぽつりと零れ誰にも聞かれず消え去った。

数ある得意先から貰った、一本の栄養剤。それが全ての発端だった。

残業中、気まぐれに飲んだ途端体は異常な熱を発し、俺は誰もいないオフィスで倒れこみ、朝出勤してきた同僚に揺り起こされ起きてみると、自分の体が女に成っていた。

まるで三流の映画か小説のような、馬鹿げた出来事だ。実際、これが自身に降りかかった出来事であれば、俺は今でも信じていなかったらう。

当たり前のごとく、会社に侵入した不審者と思われた俺の潔白は、監視カメラの映像と、俺以外にいたらしい被害者の存在がニュースで報道されたことよって証明され、政府主導で新たな身分を手に入れ無事社会復帰となった、はずだったのだが。

俺が他の被害者と違ったところは、不定期に性別が入れ替わってしまう発作が起きてしまうことだった。

理由は不明だ。そもそも事件の原因が詳しく特定できていないこ

とからして、他の被害者との違いなど今の段階でわかるわけもなく。判明しているのは、DNAのテロメアの長さやその他直接的な健康被害など、寿命が縮まるなどの心配は全くないことくらい。後は、幾度となく変化してきた傾向から察するに、一度変化すれば最低三日以上おかないと体の変化は無い、ということくらいか。

だが、この発作が厄介なのだ。初めとは違い気絶するほどではないが、傍から見ればどう見ても救急車案件である。そんな発作が万が一客先にて起こってしまえばどうなるか。メディアには伏せられている、女性化事件の被害者の一人が俺だと露見するばかりでなく、いつ倒れるとも知れない社員を働かせている会社の信用問題にもなりかねない。

事件後職場に復帰した時、体よく俺を追い出そうとしているのだろう、ニヤついた顔で言う部長の言葉を、俺は吞まざるを得なかった。

この半年ですっかりと慣れてしまった手つきは、思考を逸らしていても無意識に着替えられるほど習熟していた。パンツルックのものを選んでいいるから、スーツのほうはまだ良い。問題は、女性用の下着だ。未だに抵抗感がぬぐえないそれは、いい加減覚えないと困るのは自分なのだが、脱がせ方はともかく、着け方など覚えたくはなかった。

「……よっ」

鏡を見ながら服装に変なところが無いかを確認し、頷く。逆の時刻を刻む時計の針は、既に一時過ぎを指していた。

これも慣れた手つきで化粧を手早く終わらせ、俺はどんよりとした心境を現実に反映させたような重い空気を纏いながら、更衣室を出る。

体に変調が起きてから、俺の生活は一変した。部長ろくでなしの命令で今の部署に異動になり、生活スタイルが随分と落ち着いたから、というものもあるが。生活に色がなくなった、というのが一番正しい表現だろうか。

あれだけ精力的に励んでいた仕事に対して、微塵もやる気が出てこない。それどころか、休みの日も家の中でじっとしていることが多く

なった。暇さえあれば、あの女性を探しに行く事を兼ね、旨い飯を出す店を探しに外に出かけることはしよつちゆうだったというのに、今はそれすら億劫だった。

——結局あの糞部長の言いなりになっているというのに、これ以上、仕事を頑張る必要があるのか。

——仮にあの女性を見つけたとして、こんな姿で何を言えば良いのか。向こうが俺を覚えている保証もなく、女の姿で気づくわけもないのに。

そんな諦念が俺の中で常に渦巻き、全てのやる気を削いでいく。

ふと立ち止まり外の景色を見れば、高いビルの立ち並ぶ街の景観を透かすガラスの上に、死んだ目をした、女の俺が映っている。

別に不細工ではない。美人でもないだろうが、十分可愛いと思える容姿だ。だが、この女がいることで俺が失ったものの多さを考えると、受け入れられるかといえばそれは不可能な話だった。むしろ、殺意すら湧きそうだ。

ここから身を投げれば、こいつを始末できるのか……そう、不穏な思考まで一緒に湧き出てきて、そろそろと腕が上がりかけた時。

「彩君、こんなところにいたのかね」

ちらりと振り返ると、俺を呼び止めた肥満体の男が立っていた。そいつは、出世欲の塊です、と欲望が顔に書いていそうで、見た目通りの捻り腐った性根の持ち主である、三島部長。俺の元上司だった。ちなみに、俺の名前は彩慶介<sup>あやけいすけ</sup>。女だから別の名前を付けたわけではなく、元々この名前、呼び方なのだ。

面倒な奴にあつたなと内心舌打ちしつつ、軽く会釈し返事を返す。

「部長、どうかされましたか」

「いや何、少し話したい事があつてね。君を探していたのだよ」

「はあ。廊下で済む話ですか？ 何なら別室にでも行きますか？ 今の時間なら休憩室も空いてるでしょうが」

「そこまで時間はとらせんよ。すぐに済む話だ」

もう時刻は昼休み過ぎ。他部署の人員を呼び止めているのに気にしていない辺り、やはりこいつはろくでもないなと眉を顰めるが、表

面上は取り繕っておく。

どうせいつもの嫌味だろうと、表面だけは取り繕ってこの糞上司と向き合う。が、言ってきた言葉は予想外の言葉。

「彩君、辞表を出したまえ」

「は……？」

こいつとは、入社当初から因縁がある。因縁と言っても、新入社員にしてはそこそこ成績を上げたせいで、目をつけられただけなのだが。

昔から、自分のミスを俺に押し付けてみたり、無理難題に近い案件を振ってみたりと、あの手この手で俺を辞めさせようとしてきたが、実力行使どころか、ここまでド直球に言ってきたことはなく、驚きの声を隠せなかった。

「名瀬君じゃ言い辛かろうから、代わりに私から言ってやろう。」

男になったり女になったり、常にその危険を考慮しないといけないとは、管理職からしたら非常に扱い辛い人材だよ、お前は。それに加え、最近の仕事もミスばかりらしいじゃないか。名瀬君も結構迷惑しているそうだ。

お前なんぞいい加減クビにしてやりたいところだが……政府の手配もあるせいで、こつちからは簡単にクビを切れん。

だが、お前自身の意思なら話は別、というわけだ」

詭弁も良いところだ。

迷惑しているのは事実だとしても、あの思慮深い名瀬部長が社内一の嫌われ者であるこいつにわざわざ漏らすか、と言われれば疑問ではない。

そう簡単に了承するわけもなく、半分ならみつける気概を込め言い返すが。こいつのギトギトとしたにやつく笑みは止むことはない。

「……そう簡単にはいそうですか、と言うと思います？」

「全くもってその通りだ。だがそれは、以前のお前なら、の話だ。」

今にも自殺しそうな陰鬱な顔をしておって、自分が心にも無いことを言ってる自覚はあるのか？ そんな顔で、まだ減らず口が叩けるのが不思議だよ」



「……」

否定、したいが。言葉が出てこなかった。

悔しさはあるのに、以前のように心の内に満ちるほどではない。俺の原動力だった燃え上がるような反骨心は、今では微塵も感じられなかったのだ。

「かわいい顔をしておって、中身がお前じゃなければ手籠めにしても良いくらいだが……」

「セクハラで、訴えますよ」

「ははは、冗談だ。お前なんぞ、こつちから願い下げだよ。コロコロ性別が変わる上に、中身がお前とわかってて誰が抱くか、気持ち悪い。

一応伝えたからな。退職届が受け取ってもらえるうちに、さつさと出してしまふことだ。問題児がいなくなつて、名瀬君もさぞ喜ぶことだろうよ」

隠しきれない悪意が滲み出ている笑みを浮かべながら、ポン、と俺の肩を叩き去っていく。

冗談だとわかっていても、抱いてやろうかだなんて寒気がする。しかし、今はそれ以上にあいつの言葉に堪えていた。

懲戒解雇だったり名瀬部長の件は、俺を辞めさせたいがためのあいつの虚言に違いない。だからあの言葉を真に受けることはない、そうわかつているのに、もう心が楽になりたがつていた。

製薬会社からの賠償金に、俺の特殊な体質を解明するための定期検査による報奨金を加えれば、多少贅沢をしても、死ぬまで不自由無く生きていけるだけの額は口座の中に眠っている。働く必要など、生活の張り合いを出すため以外に理由はないのだ。だが、俺はそれさえもこの体のせいで失っている。そう考えれば、もうこの会社にいる必要も……

胸元の内ポケットに手を入れる。あの事件以来、常に意識し、お守り代わりに携帯していた一枚の紙切れが入った封筒。表に書かれた、辞職願という文字が目に入る。

以前なら考えもしなかった言葉だ。遠回しに辞めろと言われ続けても、むしろあの糞上司を辞めさせてやるくらいの気概だったのに、

今ではその言葉を自然と受け入れてしまいそうだった。いや、今正に受け入れようとしていた。

——辞めよう。

決意する。あの糞上司の思惑に乗るのは癪だが、これで名瀬部長の気も楽になると考えれば、まだマシか……

気は晴れない。辞めてから何をするかなど全く決めていないが、少しでも前を向くための決断だった。

名瀬部長の会議が終わり次第、すぐにでも出そう。そう決めると、重かった足取りも、多少軽くなった気がした。

オフィスに戻ると、同じ部の連中から休憩中に女になっていたことを多少突っ込まれつつ、午後の業務を開始した。

予定だと4時くらいには終わるらしいから、終わり際に時間をとってもらって出せば良い。そう考えていたのだが、何か問題でもあったのか、予想以上に時間をとっているようだった。その長引き具合は、退社時刻になれば、緊急の要件でなければ業務報告明日で良いと、実質的な帰宅命令が会議中に各部長陣からメールで回って来るほど。

多少早く終わるかななどと考えていたが、実際は全くの逆で、結局定時になっても会議が終わることはなかった。

今日はうるさいお目付け役が居ないせいとか、どの部署も定時になるとそれぞれ三々九度に席を立つ。俺も帰ろうかと思ったが、話は早いほうが良いと思い、終わるまで待つことにした。

同僚もみんな帰り、一人残ったオフィスで翌日の分の決済や事務処理を片付けていると、8時過ぎになって廊下ががやがやと騒がしくなり、ようやく会議が終わったのだと俺に知らせてきた。

がちやりと扉が開き、てつきり名瀬部長かと思いい席から立って挨拶する。が、よく見ると別の部署の部長である。

「あ、お疲れ様です」

「誰が残ってるのかと思えば、彩君だったか。お疲れ。」

優秀な君が残業とは珍しい、どうかしたのかい？」

名瀬部長に次いでまともな方だと評される優男風の男は、俺の会釈

に軽く手を挙げて答える。

「いえ、名瀬部長に用事がありました。ついでに溜まつてる仕事を片付けようかと」

「相変わらず殊勝なことだ。君が営業に残れていたら、まだ話は変わってきたんだろうが……」

ああいや、こつちの話だ。名瀬君なら会議室の後片付けをしてきているよ。話があるなら丁度良い、ついでに手伝ってあげてくれ」

「わかりました、ありがとうございます」

ため息交じりに語る男に礼を返すと、適当に返事をして去っていく。

俺を惜しんでくれているらしい言葉に混じる謎のため息に、内心首をひねりつつも、関係ないなら良いと受け流す。片付け中なら都合が良い、一対一で話せて邪魔も入るまい。

編集集中だったファイルを保存して閉じると、俺は席を立ち会議室へと向かった。

うちの会社は基本的に、営業部以外残業することは稀だ。仕事かさほど忙しくないのもあるが、労働環境の健全化が図られる前からこの調子なので、どちらかと言えば社風に近い。

なので、通りかかる部屋の電気は消えており、薄暗い廊下ですれ違う人も皆無だ。

静寂に満ちた廊下に、俺の足音を響かせ歩いていく。

歩いていくと程なく、廊下の突き当りに唯一光の灯った部屋が見つかる。昼、俺が資料を置きに訪れた部屋である。

懐から退職願を取り出し、ノックをしようと思ったところで、ふと中から話し声がすることに気づく。

話し声ということは、名瀬部長以外にも誰かがいるということである。

そつとばれないように端により、会話に耳を澄ませる。普段であれば聞き取れないだろうが、全く雑音が聞こえない静まり返った廊下では、鮮明とは言えないが容易に聞き取れた。

『それで名瀬君、わざわざ呼び止めて何の話があるのかな？ 長丁場で私も疲れているんだがね』

『誰かの進退に関わる、重要な話です。真剣にお答え頂かないと困りますので、予めお願いしておきますよ？』

相手は、声も聴きたくないあの糞上司だった。名瀬部長は真剣な声色で話しかけているが、奴は意に介さず適当に発言しているような軽い口調である。

『名瀬君はいつも性急でいかな。もう少し迂遠な言い回しを覚えんと、部下もついてこんぞ？ そうだな、君と私の共通の話題と言えば、彩君の話でもどうだ？』

露骨な誘導だ、どこまで俺を貶めるつもりなのか。止めに入りたいところだが、ここで割りいるのは少々勇気がいる。余計なことは言われたくないが、ここは大人しく聞いているしかないか。

『彩君ですか？』

『ああそうだ。事あるごとに上司である私を目の敵にして、問題ばかり起こして私に苦労ばかりさせる……君も覚えがあるだろう？』

『……いえ、そんなことはありませんよ。彩君は十分良くやってくれています』

『そうかい？ 異動してからも相変わらず問題ばかり、君も叱ってばかりで気苦労が絶えないと、どこかで耳にしたがね。元上司の私としては、問題児を引き取って貰って清々したが、君には悪いことをしたようだ』

『……それとこの話に何の関係が？』

例えそれが軽いジョークでも、人を貶めるような事を言う部下がいと真つ先に注意する名瀬部長のことである。執拗な俺への誹謗に気分を害したのか、いつも冷静な名瀬部長の声に苛立ちが混ざる。だが相対的に、奴の声は機嫌が良さそうに弾んでいた。

『誰かの進退とは彩君の事だろう？ なんでも、誰かから上部に苦情がいったそうだね。仕事もミスばかりで業務に支障が出ているとか何とか。いやあ、彼には期待していたんだがね、ついに年貢の納め時かな』

『……貴方でしたか、彼の懲戒解雇を上層部に上奏したのは。おかげで昨日は大変だったんですよ、彼の勤務態度について、取り調べのようなことまでさせられて』

『ああ、それは悪いことをしたね。だが、組織としては仕方ない事だよ。協調性の欠片もないガンを取り除くために、自浄作用が発揮されただけだからね。凶らずも彼のおかげで、我が社は不正と規律違反を許さない、しっかりとした組織だという事が証明されたわけだ』

元上司の得意げな言葉に、俺は怒りを隠せなかった。まさか、このままでは懲戒解雇だと宣った昼のセリフが、本当だったとは。それほどまでに俺が邪魔なのか。部から追い出すだけでは事足りず、会社まで辞めさせようとするとは……

今までなら退部させただけで満足しそうなものだが、何がやつを俺の退社に駆り立てるのか、不思議でしようがない。

『ああ、そういう話の繋がりでですか。なるほど、それでしたらよくわかりますよ。全く持って同意です』

名瀬部長も、納得したようにため息交じりの同意の声を上げる。

正直、そうだろうなと思った。普段優しい名瀬部長が、俺に対してだけ厳しいのだから、嫌われているのだろうと察しはついていた。だが、その言葉を直接本人から聞かされるといのは、弱った俺の心になりに堪えた。今更大人の大人が泣くほどではない。だが、立ち眩みかしてしまう程度にはショックだった。

『書類を作らせればミスばかり、何度言っても同じ間違いばかり繰り返し、挙句人の話を聞かない。学習能力が無いですよ、本当』

『うむうむ、人の迷惑も考えず自分勝手な行動ばかり……私も昔は苦労させられたよ』

細かい指摘は毎日受けていたが、俺にそこまで失敗した覚えはない。だが、仕事に熱が入らなかつたのは事実で、気づかぬうちにそんな箇所もあつたのかもしれない。

『空気の読めない発言ばかりで部内の空気も悪くなりますし……』

『ははは、確かに。営業成績のためなら、他人を蹴落とすことなど何の躊躇いもなくやってのける。自分のことしか考えない典型だからな、

彼は』

この体質女になるのせいで、若干腫物扱い気味の扱いになつて自覚はあつたが、部の奴らとはそれなりに仲良くしていたつもりなのに、名瀬部長からしてみれば違つたということか。

『正直、大嫌いですよ』

『ははは、名瀬君、君も正直だな。いや、まったくもって私も同感だがね？ 君がそう言うとは意外だったな』

『そうですか？ 別に珍しくもなんともないと思いますが。彼が好きなのなんて、少なくとも出会つたことはないですよ』

嫌悪の感情を乗せ、唾棄するように吐き捨てる彼女に、機嫌が良さそうな元上司の声が重なる。

彼女にここまで嫌われるなんて、きつと俺が非のある何かをしてしまったのだろう。だが、いくら本人が聞いていないつもりだからと言つて、ここまで言われる謂れはあるのか。ぐらりと足元から崩壊していくような感覚に、思わず自力で立つていられず、後ろの壁に持たれかかつてしまう。

営業職は嫌われるのが仕事の一部でもある。だから、多少は耐性があるつもりだった。だが、まるで花粉症に発症する人間の体のように、今まで積り積もつた何かが、限界を超え溢れ出す。

真面目に頑張つてきたつもりだった。社内からも、奴からはともかく周りからはそれなりに評価されていた。それが、少し体に変調をきたしたくらいでこんなことになるのか。

「俺が、何したつて言うんだ……」

誰にも聞こえないような、呟くように零れたその言葉が、すべてだった。弱り切つた涙腺が僅かに緩む。何年ぶりかに、感情の籠つた液体が頬を伝う。

抗いようのない出来事に流され、気づけばこれだ。俺に非は無い筈。そう思つてしまふが故に、余計に悔しさがこみ上げる。

『口を開けば人の悪口で、上の人間にゴマをする以外は自分の自慢ばかり、そりや嫌われますよ』

名瀬部長は言い足りない、さらに言い募る。

俺なりに頑張ってきたつもりだったのに、たった1つ歯車が狂うだけでこれだ。

『すぐサボろうとしますし、仕事は他人に丸投げですし、女性社員の事は厭らしい目で見てきますし……』

『うんうん』

仕事の合間の休みや女性社員への視線のやり取りなど、確かにそう取られる事はあったのかもしれないが、ここまで言わなくていいじゃないか。

『人の話は聞きませんし、備品はすぐちよろまかしますし、自分のミスはすぐ人のせいになりますし……』

『うんうん』

思い当たる節はない。だが、彼女から見た俺はそうなのだろう。

『プライベートではサングラスかけたり色々おシヤレに気を使ってるつもりなのかもしれませんが、正直デブでハゲじゃ似合ってますし、その割に仕事場じゃネクタイ曲がってたりだらしないですし、親父ギャグは全く面白くありませんし……』

『うんう……うん？』

まず太つてもハゲでもないし、俺も自分がかっこいいとは思ってないが、身だしなみは気を付けてるし、そもそもギャグなんて言わないが、彼女が勘違いしている面はあるのだろう。多分。恐らく。きつと。

『可愛い子がいたら簡単な案件や他の取り分まで回しますし、自分の地位を盾に無理やり関係迫りますし、誰とは言いませんが、会社の女の子を無理やり襲った挙句、金にものを言わせて示談にして黙らせたりますし……』

『ちよ、ちよつと待ちたまえ名瀬君!!』

……いや、それ俺か？

少しは非があると思って途中までは肅々と受け止めていたが、流石にそれは違うと俺が思った時、同時にあの糞上司が焦ったように声を上げた。

元上司の言葉に名瀬部長は途中で陳情を切り上げ、心底不思議そう

な声を上げる。

『何です?』

『いや、途中までは同意できるのだが、途中からちよつと様子がおかしくなつてだね……』

『はあ』

『一応、聞いておきたいのだが。それは、彩君のことだよな?』

『何を今更なことを言つてるんですか、三島部長』

はあ、露骨に馬鹿にしたような息を吐きだし、声色に侮蔑の感情を隠さず、名瀬部長は言い切る。

『最初から全部、貴方の事しか言つてませんよ。三島部長』

『はあ?』

怪訝な声を上げる元上司と同じく、俺も驚きの声を漏らしかける。てつきり、俺の文句を言い募っているのだとばかり思っていたのに……

『面白い冗談だな、名瀬君。君の言っている事に関して、思い当たる節など一つもないのだが……』

『三島部長こそ何を言つてるんですか。私が迂遠な言い回しが嫌いなのはお知りなんでしょう?。なんで私が、今関係ない彩君の話をしなといけないんです。重要なのは貴方の事ですよ』

『私、だど?』

彩君も少しは関係あるのかな、などと呟く名瀬部長に対して、気に入らない者を甚振るだけで良い強者の立場から、唐突に陥った弱者の立場に、戸惑いの声を上げる三島部長。傍聴席から裁判を観覧していたと思つたら、いきなり自身が被告人になつたようなものなのだから、その困惑は当然だろう。かく言う俺もびっくりしていた。

『そうですよ。先日、上層部宛に彩君に関する上奏があつたのは事実ですが、貴女以外の管理職に行われた面談の理由は、それが主ではありません。貴方の懲戒解雇についてヒアリングがあつたのがメインです』

『私が懲戒解雇だど?。ふざけるのもいい加減にしろよ、小娘が』

ドア越しだというのに、廊下中に響く怒号にびくりと肩を震わせ



る。びくつく俺とは対照的に、名瀬部長は表情こそ伺えないものの、普段の様子を崩さず淡々と話しを進める。

『心当たりはないんです？ 私には思い当たる節しかありませんが』  
『あるわけないだろう』

『はあそうですか。では聞き方を変えましょう。中本瑞樹さん、西島愛美さん、三木ひとみさん。この三名の名前に心当たりは？』

『……それはあるに決まっているじゃないか。私の部下だからね』  
僅かに入る沈黙は、暗にその質問に対し肯定したも同然だった。

この三名は、いずれも営業部所属の女性社員である。最後の一人以外は退社しているのだが、わざわざここで名前が上がるということは、察しが付く。

『貴方はこの3名に、仕事の便宜を図る代わりに肉体行為を迫った。間違いありませんね？』

『間違いだらけだ。何一つあっていないな』

『ですが、三木ひとみさんからそう話が上がっていますよ？ 優先的に案件を回してやるから抱かれる、と言われたと。事実、この3名はある時期を境に急に個人業績が急上昇しています。丁度、貴方の外回りが増えた日とも重なりますね。何か申し開きはありますか？』

そう言われてみれば確かに、前二人の名前は良く覚えていた。前の週では下位をうろうろしていたのに、突然上位争いに食い込んできて驚いた記憶がある。それに、最後の三木ひとみは、俺のやりかけた案件をすべて引き継いだ後輩の女の子である。あとはサインするだけという案件も多数あったことから、あの分が全てひとみちゃんの功績になっているとすれば、確かに鼻屑であるのは間違いない。

『その女どもが口裏を合わせて、私を陥れようとしている可能性もあるだろう。成績が伸びたのも彼女たちの努力の賜物であって、私は何もしていない』

『なるほど、では貴方が彼女たちと関係を持ったことはない？』

『あるわけないな』

『では、彼女たちに口止め料を払ってはいないんですね？』

『送別会くらいはしたがあ、直接金など渡していないよ』

『貴方が外回り中であるはずの時間、ホテルに入る貴方を目撃した社員がいるそうなのですが、覚えはありますか？』

『その社員の勘違いだろう。確かな証拠もないのに犯罪者扱いは止めてくれるかな、名瀬君』

ほぼ黒とって良い証拠に対し、悉く詭弁で切り返す三島部長は、厚顔無恥という言葉を体現したような卑怯者である。

百歩譲って俺や同僚に対してやったパワハラに関しては見逃してやるとしても、権力を楯に女性に關係を迫るといふ男の風上にも置けない行為には怒りを覚えざるを得なかった。

『往生際が悪いですね、三島部長。』

まあいいでしょう。敢えてこの話に関しては流すとしましょうか。貴方が諸悪の根源ですが、旨味のある話に飛びついた彼女たちにも非はありますしね』

『ほう。話が分かるじゃないか……』

だからこそ不思議だった、何故ここで追及の手を緩めるのかと。

とりあえず窮地は去ったと思っただか、あからさまに声を明るくする三島部長。

まさか、ここまで話しておいて見逃すともいうのか。

怒りや不安から俺はそう心配したが、結局それは杞憂に終わる。別に名瀬部長は許したわけでもなんでもなかった。ただ単に、止めを刺す手段は無数にあったというだけ。

『話はそれだけかね？ 私も用事があるのでね、早く帰らねば……』

『ああ、それはすみません。ですが、もう一点お聞きしておきたいことがありますので、もう少しだけ良いですか？ 大丈夫です、すぐすみませんから』

『何かね？』

『いえ、私も日々の激務ですっかり忘れていたのですが。1つ、貴方から引き継ぎ損ねた仕事があったのを最近思い出しまして。その確認だけよろしいですか？』

『それくらいなら問題ないとも。何でも言ってくれたまえ。どの件のことかね？』

『彩君宛に出ている助成金の行方をお教え願えないかと』

』

ひゅつと声が漏れる音。意表を突かれたように、詰まった声を漏らす三島部長。

『性転換被害者が所属する会社に対して、政府から出た助成金があったと思うのですが、それは流石にお覚えですよね？』

『あ、ああ。それは、勿論……』

『それは良かった。なら話は早いですね。』

助成金は、特殊な環境に置かれる被害者の待遇・処遇の改善を図るために、少額ですが国から捻出された助成金です。なので、使用方法はその会社に一任されています。

我が社では、元々彩君が所属していた営業部に、使用方法も含め金額預けられたはずです。ある程度使ったにせよ、彩君が異動になったのであればその残額を私の部で引き継がないと、と思った次第です。』

俺に出されている助成金らしいが、俺自身は聞いたことがなかった。だが、三島部長は聞き覚えがあるようで、あからさまに様子がおかしくなっていた。表面上は声色はかろうじて取り繕っているようだが、先程までの余裕は嘘のように無くなっていた。

『いや、すっかり忘れていて申し訳ありませんでした。』

実は、彩君に至急用意してもらわなければいけないものがありました。とはいえ、彼の体質にかかわることですし、それを個人負担させるのは忍びないということで、助成金から支払って支給しようかと思いついて。なので、元データを頂けないかと』

『そ、それは素晴らしいことだな。正に助成金の正しい使い方、といったところか。』

だが、私もまさか他人に渡すと思っていなかったから書式も整理できているか……』

『それでしたら、領収書や見積書さえ出していただければ後は私のほうでまとめておきましょう。』

……おや、どうしました三島部長。何やら顔色が悪いですが』

ドアのガラス越しに映っているのは、ヒールの音と共に歩を進める小さな影と、同じ分だけ後退する影。

『まさか、領収書を捨てた訳ではありませんよね？』

例えば彩君の更衣室改装費と書いてあるこの項目、工事費として記入されてありますが、見積書もないのですか？

……あれ、そういえば、彼の更衣室は私の方で用立てたんです。それも、空き倉庫に彼のロッカーを運んだだけ。工事業者なんて頼んでもいないのですが。

覚えていますか、三島部長？』

『名瀬、お前まさか最初から全部知ってて……!!』

一歩一歩、容疑者を壁際に追い詰めるように歩みを速めていく名瀬部長。

『逆に聞きたいのですが、何故知らないと思つたんです？ 貴方の白なんて誰も必要としてませんよ。これはただの勧告、証拠固めなんて段階、既に終わってるんです。貴方が権力を乱用して三木さんに関係を迫り、その交際費として会社の資金を横領していた事まで、全て調べもついています』

『ぐ……』

それに対し、反論もできず後ずさるしか出来ない凶体のかい影は、じりじりと壁際へと追い込まれる。

『貴方は最近、彩君に退職を迫っていたそうですね。当然だ、もし彼が決算までに退職してしまえば、報告義務はあれど返金義務のない助成金は丸々宙に浮く。そうなれば自然と決算に計上し、精査されることもなくなり貴方が横領したこともばれることはなくなる……そういう算段だったんでしょう？』

その歩調には、声には、俺が今まで聞いたことのないような熱が、怒りが籠っていた。

『入社当初から気に入りませんでした。権力を盾に女性に迫るような腐った根性が、ばれなければ良いと好き勝手に会社の資金に手を出す性根が、部下を自分の所有物か何かの様に扱う人間とは思えない性格が、大嫌いでした。』

自己中心的な貴方だからこそ、正論を言う彩君はさぞ苦手だったことでしょう。嫌がらせをしても、言葉ではなく行動や結果で反論してくる彼が、大嫌いだったんでしょう。だからこそ、精神的に不安定になっている今の彩君なら、やり返せる、他部署に追いやり、最終的には退職に追い込んで、自分は金を横領できると。つまりは与しやすいと思っただけでしょうが……そうは問屋が卸しませんよ』

『……何故だ、日頃あれだけ文句を言っている癖に、何故そこまで奴を庇う!? どうせ、お前も俺を追い落としたいだけだろうに、あいつを体の良い言い訳に使うんじゃない!!』

『……彩君は、私の部下です。それ以上でもそれ以下でもない、もう貴方の部下ではないし、まして玩具や奴隷などではありません』

この会社において、営業部は花形の部署となる。だからこそ、その営業部の部長職というのは別格の意味を持つていた。こいつは、名瀬部長が自らがそこに納まるべく、自分を追い落とそうとしていると勘違いしているのだろう。だが、この女性が、そんな私利私欲の塊に見えるのだろうか。

名瀬部長からは日頃からいびられているような態度をとられているが、今ならわかる。彼女の指摘されたことは全て理にかなっていた。ミスの指摘やケチを付けられた訳ではなく、アドバイスだった。あれらは、落ち込んでいた俺を励まそうとした、鼓舞する言葉だったのだ。いつだって部下の事を考えている彼女が、唯の好き嫌いでそんなくだらない事をするはずが無かったのだ。

無意識の内に頬が吊り上がる。沸き起こる嬉しさに、笑みが止められない。

遂に逆切れし始める諸悪の根源に対し、名瀬部長は声を震わせ、心境を漏らし始める。

『慣れない仕事にもめげず、酷いことを言っただけの私に文句も言わずについてきてくれて、他の部下の失敗は進んでフォローしてくれる、私には勿体ない程良く出来た、自慢の部下の一人です。』

そんな部下を傷つけられて黙っているほど、私は出来た人間じゃありません。今も、貴方をぶん殴りそうになるのを堪えるので必死なん

です。これ以上、私を怒らせないで頂きたい……』  
その震える声には、様々な感情がこもっていた。

名瀬部長は壁越しだというのに伝わってきそうな程、怒気を込めた台詞を放つ。

『貴方の顔を見ると、虫唾が走るんです。消えろ、今すぐにツ!!』  
『く、くそつ……!!』

見たこともない名瀬部長の剣幕に、三島部長は気圧されたように焦って走り出した。

ドアを壊れそうな勢いで開き、廊下に飛び出した三島部長と、部屋の中の話を聞き、呆然と立ち尽くしていた俺の視線が交差する。

「お前は……!!」

「……退職届、受け取ってもらえると良いですね」

「こ、このおつ……!!」

辛うじて捻りだした俺の皮肉に、奴は頭に血を上らせ拳を振りかぶるが、これ以上の罪状を重ねるわけにはいかないとしても思ったのか、結局何もせず、悔し気に捨て台詞だけ残し、ドタドタとその体重を廊下に響かせ走り去っていく。

脂汗が滲み、ぺったりとくっついた薄い毛髪と、苦虫を潰したような表情を浮かべる奴の追い詰められ具合は、久しぶりに見た爽快なものだった。

ドタドタと豚が走る音が止むと、静寂が再び廊下に満ちる。

『……はぁ』

「……あつ」

静かになつた廊下に響く名瀬部長のため息に、ようやく俺は用事を思い出す。そうだ、盗み聞きしに来たわけじゃなく、会議室の片付けの手伝いをしに来たんだった。

自然に浮かんでいた笑みを何とか堪えると、俺は慌てて格好を繕うと、開いたままのドアをノックし名瀬部長に声をかける。

「名瀬部長、片付けの手伝いに来ました」

「あれ、彩君？ まだ残ってたの？」

「ええ、少しやりたいことがあります」

「……なら、お願いしようかしら。助かるわ」

俺を男女の姿で名前を呼び分ける名瀬部長は、女になっている今の俺を『彩君』と呼ぶ。さっきの話などなかったかのような、無表情でクールな名瀬部長に、俺は何処か安心した。

プロジェクトや残った資料の片付けなど、然程時間もかからず終わると、書類を持ち部へと戻っていく。

会議も終わったからか、とうとう最後の部屋の光も消え、会社に残るは俺達のみ様だった。

仕事中は滅多に私語をしない名瀬部長の事だ。例え周りに誰も居ずとも、並んで歩く俺との間に会話があるわけが無かった。

「……彩君、今、仕事は楽しいかしら？」

「え？」

と思っていたものだから、名瀬部長の言葉に驚きを隠せなかった。

前を向いていた俺が思わず名瀬部長の方を見ると、名瀬部長は俺の方に視線を向けていた。

「いつも遅くまで残って、土日も気にせず出勤してる彩君を見て、貴方と私は似ていると思っていたの。簡単な仕事だと拍子抜けしちゃうし、納期の厳しい仕事の方が逆に燃えてきたり、ね。ひっそりとシンパシー感じちやったりして、一分でも貴方より遅く会社を出るように仕事切り詰めてみたり、変な見えの張り方をしたこともあったわ。

でもあんな事件が起きてから、めっきり貴方の姿を見ることはなくなった。貴方が営業から転属になるって言うから私が手を挙げただけけれど、配属転換されて来た時、びっくりしたわ。あんなに熱意に満ちていた貴方が見る影もなく、常に何かにおびえるように。何かあったんじゃないかと心配で……」

痛ましいものでも見るように、心配げな瞳を見せる名瀬部長。

正直、俺は転属するまで名瀬部長とは面識が無かったのだが、向こうは業務に精を出す俺をよく見てくれていたようだった。

「そんな貴方を知っているからこそ、上司としてどうにかしたいと思っただけと手を尽くしたけど……貴方の力にはなれなくて申し訳なかったわ」

「いえ、そんなことないですよ。十分、良くしていただいていますし」  
今の部の連中は、以前の俺を知らない。仕事を前に詰め、スケジュール表一杯に予定を詰め、仕事に生きていた以前の比較が出来ないからからこそ、俺の異変には気づかなかつたのだろう。俺を叱責することで激励してくれていた、名瀬部長を除いては。

その事に気付かされたのはついさっきだが、色々と体の変調を抱える俺の事を配慮してくれていたことは、普段の生活でも明らかだった。感謝しかないのに、卑屈な言い方をする名瀬部長に否定の言葉を贈るが、彼女は納得していない様子だった。

「上司の仕事は、部下に気持ちよく仕事させ、何かあれば責任を負うことだと思っっているわ。」

だからこそ、私にできる精一杯を提示させて貰うわ。彩君、貴方営業に戻る気はないかしら?」

「……………」

冗談などではなく、真剣な意思を宿した瞳は、嘘を言っではないなかつた。

「関係する彩君ならば言っても良いでしょう。明日正式に通達がありますが、三島部長が更迭されます。その理由自体は別だけでも、その調査で、貴方が営業を追われた理由が、貴方を貶める為の彼のでつち上げだったことがわかつたの。それがわかつた以上、貴方には営業に戻る権利があるわ」

「俺が、営業に……………」

思いもよらぬ提案に、心が揺れる。

「貴方の身体の事もあるから、以前と全く同じとはいかないでしょう。働き方も変わるだろうし、多少、仕事量をセーブして貰う必要もあるわ。けど、今のまま不満を抱いて仕事をするよりは格段に良いでしょう。」

彩君、どうする?」

視線を下に落とすと、頼りなさげな白く細い手足が目に入る。

以前に戻れたら。そう夢想することは多々あつた。このおかしな体質を恨み、あの日の自分を死ぬほど恨んだ。今日など、あの男に声



を掛けられていなければ、飛び降りていてもおかしくなかったほど追い詰められていた。

この話を飲めば、完全に以前のままとはいかなくても、元の生活に戻れる。同僚や他の連中と高め合い、切磋琢磨出来るあの日々が戻ってくるのだ。しかも、そこにあの糞部長の姿はない。そんな理想の条件、是非もなく選ぶだろう。

——選ぶのが、昨日までの俺ならば。

「いえ、結構です」

「……ええ？」

俺の否定の言葉に、目を見開き呆けた声を上げる名瀬部長に、思わず笑みが零れる。

「ど、どうして？ 三島部長も居なくなっただし、営業に戻れた方がやり甲斐があるって話じゃないの？ そ、それなら別の会社を紹介しましょうか？ 何社か予め打診して、似た業種で受け入れてくれそうな所もピックアップしてるから、そっちの方で……」

「それも、大丈夫ですよ」

驚きで目を白黒させ、焦った様子でわたわたと話をしている名瀬部長。普段の姿とのあまりのギャップに、俺はくすりと笑みをこぼす。

「確かに以前の仕事は俺の生き甲斐だったし、正直、あんなことになって落ち込みました。死にたいと思ったこともありました。」

でも俺、今の仕事でやりたいことを見つけたんです。名瀬部長のお陰で、もう少し頑張りたいと思えたんです」

俺にとって上司とは、やることなすこと一々文句をつけ追い落とそうとしてくる、敵のような存在だった。

だが、目の前の女性は違った。不正を許せない正義感もあったのだろうが、俺を心配してくれ、わざわざ他社にまで手を回してくれるほど、俺の事を考えていてくれたのだ。

今まで仕事に熱中していたのは、あの糞野郎の鼻を明かすだとか、仕返しの意味合いが強かった。究極、自分の為だけに仕事をしてきて、恋人だっていたことのない俺からすれば、誰かの為に働きたいと思ったのは生まれて初めてだったのだ。

「俺の為に、ありがとうございます。そして、これからもよろしく願います、名瀬部長」

俺は改めて、名瀬部長に挨拶をし、手を差し出す。それは、なあなあで働いていた今までの自分との決別だった。

俺の表情を見て、もう問題はないと思っただのか。名瀬部長はふっと表情を緩めると。

「……そう。なら、これからも頼りにさせてもらうわ。よろしくね、彩君」

すつと握りこまれる俺の小さな手。半年を経て改めて交わされた配属の挨拶に、二人そろって笑みを浮かべる。

名瀬部長が浮かべた、思わず見惚れてしまいそうな程綺麗な笑みは、何故か俺の脳裏を刺激したものの、気のせいだとして改めて記憶に刻み込まれるのであった。

「そういえば彩君、来週から、女の子の姿の時は制服を着てね？　ちゃんと制服は支給するから」

「えあつ、す、スーツじゃダメなんですか？」

「駄目よ。いつまでも、貴方だけ特別扱って訳にもいかないから」

「あ、あはは……」

すつかりいつもの表情に戻った名瀬部長のにべもない返事に、苦笑いを浮かべるしかない俺だった。

そんなわけで翌日。休みの日だったが、俺の姿は半年ぶりに外にあった。

以前は休みの度に関外に出かけ、美味しい飯屋探し兼、あの時の女性探しに精を出していたものだが、女になるようになってからは一度も行っていないかった。食欲も無かったし、会ってどうするかという虚無感も手伝い、ひたすら家で死んでいただけだが、悩みが解決し、晴れ渡るような心境の俺は、実に久しぶりに何かを食べたいと自発的に思った。一応買っておいた、ユニセックスな上下の服を着ると、俺は部屋を飛び出す。

当てもなくふらふらと歩き、適当に見つけた定食屋で食べた定食は、何の変哲もない野菜炒めだったにもかかわらず、ここ最近付き合いで行った焼き肉屋よりも美味しく感じた。精神状態が違うだけでこんなにも違うんだな、と感心しながら完食し、その周辺を目的もなく歩いているのが今までのハイライトである。

僅かに変わった街並みを眺めつつ、ご機嫌に鼻歌でも歌いながら練り歩く。昨日体が変化したことから、この週末は発作を気にせず過ごせるというのも、ご機嫌がプラスに働いている要素だった。

「ふーん、こんなところにケーキのバイキング出来たのか……」

土曜日ということでも人通りの多い道の一角に、新しく店が出来ていた。ケーキ屋らしかったが、どうやらランチタイム限定でケーキバイキングをやっているらしく、表にある順番待ち用の椅子は半ばまで埋まり始めている。軽く中を覗いてみても、種類もあつてそこそこ美味しそうなケーキばかりである。

昼を食べたばかりとは言え、デザートは別腹。俺自身甘いものは結構好きな方なので、興味がひかれるがしかし、こんな女性ばかりの空間に男一人で並ぶのもなあ、と思い直し立ち去ろうとするが。

「今俺、女じゃん……」

中性的な服を着ているせいで可愛らしいとは言い辛いものの、見た目はただ服のセンスが男っぽい女の子である。女になつてしまった事の悪用ともとれるが、盗撮や女風呂への侵入に比べれば余程健全である。これぐらい、負った苦労に比べればやっても罰は当たらない筈。

そう自身に言い訳をし、うきうき気分で順番待ちの椅子に座る。携帯を弄りながらまだかなーと暢気に待っていると、ふと視線を感じた。

「……うん……」

きよろきよろと辺りを見回すが、それらしき影は見つからず、首をかしげる。そこで、ふっと目をやった車道を挟んだ反対側の歩道にて、人が一部を避けて歩いていることに気付いた。

ちらちらと人ごみの隙間から見えるのは、今日は休業日なのか、

シャツターの閉まった店の前で、2人の男と1人の女性がもめている姿。横顔しか見えないものの、アクセサリーをじやらじやらぶら下げ、浮かべている軽薄そうな笑みは、明らかに碌な男たちではない事を証明していた。ナンパでもしているのだろう、身振り手振りで女性を誘っているようだが、女性はさも迷惑そうにしている。だが気が強くないのか、どうしても二人を振り払えず、あちらこちらに視線を送り、助けを求めている。だが、通りかかる人はみんな見て見ぬふり。所帯じみた田舎でもない限り、今の日本などそんなものだ。あの手の輩は須らく面倒くさいと道理が決まっている。あいつらより厳つい容姿をしているか、頭が回って弁論が立つ人でもなければ、助け出すのに手間と時間ばかりかかることが皆わかってる。

俺だってそうで、絡まれているのが知り合いとかでなければ助けにはいかない。誰かが助けに行くだろう、そんな無責任な信頼を言い訳に。

ああそういえば、あの時もこんな状況だったっけ。取引先に急いでいる最中、ガラの悪い男に絡まれて困ってるあの女性を見つけ、て——

思い出に回想していた俺の思考が静止する。車線を挟み、交差する視線。長い黒髪で、ぱつちりとした目をしていて、可愛らしい洋装に負けず劣らずの容姿のその女性は。今正に考えていた、あの雪の日、俺が助け、一目ぼれした——

俺と目が合った瞬間、女性はこちらに語り掛けてくる。脈打つ心臓の鼓動がうるさくて、何を言っているかなんてわかるはずが無かった。だが、口の動きで伝わる。あの時と全く同じ、助けての4文字を理解した途端、俺は名前を呼ぶ店員のことなど無視し、順番なんて放り投げて走り出す。動悸が激しい。男に比べたら貧弱な体に鞭を打っているせいか、憧れの女性にもう一度会えたという嬉しさか。今はどちらでもいい。兎に角、あの女性を助けないと。その一心で、俺は駆けていた。

「……おいお前ら、いい年して女性に迷惑かけるんじゃない」

「あん？」

女性の腕をつかみ、無理やりどこかに行こうとする男たちに対し、息を切らしながら俺は睨みつける。

女性は、安心したように表情を明るくする。突然かけられた声に男たちは俺に目を向けるが、俺の容姿を見てすぐに関心を無くす。

「なんだあ、ちんちくりんが。俺らはこの大人のお姉さんに用があるんだよ、ガキは引っ込んでな」

「俺たちと遊びたいんならもつと成長してからにしな」

俺が女になった姿が、童顔で子供っぽく見えがちなのは事実だし、男っぽい服を着ているせいで、ちよつと背伸びをしたがっている女の子感が出てしまっているのも事実である。だからと言って、ゲラゲラと下品な笑い声を上げられる覚えはないし、こんな脳みそ空っぽそうな糞野郎共、仮に男の姿でも絡みたい訳が無かった。

「その大人のお姉さんに吊りあってないんだよ、ガキ共が。この人と遊びたいんだったら、せめてその馬鹿丸出しの格好は止めるんだな」  
「ガキの癖に、言わせておけば好き勝手言いやがって……舐めてんのかてめえ!!」

あからさまなため息を落とすと、一見子供にも見えそうな用意の女に馬鹿にされていると思っただのか、馬鹿二人組の頭に血が上る。見た目相応に軽そうな脳は怒りの沸点も低いのか、俺の素直な感想に対し思惑通り容易にキレてくれる。

男の怒号に周囲の視線が集まるが、当の男達は気づいていない。だからこそ、怒りに身を任せて拳を振りかぶり、俺に向かって殴りかかろうとする。

こんな人混みの中、中身はともかく、見た目は完全に女の子な俺に向かって殴りかかるとは、頭に血が上っているせいで思考が単純化しているのか、そもそも頭が悪いのか。はたまたその両者なのかは知らないが、少なくとも、立場を悪くするだけと思いとどまったあのハゲ豚より馬鹿なのは事実で、非常に扱いやすくて助かる。

狙いは、身長差的に狙いやすい顔面か。今俺が男であれば、正当防衛の証明がてら一発貰ってから殴り返しても良いが、今の華奢な体では吹き飛ばされるのがオチだ。ならば……

「オラア!!」

「キヤアツ」

チンピラ紛いから振り下ろされる拳に、周囲から悲鳴が上がる。残念ながら間に割り入るような勇敢な人は通り掛からなかったようで、腰の入っていない、腕っ節だけで力任せのパンチは、それなりの速度で俺に向かって迫り来る。

誰もが殴られる女の子を想像した事だろう。だが、大半の予想に反して、パチン、と乾いた音が周囲の人間の耳を打った。どう聞いても、鈍く響く殴られた音ではない。それは、俺が掌でパンチを受け止めた軽い音だ。

「なっ」

プロボクサーの様に鋭いわけでもなく、格闘家の様に正確でもないパンチなど、ずぶの素人で女になって筋力の堕ちている俺でも、恐怖で目をそらさなければ簡単に受け止められる。

想像とは違った光景に、怒りのまま殴り掛かった馬鹿二人が目を見開き驚くところに、俺は追い打ちをかける。

「そのガキも殴れないような柔なパンチしか持ってない癖に、衆人環視の状態でそれを披露する度胸だけは認めなきやな」

「ああ!?!」

「な、何見てんだコラ!! 見せ物じゃねえぞ!!」

俺に言われてようやく周囲の状況に気付いたのか、威圧するように周囲に怒鳴り散らすも、自分達が原因で一気に視線が集まってしまったことでビビっているようで、そのセリフも微妙に声が震え、明らかに腰が引けているのが見てとれる。

周囲の人間も、殆どが足を止めてこちらを注視していた。数は力、いくら喧嘩っ早いヤンキー崩れが相手だろうと、対峙しているのが自分でなければ、批判的な目くらいは相手に向けてくれる。事実、批難するその周囲の目に、馬鹿二人組はおののいている。

ここまですればあと一押し。ひりひりとする掌をごまかしつつ、口角を吊り上げ脅しかける。

「俺に殴り掛かるくらいだから、警察に捕まる腹積もりなのかと思っ

だが、違うのか？　こんな騒動になれば、流石に誰か一人くらいは通報してくれてるだろうし……あ、お巡りさん？」

「チツ、おい逃げるぞ」

「クソ、覚えてろよクソガキ!!」

人ごみの一端に視線を向けると、焦った二人は俺に悪態をつきながら慌てて駆けだす。人ごみを掻き分けて逃げ去る二人を見て、ようやく一息つく。問題は解決したと見たか、足を止めてこちらを見ていた人たちも程々に散っていき、あつという間に通行の流れは正常化した。残されたのは、俺とあの女の人だけ。

黒曜のように深い色の瞳が俺の目を捉え、極めて近い距離で二人の視線が交錯する。吸い込まれるようなその瞳に、ドキリと胸が跳ねる。

「怪我はありませんか？」

「え、ええ。大丈夫です」

辛うじて吐き出した言葉に、向こうも軽く一礼しながら言葉を返してくれる。肩越しに流れるその艶やかな黒髪に、それを払う仕草。二人組に絡まれていた先程とは打って変わり、柔らかな笑みを湛えるその表情は、紛れもなくあの時、俺の出会った女性で間違い。

その動作一つ一つが、一々俺の胸を高鳴らせた。一年以上待ったその再開に、俺は改めて運命を感じた。

「あ、あの……!!」

今しかない。二度とないだろうこのチャンスに、一年越しの気持ちを含めて声を掛けようとするも……気づき、愕然とした。

俺の事、覚えてますか。そう声をかけても、女になった俺の事がわかるわけが無かった。そりゃそうだ、女の俺とは今初めて出会ったのだから。

俺の血縁者と言われたところで似ているか微妙なラインだと言うのに、ましてやそれが本人だと言って信じてくれるわけが無い。

久しぶりに出かけた事でようやく出会えたこの運命も、俺を覚えてくれていたかどうかを聞くことすら出来ず終わるようで。盛り上がっていた気持ちだが、一気に沈下する。

あと数日ずれていけば、昨日女にならなければ……そう後悔せずにはいられなかった。

同僚が言っていたように、俺には縁が無かったのだと諦める他ない。

伸ばしていた手が、ゆつくりと下降する。開きかけた口が閉じる。質の悪いやつらに捕まらなかつただけマシと思わねば。

沈んだ気持ちに鞭を打ち、あたまを下げてその場を辞そうとする。

「……ありがとう、彩君」

「……え!?」

ドキリと心臓が脈動し、下がっていた視線が、再び上がる。その女性性は、美しい顔に相応しい表情を浮かべながら、俺の名前を呼んだ。

「無視すれば良いんだろうけど、私、ああいう強引な人苦手で……彩君が追い払ってくれてとても助かったわ、本当にありがとう」

「いえ、それは、全然構わないんですが。」

「い、今、俺の名前を……」

間違いない、間違はなく俺の事を知ってくれている!!

その事実には驚きを隠せないが、それ以上に喜びの感情が勝り、ひとりでに吊り上がる口元を抑えきれない。昨日から続いている確変は、まだ続いていたのだ!!

喜び勇んで尋ねた一言に、気圧された麗しの彼女はびくりと肩をはねさせる。

「え、ええ、知ってるわよ。彩慶介君、よね?」

「お、覚えてくれてるんですか!?!」

その返事で息を吹き返したようにテンションの上がった俺に向かって、彼女は心底不思議そうな顔をする。

「それは勿論。ひと時も貴方の事、忘れた事は無いわよ」

「ほ、本当ですか!?!」

その言葉に有頂天になりそうな俺は、感情がこらえきれず表出するのはもう諦めた。だが、運命を感じて絶頂を極めそうな俺は、ハタと気づく。あれ、俺、前自己紹介したつけ、と……



取引先への移動中、電車の遅れで急いでいた最中に会ったのが彼女だ。取引先へ連絡は済ませていたものの、印象が悪くなつてはよろしくないと急いでいた俺は、美しい女性への衝撃も手伝い、後ろ髪惹かれつつも泣く泣くその場を後にした。だから、自己紹介などする間も無かつたはずで、彼女が俺の名前を知れるはずもないのだが……そもそも。今の俺、女じゃん。仮に俺があの時自己紹介していたとして、今の俺が同一人物だとわかるわけが無かつた。え、これぬか喜び……？

「あの、もしかして気づいてない……？」

「え？」

勝手に上がって勝手に落とされるジェットコースターのように気分をしている俺に向かって女性が訝しげに尋ねてきた言葉に、今度は俺がきよんとした表情を浮かべる番だった。

え、まさかこの女性、俺の知り合いなの？ それも、俺が女性化している事を知っているような親密な!?

とつきに出た一文字の返事で、俺がわかっていないことに気付いたのだろう、女性もがっくりと肩を落とす。

「わかつた、わかつたわ……確かに会社じゃそっけなかつたし、ひよつとしたら無視されてるのかなーとか、色々考えてたけど、まさか本当に気づいてなかつたなんて……」

「あ、あの……？」

どんよりとした雰囲気を受けつつ、ぶつぶつと独り言を言っている彼女に声をかけるも、肩を落としたままがっくりと項垂れている。

彼女はあ、と重い空気を吐き出すと、持っていた手提げバッグから髪留めを取り出し、美しい漆のように艶やかな黒髪を根元で縛ると、ポニーテールに髪型を変えた。

「彩君、見覚えはない？」

「……？」

横から覗くうなじの色つぼさに、髪型を変えても美しいなあ、なんて考えている俺に問う女性。

謎の既視感が俺を襲うものの、それが何なのかはわからない。首を

ひねるが、さっぱり見当もつかなかった。

彼女は深い深いため息をつく。次に取り出したのは、眼鏡だった。大抵目を柔らかく見せる物が多いファッション用の眼鏡。にもかかわらず、彼女が取り出したのは逆に印象をきつくさせるような真逆の物。

「うん……？」

この組み合わせ、絶対どつかで見た。そう確信はあるのに、喉元まで出かかっているのにわからないもどかしさ。その疑問は、次の瞬間に一瞬で氷解した。

かちやり、と眼鏡をかける。思った通り、柔らかな表情が多い彼女が一瞬にして目の鋭い女性に早変わりした。その姿を見て、混乱で迷走していた俺の思考は雷が走ったかのように閃き、一つの解を導き出す。衝撃が走り、思わずたたらを踏んで後ろに下がってしまう。

「な、な、名瀬部長お!？」

「久しぶりね、彩君……」

疲れた表情を浮かべた名瀬部長は、衝撃に困惑を隠せない俺に向かって皮肉気な言葉を放ったのだった。

「……」  
「……」

立ち話もなんだからと、適当に喫茶店に入った俺たちだったが。1つのフロートを二人で飲んでイチヤイチヤしているカップルやら、ノートパソコンを開いている大学生らしき男などそれなりに賑わっている店内の一角では、とても気まずい雰囲気の流れていた。

向かい合って座る俺と名瀬部長は、お互いに手元のコーヒーに視線を落としている。エアコンが効いている筈なのに、背中にはじつとりとした嫌な汗をかいていた。

運命の相手とまで思った相手と再会出来た所までは上出来だった。だがまさか、一年以上探していた憧れの女性が実は同じ職場で働いていて、尚且つ上司で毎日のように顔を合わせていたなんて、一体誰

が想像出来たのか。

ちらりと視線を上げる。気まづげに沈黙を保っている名瀬部長は、髪留めと眼鏡を外し、先程までの姿に戻っていた。いや、戻っていたも何も同一人物なのだが、どうしてもイメージが一致しないのだ。常に冷静沈着で、鋭い視線と共に威圧感を周囲に放つ出来る女上司と、少し調子に乗った男も振り払えない、今時珍しいか弱さすら感じるような儂げな女性。印象が違いすぎて、俺の頭は理解を拒否していた。冷たい風で常に揺らめくコーヒーのさざめき。届いてから5分以上経ち、既に冷めてきたそれは、動揺仕切りの俺の心証を現しているようで、落ち着かない。

「……あ、あの」

「は、はいっ」

兎に角何か喋らないと。その一心で口を開くが、突然の言葉にびくり、と肩を跳ねさせる名瀬部長。あ、可愛い。

「何で、会社だと眼鏡かけてるんです？ あ、いや、かけないと見えなйтかなら、無意味な質問なんですけど……」

普段とは印象が違いすぎて、名瀬部長だと気づかない程の変貌ぶりはおいておくとして、何でわざわざ変装するような真似をしているのか。眼鏡をはずした姿があれだけ綺麗なら、正直勿体ないと思ったのだ。助けた女性が名瀬部長だと気づいてから、ずっと抱いていた素朴な疑問。

「ああ、これのこと？」

名瀬部長は再びカバンから眼鏡を取り出し、こくりと頷く俺。俺の質問に対し、名瀬部長はよく聞かれるのよね、と前置きを1つ。口を付けていなかった事ですっかり分離してしまったコーヒーを、くるくるとマドラーでかき混ぜる。

「これ、度の入ってないブルーライトカットの眼鏡なの。目が疲れないから、っていうのは表向きの理由で……」

自慢みたいに聞こえて、本当は話すのも嫌なだけ。眼鏡かけてないと、ああやって声を掛けられることが多いのよ。強引に誘えば付いてくるでしょ、みたいな態度で無理やり。実際強引な人って苦手だ

から、断り切れなくて付いていく事も多くて……だから、ああやって見た目だけでも強気にすれば、多少減るかなって思ってた……」

「ああ……」

先程を思い出したのか、眉を顰める名瀬部長に、さもありませんと俺は納得した。会社で見る名瀬部長のイメージだと、あんな輩などビンタ一発で追い返しそうなイメージしかない。だが。

「名瀬部長って、可愛いでもんね」

「か、かわつ……!! じよ、上司を揶揄っちゃだめよ、彩君!!」

俺が素直な感想を口にするだけで、こうしてぽつと顔を赤くして戸惑う名瀬部長を見るに、会社での厳格で怖い上司という姿は取り繕っているもので、ちよつとした誉め言葉で動揺してしまうような、可愛らしい姿が彼女本来の姿なのだ。

頬を紅潮させながら睨まれたところで、ただただ可愛さが増すだけである。これが、ギャップ萌えという奴なのか……運命の相手だと思っていた女性が上司だったと知って困惑した所で、これだ。

「本当にもう……」

俺は至って本気なのだが、名瀬部長は冗談と思っているのか、ぷんすか怒って本気にしていない様子。名瀬部長は、火照った顔を冷やそうとカッパをぐいと一気に煽る。

何の変哲もない動作だが、そんな日常的な仕草ですら可愛く、魅力的に感じた。

社会人として彼女の姿勢を尊敬はしていたものの、昨日までは異性として見たことはなかったはずだ。それなのに、彼女が運命の相手だとわかった途端に胸の高鳴りは止まず、一挙一動にドキドキさせられる。それは、俺の現金さから来る物なのか。それとも、昨日彼女の優しさの一端に救われたからなのか。俺の中では、どちらとも判別がつかなかった。

この一年、ずっと秘めてきた思いだ。後悔の無いよう、もしもう一度会えれば告白しようと思っていたはずだ。

「……」

だが、あと一歩が踏み出せない。それは、俺が案外チキンだからな

のか、それとも女になるといいう馬鹿げた体質ですっかり染みついた、諦観のせいかな。

性別が入れ替わるといいう、特異としか言いようがない体質を持った俺を部下として評価し、庇ってくれはしたものの、そいつを伴侶に選ぶかどうかは別の話だ。今の俺は、男であろうと女であろうと、どちらの姿でも子供を作れるかどうかわからない。世間には、俺のような性転換事件の被害者を気持ち悪いと言いう人も多い。風評被害という意味では、未だに差別のある同性を恋人に選ぶよりリスクのある相手だ。それを名瀬部長に押し付けるのかと考えると、途端に開きかけた口が閉じてしまう。

再び沈黙が場に満ちる。

「そういえば彩君、まだお礼を言っていなかったわね」

だいぶん頬の赤みも引き、いつもの鋭い視線を取り戻した名瀬部長が切り出した話に、思わず姿勢を整える。

「礼、ですか？ お礼なら、さっき言っていたいたじゃないですか。それで十分ですよ」

「いや、そっちじゃなくて。一年前、今日のように変な男に絡まれてた私を、営業先の近くでたまたま会った貴方が助けてくれた時の事よ」  
名瀬部長は、俺をまっすぐに見つめていた。

「営業先に急いでいたんでしようけど、それでも私を見るなり颯爽と助けに来てくれて。貴方のカッコいい後ろ姿、今でも覚えてるわ。私を助けるなり走りさって言いそびれちゃったけど、本当にありがとう」

「いえ、そんな。当然の事をしたまでですよ」

「その当然の事を出来ない人が多いのよ。出来たとしても、下心丸出しの馬鹿ばかり。中々真似できることじゃないわ」

嫌味しか言わない前部長時代を含め、叱咤や罵倒ばかりだった今までを考えれば、まるで確変のように褒められている昨日今日は、正直生きた心地がしない程。だが、俺はそこまで褒められた人間じゃない。ゆるゆると首を振って否定する。

「本当に、そんなことないですよ。俺だって下心くらいあります。綺

麗な人だな、こんな人と付き合えたらな、と思うくらいには」

「ふふ、その割には、名前も聞かずに走り去っていったけどね」

「あ、あれは」

「それに、毎日顔を合わせてたのに気づかなかったわよね。もしかして、無視されてるのかしらと思つてシヨックだったわ。義務感から助けたけど、嫌いだから見なかったことにしてるのかな、とか色々考えちゃつて、夜も眠れなかつたわ。まさか、私だと気づいてなかつたとは思わなかつたけど……」

「本当にすみません……」

ため息交じりの言葉に、がっくりと項垂れる。言い訳させてもらえぬなら、いくら同じ会社で面識はあるとはいえ、あんな別人のように綺麗になられたら、気づけるわけがないと思う。

さぞ怒つているのかと思いきや、ちらりと視線をやつた名瀬部長の表情には、笑みが乗っていた。

「ねえ、彩君。もう少し信じてほしいな」

「信じる、ですか？」

「そう、信じる。貴方が好きになつた女性の事」

オウム返しに聞いた俺は、目を見張る。

「好きになつた男性ひとがちよつと変わつてたつて、それが理由で嫌いになる程、私は薄情者でも嫌な女でもないわ。例えそれが、たまに女の子になつちやうことだとしても、ね」

苦笑交じりのその言葉には、慰めなどの気遣う感情は入っていない。

「あの日はただのきつかけ。私は、貴方の容姿に惚れたんじゃない。全力で仕事に取り組んで、皆と切磋琢磨してる貴方のイキイキした姿や、誰かが困つてたら率先して助けに行く、カッコイイ貴方に惚れたんだもの。女の子になるなんて、些細な事だわ」

「名瀬、部長……」

俺の勘違いでなければ。その澄んだ瞳の奥には、俺と同じ思いが宿っているのではないか。名瀬部長は、それをわかつてわざわざこんな言葉を言つてくれているのではないか。

思いを自覚した途端、一気に顔が熱くなる。それは、惚れた相手から後押しされないと告白できない自分自身への恥ずかしさであり、思いが通じ合っていたことの歓喜でもあった。

俺は覚悟を決めた。女性の方からここまでお膳立てしてもらって告白しないなんて、本当に男じゃなくなる。

姿勢を直し、まっすぐ名瀬さんを見つめ返す。俺の思いが、正しく伝わるように。

「助けて貰ったのは、俺の方もです。こんな体になって、自棄になって俺を立ち直らせてくれて、とても感謝してます。まさか名瀬部長が、俺が一目惚れして探していた女性だったとは思っていませんでした……」

あの日、名前も聞かずにその場から去ったことをずっと後悔していました。そして、もしもう一度会えたら、ずっと言おうと思ってたことがあります。聞いて、くれますか」

こくりと頷く名瀬部長を見て、俺は喫茶店特有のコーヒー豆の香ばしい空気を肺いっぱい吸い込み、吐き出す。

読書やテレビすら見ず、女性との恋愛の経験値も少ない俺が、ドラマのように女性を感銘させる告白などできるわけがなかった。だから俺にできるのは、思いの丈を正直に打ち明ける。営業のように説得力なんていらぬ、俺の全てをぶつけるだけだ。

「俺の人生を振り返っても、思い出すのは仕事の事ばかりで、今まで誰かを好きになったことなんて一度もありませんでした。そんな俺が初めて一目惚れしたのが、貴女でした。あれ以来、ずっと好きでした。俺と、付き合ってくれませんか？」

俺の言葉を聞いた彼女のまるで花が咲いたような満面の笑みで、場が一瞬で華やいだ。

返事は聞くまでもなかった。

俺と名瀬さんは、自然とテーブル越しに顔を近づけた。あともう少しの所で、互いの後ろから覗く周囲の好奇の視線に気づき、今はお互い女同士であり、ここが衆人環視の環境だということを思い出し、慌てて離れる。

「どちらの貴方も愛してるけど、出来れば、ファーストキスは男の子でお願いね？」

「善処します……」

小さく微笑む彼女の頬に俺が手を添えると、名瀬さんも俺の小さな手に手を重ね、二人の体温が伝わる。どちらともなく笑みが零れ、何気ない行為が、とてつもなく嬉しくて仕方ない。

思い描いていた女性が目の前にいて、思いが通じているのだ。そう思うだけで、後悔ばかりで大嫌いだったこの体も、名瀬さんと付き合えたきつかけだと思えば、今後はうまく付き合っていけそうだった。「そうだ。名瀬さん、この後暇でしたら、デザートバイキングに行きませんか？ 折角女の子なので、一度行ってみたいんです」

「ふふ、喜んでついていくわ」

あの事件で閉じたと思っていた未来が、こんなにも明るい。目の前の女神には、いくら感謝してもし足りなかった。

「末永く、よろしくね？」

「……はいっ!!」

まるでプロポーズのような言葉に、浮かれている俺は、幸せにし返すくらいの勢いで肯定するのだった。

そんな経緯を経て、晴れて名瀬さんと付き合い始めた俺だったが、名瀬さんたつての希望で、付き合い始めたことは社内には隠すこととなった。別に社内恋愛禁止という条項は社則に無いが、結婚まで皆には隠しておいて、後で驚かせたいらしい。そんな子供っぽいところもまた可愛いのだが、その算段は些か甘いのではないかと思うわけだ。

金曜に変化したため、月曜日を迎えた段階で男に戻れるわけもなく、女の姿で出社した。なるべく以前と同じように振舞うように、と聞いていたので特段意識することもなく、貰った仕事を淡々とこなしているのだが。

「慶介君、今送付したメールに添付されてるファイルを印刷しておいてくれる？」



「わかりました」

デスク越しに名瀬さんの指示を貰う。俺は指示を受けファイルの確認に入るが、1つため息を落とした。一見、別に問題無さげな言葉だが、良く聞くといつもと違う。性転換事件の被害者である俺に対して人一倍配慮を欠かさない彼女は、俺の事を女の姿なら姓の彩、男ならば名の慶介と呼ぶのだが、今俺は女の姿なのに慶介、と呼んだ。名前の呼び間違いや、言われなければ気づかない人も多いだろう些細なミスだ。だが、それが滅多にミスをしない名瀬部長が相手であれば話が変わってくる。しかも、会社ではクールな表情を崩すことのない名瀬部長が、俺に向かって小さくだが微笑んでいるのだ。俺としてはうれしいのだが、こればかりは悪手だった。

瞬間、口元の変化を目ざとく発見したオフィスの女性陣から、俺たち二人に熱い視線が注がれる。

「ちよつと、名瀬さん!!」

「あ、え、な、何?!」

女性陣は仕事を放棄し、名瀬部長の腕をつかみどこかへ連行する。目を白黒させている名瀬さんの姿を見て、俺はもう一度諦めのため息をついた。

ああ、ばれたな。

仕事中は気を張っているらしいが、自然体だと結構抜けてる所の多い名瀬さんの事だ、俺に対してのリアクションで何かやらかすだろうと思っていたが、俺に対しての指示でそんなにわかりやすく反応してしまうとは……流石名瀬さん、めっちゃ可愛い。

「名瀬部長、何かあったのか?」

「……さあな」

機敏に僅かな違いに気づいた女性陣に対し、困惑気味に呟く男連中は全く気づいていなかった。どうやら、俺が追及を受けることはないようで一安心だ。名瀬さんには、ある意味役得だとして頑張っ貰うしかあるまい。

廊下から上がる黄色い歓声に首をかしげる男共を尻目に、俺はにやつき歪む口元を手で隠し、ちよつとした優越感に浸るのだった。

……残念ながら口元は隠しきれしておらず、今日の彩はなんだか可愛いな、等と言われていることも知らずに。

「彩君、貴方もちよつと来なさい!!」

「あ、はい」

廊下から顔を出し俺を呼びつけるお局様に、他人事のようにニマニマと笑っていた俺は、慌てて廊下へと駆けていく。

……その優越感もあえなく崩壊したが、まあ良いのだ。女性陣に経緯を根掘り葉掘り聞かれ、照れまくって顔を真っ赤にしている名瀬さんを見ただけで、俺の勝ちなのだから。

恥ずかしながらも、少しずつ噛みしめるように答えている名瀬さんを見て、俺はこの素敵な人と付き合えている幸せをかみしめるのであった。

#### 4 (後編)

少し前、紆余曲折を経て、一年越しに思いを伝えてようやく付き合い始めた俺と名瀬さんであったが、一か月たった今でもカップルっぽいことはしていなかった。何故かと言うと理由は簡単で、俺も名瀬さんも非常に忙しいのである。名瀬さんがトップに立っている部署自体は、残業が常態化している営業ほど忙しくはなく、殆どの人員が定時で上がるのだが、部の取りまとめともなると少々忙しい。土日出勤するほどではないが、ほぼ毎日残業が発生するので、仕事帰りにデートとしゃれ込むのは少々時間が厳しいのだ。

とはいえ、土日は二人とも休みだし、幾らでもデートする時間は確保出来るのだが、それだけが理由の全てではない。主に原因は、俺である。

平日でも十分多いのに、週末のせいで酔いそうなほど人が密集している都会の街並み。目印代わりに待ち合わせ場所にしていた公園の入り口で、俺はその姿を発見する。淡い青のブラウスにフレアスカートを着こなした女性は、携帯を弄りつつ、時折誰かを探すように周囲を見渡している。明らかに周囲の目を引いており、声かけてみるよ、だなんて声も聞こえる。急がないと、またあの光景の繰り返しになるだろう。そんな女性と付き合っているのは俺なのだという優越感に、口角を釣り上げたまま、俺は小走りに駆け寄ると、自然と視線があった。その瞳が喜びに満ちたのも一瞬、俺の姿を認識した途端に、華やいた雰囲気は一瞬で引き、口元が引きつる。

「慶介君……」

「すいません、本当にすいません……」

それ以外に何を言えというのか。何とも言えない微妙な表情を浮かべる名瀬さんに、俺はいつもよりも若干高い声で平謝りするしかなかった。

「遅くなりますって連絡が来た時、ひよつとしたらとは思ったけど……本当に女の子になってるだなんて。呪われてるのかしら」

「面目次第もございません……」

「気にしなくて良いのよ。悪いのは慶介君じゃなくて、そんな体にした薬品会社なんだから……」

名瀬さんが気遣ってくれているのはわかるが、どこか影のある憂いを潜めさせたその表情から隠しきれない落胆を感じとり、非常に申し訳ない気持ちになる。

名瀬さんと付き合い始めてから今週末まで、女のまま週末を迎えるのは新記録だった。そう、平日はそこそ男である頻度が高いが、土日はすべからく女なのだ。一年以上、女と男を行き来する特異な体質と付き合ってきたが、ここまで曜日で偏ったことはなかった。名瀬さんと付き合えた幸運で、その分それ以外の運が下がりきっている気がしてならない。名瀬さんの言う通り、恋愛の神様か何かにも呪われたに違いなかった。

「い、行きましようか。カップル割は、もう適用されませんけど」

「もうレディースデーに行きなおした方が良いんじゃないかしら……」

「そんなこと言わずに!! 名瀬さんだつて楽しみにしてたじゃないですか!!」

若干すね始めた名瀬さんの背中を押して、俺達は映画館に向かった。

てきぱきと仕事を片付ける会社での様子からは想像もできないが、プライベートでの名瀬さんはかなり女性的だ。料理ができて家事掃除はお手の物、というとジェンダー差別かもしれないが、およそ世間一般人が女性的と言われて想像することは大抵出来るといっても過言ではない。手料理を何回か振舞ってもらったが、かなりの腕前だ。プライベートでは気が弱いところがあるのが玉に瑕だが、それにしただって男心をくすぐるし、そういう名瀬さんも好きなのでマイナスではない。

そして、会社での地に足のついたお堅いイメージとは裏腹に、存外少女趣味だ。例えば、今日の洋装は色調の落ち着いたシックなもの

だが、買い物に行くと、名瀬さんの熱心に見ているのは大抵可愛い系に属する服が多い。

慶介君ならともかく、私じゃ似合わないから。なんて言って結局買わないのだが、憧れのような感情は隠しきれしていない。女性にしては背が高い部類に入る名瀬さんでは、着ても似合わないと思っっているのだろう。俺としては似合うと思うのだが、可愛い服を着た名瀬さんも好きなんだけどなあ、だなんて言葉を口にした日には、恥ずかしくて俺の肩をバシバシ叩いた挙句、腹いせに俺が被害を被る羽目になるので、決して言わないが。

他にも、理想のファーストキスのシチュエーションは細かく指定があったり、デートの雰囲気といったものをとっても大切にしている。なので、女の俺とキスなんて言語道断!! 初めては男の俺とが良い!! という名瀬さんの熱弁により、付き合い始めて1か月以上たとうとして居るのに、いまだにキスすら交わしていない訳だ。

勿論、俺も名瀬さんの言うことに納得している。いくらたまに女になる俺を受け入れてくれたとはいえ、名瀬さんは女の俺と付き合っているわけではないのだから。名瀬さんご希望のシチュエーション通りに行けば、熱いベーズを交わした後そのままベッドイン、だなんて展開もあり得なくはない。いずれ味変のノリで女で致すこともあるだろうが、最初から女でやるのは俺も嫌なのだ。というか、トイレですら最近ようやく慣れてきたって段階なのに、いきなり夜の行為だなんて出来るわけなからう。

昨日寝る前は男だったので、名瀬さんも俺自身も、遂に! と期待していたのだが、起きてぶかぶかのパジャマを着ていることを自覚した時は、がっかりとかいうレベルではなかった。それは名瀬さんも同じようで、あれだけ楽しみにしていた映画を目の前にし、溜息が絶えなかった。

女になってしまっていることに関しては、もうどうしようもない。キスやら何やらは次回以降に期待してもらおうとして、この後の予定で何とか楽しんでもらうしかあるまい。

溜息が止まらない割に、映画の展開で涙腺を緩ませている名瀬さん

に和みつつ、俺は頭の中での予定表のページをめくるのであった。

慶介君にとって、女の子になってしまう現象は不可抗力である。そう頭でわかっただけではいても、こうもタイミングが合わないとかわがとなのかな、と思ってしまうのが私の悪い所だ。大人げなく拗ねていた私だったが、慶介君の必至な慰めと、楽しみにしていた映画を見て、すっかり機嫌を直した。と同時に、慶介君は何も悪くないというのに拗ねていた自分が恥ずかしくなり、一言慶介君に謝り、それから楽しいデートとなった。

今の慶介君に似合う洋服を探したり色んな面白い物をしつつ、夜は慶介君おすすめのおしゃれな居酒屋さんで過ごした。個室の多い落ち着いた雰囲気、周囲もカッパルだらけである。私たちもその中の一組なのだと思うと、私の中に謎の優越感が沸き起こる。

肝心の中身はというと、突き出しの時点で既においしく、食べ歩きが趣味らしい慶介君のセンスは相変わらず素晴らしかった。

美味しい料理と話にお酒も進み、席の時間が来た頃にはすっかり出来上がっていた。いや、出来上がりすぎていた。

「うぐう……」

「大丈夫？ 吐きたかったら吐いた方が楽になるわよ？」

「だい、じょうぶです……」

顔を真っ赤にして、気の抜けた表情をしている慶介君は、私に掴まっていないと歩くことすらおぼつかない。お酒に酔って意識がふわふわしているのだろう、返事も半分浮ついており、普段からしつかりしている慶介君らしからぬ様子だった。

慶介君が酒に弱いイメージは無かったのだが、もしかすると女性の体になった状態だと多少お酒に弱くなるのかもしれない。そういえば、女になつてからお酒はあまり飲んでいなかったそうだし、今までのデートで行った店だと乾杯の一杯くらいでそこまで飲んでなかったから、慶介君本人も含めて誰も気付かなかったのかもしれない。

「うう……」

慶介君の家は知っているし、このまま家に送り届けても良いが、女

性の体で、千鳥足で意識も浮ついている慶介君をこのまま放り出すのは心配だった。

せめて、目の届く範囲に置いてあげないと。そう思った私は、慶介君を連れ出す。

「すみません、区役所の近くのマンションまで」

稼ぎ時ということで、飲み屋街の近くに溜まっているタクシーを捕まえて乗り込むと、タクシーは静かに走り出した。

よくいる、積極的にお客さんに話しかけてくるような、社交性のある運転手でなくて助かった。どうにも、初対面の人と話すのは苦手だから。こういう時に頼りになる慶介君は今、私の肩に頭を預け、静かに寝息を立てているし。事情を知らない他人が見れば、飲み会で飲みすぎた後輩を介抱する先輩か上司にしか見えないだろう。まさか、恋人同士などとは思えない筈。そう、こんな可愛らしい女の子が私の彼氏だなんて、未だに実感がないのだ。

雪が降る日、私が慶介君に助けられ、それ以降仕事場で会うたび目線で追いかけた彼は、理路整然と話し、相手を納得させる頼りになる仕事人であり、いざというときは自身を盾にしても他の人を庇える男らしさを感じさせる好青年だった。

「仕事場では今でもそうで、”彼”であろうと”彼女”であろうと、変わらず職場の誰もが頼りにする出来る男だ。でも、私にだけ見せてくれた新たな一面は、意外と彼女の姿が似合っている事を私に教えてくれた。それは女々しいという事ではなく、ただ彼の良さを強調するだけ。私しか知らない彼の一面を知る度、私は更に彼に夢中になった。今日だつてそうで、勝手な理由で拗ねる私を必死に盛り上げようとしてくれる彼の必死な姿や、恋愛ものの映画で涙ぐむ私を見てほっこりとした笑みを浮かべる彼の姿は、頭の中のフォルダに大切に保管してある。」

そんな彼だからこそ、私は好きになったのだから。1つ、覚悟を決める。

「うう……」

「大丈夫？」

「なん、とか……」

タクシーが停止し、お金を払って降りたのはとあるマンションの前。意識が空ろな慶介君は、ここが私の部屋だとは気づいていない様子だが、ここは今まで上げたことのない、私の家。

辛そうに呻く慶介君に肩を支えながら、私は自室の扉を開く。可愛らしい物ばかり飾られた、私の部屋。友達によく子供みたいと馬鹿にされる、少女趣味全開の部屋のベッドに、彼を寝かせる。可愛らしい部屋に入る慶介君が寝っ転がると年相応に映り、まるでここが慶介君の部屋であるかのようすら感じてくる。

自分の趣味であるが、どうにも似合わない私は慶介君に若干の嫉妬を抱きつつ、水を継ぐと、慶介君にコップを差し出す。

「お水持って来たわよ」

「ありがとうございます」

声をかけると、慶介君はなんとかといった様子で体を起こし、私からコップを受け取り、口をつける。女性の体では、一口に飲める量など少ない。こくり、こくりと小刻みに飲み込み、水が嚥下する度うねる白い喉元。私の指導もあってか、最近は随分と自然な化粧ができるようになってきた、薄くひかれた口紅の唇。アルコールで火照り、リノゴのように真っ赤な頬は、少し子供っぽい容姿とは裏腹に、大人の妖艶さを感じさせる。

私にそんな趣味などないはずなのに、私の目には目の前の女の子が、とてつもなく魅力的に映った。

小さく吐息を漏らす仕草は、とても女の子一年目とは思えない色っぽさを感じる。

「すみません、名瀬さん。最後の最後に恰好つかなくて。

……いや。女の姿で来た時点で、最初からついてなかったのかもしれないですけど」

皮肉気に自嘲する。澆漑とした慶介君からは程遠い印象。お酒が入り、あの時のように慶介君の弱気が表に出ている。以前と違うのは、その思いを私に吐露してくれているという点。

「そんなことないよ。今日は一日素敵なデートだったし、子供っぽい



事にいつまでもこだわってる私が悪いんだもの。気にすることないわ」

「……でも、男としては答えたいじゃないですか。好きな人の、夢くらい」

両手でコップを握り、俯く慶介君。付き合い始めのキスは、ロマンチックな雰囲気が良いだなんて、大人になり切れてなかった私の思いを必死に叶えてくれようとする慶介君の姿勢に、思わず笑みが零れる。ああ、私って心底馬鹿だったな、と。

しょんぼりと肩を落とす慶介君の横に座ると、ぎゅ、とコップを握りこんでいる小さな手を取る。

「名瀬、さ……!?!」

疑問の声を封じるように、私は口を塞ぐ。驚きで目を見開き、強張った手からコップが離れ、中に残っていた水が彼女のスカートを濡らす。

鼻を抜けるアルコールと仄かな甘み。男なんて微塵も感じない、女性特有の甘い香り。舌を絡ませたりしているわけでもなく、ただただ唇同士を合わせ、互いに口紅の塗りあうだけのファーストキス。

私が口を離すと、慶介君は乱れた口元を手で隠す。動揺が隠しきれない慶介君に、私はいたずらっぽく微笑む。

「貴女のファーストキス、貰っちゃった」

「……よ、よかったんですか?」

かろうじて絞り出したらしい言葉に、してやったりと笑みを深める。

「私が好きなのは、慶介君だもの。男でも女でも、関係ないわ」

「あっ……」

とん、と軽く肩を押すと、小さな音を立ててベッドに収まる。酒の火照りで洋服が乱れ、所々肌をチラつかせつつ、未だ収まらぬ動揺で瞳を揺らすその扇情的な姿。女である私すら欲情させるその艶やかな姿に、熱に浮かれたように、覆いかぶさる。泳ぐ両手を抑え込み、逃げられないように。

高鳴る鼓動に、交錯する視線。ふいに、向こうから目をそらす。そ

ここには、期待感、高揚感、そして僅かばかりの恐怖が浮かんでいる。  
「……怖い？」

「正直に言えば、そうですね」

想定していたシーンとは居場所が反対の現状に、慶介君は居心地が悪そうに、もぞもぞと全身をゆする。

頑なに合わせない視線。恥ずかし気にそつぽを向いたままの慶介君の様子に、私はふと思いつく。

「もしかして、女の子の体で触ったことないの？」

「……俺は、男ですから。こんな風に、受けに回る経験なんて、あるわけじゃないですよ。いろいろあつて、精神的に追い詰められててそれどころじゃなかったのもありますけど。そこまですたら、俺が女だと受け入れてしまうようで、とてもそんな気には」

でも、と前置きすると。アルコールか、雰囲気か。慶介君は、どちらかに酔って頬を真っ赤に染めながら、潤んだ瞳で私を覗き込む。

「こんな私”私”で良いなら。受け入れてくれた名瀬さんとなら、私は……」

愛らしいその容姿を私に捧げるように、瞼を閉じる。

……ああ。世の中の男の人って、こんな風に女の人に欲情するのかしら。慶介君が、どうしようもなく愛おしい。胸中に沸き起こる愛おしい感情を、止められない。

私にとっても、今の状況は理想のシチュエーションとは真逆だ。それでも、いざ目の前の王子様お姫様を前にしてみると、もう我慢できなかつた。女の子が好きなわけではない。慶介君が、特別なのだ。

「今日だけは、私の王子様お姫様。女の子の相手は初めてだけれど、とびつきり優しくするわ」

「名瀬、さん……」

「二人きりの時は、恵里佳、って呼んで？」

「えりか、さん……」

もう一度、口づけを交わす。唇同士を触れ合わせるだけの軽いもの。たったそれだけなのに、胸に満ちるこの幸せな気持ち。その感情はアルコールのように私を酔わせ、キスは自然と貪るようなものに。

「ん、む……」

恐る恐る絡み始めたそれは、求めるがままに次第に激しくなり。気づけば、互いに口内を責めあうまでに。鼻息が擦りたい。だが決してやめる理由にはならない。

慶介君から、鼻から抜けるような声が漏れる。私の呼吸も自然と荒れ、次第に鼻息以外に水音まで立ち始めた。初めての味に、私も彼女も夢中になる。

「ぶはっ」

「ふう、はあ」

呼吸が苦しくなり始めた頃、ようやく終わる。小さな胸を隆起させ、慶介君は物欲しそうに、とろけた瞳を私に向けてくる。

辛抱たまらない、そんな様子の慶介君を見て、私も火が付く。急に熱くなってきた私は、乱暴に着ていた洋服を脱ぎ捨てる。

びっくりしたように目を丸くした慶介君。そして、露出した私の下着に目を白黒させ、視線がくぎ付けになる。

「え、あの」

「ふふ、次は慶介君にお願いするわ。でも、今日のエスコートは私。彩ちゃんは、私に身を任せてくれれば良いのよ……？」

女の子同士で経験が有るわけじゃないけれど、少なくとも慶介君……この場においては、彩ちゃんよりは女性について知っているつもりだ。

腕から上半身へと手を滑らせ、かろうじて女性が着ていてもおかしくない、ほぼ男物のシャツのボタンを外すと、小ぶりの丘陵を隠していた、デザイン性など皆無な下着が姿を現す。デパートで一山いくらで積んでいそうな、シンプルと表することすら失礼に当たりそうな、最低限の機能性だけを有したそれを見て、僅かに顔をしかめる。

「もし次も女の子の姿でデートなら、今度は下着も買いに行かないといけないわね」

フロントホックのそれを脱がすと、予想通り小さな胸がまるびでる。成熟していない、青い果実を思わせるそれ。それでも先端には、ピンと屹立した乳首が自己主張している。

「そんなにまじまじと見ないでください。さすがに、恥ずかしいです」  
「私のも見たんだから、お相子よ?」

「んんっ……」

わざとそれを避けるように、つつ、と肌を爪で搔くように走らせると、びくびくと体を振るわせる。全身が敏感なのだろう、初めての刺激に戸惑いの感情を浮かべながらも、声を上げないよう必死に唇を閉じ我慢している彩ちゃんを見て、むくむくと沸き起こる悪戯心。

「ん、んんっ!!」

彩ちゃんの未成熟な体にキスを落とす。わざと音を立てながら、何度も何度も。彩ちゃんに意識させるように、全身に私の印をつけていく。

「えりか、さあん……」

たまらず、彩ちゃんがかしそくに体をゆする。いつまでたつても訪れない刺激に、物欲しそうに私を見つめている。いつも頼りになる慶介君が、こうして縋るような視線を私に送る。

いつだったか、慶介君が話していたギャップ萌えだとかいう話。私としては今一わからない感覚だったが、慶介君がおねだりする様を、乱れる様をもっと見たいと思ってしまうこの感情が、そうなのだろうか。

沸き起こる衝動に身を任せ、私はひたすらキスの雨を降らせる。

「ふあっ、あっあ、なんで、こんな……!!」

名前の通り、そのキャンバスに”彩り”を添えるように、今日新生したばかりの彩ちゃんの肌に赤い花を咲かせていく。性感帯を触られたわけでもないのに鋭敏に感覚を伝えてくる自分の体に対し、喘ぎながらも戸惑いの声をあげる彩ちゃん。自分の体に真っ赤な花が咲くたびに、腰を浮かせ、胸を強調するように胸を突き出す姿に、私は笑みが深まるばかり。

「やあっ、ああっ!!」

口は否定しようとも、体は素直だった。乳首の周囲で円を描くように指でなぞると、鈴の音のような声を上げる。聞くだけで耳がとろけてしまいそうなほど、甘露なそれを聞くのに夢中な私は、彩ちゃんの

その可愛らしい口からおねだりを聞くまで決して止まらないとばかりに、焦らすような指運びをやめなかった。

「えりかさん、さ、触ってください、お願いですからあ」

彩ちゃんは絶え間なく襲うもどかしさと切なさに、敢え無く白旗を上げる。

息も絶え絶えになりながらも、遂におねだりをし始めた彩ちゃんに、私は攻め手を止める。

「何処を触ってほしいの？」

「どこって、その、胸を……」

「胸なら一杯可愛がってあげてるわよ？　もしかして、もっと激しくってことかしら」

恥ずかしいのだろう、決定的な言葉を濁す彩ちゃんに、私はとぼけた声を上げて知らないふりをした。汗ばみ始めた肌にキスをし、ゆっくりと胸を揉みしだく。再び始まる焦らし地獄に、自分で気づいているのかいないのか、彩ちゃんは内またになって足をすり合わせていた。

「あ、ああっ」

言わないと始まらないと察したのだろう、羞恥で頬を真っ赤にする彩ちゃん、目を合わせる。潤んだ瞳からは自然と涙がこぼれ、色っぽい吐息のこぼれる口は、何かを言おうとぱくぱくと開いては閉じている。

「そ、その……」

「なあに？」

一瞬の躊躇いの後、止まらない私の焦らしに屈したように、ようやく口を開く。

「お、俺の……」

「今は、彩ちゃんでしょう？」

「わ、私の、乳首。触ってください、恵里佳さん」

仕草に、声に、表情に、きゅん、とまるで漫画のような音を立てる私の胸。あまりの可愛らしさにおかしくなったのかと思ってしまうほど、激しく高鳴る。

「よくできました。彩ちゃんが満足するまで、たっぷり可愛がってあげるわ」

辛抱たまらず、私はむしゃぶりつくように興奮で腫れあがった乳首を口に含んだ。

「~~~~~!!」

口で吸いながら、舌で転がす。たったそれだけの刺激で、彩ちゃんは顔を跳ね上げ全身をびくつかせた。表情は見えないが、あまりの快感に嬌声すら上げられず、足をばたつかせている様を見るに、満足してくれている事は明らかだった。

追い打ちをかけるようにもう片方も指で転がしてやり、時たま変化を持たせるように舌や指ですりつぶしてやると、更にその様子が加速する。

「いきゆのがとまりやないいつ、あたま、まつしろになりゆっ!! 啊啊あああ!!」

がくがくと体中を痙攣させながら叫ぶ様子は、その絶頂の壮絶さを物語っている。それでも手は止めず、常に快感を送り続ける。舌足らずに叫ぶ彩ちゃんをもっと見たい、もっと悦んでほしい、そんな思いが私を暴走させる。

攻め手を緩めない事からイキっぱなしの彩ちゃんを見て、私も興奮がピークに近づく。彩ちゃんの痴態でぬれ始めたあそこを、滑らかな彩ちゃんの足に擦り付け、快感を得始める。彩ちゃんの様子に合わせ、普段ではありえないそのはしたなさも加わり、私も呆気なく絶頂に達する。

「えりかさん、えりかしちゃんっ!!」

「(彩ちゃん、彩ちゃんっ……!!)」

体がつながっているわけではない。でも、心は通じ合っていた。絶頂の波が落ち着いていた彩ちゃんも私も、お互いに名前を呼びあいながら絶頂に向かっていき。

「~~~~~!!」

二人同時に果てるのだった。

セックスしたわけでもなく、どちらかと言えば自慰に近かったこの行為。なのに、私はいつもよりも強い充足感を感じていた。物足りないどころか癖になりそうなほど、私は満ち足りていた。

笑顔の私に対し、お相手の彩ちゃんこと慶介君はというと。

「死にたい……」

絶頂しっぱなしで乱れていた呼吸もようやく整い、我に返った途端、腕で目を覆ってこんなことをつぶやき始めた。

「なんだよえりかしやんって、俺は子供か。しかも、恵里佳さんにあんなおねだりみたいなマネまでして……もうやだ、恥ずかしすぎて死にたい。恥ずか死しそう……」

ぐすぐすと鼻をすすする音までしだし、次第に泣き言にまで発展し始める。

「ご、ごめんね慶介君？ 私、つい調子に乗っちゃって……」

いくら慶介君が認めたからといって、今回は私の方から半ば無理に迫ったに等しい。少しやりすぎたと思った私は、物騒なことを言いながらすすり泣きしている慶介君に謝る。

「いや、自分があまりにも情けなくて泣いてるだけです。名瀬さ

……じゃなくて、恵里佳さんは関係ないですよ」

「でもほら、死にたいだなんて……」

ぐすぐすとまだぐずっている慶介君は、ふるふると首を振って否定する。

「確かに、あんな女みたいな喘ぎ声上げて乳首だけでイクだなんて、恥ずかしすぎて穴があいたら入りたいくらいですけど。相手が恵里佳さんですから、恥ずかしいですけど気にならないです」

むしろ癖になりそうで怖い、だなんてことを呟く慶介君があまりにいじらしくて、寝っ転がっていた慶介君を持ち上げ、ぎゅ、と胸に掻き抱いた。泣いていた慶介君は、目を白黒させながら抗議の声を上げる。

「ぶあつ、恵里佳さん!？」

「男の時は頼りになってかっこいいのに、女の子になったらこんなに可愛いだなんて、慶介君はお得ね」

「人をお買い得物件みたいに言わないでください。恵里佳さんこそ、会社じゃクールな癖に実は可愛いもの好きだなんて、ギャップがありすぎて可愛いすぎるんですよ!!」

私の胸元で上目遣いに睨んでくる慶介君と、私の言い合いが始まる。これほど幸せな喧嘩がかってあっただろうか。自然と笑みが零れ、温かな気持ち胸に広がる。

「……俺以外の前で、見せちゃダメですよ。絶対、男が放っておきませんから」

「ふふ、じゃあ慶介君も、女の子の時は気を付けてね。あんなに可愛い慶介君見たら、それこそ皆放っておかないでしようから」

「気持ち悪いこと言わないでくださいよ……想像するだけで鳥肌が立ちそうです。女の姿で誰かと一緒に寝るのは、後にも先にも恵里佳さんだけですから」

「嬉しいことを言ってくれるわね。私も、誰かに慶介君を取られちゃうのは嫌だから、気を付けるわ」

そう言い、私の腰に手を回す慶介君。私も、安心させるようにもう一度抱きしめる。

流れる時間がゆっくりと感じられる、温かなひと時。慶介君の新たな一面も見れ、改めて、慶介君が彼氏で良かったと思う幸せな一日だった。

「この後はどうしましょうか。あそこも触ってみる？」

「えうっ!? こ、これ以上はちよつと……」

「癖になるって? 大丈夫よ、彩ちゃんのその姿を見るのは後にも先にも私だけなんだから。いずれやるんだから、いつやっても一緒よ」  
「やるのは既定路線なんですか!? ちよつとさっきのが尾を引いてて、これ以上は……あっ」

「ほら、可愛くない下着がこんなに濡れちゃってる。こんなになつてるのに、触ってあげなかったら逆に可哀そうじゃない?」

「う、うううう。恵里佳さんの、意地悪……」

「……そういう言い方が良くないのよ。逆に、一杯虐めなくなっちゃうじゃない」



「藪蛇っ!? その手つき止めてください、俺初めてなんですよ!? いわば処女ってことで、ちよつとは手加減を……あんっ!!」

このマンションは割と防音はしっかりしている方だが、翌日、隣の住人からさりげなく苦情を入れられるくらいには、燃え上がった私達だった。

「なあ慶介、最近お前、えらく女っぽくなったよな」

「は? 何気持ち悪い事言ってるんだお前」

とある日の休憩中、人事が一新されすっかり健全になった営業部で働く元同僚が、そんな戯言を言い出した。

「いやさ、ちよつと前までは、女の姿でもまるつきりお前だっただろ。仕草とかも含めて歩き方は男らしいし、言葉遣いこそ丁寧だったがほぼ営業トークそのままだし、丸つきりお前のマイナーチェンジ版というか、お前をよく知ってるやつが見たらわかるレベルでお前だったじゃん?」

「じゃん? って言われても、本人にはわからんわ……」

確かに、女らしい仕草など気にしたこともなかったが言われてみるとそうなのかもしれない。むしろ、心まで女にならないようにわざとしていた節があるので納得である。

「それが何だよ、気が付けばちよつとした振る舞いまでほぼ女になってる上に、いつの間にか女子の制服着てるし。やけに似合ってるこつちも気持ち悪いわ」

「うるせえよ。これは、名瀬部長の指示で仕方なくだな……」

恵里佳さんの指示で着始めた女子の制服。所謂OLが着ているような服なのだが、どうにも慣れない。何度着ても履きなれないスカートは勿論の事、仕事はスーツというイメージが頭から抜けないせいだと思うのだが、とにかく動きづらくて仕方ないのだ。

仕草云々に関しては、恵里佳さんから受けた教育も関係していると思う。客先に出ても違和感のないように、という建前の元、恵里佳さんから徹底的に教え込まれたそれは、よく観察されない限り、相手に指摘されないくらいには仕上がっている。最近女の姿で床を共に

する際、そんな仕草で喘がされることが多いので、恐らく趣味の荷重の方が多いいとは思うのだが、私生活で実際に助かっている場面も多いので、俺からは何も言えない。女性の快感が癖になっているのでは決していないぞ、絶対に!!

あ、ちなみに、初夜の翌週、無事に男の姿で致せました。恵里佳さんも俺も非常に満足です。

「お前、まさか俺を口説こうとはしてないよな……? もしくは、俺を狙ってるやつに仲介を頼まれたとか?」

「そんなわけないだろ、理由が気になったただだよ。今までそんなことなかったのに、急に変わったからな」

「理由ねえ……」

話しても良いが、名瀬さんから内緒よ! と念押しされているため、正直に全部話すわけにもいくまい。ただ、こいつとは長い付き合いだし、特別にヒントくらいはやっても良いだろう。

「とりあえず、休みの日に無意味に出歩いたりはもうしないかな」

俺の言葉に呆気にとられ、意味を理解した瞬間の表情の変貌は、思わず録画しておくんだったな、と後悔してしまう程面白かった。

「……は? まさかお前、見つけたのか!! マジで!?!」

「はっはっは、どうだろうなー」

「その言葉、絶対見つけただろお前!! とぼけるなよ、一緒に探した仲間だろ、詳しく教えろよ!!」

とぼける俺の肩を持って揺さぶる同僚。それでも答えない俺に業を煮やし始めたところで、俺は小さな体を生かしてするりとその拘束から抜け出す。

「あちよ、待って!! せめて写メだけでも……」

「良い女は、秘密が多いってね」

ぺろりと舌を出し、俺は休憩室を出た。

かつてはふざけ半分でも言えなかった、自分を半分でも女だと認める言葉。それが簡単に口に出せるようになる程、俺は変わった。それは悪い変化ではなく、今の俺を認め、良い方向に変えてくれた人がいたからである。

「……彩君」

「うわあつ、名瀬部長!?! い、いつの間にそこに」

「たまたま通りかかったの」

休憩室の外にいたのは、俺を待ち構えているように腕組みしている恵里佳さんである。眼鏡をかけ、髪を後ろで縛っている姿は、出来る女上司という言葉が意思をもって歩いているかのような似合い具合だが、その視線は俺を咎めるように鋭かった。

「私達が付き合ってる事、秘密って言ったわよね……?」

「あれじゃわかんないですよ。単に俺に彼女が出来たって言っただけですし、相手が名瀬部長だとは一言も——」

「秘密って、言ったわよね?」

「ば、ばれませんってきつと——」

「……」

いや、絶対あんなのじゃわかんないですって。温度の低いじつとりとした視線に、開こうとした俺の口も自然と閉じる。

「すみません……」

「今日は”残業”ね。みっちり教育してあげるから、楽しみにしてなさい」

残業をする、つまりは今夜一緒に過ごそうという隠語である。人にはこうして怒る割に、ちよつと頭を捻れば思いつくような単純明快な隠語を考えるあたり抜けているのだが、それがまた可愛いのだ。

ほら、口調こそ怒っている風だが、その口元は笑みが隠し切れていない。そんな可愛い姿に、俺もまた笑みを浮かべる。

「ご指導のほどよろしくお願いしますね、俺恵の自慢里の上司さん」

「私の彼氏が可愛すぎる……」

俺の万感の言葉に頭を抱える恵里佳さんだったが、恵里佳さんよりも身長の高い今の姿では、ニヤついた笑みが丸見えである。そんな姿を見ると、俺まで笑顔になる。

しばらく悶えていた恵里佳さんだったが、突然キリリとしたいいつもの表情に戻ると。

「今夜はたっぷり可愛がってあげるわ、私の大切な部下ちゃん」

すっかり女の俺を責める喜びに目覚めた恵里佳さんは、嬉々としてそう呟くのだった。ぞくぞくと背筋を奔る快感に操られるように、俺は首肯する。最近、本当に癖になつてきて、自分でも弄るようになってきた。ダメだとは思いつつも、やめられない。でも、相手が恵里佳さんであるなら、と自分から受け入れつつある。

盛大に遠回りしながらも、ようやく築き上げた恵里佳さんとの関係は、これからも色々と変化し続けるだろう。変な体質を抱えて自殺すら考えた俺が、恵里佳さんのお蔭で生き永らえ。ただの上司赤と部下他という関係から、上司人と部下同になれたように。どのように変化するかは俺たち自身にも予測できない。それでも、俺たちの関係はこれからも続いていくだろう。

「俺、幸せです。恵里佳さん」

「私もよ、彩ちゃん」

ここが会社だということも忘れ、キスを交わす俺達の行く末は、希望に満ちていた。

愛しても愛されたりない彼女を持つ彼氏が、彼女の彼女になるまで

## 5 (前編)

ギシギシとベッドの骨組みが軋む音が耳に障る。簡素な内装の部屋の中には、壁の傍に比較的大きなベッドが設置されているのみで、他に碌な家具など置かれていなかった。シンプルな内装というよりは、殺風景と称するのが正しい表現だろう。ベッド以外にびた一文お金は使っていないのだから、それも当然だ。ここは生活を送る場所ではなく、ただただ、彼女と退廃的な行為に浸る為だけにレンタルしている部屋なのだから。

「ああっ!! 良い、奥までえっぐいのが、キテるう!!」

剛直を彼女の中にえぐり込む度、賛辞の声交じりの喘ぎ声上がる。整った顔(かんばせ)を歓喜の表情に染め上げ、セミロングの金髪を振り乱し、全身を上気させる彼女を見る度、俺はこみ上げてくる射精欲を必死に我慢していた。攻め立てている剛槍を、きゆうきゆうと締め付ける彼女の名器も、待望の瞬間を今か今かと期待していることを鋭敏に伝えてくる。

「アキ、もつと、もつと激しくう!!」

快感の波と戦っている俺に喋る余裕など無く、その速度を上げ返答代わりにすると、更に攻め手を強めた。

空を泳いでいた彼女の両手が、何かを求めるように俺に向かって伸びてくる。察した俺は、ベッドに寝ていた状態で突かれていた彼女を両手で引き起こすと、胡坐を組んだ上に抱え込むような態勢にする、思い切り突き上げた。

「ほおっ!! んはあつ、おおっ!!」

「き、きっつう……!!」

俺が突き上げる度に気持ち良さそうな音を奏でている風咲は、全身を使って俺を締め付けた。俺のペニスを奉仕を続ける膣壁に、俺の背中に回された手が離さないとばかりに肌に食い込み、わずかに痛みを

与えてくる。俺の顔付近に密着した豊満な胸からは、柔らかな感触と女のフェロモン全開の発情した女の匂いを感じ、俺の中の雄を強烈に刺激する。絶頂間近な風咲の感じている表情も加わり、そろそろ俺も辛抱溜まらず、フィニッシュに向けてピストンを一層早めた。

「このまま出すぞ、風咲っ」

「良いよ、そのまま出して、アキツ……!!」

とろんと快楽で揺蕩っている表情を俺に晒しながら、風咲は肯定する。俺ももう我慢せず、抑え込んできた衝動を躊躇わず開放する。

ごちゅごちゅと激しい抽送音が鳴り、股間からは攪拌され泡立った液体がシートにじわじわとしみ込んでいく。そんな些末事に構うことなく、軽い風咲の体を少し持ち上げると、20cmに迫る男性器を全て風咲の蜜壺に飲み込ませるように、勢いよく突き込み、絶頂を塞ぎ止めていた栓を手放した。

「出すぞ風咲……!!」

「きて、きてえアキツ!!」

積もり積もった情欲を叩き付けんばかりに、風咲の中へ欲望の塊を吐き出し続ける。貯めに貯めたザーメンが男性器の中を駆け上る解放感と、その精を風咲に一方的に叩きつけているという、自分勝手な達成感と征服感は、最高の心地である。

「あつ、はああああ……アキのが一杯、奥に来てるう……」

風咲も満足したようで、いった余韻を楽しみつつ満面の笑みを浮かべていた。

風咲が腰を上げると、ぬぼり、と淫らな音を立てながら、僅かに硬さを失った俺の男性器が抜ける。

「あー、スツキリしたあ。んふふ、いやーいいね、最高だよそのチンポ」「はいはい、それは、何よりで……」

風咲がどつかと背中からベッドに倒れこむと、入れっぱなしだったあそこからぐちゅりと音がなる。いやらしい穴からどろりと垂れる白濁液は、風咲汗だくの体とあわさり、そこはかたなくエロさを感じさせる。恥じらいなどどこかに置いてきたように、明け透けにがばりと開いた股間は、普通の男ならもう一回戦、と催してきそうなもの

だったが、俺の息子はピクリともしなかった。

「そりゃね、5回もすれば流石に満足してもらわないと困るよ。それにお前、こいつにいくらかけたと思ってるのさ？」

呼吸を整えながら軽く左手を振ると、半透明なウインドウが俺の視界の中に表示される。それを不思議に思うことなく、リストをドラッグし持ち物の一覧から炭酸飲料を選ぶと、手元に缶の飲み物が2本出現する。

「ほい」

「あんがと」

ベッドで心地よい倦怠感に浸っている風咲に向かって、じとつと湿った視線と共に放り投げる。

俺の股間に収まっているこのデカチンは、俺の彼女であり、性欲魔人の風咲の要望に応え、大枚叩いて買い替えたパーツアバターなのだから、これで満足してもらわないと困るのである。

2000年代初頭、隕石の墜落に端を発した環境汚染により、地球の生態系は崩壊した。地球に住む生物は例外なく影響を受け、多くの動植物が死滅し、生き残ったものも環境適応により否応なく変化を余儀なくされ、人間も多分に漏れずその被害を受けた。見た目こそ以前と同じものの、生殖機能など人体に色々な影響が出た結果、屋外で長時間の活動ができなくなった人類は、生活圏をバーチャルリアリティ、要するにネットの世界へと移すこととなった。そう、今俺と風咲が過ごしている部屋も、お互いが動かしているこの体も、VR世界上で再現された仮想の存在なのである。

仕事も娯楽も、果ては現実世界の体の治療まで含め、今や人類の営みは、全てこのVR空間の中で行われている。仕事どころか、行政サービスや各種手続きも殆どVR空間上で行える上、VR空間に没入する為の装置には生命維持装置が付属しているため、よっぽどの理由が無い限り一年中ログインしっぱなしというわけだ。

この全長20cm超えのあそこも、VR空間だからこそでできる整形

——アバター変更を利用した結果だ。現実の肉体ならいざ知らず、VR空間ならばボタン1つでお手軽に購入、適用ができる優れモノだ。まあその分、お金はかかるけどな。

この前18cmに変えたばかりだと言うのに、この性欲に取りつかれた女は、もつと刺激が欲しいの!! などと言って、強引に新しいのを買わせたのである。そのお値段、なんとびつくり20万円也。ほぼ俺の給料一か月分じゃねえか。取り外しが可能なのか、人体にくっついていてのかだけでこれだけお値段が変わるとは、理不尽にもほどがある。まあ、これも惚れた弱みだから仕方ないと諦めてはいるが……「ふはあー!! いい汗掻いたなあ!!」

「そりゃ何よりだが、セックスをさわやかに汗をかくスポーツか何かと勘違いしてるんじゃないだろうな……?」

「流石にそれは無いよお。相手が大好きなアキ相手だから良いんだってー」

プルタブを開け、男らしくぐびつと缶の中身を煽った風咲は、白い喉を鳴らしながら俺が渡した飲み物を飲み込んでいた。

荒れない程度に手入れされた肌に、痩せすぎず肥えすぎず、程よく肉付いた肉感的な身体に、豊満な胸。男の本能を撥る、抱かれ心地を重視したと言われてもおかしくない風咲の身体は、金さえあれば手軽にワンボタンで出来る整形（アバター交換）のせいで、今時珍しくはない容貌である。

だが、風咲のそれは、パーツ交換無しの天然ものだというから驚きだ。その美貌を遺憾なく発揮し、毎夜毎夜俺の都合は関係無しに種を絞ってくる風咲は、正に天然エロボディに宿るべくして宿った性欲女といったところか。毎晩毎晩エッチを要求してくる風咲を相手にするのは、正直体力的に厳しいものがあるが、これも惚れた弱みである。今日も俺は、黙って精力剤を飲む日々を送っている。

そんな自慢のボディの持ち主である風咲はというと、視線を下に落とし何故か神妙な顔をしていた。どうにも最近見たばかりの、具体的に言えばつい先日アバターを再変更する羽目になった時の表情に類似した雰囲気風咲に、俺は嫌な予感が拭えなかった。



「うーん……」

ねえ、とつても失礼な事言つても良い？」

「何だよ」

俺が理由を尋ねる前に口を開いた風咲は、きりりと引き締まった表情で俺を見つめる。

「やつてる最中はいいんだけどさ、でかすぎて後で痛いわ。やっぱり戻そ？」

「流石に怒るぞ風咲ア!!」

「だつてえ!!」

風咲から飛び出した暴言に思わず襲い掛かるも、気だるげな様子から一転、俊敏な動きでベッドから飛び降りた風咲は、怒り狂う俺から距離をとる。

「風咲が言ったから買ったんだろ!! いくらかかったと思つてんだよ、俺のあそこはおもちやじゃないんだぞ!!」

「注文通りだよ、とつても気持ちよかったよ!! でも痛いんだよ、後でじんじんしてくるんだよお!! お仕事してる時に響いたら事でしょ!?!」

「片腹痛いわ、俺の懐のほうが大ダメージだつての!! これ1つで俺の安月給一か月分だぞ?! あのワンタッチで何日分の生活費になると思つてやがる!!」

「く、クーリングオフ!! クーリングオフすれば良いじゃない!! ね、ね!!」

「アバターにクーリングオフもクソもあるかあああああ!!」

ぎゃーすか騒ぎながら、逃げ回る風咲を追いかけて部屋を駆け回る。

風咲とは長い付き合いになるが、しょっちゅうこんな騒ぎを起こしている為、いい加減慣れたものである。人間の3大欲求の内、性欲に全振りしたような色ボケ女ではあるが、かといって浮気するような尻軽女ではないし、決して悪い女じゃないのだ。明け透けな所も含めて好きになったので諦めている所もあるものの、今回ばかりはお仕置きくらいしないと気が済まない。おねだりされて仕方なくだとは言え、

セックス用にアバター変更するために、こっそり貯めている結婚用の資金を下ろしている俺の心境にもなつてほしい。

普段傍若無人な風咲も、今回ばかりは自身の非を悟っているのか、だからだと冷や汗を流し、俺から必死に逃げ回っていた。

「どうしてわかつてくれないかなあ、でかい肉棒（ロマンチック）を求めめる乙女心と、その反面後が怖いなつていう相反する私の葛藤が!!」  
「……お前の言うロマンチックとやら、男性器に類する単語にルビ振ってあるだろ?」

「!? ど、どうしてそれを……!?」

「一体何年の付き合いだと思つてやがる、お前の考えなんてお見通しだ、この淫乱女!!」

「ぐ、ぐぬぬぬ……」

くつそお、アキも女の子になればわかるよ!! もつと激しくセックス致したいなあ、もっとあそこにポリウム欲しいなあ、つてパイプを求めちゃう女心が!!」

エロ以外の事には頭が回らない風咲に俺を論破出来るだけのトークが出来る訳もなく、最終的に目をぐるぐるさせながらよくわからない事を喋り始めるのであった。またこいつの妄想が始まったかと、俺は頭の中で嘆息しながらも、風咲の為を思い叱りつける。いつもの事といえばそれでおしまいであるが、笑つて許してやれる段階は既に過ぎ去っているのだ。

……今思えば、風咲のこの戯言（台詞）を止めていればこの後俺に降り注ぐ受難は訪れなかつたのであろうが、怒り心頭の俺にわかるわけもなく。

「そうだよ、アキも女の子になれば良いんだ……!! 身長は131cm位で、ちつぱいで、顔も小つちやくて、そのくせ色んなところが敏感な、ちつちや可愛いエロロリ娘になつちやえば良いんだあ!!」

「言い訳かと思つたら、欲望塗れの自分の妄想じゃねえか!! しかもえらく具体的だなおい!!」

「勿論、私の趣味さ!!」

「悪びれもせず言い切るんじゃないやねえ、お前、今自分が怒られてるつてわ

かって言ってるの!？」

ベッドを挟んで睨み合う俺は、堪えきれなくなったため息を一つ。やけくそになって叫んでいるだけだとは理解しつつも、中々謝ろうとしない凧咲に呆れている内心を隠しつつ、目を瞑ってじつと言ひ聞かせるように語りかける。

将来をともにしたいたいと思う凧咲が相手であればこそ、こうして説教するのである。最悪収入は俺が頑張るとして、凧咲は遊んで暮らすまでは許すにしても、最初から享樂的に生きるのを許すわけにはいかないのだ。男のプライドがあるからな。

「いいか凧咲、俺達は金持ちでも何でもない一般庶民だ。そんな俺達にとつて、20万が大金なことくらいはわかるだろ？」

「それは、わかるけどお……」

ブン……となんだか聞き覚えのある電子音が聞こえた気もするが、気のせいだろうと説教を続ける。

「……うん？ あれえ？」

「凧咲、お前は昔からそうだ。目の前のことばかりで、後先考えず行動して……」

「ね、ねえアキ？ ちょよ、ちょつといいかな？」

「ほら、そうやって話を逸らそうとするだろ。そういう可愛いところも好きだが、少しはお前も自制というものをだな……」

今度はピー……と高い電子音が耳に響いたが、頭に血が上っている俺は、凧咲を叱るのが先だと言葉を紡ごうとするが、凧咲は焦り交じりに俺の言葉を遮った。

「いやあ、今は私より、アキの方が可愛いというかあ……」  
「はあ？」

平均くらいの背体重で、如何にも普通の男の顔しかしてない俺に何を言ってるんだ。凧咲の意味不明な言葉に呆れ目を開けてみると、凧咲はもじもじとふともをすり合わせ、両手の人差し指をつんつんと突き合わせつつ、熱い視線をこちらに送っていた。

何だ？ こいつまさか、俺が無意識に勃起してしまって、それを見たこのビッチが勝手に欲情でもし始めたんじゃないだろうな？ 発

情期の犬でもそんな盛ってないぞと思いつつも、青筋を浮かべながら  
凧咲の視線を辿って、自身の下半身を見る。

すると、そこには不思議な光景が広がっていた。

雄々しくそそり立っているはずの、非常にお高くついた俺の男の象  
徴は存在しておらず。俺の眼下には、ひたすらになだらかな草原が広  
がっていたのだ。

「……は？」

俺のあれが、無い。大枚叩いてモデルチェンジした筈の息子が、元  
に戻っているどころか、存在自体が抹消されているのだ。あまりに意  
味不明で、理解の及ばない状況を整理するためか、反射的に手を伸ば  
してみるが、視界に入ってきた決め細やかで真っ白な肌の小さな手  
に、思わず固まる。

恐る恐る目の前に手を持ち上げてみる。俺の指とは似ても似つか  
ない、子供のように小さいちんまりとした手先。

「……はあ？」

ふと視線を上げると——熱っぽい表情を浮かべている凧咲は一旦  
置いておくとして——、強烈な違和感を感じた。何だか、視線が低い。  
頭2つ分は身長差がある筈の凧咲を、今の俺は見上げているのだ。

心ここに在らずといった様子で、距離をとるために挟んでいたベッ  
ドを回って近づいてきた凧咲は、自分の手持ちから手鏡を取り出し、  
俺の全身が写るように翳す。俺はまさかと思いつつも、少しずつ近づ  
いて恐る恐る覗き込むと。そこには、凧咲ご指名した通りの、身長は  
130cmくらいで、胸は小さくて、顔は小さい、可愛らしいロリッ  
子が写りこんでいた。

「……はあ!？」

俺が右手を上げれば向こうも上げるし、ぴよんと飛んでみるとあち  
らも飛ぶ。状況が飲み込めず引くつく口元も、俺とそっくりそのまま  
同じ動きをするこのロリっ子。ここまで状況証拠が揃っていれば間  
違いない、このロリっ子は今、間違いなく俺自身だ。

「な、なんじゃこりゃあ!？」

「よくわかんないけど、アバター書き換えるリング出てたから、アバ

ター書き換えたんだと思うなあ……」

「ええ!?…いくらなんでも、男に女アバター適用は無いだろ!? しかも、風咲の言ったまんまの格好なんて、どうかしてるだろ!!」

さつきはスルーしてしまったが、聞き覚えのある電子音は、アバター変更時の書き換え音だったのだ。通りで聞き覚えがあるはずである。つい最近聞いたばかりなのだから。

何やってるんだ運営は!! と叫んで、俺は頭を抱えた。

さらさらの髪の毛の感触や、きめ細やかな肌の感触はもとより、さつき風咲が口走っていたまんまの可愛らしい容姿の女の子から、野太い男の声が出ているのは違和感しかないが、今はそれどころじゃない。

何をどうすれば、俺が目を瞑って風咲に説教していた十秒足らずの時間で、俺のアバターが男から女になるんだ。しかも、風咲が血迷ったように叫んでいた容姿通りの姿に変わるなんて、理解が追い付かない。

今俺たちがいるVR空間は、かつてのようにエンターテイメントの一環としての場所ではなく、第二の現実世界として構成されている。だからこそ、VR世界で使用する第二の体であるアバターはDNAの配列を元に現実世界での体を再現したものとなっており、正しい意味でもう一つの自分の体といっても過言ではないのだ。だからこそ、現実世界で言う性転換手術等と同じ要領で異性のアバターを適用させるというのは、面白半分や苛め等で強制されないよう法律で厳しく制限されており、性同一障害が認められた人が相手であろうとそう簡単に許諾されない程、適用条件が厳格に定められているのだ。しかも、犯罪に悪用されないよう、アカウントの性別の項目は個人情報情報の保護と共に厳重なロックがかかっている。万が一バグが起きたところで、そう簡単に変わり得るものではないのである。仮に開発者がハッキングを試みたとしても出来るかどうかともわからない、そんなレベルのセキュリティに守られている筈だった。

それを知っているからこそ、こうしてあっさり女になってしまっている事に混乱しているのだ。

「何がどうなってるんだ。まさか、テロにでも巻き込まれたのか……？」

指を握ったり開いたり、俺の思いのままに動くロリ娘に、困惑を隠せない。現実感が無いとは正にこの事。いや、正確には現実ではないのだが、実際の犯罪ですら聞いたことのない事態に、理解が追い付かない。

「私の、理想の女の子……もしかして……」

まるで意味が分からん、早く運営に通報すべきか……などと頭を回し唸っている俺に対し、ぶつぶつと何かを呟いている風咲。一杯一杯な俺は、怪しげな笑みを浮かべる風咲の様子に気を回す余裕なぞなく。

「声は、舌つたらずな子供っぽい甲高い声で……」

「えうん？」

喉元にアバター変更のリングが通ったと思ったたら、俺の声が見た目相応に甲高くなり。

「もうちよつと、髪はふわふわの長めで……」

「お、おお？」

今度は鏡に映っているロリ娘の髪が長くなって。

「眼鏡を、掛けてる」

「えあ？」

ポン、と鼻の頭にのっかるのは可愛らしいデザインの赤縁の眼鏡。10秒もかからず、あっという間に風咲の思い通りの姿へ大変身だ。

デバッグ用のプログラムでも走っているのか、風咲の言う通りに変貌する自身の姿を見て呆然とする俺を尻目に、はああ!! とあらぬ声を上げながら胸を抑える風咲。

「はああああん!! やっぱり!! アキのアバター権限は今、私の中にある……!! 完ツ璧だわ、私の理想の女の子が今、私の目の前に顕現した……!!」

「何をした、この淫乱娘!」

喜びのあまり、涙を流しながらこちらに熱い視線を送っている不審者に詰め寄り、肩をつかんで揺するも、身長差がある上にこつちの方

が低いせいで、絵面は仲の良いお姉さんと戯れている小さな女の子であつた。中身はそれとは程遠いけどな。

「私の言う通りにアキのAvatar書き換わるんなら、微調整もいけるかなって……ほら、アキも折角なら可愛い方が良いでしょう？」

「否定はせんが、ロリは無いだろロリは!! せめて胸のどかいグラマーな女性にしろよ!! っていうか、変更できるなら元に戻せ!!」

「いやあ、なんだか惜しくって……」

いつの時代も、胸の大きな女性を自分のモノにするのは、男のあこがれである。だから、もしそれが自分のモノになれば、遠慮なしに揉んでみたいと思ってしまうのは抗えない男の性なのである。

……まあ、自分のモノ、という言葉のニュアンスが些か違う気がするが、そこは気にしてはならない。

グラマーって死語じゃん、と冷静に突っ込まれるも、理解の及ばない事態の連続で沸騰している思考回路がまともに働くわけがなく。風咲の胸元を掴みがくがくと頭を揺さぶり抗議するが、頭がお花畑状態の風咲には通じず。

風咲は変わり果てた俺を見て、にへらとだらしない笑みを浮かべ、のらりくらりと俺の追及をかわしている。

「惜しくってえ、じゃない!! くっそ、こうなったらさっさと運営に通報して——」

「ま、まったアー!!」

「オッッフ!!」

埒が明かない。そう思った俺が、風咲を放ってコンソールを立ち上げ運営に連絡を取ろうとすると、慌てた風咲から腰にタツクルを食らい、視界がぐるりと回る。

ぼふ、と背中を打つベッドの柔らかな気持ちのいい感触と、情事後で濡れた気持ちの悪い感触。絢交ぜになった、混乱しきつた今の心境と全く同じ感触。どうやら、通報を阻止するためにベッドに押し倒されたようだ。

「もったいないよロリっ子!! どうせ通報したら元に戻っちゃうんだよ!?! 折角なら楽しまないと損だと思わない!?! ね、ね!?!」

「ひ、必死すぎて怖いんだけど……」

ベッドに押し倒された俺が天井を背に見上げるのは、相変わらず色欲に満ちた色気全開の風咲の表情。男ならば多少でも劣情がこみ上げそうなものだが、生憎、今の俺は小さな女の子。今の俺には、風咲が捕食者にしか見えなかった。

今の貧弱な体では、女性としては小さな部類に入る風咲の体すら押しつけることは出来まい。しかも、ウインドウを操作されないよう両手首を押さえつけられているため、運営に通報も出来やしない。

……あれ？ 俺、これ詰んでない？

今強引に迫られれば、抵抗すら出来ないという事実を今更認識し、恐怖を覚える俺。

俺の目に浮かんだ怯えに気づいたのかどうか。風咲はお構いなしに、説得という名のもと、自身の欲望を垂れ流す。

「アキも興味あるでしょ!? おっぱい触られたり、クリ弄られて、びくびくっつてなっちゃう、女の子の快感!!」

「いや、無いといえば、嘘になるけど……」

ぎらついた目。その矛先が俺であることはいつもと変わっていないのに、体を貪られる側に回っただけでこんなにも感じる圧が違う。唇を湿らせるように動く舌先は、ちろちろと俺を挑発するように空を切っている。

興味が無いわけではない。実際、これで相手が風咲で無ければ安心して身を任せたに違いなかった。そう、よりにもよって、相手がこの色情狂女でなければ。

っていうか、風咲って女もイケる口なの？ しかもこんなロリポディを？ 長いこと連れ添ってきた俺でも初耳なんだけども？

「でしょ!?! もう天にも昇る心地で、アキもハマっちゃうこと間違いなしなんだから!! 男のまま女イキ出来るなんて世界初だよ!! 今だけだよ!! 今のうちにやっとなないと損だよ!! ほら、今なら私の長年のオナテク駆使して天国見せて上げるから!!」

「いや、それなら自分でオナるからお前は別に——」

「いやいやいやいや!! そんな遠慮しなくても!! ここは女の先輩に



任せてよ、最初から最後まで懇切丁寧に、優し〜く手解きしてあげるからさ……!!」

優しくという割には力強く断言し、目を爛々と輝かせ、涎を垂れ流さんばかりに視線で俺の肢体を嘗め回しているこの女を信用するのは、俺の中身が本当に口り娘だった場合だけだ。いや、ひよつとすると誰も騙されないかもしれないな。純真無垢な子供だからこそ、風咲の言葉に含まれた欲望を見抜くだろうし。

いくら将来を共にしたいと思った風咲が相手でも、こと性的な事になると途端に信頼度が下がるのである。

普通なら頭の弱い風咲を言いくるめて終わりにするところだが、頭がお花畑どころか噴火寸前の火山のような状態で熱弁を振るう風咲に、通常の論理が通じるわけがなかった。いくらそれっぽく話していても、頭の中は自分の理想の女の子を美味しく頂くことをしか考えていないに違いない。

ほら、もう頭の中で凌辱が始まってるぞ、きつと。口から涎を垂らすなんてまだ優しい、マウンティングを取られている俺のお腹に密着している風咲のあそこは、妄想だけで興奮しきりのようで、とろとろと流れ出る透明な液体でぶにぶにのお腹をコーティングしていた。自分で言うのも悲しいが、俺の手触りの良い肌を楽しむように、風咲はぐりぐりと腰を擦り付け感触を楽しんでいる。

非常にまずい。このままでは、まず間違いなく食後のデザートにされる。どうにかしてこのバグを通報しないと。

段々と加速していく風咲の口上と共に、血走り始める眼に危機感が限界に達した時、ピンク色に染まりかけた脳細胞に名案が閃く。

風咲の油断を誘うように、さも嬉しそうに微笑む。

「そうかそうか、それは有難いな」

「でしょ!?! 私、アキへの優しさで満ち溢れてるでしょ!?!」

「そうだな、とても嬉しいよ」

「えへへ……大好きなアキの為だもん、私も一肌脱いじゃうよ!!」

ちよつと下手に出てみると、御馳走にありつけると確信したのか、嬉しそうに頬を緩ませる風咲。じゃあ早速頂きます、とばかりにペろ

りと舌を出した風咲の不意をつくのように、ぽつりと呟いてみる。

「……して、その心は？」

「合法ロリ娘を心行くまで堪能したい」

キリリとした表情で、下心満載の本音がぽろり。

「やっぱりじゃねえか!! 俺は抜けさせてもらおう!!」

「いや、あ、あ、あ、あ、あ、あ、待っでええええ!!」

本音が漏れ力が緩んだ隙について拘束から逃れ、押し掛かっていた風咲を突き飛ばすと、ベッドに俯せになりウインドウを開くと、運営への通報画面を立ち上げる。俺史上最速のタイムで操作し、何とか後は最後のボタンを押すだけの段階までもっていったが、そうはさせまいとする風咲に両足に抱きつかれ妨害された。ラグビー選手もかくや、というレベルの高速タックルだった。おかげで、押しかけた指が衝撃であらぬ方向につき抜ける。

「ごあつ、ぐ、離せ、このけだものツ!!」

「は、離すもんか……!! 私のまいすいーとはにーを、私が美味しく頂いた上にいっぱいお代わりして、おなか一杯になるまで、この手は離さないぞっ……!!」

「外見はともかく、中身が男のハニーがいてたまるか!? お前本当に見境無しだな!」

「私の理想のロリ娘が具現化してるってだけでどうかかなりそうなのに、中身アキだなんてそんなの美味しすぎるよっ!! 鴨が鍋一式しよって現れて、下味付けて盛り付けた上に、後は火をつけるだけですさあどうぞ、って言ってるようなもんじゃんか!! ここで逃げれば、女が廃るってもんよ!!」

「それは、普通、男のセリフ、だろうがっ!!」

げしげしと足であちこち蹴りつけて何とか解放されようとするものの、俺の腰に回った風咲の手は万力のようにビクともせず、むしろ強まるばかり。ふと気になり、首を回して抱き着く風咲の表情をうかがってみると、蹴られて怯むどころか、むしろ抱きついた俺の腰に頬ずりしてうっとりとした表情を浮かべている。

この女が性欲に忠実な奴なのは知っていたつもりだったが、こんな

に変態だったっけ……？

頼りない俺の全身にねつとりと絡む風咲の視線に、寒気がこみ上げる。思わず緩んでしまった攻撃の手を合間にするするとベッド上を駆け上った風咲は、振り返っている俺に見せつけるように舌をべろりと出すと、背筋を舐め上げた。

「は、ああああっ……」

ゾクゾクとした寒気のような感覚が、背筋から脳へと伝達される。だが、先ほどの恐怖から来るものではなく、こそばゆい様な僅かな快感交じりのそれに、俺は情けない声をあげ、全身から力が抜ける。意志とは裏腹に、抵抗感が削がれていく。

「あは、可愛い声」

喜色交じりの声に、風咲の口角が吊り上がる。

男の癖になんて声をあげてるんだ俺は、戸惑った俺がそう口にする間も与えないように、風咲は追撃の手を緩めない。

積もったばかりの新雪を踏み固めていくように、背骨に沿って背を北上していく風咲の艶めかしい舌遣い、さわさわと脇腹を擦る軽やかな指遣い。

溜まらず漏れてしまう声に、風咲のボルテージは上がっていくばかり。り。

「きゅふうっ!? あつくう、や、やめえっ……」

「TSした娘は感度抜群だって、昔から相場が決まってるんだよ？ほら、背筋舐められただけなのに、ぞくぞくーって気持ちよくて仕方ないでしょ？」

生娘の様な声を上げてしまう自分への恥ずかしさと、風咲の思惑通りの反応をしてしまう自分への情けなさで頭がどうかなくなってしまっそうだった。

態度では返事をしたも同然だったが、意地でも肯定してやるもんかと、ぽふりと顔を枕に埋める。

息苦しきなんて構うことなく、勝手に漏れ出る声を枕で押し殺す。

「そんな頑張って我慢なんてしなくて良いんだよ？ アキは今可愛いロリっ子なんだから、ちよつとした刺激に敏感に反応しちゃうのも当

然だよ。女の子の先輩である私が言うんだから間違いないって」  
「んんんっ!?!」

耳たぶを唇ではみはみとされながらの囁き。風咲の声が鼓膜を擦る度、俺の意思とは裏腹に全身が勝手に動く。きゅっと両手を握りしめ、堪えようとする。だがやはり、女としての経験値は向こうのほうが上。

涎を絡めた舌を耳の中に差し込まれ、ぐるりと耳の穴を一周。聴覚が風咲にジャックされたかのように、水音が俺の頭の中に満ちる。いつものセックスの最中鳴り響く淫靡な音に似たそれに、頭がふわっと浮く感覚。

俺が硬直した瞬間、すかさず風咲はシートと俺の体の間にするりと手を差し込むと、ロリ娘らしい薄い胸の頂点に座している突起物を、きゅ、と摘まむ。

「~~~~!!」

胸から走る、今まで感じたことのない類の想像を絶する快感。触られたくらいに軽い刺激なのに、恐ろしいくらい強い快感。枕に顔を埋めて居なければ、あられのない声を漏らしていたに違いなかった。(なんだこれ……!?! 風咲の奴、いつもこんな快感味わってんのか……!?!)

指で挟み、ぐりぐりと根元から潰すように刺激されると、快感の波は更に高くなる。

普段味わっている男の快樂とはまた違う、じわりじわりと染み出すような快樂に、時折鋭い閃光が混じる。

「きゅ、つふうう……!!」

「あああ、その押し殺した声も良いけど、今のアキ、絶対可愛い顔してるよ……見たいなあ、アキがイクの必死に我慢してるメス顔見たいなあ。普段かつこよくて頼りがいのあるアキが、可愛くおねだりしてる姿見たいなあ」

「ん、んんん……!!」

突っ伏したまま頭を左右に振り、必死に否定する。少しでも顔を上げたら嬌声が出てしまいそうで、これが最大限の抵抗だった。

風咲との行為中、プレイの一環として風咲の胸に舌を這わせることはあれど、あくまで雰囲気作りのようなもの。実際に風咲も、そこまで気持ち良い訳じゃないとぶっちゃけていた。なのに、いざ俺がされる側になってみるとこの様である。

敏感なんてレベルじゃない、擦るような手触りだけで心臓が跳ねる。こりこりと刺激された日には真つ暗な視界に火花が飛び、ぎゅつと目を瞑り、ベッドのシーンを握りしめ耐えることしかできない。

任せると豪語するだけあり、女体の扱いは俺よりも何枚も上手の様だった。更に質の悪いことに、風咲は女を手籠めにするのも上手いよ

うで。  
「アキったら強情なんだからあ。ほら、顔枕に埋めたまま、深呼吸してみ？ さつきまで私が寝つ転がってたから、濃厚な私の匂いが染みついてるでしょ」

経験したことの無い刺激に抵抗するのに必死で、つい反射的に、風咲に言われた通り肺一杯に空気を取り込む。あ、と後悔するも後の祭り。嗅覚に満ちるのは、発情した愛した女の香りだった。

脳の冷静な部分が、どろりとした何かが、股の奥底から吐き出されたのをしっかりと認識してしまう。

「えへへ、ほんとに女同士ならともかく、アキなら感じてくれるでしょ？ 大好きな人に可愛がってもらって、発情しちゃった女の匂い。きゅんきゅんお腹に響くでしょ？」

「ふーっ……ふーっ……」

ついさつきまで当たり前に吸い込んでいた空気が、途端にピンクに染まった気がする。

部屋に充満しているのは事後特有の性臭だが、ベッドに染み付いているのは甘酸っぱい、発情した女が発するフェロモンだ。風咲が残した濃密な性の香りは、凡そ性行為を経験しているとは思えない未熟な体を、あつという間にアイドリング状態へと移行させた。

体の内側から堪えようのない熱が発せられる。沸き起こる性行為への渴望。いつもなら何かにぶつけて解消しているがを、この頼りない体はその発散する術がない。代わりに、足りない何かを埋め合わせ

るように必死に求めている。

一度意識してしまうともう駄目だった。見て見ぬ振りなどでできず、余計にその感情を募らせていくばかり。

「我慢は体に悪いし、正直になった方が良いよお？」

「くっ……きゅふうっ!! ふーっ、ふうう、ふううー……!!」

風咲より高いソプラノ声が、獣のような唸りを上げる。

ベッドから漂う風咲の気配に加え、俯せになった俺に風咲が押し掛かっているせいで、背中に密着してる肌から伝わる、風咲の鼓動、熱、期待感。さながら、全身を風咲で包まれている錯覚さえした。

そこに絶え間なく襲い来る胸から走る甘い電流が合わさり、必死にキープしていた理性が融け始める。

風咲という存在が、俺を捕食しようとしている恐怖の対象から、元の愛しい恋人へと徐々にシフトしていく。騙されている、誤魔化されようとしている、そう頭ではわかっているのに、体が言うことを聞かない。

「ほらあ、アキの出来立てのあそこも、ぐちよぐちよってエツチな音立てちゃってるよ。早く私に食べてほしいなーって、私に泣いて頼んでるよ?」

「くふううっ……!!」

風咲がぐりぐりと腰を押し付けると、つられて俺の下半身も動き、ベッドに股間を擦り付けるように右へ左へと誘導される。耳を打つぐちゅぐちゅ鳴り響く水音は、興奮しきった風咲の愛液だけではあるまい。湿った下半身の付け根の感触は、俺の受け入れ態勢が準備万端であることを俺自身に伝えてくる。

「アキったら耳まで顔真っ赤になってる。全くもう、可愛いんだから。

恥ずかしいよね、でも大丈夫だよ。今のアキを見てるのは私だけだから、安心して楽しんで良いんだよ?」

私に全部任せてくれたら、もっと気持ち良くしてあげられるんだけどなあ……?」

絶対に祿でもない事になる、頭ではそう理解しているのに、初めて味わう女の衝動という名の火に晒され続けた俺の理性は、既に白旗に

手をかけていた。普段の吐精を我慢する感覚とは違う、今まで感じたことのない乾きや、底なしに餓える衝動を抑えるのに必死だったのだ。

触った瞬間イクのは決定的で、気持ち良いのは間違いない。俺は風咲の悪魔の囁きにも似た風咲の言葉に逆らうことで精一杯。その攻勢の前に、思わず全身の踏ん張りが解けた瞬間を見逃さなかった風咲は、俺の身体に手を回すと、すかさず俺の身体をひっくり返す。

「あつ……」

しばし見詰め合う風咲と俺。いつもと違う、風咲を見上げる体制に、胸が跳ねる。

風咲は相変わらず欲望全開の笑みを浮かべているものの、若干理性が戻っているのか、先ほどまでの暴走気味の様子ではなかった。だが、却って冷静になってまじまじと観察されているのだと思うと、余計に羞恥心が強くなる。

「今のアキ、やっぱり可愛い顔してるね。ぶにぶにの頬つぺた真つ赤にしながら、潤んだ瞳で私を見つめて、私に何かをおねだりしてる」そんな訳ない、と言い返す余裕すらない。俺自身が一番よくわかっている。早くなる薄い胸の隆起も、下半身の疼きも、俺に訴えかけてきていた。

浅ましいその欲求を、見抜かれている。恥ずかしさから直視できず視線を逸らすも、風咲に両頬に手を添えられ、視線を戻される。

「ごっち向いて、アキ」

「あ、うう……」

間違いなく、最初に叫んでいた通りの妄想交じりの欲望が原動力だろう。

だが、情動たつぷりに眩かれると、性欲交じりの瞳がその実、愛おしさで一杯になっている様を見ると、これ以上我慢できなかった。

あそこから液体が垂れる気色の悪い感触。紛れもない、これからの行為への期待の証。

「アキは、どうして欲しいの……?」

優しい気な笑みを湛えた風咲は、静かにこちらの返事を待っている。

ああも、駄目だなあ。

風咲の笑みの裏に潜む性欲に忠実な性格も、何だかんだ本当に嫌がっているところはこうして選択を委ねてくれる優しい所も、全部ひっくり返して好きになっただから、少しは騙されても良いかなと、つい甘くなってしまうんだ。

風咲だからな、と安心している自分に呆れる。

「わかったよ。頼むから、優しくしてくれよ……?」

しっかりと顔をホールドされているから、視線だけでも端に逸らす。

こいつじゃなかったら、こんな恥ずかしいセリフ言ってやるもんか。火照る全身はきつと、発情や恥ずかしさだけじゃなく、照れによるものだ。

どうせ暴走するんだろうが、少しはこいつの良心とやらを信じてやろう。

そう思い、恋に夢見る年齢だろうこの体相応の態度として、目を瞑り、その時に思いを馳せた。火照った体からこみ上げる衝動を我慢しつつ、僅かな期待と共に風咲のリアクションを待ち望んだ。



## 6 (後編)

「……」

筈、だったのだが。先程までの良い話ムーブは何だったのか、突然すん、と黙った風咲。返事どころか身じろぎ1つしやしない。

——え、あれ？ 今完全に、「ええ、わかったわ」だなんて言って、優しく手ほどきが始まる流れだったよね？ 折角風咲が好きそうなりアクションしてやったのに、反応無しなの？

10秒立つても反応のない風咲を不審に思った俺は、片目を開けてちらり、と風咲の様子をうかがってみる。

「……」

「うおあッ!?!」

恐る恐る目を開いた俺の視界に飛び込んできたのは、据わった眼をして、じつと押し黙ったままこちらを凝視している風咲の姿だった。そのあまりの恐ろしさに思わずびくりと体を震わせ、幽霊を怖がる子供のように身じろぎしてしまう。

「な、何だよ。突然スイッチ切れたみたいにな黙りやがって……」

まさかこのバグのせいで、同じ場にいる風咲のAvatarにもバグが起こってしまったのか。心配して起き上がりかけた俺だったが、すぐに無用な心配だったということが分かった。むしろ、自らの心配をしたほうが良いレベルの災いが俺を襲うことになるのだ。

「ど、どうしたん——」

異様な風咲の様子に、俺が上半身を起こそうとした瞬間。ピー、と少し前に聞いたばかりの電子音が耳に入る。と同時に、お腹辺りに発生した異様な感触に、俺の動きがびしりとフリーズした。

つつきがいのあるぷにぷにのお腹に、むにゆりと突き刺さった熱量を伴った固いもの。

先端がぬるぬるしてて、固くて、ギンギンに反り返ってそうな、棒状の何か。

今のVRを中心とした生活に慣れ切った人類には馴染みのある電子音と、不可解なバグによって風咲の意のままに変化した俺。そし

て、風咲が熟れ切った果実を前にした時、何を思い、その結果何が起きてしまうのか。こんな簡単な推理ゲーム、子供でも解けてしまうに違いない。

「お前、まさか……」

「……」

部屋に沈黙が満ちる。口角を限界まで吊り上げた風咲の深い笑みに、ぞくりと寒気が走った。

「女の子とエッチするなら竿役がいる。そうだろ？」

「お前、お前ーッ!？」

少しでも優しくした俺が馬鹿だった。折角、折角乗ってやったというのに、お前ってやつは、どうしてそう期待を裏切るのが上手いんだ!!

「頼まれたからには、私にはアキを気持ちよくする責任がある。でも、女の子を悦ばすにはでっかいおちんちんが居る。そして今の私には、都合良く宿った謎のバグがある……これはもう使うしかないでしょ!!」

「優しくって話はどうした!？」

「煮えたぎってる私の股間に優しい方法をとることにしました!!」

「こんの、ふざけ……っ」

俺の抗議の声を遮ったのは、腹部から感じる大きな質量だった。

風咲の股間から屹立した、風咲の容姿からは似つかわぬ肉棒。サイズは俺についていた物と遜色無いレベルで、明らかに意識したに違いない。こいつの性格からして、大は小を兼ねるとか言いかねないのが怖いところだ。

ねっとりとした我慢汁は大きく開いた鈴口から漏れ、俺の腹に滴っている。

「ま、マジで言ってるの……?」

淫液でてらてらと輝く風咲の男性器。とろとろとしたカウパーが肌に触れるたび、そこから熱を発している錯覚すらする。

風咲ですら痛がるようなデカさのこれを、風咲より小さな体躯である今の身体の中に収めろって? さすがに冗談が過ぎるだろ。

「1人エッチはともかく、これの扱いに関しては第一人者だと自負してるからね。私に任せてくれれば、仮にアキが処女だったとしても、アへ顔になるまで全力で可愛がってあげるられるよ?」

全力でご免こうむりたいのだが、玩具を与えられた子供の様に楽し気な風咲は話を聞かない。止めるどころか、言葉も満足に紡げない俺に見せつけるように、ゆつくりと腰を動かす。

身体は恐怖で強張り動かないのに、視線の先で動き続けるそれから不思議と目が離せない。

手慣れた手つきで胸を愛撫されると、きゅんとあそこが疼いてしまったのを感じる。

「大丈夫だよ、絶対痛くしないし、私がお任せで気持ちよくしてあげる!! アキは私に任せて、とろとろしててくれたらいいからさ」

さも私はいいでですよ、とでも言いたげな風咲だが、男の快樂への期待感で胸が躍っているのは明らかだった。それだけじゃない。全身を真っ赤に染め、発情し切った様子のご馳走を前にした狼さんはとても機嫌が良さそうで、鼻歌でも歌い始めそうなほどにうきうきの様子。

「はっ、はっ、はっ……あつ、う……」

対して俺は、反論することすらできない。くちゆくちゆと厭らしい音を立て始めたそれから、目が離せない。

呼吸が浅くなる。目が潤んでくる。風咲が腰を素振りする度にちりっ、と女芽に男根が掠る度に迸る衝撃に、変な鳴き声を上げてしまう。とうの昔に限界を迎えた理性は、引導を渡してほしいと泣き叫んでいる。

「怖いなら手を握っててあげる、心配ならずっと抱きしめても良いよ。アキが動いてって言うまで絶対動かさないから。だからセックスしようよお、ね?」

「う、うう……」

普段であれば、まるでぐずる子供に言い聞かせる口調の風咲に、お前が入りたいだけだと一喝するところだが。

「わ、わかった、よ……入れて、良いよ」

こくり、と頷く。恥ずかしくて正面を向けず、ふいつと視線をそらす。

誤魔化されてはいるつもりはない。我慢の限界であることは否定しないし、半ば自棄になっているのも事実だ。でもそれ以上に俺自身が、風咲と繋がりたいと思つてしまつていいるのだ。

風咲がハマる女の快楽を知りたい興味本位が半分。愛する女にここまで求められて、答えてあげたいという男の甲斐性が残り半分。例え、それが男女逆転していようが、相手が好いた人間ならば良いのだと、思うことにした。

もう限界だった。燃えるような熱を感じるあそこからの衝動に、これ以上逆らえなかつたのだ。

「でも、ゆつくりだぞ。絶対、痛くするなよ……!?!」

「わかつてるよお。とびきり、優しくしたげるからね」

んふ、と鼻にかかった声を出した風咲は、俺の膝を抱え上げる。露になつた下半身に咲く未成熟な蕾は、期待に打ち震え蜜を垂れ流していた。とくとくと漏れ出る愛液は、先ほどの情事の爪あとを上書きするように、じわりとシーツの上に広がっていく。

風咲は人差し指で淫らな水溜りから液体を掬い取ると、そのまま銜え込んだ。ねっとり舌を使い、ちゅぱちゅぱと音を立てて味わう様を見せ付けられる。

「蜂蜜みたいに美味しいお汁だね。甘くて舌が蕩けそうなくらい……自分の舐めるとしよっぱいののに、アキのだって思うと美味しく感じちゃうんだよね……不思議」

雄を挑発する仕草を目にし、俺の中に沸き起こる衝動。その感覚は、背筋の凍るような嫌悪感ではなく、燃え上がるような熱情。

ぴっちり閉じた淫唇を下からなぞる様に触れられると、お腹の奥がきゅんと疼く。カリツ、と爪で軽くクリトリスを弾かれると、独りでに腰がはねる。

「あうっ、あぁっ」

「ああ、いつもはカッコいいアキがこんなに可愛くえつちに鳴いてるなんて……ああもう、おちんちんが張り切れそうだよお」

軽いタッチとは裏腹に、風咲が触るたびに全身に甘い痺れが生じ、俺に恥ずかしい喘ぎ声を強制させる。

「うう、出したくて、出したてるわけじゃ……勝手に、きゆうんん!!」  
声が、出ちゃうんだあつ!!」

「今のアキはとつても可愛いんだから、我慢しなくて良いんだよお。この調子でどんどん喘いじやおう?」

「い、嫌に決まってるだろっ!! は、恥ずかしいし……」

我慢したくて掌を硬く握り締めるが、風咲はそつと解くと、指と指を絡ませる。汗ばんでしっとりとした手の感触。行き場をなくした衝動が、蜜を生産し続けているあそこへと集中していく。

じつと俺を見つめる風咲の視線。どくん、と跳ねる鼓動に、思わず覚悟を決めるように、ごくりと生唾を飲んでしまった。

風咲が腰を大きくグラインドさせると、その大きなペニスが俺の女性器をなぞり上げる。

ずりゆ、と淫らな水音が耳に届くとともに、ぞわりと駆け上がるメスの性感。恋人繋ぎで逃げ場を失ったことで漏れでた嬌声が、更に俺を高ぶらせていく。

「ああつ、んんっ」

「んふふ、可愛いよ、アキ……」

決して早くは無い、ゆつたりとしたペースで腰を動かす風咲。

ぐりっ、と亀頭でクリが押し潰され腰が跳ねたかと思えば、ぱつくりと花開き始めた膣の浅瀬を刺激される。絶え間ない様々な快感に、視界がちかちかと明滅し始める。見知らぬ快樂に翻弄されつきりの俺は、されるがままに淫らな声で歌わされ続けるしかない。

「あつ、あつ、な、なぎしやあ」

「どうしよ、私を『なぎしや』って呼ぶアキが尊すぎてどうかなっっちゃいそう。ん、んんっ、やば、もう出ちゃう……」

もう自らが何を言っているのかすらわからない。身近に愛する人の熱を感じながらの前戯に、されるがまま見も心も蕩ける快樂に包まれている俺。

だが、異性の快樂に翻弄されているのは俺だけではないようで、風

咲もびくびくと快樂で体を震わせながら、ふうふうと荒い息を吐いていた。

「ちよ、ちよつとタイムね、アキ……」

イかない様に歯を食いしばっている風咲は、こんな千載一遇の機会は二度と無い、もつと楽しまないと、とばかりに、一旦仕切り仕切り直そうと腰を引く。

絶え間なく続いていた刺激が無くなり、不定形にまで蕩けていた思考も、僅かに纏まりを取り戻していく。

だが、半ばお預けを食らった形になった俺の理性は、とうに限界を迎えていた。

「なぎさあ……」

意識せず、せつなげな声が独りでに出してしまう。何が、なんて言わなくても伝わっていた。

無くなった刺激を求め、かくかくと腰が前後する。今俺が、男としてとんでもない発言をしていることは、麻痺しかけの頭の端で理解しているものの。ぱくぱくと、呼吸をするかのように閉じ開きしている、この幼い体の女性器。そこから沸き起こってくるリビドーが、理性を軽く押しつけていた。

「なぎさあ、はやくう」

それに、相手が風咲である事も要因だった。散々悪態をついたものの、風咲なら大丈夫だろうと結局、気を許してしまっているのだ。だからこそ、余計に歯止めがきかない。一度決壊した理性は、これ以上の我慢を許さなかった。

潤んだ視界の中で、風咲と視線が合う。生唾を飲み込むように、艶めかしい彼女の白い喉が蠢動する。

風咲は覚悟を決めたように、目の前の未成熟な割れ目に先端を添えると、震える声で俺に話しかけてくる。

「いきなり中出しは止めようって思ってたのに、誘ってきたアキが悪いんだよ……? ど、どうなっても知らないんだからねっ!」

僅かに開かれた割れ目から直接感じる風咲の熱量に、一層意識が蕩けた俺は、こくりと頷いた。確認するが早いか、興奮から鼻息が荒い

風咲は、ぎりぎり残った理性を働かせ、ゆっくりと腰を動かし始める。じゅぷ、と亀頭が淫花を潜り抜ける音と共に感じる、その長大な質量。狭まっていた膣壁が徐々に開き、初めて入れられた男性器をまるで歓迎するかのように絡みつきもてなしている。

「ふうっ、は、っああああ……」

痛みはない。風咲のモノが奥へ奥へと進むたびに、えも言われぬ快感が込み上げてくる。更に、風咲にゆっくりと慎重に入れられる事で、その感覚が引き延ばされているようにも感じられ、自然と笑みを浮かべてしまうのがわかる。

普段の男の快感では味わえない、足りなかったものを埋められたような充足感も合わさり、反射的に気のない声をあげてしまっていることにすら気づけなかった。

そして、異性の快感に翻弄されているのは目の前の風咲も同じよう

で。「あつくううう……!! き、気持ち良いけど、せつま……!!」

片目を瞑り、何かを我慢している様子の風咲。ただでさえロリ体型で膣も狭いのに、初めての快感で制御できず、無意識に締め付けているせいで余計にきつく感じるのだろう。痛いのではないかとふと心配になるが、口端が吊り上がっているのを見るに、快感のほうが勝っているようだ。

どうやら処女膜は無いらしかった俺だが、初めての経験ということに変わりはない。初めての俺が痛くないようにという、直情的な風咲らしからぬ俺を慮つての行動に、思わず胸が高鳴る。

「あつう!?!」

そのときめきで思わず腰がびくりと動いてしまい、衝撃で二人してあられのない声を上げる。

セックス中とは思えないほどキリっと引き締まった表情の風咲は、汗をチラつかせながら俺に真剣に話しかけてくる。

「お願いだから静かにして、動かないでねアキ……私は今、今にも出しちゃいそうなおちんちんの快樂と、可愛すぎるアキを、ガンガンピストンしてアンアン喘がせたい欲望と戦ってるんだから……!!」

「お、お前って奴は本当に……!! あっん!!」

「やめてよアキ!! そういう可愛い喘ぎ声!!」

「無茶言うなあ!? ふあああっ」

風咲の必死の形相に少し理性が戻りかけるものの、波状攻撃で襲い来る快樂の波に、敢無く陥落する理性の砦。チリチリと脳が焼けつくような快樂の調べに口が自然と空いてしまい、喘ぎ声は垂れ流しになった。

もどかしさと戦っているのだろう、噛みしめて耐えている風咲とは対照的である。

あの風咲カスタマイズの肉棒が半ば以上入り込んだ時、挿入時から感じていた違和感が、強烈な圧迫感に転じた。体の中に異物が入り込んでいるかのような、吐き気が混じった拒絶感に近い。

こんな小さなロリボディに20cmに迫るサイズのモノを入れようというのだから、そうなるのも当然だった。だが、目の前の恋人が我慢しているのだから自分も我慢しないと、と自然と思った俺は、何とか不快感に混じった快感に集中して気を紛らわせる。

段々と息が浅くなり、ぴりぴりとした痛みも感じる。だが俺も男だ、とどこか矛盾した決意に駆られて必死に我慢する。

「はっ、はあ、ふう……」

「もう少し、もう少しだからね……」

「つぐ、ふうふうふう……」

体感時間では10分以上もかけたような長い時を味わった末、俺と風咲の腰が密着し、脱力した声が反射的に漏れる。

ようやく、風咲の男性器が全て俺の中に納まったのだ。

「全部、入ったあ……ここ、子供の体温って高いつて聞くけど、本当なんだね。アキの中、とつても暖かい……」

「ふ、ふう……ふあああっ」

達成感すら感じる気持ち良さげな感想を漏らす風咲に対し、俺はもう喋ることすら億劫だった。

圧迫感と心地良さが同居した、奇妙な感覚。膣道にみっちり詰り込まれた風咲の逸物からダイレクトに伝わる、風咲自身の興奮と昂ぶ



り。下半身に力を入れるとその肉棒を締め付けてしまい、改めて思い知らされるその大きさ。下半身にもう一つ心臓ができたかのように、どくどくと俺の中で脈打つ他人の鼓動に、意識がすべて持っていっていた。

「お、つきい……」

涙を流しながら漏れでた賛辞は、一見苦悶の表明に聞こえるだろう。だが、目の前の美しい蹂躪者は、言葉の端々に滲んだ賞賛の感情を見逃さなかった。

流れ出た涙をそっと拭かれると、風咲の浮かべた笑みが良く見える。

「息苦しいけど、ちよつとじんじんするけど、そんなのどうでも良くなるくらい嬉しい。大好きな人と繋がって、愛してもらえて、知らず知らずのうちに笑みがこぼれそうなくらい、嬉しいよね。

私もそうだから、よくわかるよ」

風咲はいつもこうだ。普段はこっちが呆れる位ふざけているくせに、本気を出す場面を心得ているというか、どうすれば俺が喜ぶのか、ツボを抑えている。

いつものように、快樂ボケしたような事を言ってくればまだ誤魔化しようがあるのに、冗談や嘘の類だとわかれば良いのに、愛おしそうに目を細める風咲を見てしまえば、俺の躊躇いも無くなってしまう。

風咲が寝転がっている俺に覆いかぶさるように体制を変える。

興奮で潤んだ瞳に、汗の滴る長い睫や、玉のような汗が浮かぶ肌。眼前にまで迫る恋人の顔つきが何倍にも魅力的に見え、心臓が早鐘のように打つ。

「アキが良いって言うまで、絶対動かないからね。もっとゆっくり、楽しも……」

唇を合わせると、自然と舌を絡めあう。

貪りあうように求め合う、いつもの欲情に満ちた物ではない。お互いの愛を確かめ合うように、静かに絡まる舌と舌。リードする風咲の動きに逆らわず、為されるがままに全てを任せる。

「んっ、んう……」

舌と絡み合う唾液が、酷く甘く感じる。流し込まれるがまま嚙下すると、体の中から火照っていく気がする。組み敷かれ、心地よさを甘受するだけの状態に、思考すらも甘く溶けていつているような気さえしてくる。

体に力が入る度膣壁が蠢動し、俺に尻咲の大きさをや形を伝えてくる。カリ首のえぐい角度や、子宮口にすら届くその大きさが、手に取るようにわかる。

「んあ……」

男なのに女の体にされた挙句、恋人から恐ろしくでかい男性器を入れられ、抵抗することもなく受け入れている。

下半身から感じる感触や快感は、そんな情けない有様をアリアリと見せ付けられているようで、沸き起こる背徳感が俺を攻め立ててくる。

自覚した瞬間、ふるりと全身が震えた。頭の中が真っ白になり、視界すらも消えたような錯覚。

相手にも伝わるその震えは、尻咲にも快感を促し、確信を抱かせた。

「アキ、軽くイツちやっただね。目がとろんとして、おまんこがきゅんきゅん動いたから一発でわかっちゃった」

「ふ、あ……」

これが、女がイクって感覚……

余韻が痺れのようにいつまでも残り、体や思考の自由を許さない。イキ顔を至近距離で観察されて羞恥を感じているのに、否定の言葉を思い浮かべることすらできない。

いつまでもこの感覚に浸っていたいと、本能だけが残照のように頭の中にいつまでも居座っている。

ちゅ、と額に口付けを1つ落とされる。

「でもね、今のなんてほんの序の口。本気イキはもっと凄いんだよ。がくがく体が痙攣して、ぼわーって頭の中が幸せで溢れて、ふわっと意識が飛んじやうの。」

アキの体温を感じながらイク時なんて、それはもう頭おかしくなっ

ちやいそうなくらい気持ち良いんだから。

もしアキが味わっちゃったら、もう男に戻りたくなくなるかも……  
それでも、続ける?」

お前こそ、だなんて憎まれ口を思いつく余裕すらなかった。むしろ、意地悪な笑みを浮かべる風咲を見て、被虐的な悦びを覚えてしまう始末だった。

通報する前に、一回くらい、経験してみても良いんじゃないか。

所詮VR世界だから、だなんて言い訳を心の中で唱えながら、風咲の背中に手を回す。

耳元で、くすりと笑う恋人の声が聞こえた。

「じゃあ、動くね……?」

こくりと黙って頷く。見えなくても、意思は伝わる。

ずるりと引き出されたそれは、先ほどより少し早いくらいの速度で俺の中に戻ってくる。

ゆっくりゆっくり、引き抜かれる肉の槍。龟头に引つかかりながら、擦り上げられる膣壁。今までの人生で経験したことのない類の快樂の波に、思考は一瞬で白熱した。

「あん、んああッ!!」

「うああ、やっぱ、アキのおまんこめっちゃ絡み付いてきて、気持ち良すぎっ……!!」

ぱちゅ、と水音が鳴ると共に、二人同時に嬌声上がる。

馴染ませるような挿入されっぱなしだった状態から一転、こっつんと膣の奥を叩かれると、反動で勢いが付いたように怒涛の快樂が押し寄せてきた。

「ふああ!! んああ!! あっぐう、ふ、かわいい……!!」

「あ、だめ、アキの中気持ちよすぎて、腰が止まらないよおっ……!!」  
頭で処理しきれない程の快感に視点が定まらず、ぐるぐると世界が回っているような錯覚に陥る俺の耳に、風咲の賛辞交じりの弱音が聞こえる。

ぱちゅ、ぱちゅ、と音を立てながら夢中で腰を振る風咲。恐る恐る、といった風咲の心情が見て伺えるそのピストンは、男性器が立派なせ

いで子宮口に軽く触れてしまうことを除けば、優しさに満ちた愛のある性行為だろう。とはいえ、普段の風咲ならば、

『抉るように!! もっと激しく!!』

とクレームが来るくらいのも、へっぴり腰で童貞丸出しの弱弱いピストンだった。

だが、女の子初心者の俺からすれば、そんな拙い腰使いですら脅威だった。

その長大な陰茎が行き来するたび、膣壁の粘膜が刺激されひりひりと痛む。だが同時に、襲ってくる膨大な熱と痺れる様な甘い電流が、その痛みを補って余りあるほどの心地良さを生む。

「あんっ!! や、あぁっ!! あう、あっあっ、あぁっ……!!」

「やばいよお、ただでさえアキのおまんこ名器なのに、喘ぎ声が可愛すぎて、おちんちんに響くうッ!!」

悦びの声と共に、ぎゅ、と抱きしめる手の力が強くなる。

挿入される前に感じていた僅かな嫌悪感は、我慢するしない以前に、俺の中から消え去っていた。

嫌悪感が沸きおころうとすると、顔をうずめた首筋から、汗と女の匂いが香る度、相手が風咲なのだ気づく。将来を共にしたいと誓いを立てる、愛する恋人が相手なのだと思いつく。その度、愛おしさが俺の中に溢れ、どうしようもなく嬉しくなってしまうのだ。

無我夢中で腰を振り、にへらとだらしない笑みを浮かべているであろう恋人に、喜びを感じてしまうのだ。

S Mプレイなどではなく、純粹に男女の役割が逆転したセックスに溺れる俺たち。次第に早くなる呼吸に、風咲の限界が近いことを察した。

「アキ、私、もう駄目え。アキがえっちすぎで、これ以上おちんちんが言うこと聞かないの、今にも射精しちゃいそうなの……!! ね、中に射精して良い? アキのお腹の中に一杯、白いの出して良いかなっ!?!」

——VR世界でも、中出しをすれば子供は出来る。現実世界の身体情報と照らしあわせ、タイミングが合った時に中出しすると、一定確

率でVRマシンに搭載された医療機能により、人口受胎で妊娠出来るようになってきているのだ。

普段であれば、未婚の関係だからして、流石の風咲でも中出しは避けるところだ。

必死に懇願する風咲の言葉に、お腹の奥が疼きだしたのがわかった。この偽者の体が、風咲の子供を孕みたがっているらしい。

なけなしの理性が、流石にそれはまずい、と警鐘を鳴らす。だが、俺達の根底には、所詮これはバグで発生した仮初の体、さすがに子供作りの判定などしている訳がない、という楽観があった。

運営に通報すれば終わってしまう、泡沫の夢である。もうどうにでもなれ、と俺は自棄になった。

「来てっ……!! いっぱい、出してえ……!!」

既に息も絶え絶え、思考回路もまともに回っていない俺は、そういうのが限界だった。射精間近で余裕のない風咲も、ピストンを早める事を返事代わりにし、快感の波を早めていく。

「あつ、あつ、あつ」

「っふう、はあ、はあ……!」

ぱちゅぱちゅとリズムミカルに鳴る水音に合わせ、2人の女の嬌声が上がりに続ける。不可思議で、溺れるような快感に満ちた空間で、重なり合い快楽を貪っている俺達。

触れ合う肌から、高まりを感じる。抽挿が早まり、びくびくと中で脈動しているのがわかる。

「イク、イっちゃやう、射精ちやうう……!!」

「あつ、あん、ひうっ!!」

雄の快感に耐えながら、搾り出すような声を出す風咲。

雌の快感に翻弄されつきりで、先ほどから浅く低くイキ続けている俺。

最後に向けて、段々とばらばらだった息が重なってくる。肌の火照りや熱が交じり合い、1つになるように同調していく。

一際腰を深く引き、きゅ、と肉棒が中で一瞬縮むのを知覚した、次の瞬間。

「で、るううッ!!」

ずん、とお腹の奥にまで響く衝撃と共に、膨大な熱量が押し寄せてきた。それを認識するより早く、意識がふわり、と浮かび。

「おおおお、射精で、るううううッ!!? おちんちんの中、ずりずりつて、ザーメン出てるううううッ!!?」

「ッ~~~~!!」

待望の射精に喜びの声を上げる風咲とは対照的に、俺は無言の叫びをあげていた。

未熟な処女子宮に怒涛の勢いで叩きつけられる、灼熱のザーメン。聞こえるはずがないのに、俺の中でびゅるびゅるとザーメンが吹き出す音や、子宮が快樂で炙られ焼ける音が、いつまでも頭の中で反響し続ける。

余韻を楽しむように、射精しながらぐりぐりと擦り付けるように刺激されると、意識がより一層高い所に飛ばされた。

瞬間的な男の射精とは比べ物にならない、長く深く響き続ける、女のオーガズム。

きゆう、と喉の奥が締まったような声が漏れる。全身を仰け反らせ、足がピンとつま先まで伸び、がくがくと全身を余りの快樂に呼吸が出来ず、ぱくぱくと口を開閉させ、静かにその快樂の強さを讃える事しか出来なかった。

「はーやっぱいい、射精って、こんなに気持ち良いの……男の人がお猿さんみたいにシコるのも納得だよお、癖になりそう……」

ようやく射精が収まった風咲が俺の耳元でうっとりとした頃、俺はようやくアクメの高波から降りてこられた。

「——かはッ、はあ、はー、はー……!!」

仰け反らせていた手足がベッドに落ちる。快感を享受した後の身体は、鉛の様に重かった。心臓は酸素を取り込もうと煩いくらいに跳ね回り、取り込んだ端から必死に送り込んでいる。

呼吸をする度にジン、と全身に流れる甘やかな残響は俺を苛み、未だに自由を許さなかった。

「さあて、お待ちかねのアキのアクメ顔、ご拝見だよ〜!!」

「は、はあ、ああ、ふああッ……」

そんな俺とは対照的に、もう風咲は回復したのか、俺の顔を見るために上半身を起こす。

視界にぼつと写りこむ風咲の可愛らしい顔は桜色に染まり、にっこりと満足げに笑みを浮かべていた。

「やつぱりロリ娘のトロ顔って最高だよ。喋れないくらいイキ過ぎてくったりしてるところも、

それがアキなら尚更だよ、えへへ」

「恥ずかしい事を、言うんじゃない……」

壮絶な絶頂に息も絶え絶えな俺は、強く否定する元気も残っていなかった。体力全てがアクメに吸い取られた気分である。指先すら動かせる気がしない。毎回これ味わってる風咲って、結構凄かったんだな、と変な所で感心していると。

「ね、気持ちよかったでしょ？ 女の子のエッチ」

「……まあ、そうだな。悪くは、無かったよ」

風咲に問いに、癖になりそう、という言葉は飲み込んでおく。

俺の言葉に目尻を細くした風咲と、ふんわりと唇を合わせるだけの口づけ。

にんまりと心底嬉しそうに笑う恋人の笑顔を見れば、付き合った甲斐があったというものだ。

さて、風咲も満足しただろうし、そろそろ通報するか、と手を伸ばそうとした俺だったが、そうは問屋が卸さない。

「もうアキったら素直じゃないんだから。そんな素直じゃない娘にはお仕置きだよ!! 抜かすの二回戦に行っちゃうぞー!!」

「……ええ?」

一瞬で愛おしそうだった視線に欲情が混じり、睨が下がり嫌らしい視線を浴びせてくる。

俺が状況を把握する前に、いつ買ったのか、インベントリから取り出した手錠を、鮮やかな手さばきで俺に取り付け拘束すると、乱暴に唇を奪われた。

「~~~~~!?!」

落ち着きかけた呼吸が再び乱れる。風咲に貪るように口内を蹂躪されている最中、押しつぶすように乳首を刺激され、軽く絶頂へ押し上げられる。

ふす、と鼻から抜ける息がこそばゆい。揺れる視界の中、目の前に迫った風咲の瞳が物語っている、まだ終わらせる気はないぞ、と。

「ふはっ。思春期の男の子が一回で満足する訳ないじゃない。アキのお腹がポツコリ膨れちゃうまで一杯出すから、覚悟するんだよお……!?!」

ぐいっと口元を拭う男らしい仕草に、不意に胸が跳ねる。

「思春期って柄かよお前?! それただの色情狂じゃね、ふああツ?!」

入れたまま萎えていた男性器が、再び膣壁一杯に大きくなり始める。その都度ひだ一枚一枚を舐めるように滑っていくあそこからの快感と同時に、絶妙な指運びでクリトリスをカリカリとひっかかれると、じれったいような甘痒い感覚が全身に広がっていく。喋りすら途中で断絶され、甘ったるい声をあげさせられる。

「ふへへ、一回で良いからSMプレイってやってみたかったんだよねえ。折角ならお尻の穴も使ってみたいし、たっぷり焦らしプレイして、イかせてよお、って言うアキのおねだりも聞きたいし……いやあ今日は忙しいなあ!!」

「ひう……」

涎を垂らしながら爛々と瞳を輝かせるその姿は、正しく餓えた獣のよう。

手を拘束されて、抵抗すら許されない自身の状況に考えが至ると、ぞくぞくと背筋に走る悪寒と嬉しさの予感に、情けない声が出てしまう。

「まだまだ寝かさないよ。もう戻りたくないって言うまで、たっぷり可愛がってあげる……」

アキ、だーいすきっ!!」

反論しようにも、脈絡無く呟かれたそれに上手く絡めとられる。俺がその言葉に弱いと知っていて、わかっている使われていても、それが嘘ではないとわかってしまった瞬間にもう駄目だった。抵抗感す



ら取り上げられた俺に、出来ることなともうなく。

「せめて、優しくしてえッ……!!」

その懇願が更に焚きつけてしまうとも知らず、俺は生娘のようにきゅつと目を瞑り、何とかそんな言葉だけを絞り出したのだった。

## 7 (エピローグ)

その後、手を変え品を変え8回も中出しされた挙句、最後にお掃除フェラを強請る風咲を強引に振り払い、ようやく運営に通報できたのであった。

風咲のあの無尽蔵の性欲は一体どこからやってくるのか、不思議でしようがない。いや、そもそも絶倫すぎるだろあいつ……計9回も出しておいて、俺が強引に突破しなかつたらまだやる気だったからな。亜鉛などのサプリでドーピングしまくってようやく4回が限界の俺からしてみれば、その倍以上やってる風咲には恐怖せざるを得ない。つくづく、あいつが女、俺が男で良かったと思った。仮に風咲が男だったとして、あの絶倫に付き合う女は大変だろうなと身をもって思い知らされた形だ。

さて、本筋に戻るが、この風咲の要望通りにアバターが書き換わってしまった現象についてだが。

運営に通報してみると、アカウントを精査するので一度ログアウトしてほしい、とのことだった。勿論プログラムのバグも考えられるが、現実世界、つまりVR装置側に何か細工された可能性もあるので、すぐに警察も行ききます、とも言われた。時間はかかるかもしれないが、一先ずこれでこの騒動は落ち着きそうである。

体全体が浮かび上がる感覚の後、パチリ、と電源が切れたようにねっとりとして全身に絡む精液の感覚が途絶え、次の瞬間には水の中に沈んでいるかのような感覚が蘇った。現実世界に意識が戻ったようだ。カプセル型のVR装置に満たされた、生命維持に必要な要素が全て凝縮された、特殊な液体が少しずつ抜かれていく。

はあ、酷い目にあつた。最初の1回はともかく、後の8回は地獄だった。イキつぱなしでまともに頭が回らないし、そのせいで風沙の良いように好き勝手台詞言わされ続けるし、散々だ。何が悲しくて、あいつをお姉ちゃんと呼ばないといけないのか、全くもって意味がわからない。仮に俺が呼びたい呼称があるとすれば、それは妻だとかそっち方面であり、そもそも俺は女ではない。あの時の惨状を思い出

すだけで、また顔から火が出そうだ。

ピー、と音がなり、カプセルの上蓋が自動で開き始める。液体の排出が完了したようである。

俺は、けほ、と肺の中に溜まった液体を吐き出しつつ、上半身を起こした。

ぺったりと背中に張り付いた髪の毛が気持ち悪い。前髪もそれなりに伸びていて、目にかかって鬱陶しかった。確か、ログアウトするのは半年ぶりだったか。前回メンテナンスの設定をした覚えが無いので、カプセルが散髪してくれずに、髪の毛が伸びっぱなしになってしまっているようである。

フィードバックのせいか、突かれまくった腰が痛い。そう思いながら、いやに滑らかな髪の毛を掻き上げつつ、起き上がろうとカプセルの床に片手をついた、その瞬間。

起こした視界の中に、あまりに見覚えのありすぎる、か細いと称するのがあるっていそうな白く細い手足が目に入る。デジャブに首を捻っている、どこで見たのか思い至り、さあつと血の気が引く。

「嘘だろ……?」

呆然と呟いた声色が、疑いを確信に変えてしまう。若干舌足らずな、声変わり前の高い声。メタリックなカプセルの内側に映っているのは、可愛らしい容姿を青ざめさせた小さな女の子。つまりは、先程まで俺がVR空間にて操っていた、夙咲が欲望のままにカスタマイズしたロリ娘そのものだった。

VR空間でのアバターばかりか、現実世界の冴えない容姿の俺まで、可憐な女の子の姿になっていたのである。

「マジで、女の子の身体だ。アバターじゃなくて、リアル……!?!」

限りなく現実に近いVR空間の五感再現技術も、やはり現実と比べると多少の雑音が混じる。比べてみると、一目瞭然だ。

そう、液体で湿った肌の感触や、夢なら覚めるとばかりに思い切り引っ張ってみた頬の痛みは、間違いなくここが現実世界だと証明していた。

「は、え、何で? いやいや、アバター変更がリアルに反映される訳が

……!?!」

カプセルの生命維持装置には、例えば手術を含めた高度医療を行うだけの機能は備わっている。いるのだが、だからと言って元の身体を跡形もなく変えてしまう程の高度な整形技術まで備わっているなんて話、今まで見たことも聞いたことも無かった。いや、これは整形なんて生易しいものじゃない、意識が別人の身体に移し替えられたようなもんだ。

そう思い至ると、誘拐や人身売買、果ては人体実験など、嫌な想像がばかりが頭の中を駆け巡る。

「ここは……!?! あれ、家だ……」

慌てて周囲を見回すと、見慣れた内装。壁のハンガーに掛けられた男物の服は俺の物だし、見覚えのある家具の配置に、凧咲にばれないように、カプセルの上蓋の裏に飾っている凧咲の写真。どれも最後にVR空間に没入する前に見た光景のままであり、ここは間違いなく俺の部屋のようにだった。

「そうだ、凧咲は……!?!」

次に心配になったのは、愛する恋人の存在だ。そもそもその発端はあいつであるが、凧咲自身もある意味被害者である。まあ、その割には誰よりもエンジョイしていたのだが……

だが、凧咲への被害も無用の心配だった。すぐに、元気な凧咲の叫び声が聞こえてきたからである。

「アキイイイイイ!!」

ドガシヤア!! とドアを蹴破る勢いで部屋に入り込んできたのは、さつきまでVR空間にて過ごしていたアバターと、全く同じ姿をした凧咲だった。

そう、全く同じ。アバターを弄っているとかないとか、そういう話ではなく。さつきまで俺と淫蕩に耽っていた時と、そっくりそのままの姿なのである。

無事を安心するよりも前にとんでもない事実気付いてしまい、ビシりと固まる俺。

「大変なんだよお、お別れしたはずのおちんちんが、こつちにも、生え、

てて……」

俺の姿を見てぼかん、と口を開けた風咲と、視線が交錯する。

お互いにゆっくりと視線が下がっていき、隠すものの無い股に差し掛かる。

風咲は俺の変わり果てた女の子の穴で、俺は電子空間で散々蹂躪してくれた風咲の息子の辺りで視線が止まる。

目をこすつても、現実が変わらなかつた。強いて言えば、萎えていた肉棒がむくむくと起き上がり、サイズが増大したことくらいか。

「成程、成程……」

「……!?!」

時既に遅し、とは正にこの事か。俺が我に返るよりも早く、にやりと笑った風咲は、じりじりと距離を詰め始めた。

風咲の行動の意味を察して、俺は再び血の気が引く。

「待て風咲、話せばわかる!!」

「ふへへ、それは聞けない相談だよ!! アキ、さっさと観念して、そのロリボディを私に差し出せえ!!」

夢が現実に。その事実気付いてしまった風咲は、もう手が付けられなかつた。

タダでさえ唯一の出口を塞がれているというのに、そもそもVR装置の中から出られていない俺が風咲の淫欲の手から逃れる術などあるわけがなく。

拒絶するように掌を突き付けるも、あつけなくつかまれ、固いVR装置の底に押し倒されてしまった。抵抗も虚しく、あつさり両足を押し広げられ、濡れそぼったあそこを露にされてしまう。

「もう濡れてるじゃん。えへへ、10回戦の後は、念願のお掃除フェラして貰うからね……!! 愛情たっぷり込めるんだぞっ♥」

「マジでそれだけはやめて、それやったら戻れなくなりそうだから、らあああッ!?!」

ずぶ、と問答無用で挿入された快感であつという間に気をやってしまった俺は結局、家に警察が訪れるまでの間、たっぷり種付けされ続けたのであつた。

視界の端で点灯する、アカウントへ送られたメールの受信ランプ。  
おめでとうございます！ というタイトルで始まるメールが届いて  
いることを知るのは、ずっと先の事だった。

## 責任を取ろう

### 8 (前編)

夜空に帳が下りようとも、現代の街並みは宵闇に沈まない。昼間と変わらぬ往来の数はその証拠で、煌々と輝く電灯の光が夜の到来を拒んでいた。

この街に住み、その景色を構成する一員である俺も御多分に漏れず、そこかしこに灯る明りのその一角、『Crossed』という名のレストランの中にいた。

英名で”交差”という銘を打たれたこのレストランは、かつて本場で修業を積み、賞レースで優勝を争えるほどの評価を得たシェフがメインを張っている、業界でもそれなりに有名な店である。

それだけに、一見さんお断りでそれなりに敷居の高いこの店は、客としてだけではなく、働く側の登用試験も遥か高き壁だ。何しろ、当落の前にシェフに料理の味や腕前を見て貰うだけでも狭き門である。俺が入店できたのは、完全に運が良かっただけだった。とはいえ、単に運が良いといっても、くじ運が良いとか俺が天性持ち得たもののおかげではない。それは俺がたまたま持ち合わせていた、人と人の縁によるものだった。

専門学校に通いながら、そこそこのレベルの料理店でバイトしながら修行してきただけの俺の経歴では、履歴書はノータイムでゴミ箱になること請け合いである。

そんな俺が入店を認められたのはある程度の実力が備わっていたからこそだが、腕前を見て貰えたのは、今、目の前のVIP席に座る女性のおかげだった。

「夏野菜のテリリーヌ、和と洋の2種のソースを添えて」

「……」

料理の形を崩さぬよう、テーブルクロスの上に丁寧に置くと、タイトなレディーススーツを着こなす女性は、切れ長の目から料理に視線を落とした。

俺の料理人としての道を繋いでくれた恩人は、肩に軽くかかるくらい艶がかった黒髪を僅かに吹くエアコンで揺らしながら、視線で料理を吟味していた。

三月に一度、シエフが決めたテーマに沿って行われる、フルコースで出される料理のコンペティション。テーブルに置かれているのは、そのコンペに向けてこの三か月、練りに練った自信作だ。だが、料理の評価点は、味だけではなく見た目も含まれる。特にコース料理ともなると、素材の彩、配置のバランス、どれかだけ突出していても、逆に足りなくても減点対象になってしまう上に、前菜ならばメインより目立ちすぎてはいけないという、絶妙な加減を要求される。要するに、俺が美味しいと思っても俺の感性がずれていれば一卷の終わりなわけで、それを避けるために誰かに試食をしてほしかったのだ。

その為にわざわざ呼んだのが、俺がこの店に入るきつかけを作ってくれ、俺の恩人ともいえるこの女性……新堂亜美である。

亜美は揃えて置かれたフォークとナイフを手にとると、大きな皿の上に綺麗に盛られた野菜のテリーヌを手慣れた手つきで切り分け、一口含む。

壁一枚隔てた往来で人が行き来する音だけが響く静かな空間に、重い沈黙が満ちる。

重苦しい空間を作り出している張本人である彼女に、わざわざ感想を尋ねるだなんて野暮なことはいらない。こういうのは、自然と出てくるものだ。

ゆつくりと味わうように咀嚼する亜美を見守ること一分少々。固唾を飲んで見ていると、小さく細く白い喉を鳴らす。ふくりと柔らかかな唇に手を当て僅かに思考した後、シリアスな表情を崩さず、俺を見上げて一言。

「……他のメニューとの兼ね合いでしょうが、これなら十分採用されるレベルでしょう。今回は、頑張りましたね」

「今回は、って傷つくな……これでも毎回、全力は尽くしてたんだけど」

俺の言葉で破顔する亜美を見ると、肺の中に溜まった重い空気を吐



き出した。辛辣な評価が多い亜美にしては珍しく褒めてくれた事に、ここ何年か苦渋を飲まされてきた俺は留飲を下げる。

「あら、まだまだこんなものじゃないでしょう？ 貴方には期待しているのだから、私の予想くらい軽く超えて貰わないと」

「プレッシャーだなあ。買いかぶりすぎて否定したいところだけど……」

他人に厳しく自分にも厳しい彼女の事だ、彼女の言う予想というのがどこまで高いのかわからないが、聞いたら心が折れそうなのは想像に難くない。自分で言うのも難だが、俺は追い込まれても伸びないタイプなのだ。

「そんなことはないわ。真尋、貴方は私が、こんな名門の店に才能の欠片もないような人間を推薦するような見る目のない人間だと思ってる？」

「そうは思っていないよ。わかってるからこそプレッシャーなんじゃないか……でも、そこまで言われたんじや頑張るしなくなるな」

先ほどまでの重苦しい雰囲気とは違い、ほっと和らいだ空気に俺も笑みを零した。

さて、わざわざ仕事帰りに呼びつけたんだし、飯くらい奢らないとな。まあ奢るといっても、いつもの様に俺の手作りにはなってしまうが。

「松永さんにはかなわないけど、俺の作ったフルコースで良いなら御馳走するよ」

「あら、将来の三ツ星シェフのフルコースが味わえるなんて、光栄ですわ。喜んでご相伴に預らせていただきます」

「折角亜美の予想聞かなかったんだから、わざわざ言わないでくれるかな……」

いたずらっぽく微笑む亜美。予想以上に高かった未来の展望に、俺は再びのしかかるプレッシャーに肩が凝った思いだった。

新堂亜美。 かの新堂グループ、しかも親会社の新堂ホールディング

スの代表取締役のご令嬢であり、七光りではなく純粋な実力で傘下のグループ会社の社長を務めている才媛だ。バイリンガルでもあり、様々な分野の知識も併せ持つ、人の何倍もの才能を持つ真正正銘の天才。

公立の高校を卒業し、料理の専門学校を卒業しただけの唯の凡人の俺とは大違いで、まるで接点が無いように思えるだろうが、実は小さな頃からの付き合いで、実に20年来の友人である。

俺と彼女の出会いは、幼稚園の頃にまで遡る。

何の変哲もない一般家庭に生まれた俺と、やんごとなき家系の長女である彼女との接点は、隣の幼稚園に通っていただけという、一生縁がないまま終わってもおかしくない些細なものだった。

片や一般市民が通わせる市立の普通の幼稚園、片や社会的地位の高い子供が通うような、広い園庭付きでの私立幼稚園。普通に考えれば、格式の差から交わるところなんてある訳が無かった。ところが、実は2つの幼稚園のオーナーが同じ人物だったため、月に一度くらいは交流の一環として、一緒に遊んだりするイベントがあったのだ。

当時、教養も何もないクソガキでしかなかった俺の何が良かったのか、何がきっかけだったのかは覚えていないのだが、妙に仲良くなつた俺たちは、それ以来交流のイベント毎に一緒に過ごすこととなったのだ。

互いに呼び捨てで呼び合う程仲が良かった俺たちだが、彼女は根本的にレベルの違う富裕層の子供。たかが子供に大人が傳く姿は異様で、羨ましいという単語が出るより先に、ショックを受けることもしばしばあった。正直、仲良く話し遊んではいたが、卒園したらもう会わないだろうな、と子供ながらに漠然と思っていた。実際、本来ならばそうだったのであろうが、大人になった今でもそんな女性と自分が仲良くしているとは、子供の頃の自分では想像もつかないだろう。

結局、通う学校は一度も交わることが無かったが、何かと接点があった新堂家のお嬢様との付き合いは変わらず続き、成人した今でもよく会う、仲の良い友人となっている。

そう。俺達の関係は、仲の良い友人で間違いない。互いの心情は別

として、今の所、という注釈はつくが。

その後、コースで出した料理に關しても批評を貰いつつ、俺のフルコースすべて出し終え、クローズの準備をしている最中。

「ね、真尋。今日は送ってくれないかしら」

「ああ、勿論。というか、いつも送ってあげてるじゃないか。家でいいんだろ？」

「言わなくてもわかってるくせに……」

厨房を使えるのはクローズを任された人間の特権で、代わりに明日の仕込みを任されるのがこの店のルールだ。今回は仕込みを終わらせてから亜美を招待した為、後は使った食器類を洗えば帰れる。

「私、明日休みなんだけどな」

肩にかけられた両手の熱、耳元で囁かれる吐息から感じる色気、背中に伝わるやけに柔らかい感触に心臓が跳ね、危うく皿を落としかける。

後ろを振り返らずとも、何をされているかなんてわかった。密着した肢体から伝わる熱量に、顔が紅潮するのが止められない。

「ちよ、ちよつと……!!」

「ホテルのスイートルーム、抑えてるんだけどな……」

俺の言葉には取り合わず、肩から上半身、そして腰に回される手。亜美からのジワリと汗ばんだ熱は、抱きしめられている俺にも伝わる。亜美が何を言わんとしているかだなんて、誰の目にも明らかだった。

シンクに落ちる皿の音も、煩く響く心臓の脈動に比べればたいしたことなかった。

「ね、真尋。良いでしょ……?」

熱情に満ちたその音色は、俺の思いを駆り立てるだけでなく、亜美の期待感も伝わってくる。

動きたびにむにゆりと変わる膚触に、生唾を飲んでしまう。

この手を握ったその後待つ展開に、思いを馳せる。心臓の鼓動と同じく頭の中に駆け巡る妄想に、くらりと頭が茹で上がりそう。だがそれは勘違いなどではない、二人が望んだもの。

泡にまみれた手を、へそのあたりで結ばれた白く細い両掌に重ねかける。

しかし。思考の端に過ぎったあの言葉に、びくりと手が止まった。

「まだ父さまが言った事、気にしてるの？」

「……」

突然動かなくなった俺に、心配げに語り掛けてくる亜美。体に絡みつく手は、誘惑するような動きから気遣しげな様子に変わる。

「そんなこと……」

「無いわけ無いでしょう。私達が互いの思いに気づいてから、一体何年経ったと思ってるの？ 女性としては貴方からの誘いを待ちたい所を、いい加減焦れて私から誘ってしまうくらいには我慢しているのよ」

背後から飛び出る本音を隠そうともしない直截な言い方に、ぐうの音も出ない。

「家柄がどうのなどと、今時時代遅れな事を言う男の話は聞かなくていいの。むしろ、その話が外部に漏れれば窮地に陥るのは自分でしように、なぜそれがわからないのか理解に苦しみます。そもそも、稀代の傑物だとか世間で褒められて凶に乗ってるんじゃないですかね。あんな人間性の欠片もないような非人間のどこに尊敬する要素があるのか不思議でしょうがありません……」

「あの、俺の背中で自分の父親の愚痴言い出すのやめてくれないかな……」

やつとこのことでひねり出した言葉は、女の方から誘われているというのになんとも情けない言葉だった。

「いえ、そうもいきません。あの男のせいで、18で告白されて初体験、4年の交際期間を経て22で婚姻し、25で第一子を出産するという私の人生設計が狂っているのですから。経営手腕について学ぶところは多かれど、人間性は全く尊敬できない最低の人間です。全く困ります」

俺が諫めるも、亜美の憤りは止まらず罵倒が止めどなくあふれて来る。それだけ恨みつらみが募っているのだろう、亜美は罵っている最

中、俺のコック服は絞められてギリギリと悲鳴を上げていた。

亜美の言う通り、彼女の父は経営者としては有能な人物だ。

大企業には数えられない程度のそれなりな規模だった新堂グループを、基盤はあつたにせよ、一代にして大企業にまで押し上げたのだから、その手腕が相当なものである事は疑うべくもない。経営者としては、平成の傑物の一人に数えられてもおかしくない程である。

その凄さは子供ながらに知っていたが、真にその怖さを知ったのは、専門学校を卒業する頃くらいだったか。

『娘が推薦するくらいなのだから、君に才能があることは間違いないのだろう。今まで頑なに弟子を取ろうとしなかったあの松永が認めらるくらいなのだから、私もその点については疑っておらん。だがな』  
亜美とよく似ている鋭い眼光に、じろりと睨みつけられる。

『娘との交際を認めるかといえば、話は別だ。いくら昔なじみの仲であろうと、何処の馬の骨とも知れぬ輩に、将来の新堂を担うやもしれん娘の将来をくれてやるわけにはいかんだ。亜美に何かあつた時、会社が傾いたとき、君に責任が取れるのかね?』

優しく、しかし残酷に告げられた通告。

『君も、定年前のご両親を苦勞させたくはないだろう……?』

今の店へ入店が決まり、突然訪ねてきた亜美の父親に言われた言葉がこれだった。

いかにもわかりやすい、両親を人質に取ろうとする脅し。亜美に告白し、付き合い始めたばかりの俺をけん制するように放たれたその呪言は、只の凡人でしかない俺を見事に縛った。

子供のころから一緒に過ごし、いつしか自覚した亜美に対する愛情は今でも変わらない。ドラマや漫画ならここで駆け落ちするところだろうが、生憎ここは現実で、俺は彼女の言葉に答えられない情けない凡人だった。

「……………これ以上、言っても詮無き事ですな」

「あ……………」

背中を感じていた温もりが逃げる。後ろを振り返ると、亜美は出入り口に向かって歩き出していた。

「送りは……」

「タクシーを呼びますから大丈夫ですよ。料理、美味しかったです」  
振り返らずに去っていく亜美を、黙って見送る俺。手を伸ばすも、届かないまま扉はゆっくりと閉まっていく。

「私、待ってますから。早く迎えに来てくださいね」

語り掛ける言葉を持たない俺は、ヒールを鳴らし歩いて行く亜美の背中を黙って見送るしかない。

この一連の流れは、毎度の事だった。

会うたびに諦めない彼女に迫られて、どうしても両親の事を考えて俺が応えられず、将来の迎えを頼んで去っていく。

「はあ」

体の底で淀んだ様々な感情が、思わず口を突いて出る。

もう少し俺に後先考えない思い切りがあれば、彼女をこんなにもやきもきさせる事はなかっただろう。

いつそ俺が天涯孤独の身なら、俺が躊躇う事も無かったのに。

もつと言えば彼女が普通の家庭に生まれていれば、何の障害もなく付き合い始められたはずだ。

一度もしを考え始めると、次から次へと頭の中に空想が沸き起こってきた。都合の良い妄想を思いついてしまう、その行為に対して何も行動できない自分に、苛立ちが募る。

「くそっ」

自分を好いてくれる女性へ何も返せない自分への憤りは、悪態となって部屋に反響した。思い人が去っていった扉から入ってきた街の喧騒で我に返った俺は、後悔を引きずったまま、皿洗いを再開するのだった。

幾度となく繰り返されたこの件は、亜美が折れて終いとなるのが恒例だった。

いくら大企業の重役だからと言って、実際に他企業で働く両親をクビに出来る力があるのかは不明だ。

だが、父は仕事人間で、働くことを生き甲斐としている節がある。仕事命だった人が退職した後痴呆になりやすいとはよく聞く話で、今から退職後が不安なのに、定年を前にしてクビなってしまえば、一体どうなるのか。あまり良くない事になるだろうことは、想像に難くない。

自分の行動一つで両親に何らかの影響が出てしまうとわかってしまった以上、後先考えずに行動することは出来なかった。

亜美はもしそうなら責任を取って自分が養うとまで言ってくれたが、生活が保障されるのであれば良いという問題ではない。

両親のことを考えると、彼女の父親の言うことを聞き別れるべきなのだろうが、告白したとき、涙を流して喜んでくれた彼女のことを考えると、亜美との関係は諦めきれない。どうしても決断できなかった。

だからこうして、彼女の誘いを毎回誤魔化し、やり過ぎすことしか出来ない。

「俺が、もう少し天才ならな……」

自室の天井を見上げながら、誰にもなく喋る。

ドラマの主人公のように、初めからメインシエフに取り立てられるくらいの才能が有れば、あの堅物を認めさせるくらい訳ないだろう。

下積みが長いのは当たり前の世界で、5年で店のコンペティションに出せるようになっただけでも十分早いと褒められる部類だ。だからと言ってここで満足しては、もう一度彼女に歓喜の涙を流させるのは遙か先になってしまう。

今度行われるコンペティションは、その第一歩だった。かの松永シエフが考えるコースの一品に採用されれば、亜美の父親をあとと言わせるとつかかりにはなるだろう。ある程度の地位を築く事ができれば、婚姻すら認めさせることができるに違いなかった。

「頑張るしかない……」

握りこぶしをぐつと天井に向かって突き上げる。

既に返しきれないほどの恩がある彼女に、これ以上借りを作らないため。そして、これ以上待たせないために。

そう誓い、俺は微睡に身を任せ、意識を手放すのだった。



## 9 (中編)

話は変わるが、男女をセックスしないと出られない部屋に閉じ込め、その経過を見守るといふのは、創作の世界では割と昔から制作され、メジャーなものである。所謂『セックスしないと出られない部屋』という奴だが、近頃、それを模した妙な事件が世間で話題になっていた。

何処からか2人を攫い、ベッドだけおいてある密室に閉じ込め、文字通り2人が致せば、その瞬間睡眠ガスで眠らされ、さらわれたすぐ近くの場所で解放する。逆に、しない限り絶対に開放しないという、質の悪い冗談のような部屋だ。

チープなAVの企画でも無さそうな内容だが、これらは全部実際に起きてしまった事件である。それも一度だけではなく、幾度となく繰り返されているのだ。

事件は世界各地で一定のペースで続いているのだが、未だに犯人は捕まっていない。

というのも、犯人の犯行手段どころか目的も不明なため、足取りが全く掴めないのである。というのも、被害者を閉じ込めはするものの、監視カメラで覗いている様子はなく、2人の行為を録画して売りさばくわけでもない上、後から脅してお金をせしめようとするわけでもなかった。逆に言えば映像が無いため、監禁場所のヒントは被害者の供述のみという、兎角犯人につながりそうな手がかりが無い厄介な事件なのだ。

更に犯人の特定を混迷させているのは国も様々なら被害者も様々という点で、名の知れぬ一般人が被害にあったかと思えば、時にはそれなりに地位のある者の娘が被害にあっている事もある。更に、監禁される2人の決定方法も謎で、最初がカップルだったかと思えば、次は全く面識のない2人だったり、法則性が無いのだ。

更に事態をややくしくしているのは、被害者が殆ど警察に告訴しないという点である。何せ、当人たちが恥ずかしい事を除けば実害はほぼ0であり、逆にこれがきっかけで付き合い始め、結婚に至った者も

多いのである。実質被害者のいない愉快犯に近い為、国によっては完全に見逃しているところまでであるという、他に聞いたことのない珍しいケースになっているのだ。

今でも一か月に一度のペースで攫われており、事件が発覚した当時は騒がれたものだが、民衆もすっかり慣れてしまった昨今では、次はあの人か、くらいの反応しかしない有様だ。

かく言う自分もそうで、知らない人と閉じ込められたら嫌だなあだとか、どうせなら亜美と一緒に良いなあだとか、下世話な想像をするばかり。料理の腕を磨くことに意識が行っていることもあったが、あまり真剣に捉えず画面の向こうの出来事くらいにしか考えていなかったのも、被害者へのインタビューなどは聞き流していた。

だが、今となってはもう少し真面目に考えておくべきだった、と非常に後悔している。

「えー……これから、どうしようか」「どう致しましょう……」

白を基調とした殺風景な部屋の中央で、唯一置かれた家具であるベッドに腰掛ける俺達。

俺と俺の隣に座る亜美は、電子ロックのかかった扉の上に燦々と輝く、『セックスしないと出られない部屋』という、一切隠す気がないド直球で直截な看板を眺め、呆然と呟くのがあった。

昨晚の記憶は、部屋のベッドに転がり、決意も新たに彼女のために頑張ろう、と思つて目をつぶった所で終わっている。

そんな何の変哲もない日常の次の日、目が覚ると隣には、寝巻ではなく余所行きの服を着、ばっちり化粧までキメた彼女が寝っ転がっている上、あんな看板が掲げられた部屋に閉じ込められているのだから、呆然とするのも当然だと思ふのだが、隣のお嬢様はどうやら違うらしい。内心はともかく、少なくとも外見からは戸惑った様子が一向に見受けられないお嬢様の姿を見ると、段々俺の反応の方が間違っている気がしてきた。

「困りましたね、明日が期限の決済が合ったはずなのですが、間に合うでしょうか……」

「拉致されてまず心配するのは仕事とは、お嬢様は随分と肝が据わってるね」

呆れ交じりで視線を向けると、何を馬鹿なことを、とでも言いたげな視線をこちらに返す亜美。

「私が1つ書類を落とせば、1人の首が飛ぶだけでは済まないのですから当然です。何とかして戻らないといけませんわね……」

「……あれ、でも今日は休みって言ってなかったっけ？」

ふと昨日の亜美の言動を思い出した俺は、浮かんできた疑問をそのままぶつけてみる。

「言いました。真尋が誘ってくれるなら、どれだけスケジュールが真つ黒だろうとその日は休みになるのです。逆を言えば、その日以外は全部仕事ですね」

「流石にストイック過ぎるよ。俺もたまの休みの日くらいはゆっくりするけどな」

俺のためなら時間を作る、と素面で言っただけのける亜美に、照れくささ半分、申し訳なき半分の俺は、その事に反応することなくスルーして会話を続けた。

「朝起きたときはゆっくりするか、と言っておきながら、午後には材料を買いに行つて結局練習を始めてしまう真尋の事が、私は大好きです」

「……まさか、俺の部屋に監視カメラつけてないよな？」

耳に入ってきたのは、俺が亜美に言ったことのない筈のありがちな休日の過ごし方。

俺が修業させてもらっているレストランは大衆向けの薄利多売型の店舗ではないため、仕事の忙しさはまだマシな部類だ。だが、それでも仕込みの量ではなく、質が高い為に労力はそれほど変わらないのだ。仕事が終わった後も、調理技術の練習をしていることも関係し、腕が上がらないくらいにへとへとになる事もしばしばあり、休日は身体の休養に当てるのが殆どだった。

だが、ゆつくりしていると、何かにつけて亜美の事を思い出してしまふ。脳裏に浮かぶ彼女の悲しそうな顔を思い浮かべるた度、心に到来する寂寥感。最終的に、家でも練習し始めてしまふのが王道のパターンなのだ。

こんな休日の過ごし方を亜美に知られるなんて一生の恥な訳で、俺が話していない以上、亜美が知っているはずがないのである。

手段は不明だが、俺のプライベートが筒抜けで殆ど把握されていることに思わず戦慄し、隣に座る亜美を睨みつける。

切れ長の目に憂いの感情が乗り、思案気にベッドで佇んでいるお嬢様。少し肩口にかかるくらいによく手入れされた黒髪が、程よく効いたエアコンの風を受けてふわふわと揺れていた。片手を頬に添え、ほう、とため息をついてポーズをとれば、さながら映画のワンシーンを切り取ってきたかのように様になっている。流星、美人の次期社長として何度もニュースに取り上げられるだけはあるのだが、話をうやむやにしようとしているとなると途端に色あせて見える不思議。

「時計も携帯もない以上、私たちがどれくらい寝ていたのか、今が何時なのかわかる術はありません。なるべく早くここから出る必要があります。」

「話そらさないでくれる？　もしかして盗聴器つけてたりしない？」

「可及的速やかに」

「ねえってば」

「一刻も、早く」

「……わかったよ」

決して目は合わせないが、圧の強いセリフに一先ずその話は置いておくことにした。家を調べる事、と忘れないように心の中にメモをしておき、先を促す。

「それで？　まさか、さつさとセックスしてここを出よう、だなんて言わないよね？」

デリカシーのない発言と見せかけて、正直一番これが心配している点だった。

この幼馴染が手間を何よりも厭い、実直で効率を求める性格なの

は、昔からの付き合いで良く知っている。生まれも育ちも良いが、思い切りの良い幼馴染ならそう言いかねないと思いきる恐る表情を伺うと、お嬢様はじろりと険しい視線をこちらに向けて来る。

「てっとり早いのは否定しませんが、流石の私でもそんな無遠慮な事は言いませんし、羞恥心くらいあります」

「で、ですよねー。ごめんなさい」

一部は認めるんだ、と思いながらも、流石に無神経すぎたので素直に謝った。

普段から、2人きりの時はため口を要求する彼女である。真剣に見てなかったため記憶はあやふやだが、今までと同一犯ならば、この部屋に監視カメラがないのは間違いない。

社会人の嗜みと称してどんな新聞やニュースにも目を通す彼女の事だ、そんなことはわかりきっているだろう。

「でも、実際どうしようか。俺はともかく、亜美がいなくなったのはすぐわかる。捜索チームはすぐ組まれるだろうけど、今までのパターンだとすぐには見つからない場所につれてこられてるんだろうし……」

「それなりのセキュリティが備わっている我が三澄家の屋敷に侵入し、寝込みを攫えるくらいですから、用意周到に準備していたのでしよう。今までの犯行と同じく、足取りをつかめない可能性は高いでしょう。怪しい場所を風潰しに探すのも時間がかかりますし、助けは来ないと思ったほうが良いですわね」

「そうだな……」

そうなると、ここから出る方法を探さないといけないのだが、単純に出るだけなら簡単だった。看板に書いてある方法を実践すれば一発だが、お嬢様が否定したように、それには様々なハードルが立ちただかる。

例えば、今時珍しいくらい古風な三澄家の家柄を考えると、三澄家の長女である彼女とセックスする、ということは、彼女と契りを交わしたことと同義である。つまり、簡単にいつてしまえば三澄家の跡継ぎになる、と解釈されてしまうのだ。それこそが、あの父親が俺を恫

喝してまで付き合いを遠ざけようとした理由であり、彼女が今時あり得ない悪習だと自分の父親を唾棄して激怒する原因でもある。

それに加え、俺個人としても、このまま状況に流されておっぱじめるのに抵抗感を感じていた。

もしこのままセックスするならこちらから誘うべきで、でもこんな状況で初体験は男のプライドが許さない、だとか。

好いた相手とセックスするならもうちよつと雰囲気が良いのもあり。

どうせするなら、風俗嬢相手にでもいいから、少し練習しておきたかったなあ、と後悔したと思えば。

そもそも、こんな部屋に閉じ込められる事になるなら、昨日の誘い乗っしておくべきだった、とか。

複雑な事情と単純な私情が交じり合い、俺の内心は多種多様な感情が渦巻いていた。

よくよく考えなくても、付き合い始めてキスですら一度しかしたことの無い恋人と2人きりの空間である。しかも、ここなら誰にも邪魔されず、脱出するためだから仕方ないという、非常に優秀な言い訳のおまけつきだ。

脱出方法がほぼ1つしかないこの部屋で、非常にプロポーションの良い亜美と一緒にいると、むらむらとしてしまうのも当然だった。

よろしくないとは思っても、下世話な思考が頭を埋め尽くす。

悶々としていた俺を余所に、考えを纏めたのか亜美はすつくと立ち上がる。

「真尋とセックスするのが一番確実に早いのは間違いありませんが、それは最終手段ですわ。私だって、こんなシンプルで何も無い場所じゃなくて、もっとシツクな雰囲気なホテルのスイートルームで、貴方から結婚を申し込まれて、熱いベージュを交わしながら貴方のペニスで処女喪失したいとか、希望はあります」

「言い方ア!! いやいや、もっとお嬢様らしく言葉を飾ってくれよ、羞恥心はどこ行ったの!!」

「貴方しか聞いていないですし、これくらいいいじゃありませんの

……」

私にだって羞恥心はある、とつい先程言っておきながらこの発言である。

これで顔が真っ赤にでもなれば可愛げがあるのだが、事も無げに全くの無表情でされては冗談なのかも判別できない。本当に困ったお嬢様である。

俺の必死のツツコミにも面倒だなあ、という感情を隠さず表に出す亜美に、俺はもうため息を隠そうともしなかった。

昔からの付き合いで、この羞恥心の欠片もない言動も慣れたもの。とはいえ、もう良い大人なのだから、もう少し本音を隠す事を覚えて欲しいものだ。

「とはいえ、このまま唯々諾々と従うのも癪です。一先ず、この部屋を一通り探してみましよう。もしかすると、犯人自身が閉じ込められてしまった場合に使う、脱出用の道等があったりするかもしれません」  
「ダメで元々、やるだけやってみますか……」

処女喪失というお嬢様らしからぬワードが口から出た衝撃ですっかり気疲れした俺は、亜美の提案通り何も無い部屋の搜索を開始した。

亜美の指示で、俺がベッド回り、亜美は部屋の壁を見てみることに。ベッドの下を覗き込んでみたり、マットをひっくり返してみたりと、何か隠されていそうな場所を探してみるが、何も出てこなかった。「収穫は無さそうだな……」

そういった緊急用の対策があるとすれば、普通に使っているには気づかないような所に仕込むのが基本である。俺が脱出ゲームのプロだったら話が違ったかもしれないが、別に隠し部屋や装置などを見つけない専門でもない自分たちでは、何も見つけられないのは当然の帰結だった。

というか、ベッド以外に本当に何も無いのである。

強いて言うなら天井に取り付けられたエアコンと照明があるが、それにしたってベッドに乗ったところで手が届く高さではない。

いよいよ本当に、亜美とセックスするしかないのか、と期待半分、申

し訳なさ半分の複雑な感情を抱いていると。

ガコン……

「あら、外れたわ」

「え!?!」

物音とともに聞こえた言葉に振り返ってみると、亜美が立っている前の壁の一部がはずれ、四角にくりぬかれた空間が露出していた。

慌てて駆け寄ると、40cm四方の大きさの空間の中央に、赤いボタンがポツンと置かれている。

「隠しボタン……? もしかして、これ押せば扉開くのか?!」

「継ぎ目もない、精緻な作りでした。今回はたまたま気づけましたが、判然とあるのかわからない手探り状態で探していれば、見つからなかったかもしれません。これだけ精巧に隠していたのであれば、可能性はありますね」

押ししてもびくともしない取っ手のない扉も、これなら開くかもしれない。

物は試しとばかりに亜美が押ししてみると、カチリ、と仕込まれた回路が切り替わる音に続き、カシユ、と空気が抜け、何かが開く音が耳を打つ。

「おお!?!」

これはまさかあたりを引き当てたかと、期待とともに背後を振り返る。だが、唯一の出入り口の扉は閉じたままだった。

「あれ……?」

「おかしいですね。確かに音はしましたが」

扉に近づき開こうとしてみるが、押ししても引いてもびくともしない。どうやら、扉のロックが外れた音ではなかったらしい。

「まさか、空調が切れるとか危ないスイッチだったんじゃない……」

「……? 真尋、ちよつと」

「ん? どうし……」

何も考えず押したが、もう少し考えて動くべきだったかと後悔していると、背後を振り返っていた亜美に肩をたたかれ、後ろを向くよう促された。



何事だと部屋を見渡してみると、俺は音の原因を察し、言葉を失った。

「嘘だろ……」

視線の先では、扉のない3方向の壁の丁度腰辺りの高さの一部分が開き、中に隠されていた物を露出させていた。どうやら空気の抜けるような音は、この隠し扉が開いた音らしい。そして仰々しく隠されていたのは、大量の大人の玩具だった。

アダルトグッズと言われた時始めに思いつくであろう、デイルドやピンクローターに始まり、鞭や拘束具などといったSMグッズ、更には栄養ドリンクのように見える精力剤なども置いてある。

更にはピンクに変わったライトも合わさり、やけにフカフカなベッドだけしかなかった悲しい部屋は、ボタン一つで様変わりしていた。頭に浮かんだ単語に、俺は頭を抱える。

「場末のラブホテルかよ……」

「セックスを促すという目的であれば、回りくどい手段だとはいえ、脱出に繋がる一手に違いはありませんね」

頭が痛い俺とは裏腹に、興味深そうにそれらの玩具を見回している亜美。如何にお金持ちで若干常識が世間からずれているお嬢様とはいえ、これらの名前くらいは知っていると思うが、生で見たのは初めてなのだろう。デイルドを手に取り、興味深げにまじまじと見つめている。

「これがデイルドですか。初めて見ましたが、リアルすぎて気持ち悪い物から玩具にしか見えない物まで様々あるんですね。これがヴァギナに入ると思うと若干怖い気もしてきます……」

「こんなの入るのかってサイズもあるな。これなんて腕より太いし」  
この一角には、多種多様なデイルドが所狭しと並べられていた。種類が豊富なのはデイルドだけではなく、ローターやSMグッズ等も、それら一系統だけで意味不明なくらい数が揃っている。金額にすれば優に7桁は超えそうなラインナップに冷や汗をかく俺に対し、物怖じせず物色する亜美。

ラインナップの中には貞操帯まであり、これだけ豊富な品揃えなら

ば、どんなニーズにも答えられること請け合いだ。

しかし、本当にセックスを促す効果はあるのか？ 逆にそれ以外の行為助長させてないこれ？ と首を傾げていると、亜美が疑問を投げかけてくる。

「真尋、このバンドのついたデイルドは何です？」

「ん？ ああ、それはペニスバンドだよ。女性同士でする時に使ったりするんだよ」

AVなどでおなじみの物を見て俺はそう答えたが、主に、という言葉は飲み込んだ。ふと頭を過つたのだ、男女が逆になると、その行為をセックスと言い張ればセックスじゃないのか、と。

処女喪失シーンに異様なこだわりがある彼女の意向を汲み、希望に沿ってあげたいのはやまやまだだったが、俺に後ろの穴を掘られる趣味は無く、流石にそこまでして彼女の夢を守ってあげようという気概はなかった。下手に亜美に知恵をつけさせ、そうなってはたまらなかった。これを正直に言うのは優しさではなく自爆、勇気ではなく蛮勇というんだよ。

俺の返事を聞いて手元の黒革のベルトに突き立った黒いシリコンのデイルドを見、ふうん、と気のない言葉を零す亜美。

「成程。つまり、これで真尋のアヌスの処女を奪えば、私はこんなところで処女を失わなくても良いというわけね？」

「ああもう、折角言わなかったのに、何でそこに気づいてしまうのか……!!」

「大丈夫、初めては優しくしてあげる……」

無表情ながら、ちよつとわくわくしていそうな亜美の瞳に、寒気が全身に駆け巡る。

ベルトを腰に巻き、かちりと股間にペニバンを固定する動作は淀みなく、どう考えても未経験者の動きじゃなかった。

え、まさかとは思うけど、処女だけどころかという経験は豊富だったかチ？

「落ち着け亜美、話せばわかる……」

「ふふ、冗談よ。私がそんなことするわけないじゃない。真尋も怖が

りね」

「冗談って言いつつ、片手にローションしつかり握りしめてるの止めてくれないかな……」

じわじわと後ずさる俺に笑いかける亜美は、腰に取り付けたペニバンを外し元の場所に戻すが、今1つ信用ならない俺は警戒を解かなかった。

体格差はあるから抵抗することは出来るかもしれないが、万が一ということもある。他のアダルトグッズを物色し始めた亜美を常に視界の端に捉えるようにしつつ、俺も何かないか探そうと視線を動かし始めた。

だが、物が増えたとはいえ所詮は大人の玩具。脱出に繋がるようなものがあるわけがなく、亜美が面白そうな物をピックアップして俺に見せに来るだけだったのだが、最後に持ってきた怪しげな薬で話の流れは一変した。

「なにそれ」

「TS薬です」

「TS……?」

「TSです」

耳馴染みのない言葉に聞き間違いかと思い聞き返すが、答えは変わらない。

透明な液体が収められた瓶には、怪しげで目に眩しいピンク色のラベルが張られている。そのラベルにはでかかど『TS薬』と書かれており、文字の周囲には♀と♂の性別記号が乱舞している。

「媚薬じゃないの?」

「違いますね」

亜美がこの飲み物らしき何かを取り出してきたところには、他に精力剤や媚薬などといった薬が収められていた。てつきりその部類なのだと思っただが、断言した亜美としては違うらしい。

「ここに書かれている効能を信じるのならば、服用者の性別を変えてしまう薬ですね。TS、つまりはTranssexual(性転換)薬という訳になりますか」

「TSって、そんな非現実的な……それ一本飲んだくらいで性別変わるなんてありえないでしょ。ジョークグッズなのかな」

「ちなみに、いろんな種類があるようですよ。今私が持っているのは男性が女性になる男性用、後はその逆の女性用に、身長を増減させるものまで色んなものがありました」

「無駄に凝ってるなあ、たかが媚薬で」

栄養剤ほどの大きさのそれを受け取り、手に取ってみる。ラベルの裏、効能と書かれた欄には確かに性別転換薬、と律義に書かれており、種別の欄には♂↓♀の記号が書かれている。

「折角だから飲んでみませんか？ これだけ種類があつて何も試さないというのも勿体ありませんし、効果が本当なら女の子になった真尋も見てみたいですし」

「他人事だと思つて勝手だなあ……どうせ効果なんてないだろうし、飲むくらい良いけどさ」

酔いそうなくらいピンクな照明に瓶の底を透かして見るが、何か沈殿している様子もない。中身はほぼ間違いないく栄養剤が精力剤で、酷ければ市販の飲料水を詰め替えただけに違いない。

さつきからちよくちよく話にフェードインしてくるペニバンで掘られるより遥かにマシだと思い、パキパキと音を立ててアルミの蓋を開き、中身を一気に煽る。

栄養ドリンク特有の変な甘みもなく、存外にすつきりとした味わいだった。この爽やかさは、スポーツドリンクだとか柑橘系の炭酸飲料の後味に似ているか。量が少ない事もあり、一気に胃の中に納まった。

「うん、思ったより美味しいなこれ」

「どうです？ 何か違和感がありますか？」

手を開いたり閉じたりしてみても、特段変な感触はない。手足の痺れや倦怠感もなく、至って正常だ。

ほらやっぱり普通の飲み物じゃないか。

深く考えずに飲んでしまった俺は、問題なからうと樂觀的に判断する。

「特にないね。体が火照ってきた訳でもないし。いやまあ、そんな速攻性のある薬だったらやば——」

視界がぐらりと揺れる。疑問など浮かぶ暇もない。考えなしに行動した罰が当たったのだろう。

異常なさそうだし、亜美も飲んでみたら？

だなんて言葉を紡ぐ前に、俺の意識は敢え無く消え去ったのだった。

目が覚めると、俺は女の子になっていた。

まさしく三流以下の書き出しで、もし俺が編集だったなら、一目見ただけで駄作以下の何かと弾くに違いない。それだけありふれており工夫の欠片もないこの表現は、限界を迎えつつある俺の精神がろうじて捻りだした、端的で的確な現状の説明だった。

「くそ、なんだよこれ……」

結論としては、亜美に促されて飲んだTS薬とやらは本物だったのだ。目が覚め、戸惑いと共に出て来た声と真っ白な肌、そしてTシャツの胸部を押し上げる何かの感触、更には心もとない股間の感覚に、俺は直前に飲んだ薬のラベルを思い出し、驚き慌てふためいた。

何せ、身長こそ変わっていないが、体がいつの間にか女の体になっているのだ。亜美程ではないがしっかり胸は膨らんでおり、髪は勝手に伸び、何ならちよつと手触りが良くなってるし、声もかわいくなってる上、更には若干割れていた腹筋がなくなり、代わりに腰がくびれていたり、押し寄せる怒濤の展開に理解が追いつかなかった。

予想外の事態に動揺し、騒ぎ立てている当事者に対し、一部始終を見ていた傍観者はというと、極めて冷静だった。突然倒れた俺をベッドに横たえた後、変化の様子をじっくり観察していたらしい。ちなみに、変化は胸から始まり、そこから全身に波及するように変化していったという。なんでそんな冷静なんだ。

そして今は何をしているかというと、似合わない洋服を全部引んむかれ、ベッドで仰向けに寝転ばされ、亜美に全身を観察されていた。

「……」

「う、うう……」

新しい「俺」の造形を確かめるように、視線で全身をくまなく走査する亜美。無表情で真剣に俺を観察するのは結構だが、茶化す訳でもなくまじまじと見られるのは、いくら男とは言え恥ずかしいものがあった。これなら、まだからかってくれたほうがマシだ。

「あの、まだ服着ちやだめですかね……?」

「ダメです。しかし、見事に女性の体になってますね。顔の造形も元の原型を残しつつ、体は確実に女性のものになっている。貴女の双子の姉妹と入れ替わったと言われたほうがまだしっくり来るレベルです。一体何を言えば実現できるのか、不思議でしょうがありませんね……」

裸ということは胸も女性器も丸出しだということ、恥ずかしいところが全開なのである。付き合ってる女性に、男性器より先にできたばかりの女性器を見られてしまうのは、男として恥ずかしさの極みなのではなからうか。しかも、まだ現実が受け入れ難く、本人すら見ていないあそこを見られているという事実が、より一層俺を羞恥地獄に陥れてくる。

亜美だけ服を着ていることもあり、戸惑いより先に気恥ずかしさが勝ち、何だか妙な気持ちになってくる。

多少恥ずかしがるのが当たり前なのに、じつとこちらを見続けている亜美に居心地の悪さを感じ、すっと視線を逸らしたその時。

ぴとっ

「ひあッ!？」

「お腹に触っただけです。恥ずかしいから喘ぎ声出さないで下さい」

「あ、喘ぎ声じゃないっ!!」

ひとりでに出た声に頬が熱くなる。相変わらず無表情ながら楽し気な様子の亜美にさすさすとお腹を撫でられ、くすぐったさにぴくぴくと全身が震えた。

「ん、んんっ……くふっ」

「ふむ、真尋の弱点にくすぐりはなかったはず。肌も色白になってますし、これはもしかしなくても、ピーリング処置した後のように皮膚が敏感になっているのでしようね」

「なる、ほどおっ」

今までの人生で感じたことのないようなレベルのくすぐったさに、腕を噛み齧にしても声を堪えられず、ぽろぽろと漏れてしまう。

その後も、ふにふにとお腹を押してみたり、胸を揉んでみたりと、全身を隈なく調べていく亜美。

亜美にそういう意図がない事はわかるのだが、表面だけ擦る様なその触り方は、新生したせいで敏感になっている全身の神経を、否応なく高ぶらせていく。

触診が粗方終わったところには息も絶え絶えで、全身汗でずぶ濡れになつてしまつていた。

「はあ、はあ、はあ……」

早鐘のように鳴る心臓の鼓動が、頭に煩く響く。かいた汗は肌を伝いベッドに染み込み、僅かに甘い香りを発していた。

嗅覚にとらえたのは、男の発する精悍さを感じる匂いではなく、まるで若い女性の放つ甘く怪しい香り。こんな甘つたるい香りを発しているのが自分だと理解が至ると、噴き出る汗の量はまた増える。

「この甘酸っぱい香りは、体臭まで変わつていると見ました。どうやら、体の中までしつかり女の子になつているみたいですね」

「いつそ、殺せえ……」

すん、と鼻を鳴らす亜美が視界に入ると最早羞恥の極みで、腕で目を覆い隠し現実から逃避した。しかし、この探求心の塊はそれでも逃がしてくれない。

つつ……

「ひあぁッ!!」

未だに直視できない下半身から、全身の神経に電流が走る。

目隠しを解き慌てて下のほうを見ると、亜美は俺の僅かに毛の生えた女性器に指を伝わせ、周囲に浮かんている汗以外の何かを掬い取つていた。

「にや、にやにをっ!」

焦りでろれつが回らない口で戸惑いを口にするが、亜美は止まらな。人差し指に乗った液体の匂いを嗅ぎ、口に含んで真剣にティステイングをしていた。

「ふむ、味も匂いも愛液そのものですね。男性器から変化したらから匂いや味も違うと思つたら、そんなこともありませんし。恐らく、内臓まで女性の物に変化しているのでしょうか。もし実用化されていれば、ノーベル賞は堅い世紀の発明ですね。そんなものを玩具の中に混



せているのだから、とても興味深いわ」

「もう好きにして……」

俺の抗議は実ることなく、羞恥心等よりも諦念の方が勝った俺は、すべてを投げ出したのであった。体の隅々まで徹底的に精査されたのだった。

俺の大切な何かを犠牲にしたおかげで、亜美の好奇心は最後まで満たされたようである。

「満足しました」

「それは、何より……」

最終的にM字開脚であそこを割り開き観察されるまでになった俺に、羞恥心など残っているわけがなかった。この部屋には鏡がないから見る術もないが、精神的に疲れ切つてベッドに肢体を投げ出した今の俺は、死んだ魚のような目をしているに違いない。

ぐったりとした俺とは対照的に、肌をてかてかときかせている亜美は、ベッドの端に腰掛けながら、TS薬が入っていた瓶を持ち上げる。「この薬を作った人間は紛れもない天才ですわね。これだけ急激な体の変化があれば、普通副作用があつてしかるべきですが、心配していた副作用もありませんでしたし、ラベルの表記通りなら何の心配も無いでしょう。一安心ですね」

「もしかして、全身触つてたのはそういう……？」

「当たり前です。ふざけ半分で飲ませたつもりの薬がまさか本物だなんて誰も思わないでしょう。貴方の体に何かあれば一大事だと思い、真剣に調べていたのです。解放されてから詳細な検査は必要でしょうが、一先ず差し迫つての危険は無さそうでした」

「亜美……」

心外だとばかりに拗ねた表情の亜美に、俺は感動しきりだった。てつきり俺は、亜美が知的興味を満たす為に弄んでいたとばかり思っていたのに、そうではなかったのだ。俺の暫定恋人は、主人公がTSする物語にありがちな、そんじよそこのTS女性の幼馴染とは格が違ったのである。

「勿論、女の子になった真尋に興味があつたのは否定しませんが」

「そうだよ、まあそれくらいはわかるよ」

「ただ触ってるだけで官能的な声を出してしまい、恥ずかしさで顔を真っ赤にする真尋が、それはもう可愛くて可愛くて。私は満足です」  
「恥ずかしいから止めて……」

と思っただらやっぱり違った。さも良い事をしたかのようにほっこりした表情をされても、された仕打ちに恥ずかしさがこみ上げるだけだった。表情を見られなくて、ベッドにうつ伏せになって顔を埋める。男の時とは違い、むにゆりと潰れる胸の感触が気持ち悪い。

薬1本で性別が変わってしまう以上、それ以上の事が起こってもおかしくない今の状態で、すぐに危険はないとほっと一息つけたのは事実だった。

「ありがとう、亜美」

「元はと言えば勧めた私が悪いのですし、お気になさらず」

笑みを湛えてこちらを見やる亜美のあまりの可憐さに、羞恥以外の感情で頬が染まるのが自分でもわかった。

昔から無表情のイメージが強く、たまに受けているメディア取材でも営業スマイルの1つも見せないことから、仕事人だとか冷徹な美女とあだ名をつけられがちな亜美。

高嶺の花に違いない美女が、俺の前でだけ見せる普通の女の子らしい表情。他の誰も見た事のない表情を俺が引き出せていることに、彼女が見せてくれている事に、俺は堪らなく嬉しくなってしまう。なんて単純な男なのか。

だからこそ、俺は頑張りたいのだ。早く彼女の希望に添い、彼女の父に認めてもらって、大手を振って付き合えるように。その為に俺は頑張ってきたのだから。とんでもない目にあっただが、お蔭でその目標を改めて自覚出来た。

そうとなれば、一刻も早く男に戻りたい。女などになって寄り道している場合ではないのだ。

「さて、そろそろ男の体に戻りましょうか」

「え、戻れるの？」

「ええ、戻れますよ。その為に問題がないか、貴方の体を調べたのです」

から」

俺の心を読んでいたように、タイミングが良い亜美の話に、俺はがばりと体を起こす。

亜美はすつくと立ちあがると、TS薬の入っていたスペースに近づいて行く。

「この薬の効果は半永久的に続き、目立った副作用も体の変化に伴う倦怠感だけ。元に戻るなら、副作用が無いことを確認したうえで、変化してしまったときは逆の薬……つまり、女性用のTS薬を服用すれば良いんです」

「なるほど、完全に女の体になってるから女性用で良いのか……」

聞けば納得だが、戻るためとはいえ女性用を飲む羽目になるのは若干複雑だ。

亜美はTS薬を手に取り、ラベルの注意書きをのぞき込む。

「でも、それこそ副作用とかあるんじゃないの？ さつき飲んだばかりだし」

「注意書きには特には。むしろ、元に戻る場合は飲めと説明に書かれていますし大丈夫でしょう。まあこれが嘘なら大問題ですが、今更こんなところで嘘をつくメリットなんてありませんし……」

亜美の説明に、俺は納得に納得を重ねる。確かに、俺たちをここに閉じ込めた犯人の事を考えると、その可能性も薄いのは当然だった。今までの携行から察するに、この愉快犯はただ2人をこの密室に閉じ込めるだけで、俺たちに直接手出しをするわけじゃないのだから。

「しかし、面白半分て互いに飲まなくてよかったですね。もし飲んでたら、性別が入れ替わった状態で外に出る羽目になりましたし……」  
「本当にね」

俺も亜美が男になった姿に興味が無いわけではないし、飲まされた腹いせに飲ませ返してもおかしくない。亜美が語る光景も実際に十分あり得た未来であり、俺はぞつとした。だって、男女入れ替わってるってことは、仮に亜美と結婚することになれば、女になったままの俺は男になった亜美とセックスして、最終的には子供を産むことになる。想像できないレベルの話じゃないのがまた、ぞつとしない所

だ。

「そうですね。視界が埋まるほど性玩具はあるくせに、コンドームは一つも見当たりませんし、ここでやってしまえば子供ができてしまう可能性も無きにしも非ず。そうなれば、元女社長が元男の恋人を孕ませて、責任取って出来婚、だなんて、醜聞が……」

「どうしたの？」

徐々に言葉尻が弱くなる亜美を不思議に思い、薬棚の前で立ち止まる彼女を見やった。彼女は返事も返さず、俺が飲んだ薬の片割れを持ち上げたまま、フリーズしていた。

感情を見せないための無表情。仕事中や気を許していない人間がいるときに浮かべているその表情は、今時時代錯誤な、帝王学だとかいうよくわからない教えを父親から受けてきたせいで身についた、彼女の悪癖だ。

長年被った仮面の下の感情は、普通の人間では察するどころか想像すら出来ないだろう。だが、小さな頃から接してきた俺なら、彼女の微妙な感情の揺れも読み取ることができる。

「あ、亜美……？」

読みとれるからこそ、俺は困惑していた。憶測でしかないが、何故か彼女は今、人生を左右するレベルの大きな決断をしようとしているようなのだ。

なぜそんなことを断言できるのかというと、過去見たことがあったからだ。俺が切り出した別れの言葉を聞いた彼女が聞いたその時。20年を超える付き合いの中で、たった一度だけ、見た事がある亜美の表情に、嫌な予感が走る。

「……」

俺の問いかけには答えず、彼女はもう一本別の薬瓶を手に取ると、俺に歩み寄り、二本の薬を差し出した。

右の手のひらに置かれているのは、一本は最初に飲んだピンク色の物とは対照的な、青いラベルの薬。亜美の話通りなら、飲めば男に戻れるという、俺が求めてやまない物だ。

だが、左手に乗っている物がどう考えてもおかしい。中身がピンク

で、『狙った女を絶対に堕とす!!』、『女性が雌に変貌する……!!』等と怪しげな文言が踊る、『姫殺し』と銘打たれた小瓶。どこからどう見ても、立派な媚薬だった。しかも女性用。

「え……？」

「選んでください」

「選ぶって、何を？　どちらを飲むかってこと？」

こくりと頷く亜美に困惑しながらも、俺はTS薬の方を指さした。

「どちらって、そりゃこつちだよ。俺は男に戻りたいし、どちらにせよ、女同士のままじゃここから出られないし」

当然だった。確かに、この体でやり残したことは多い。折角女の体になったからにはやってみたいことはあるし、多少勿体ない気もするが、亜美が同じ部屋にいる状況でやれることではないのである。

先ほどの彼女の表情は、俺の気のせいだったのか。

ふざけているのかと思ひ、溜息をつきつつ窘めるように喋っていると、亜美はそうではないとばかりに首を降る。

「確かにその通りですが、もつと広く捉えてください」

「広く……？」

「そうです。私が聞きたいのは、この2本のどちらを飲むかではなく。男に戻るか、女性のまま生きるか、という話です」

「ええ……」

やはり、真面目なふりをしてふざけていたパターンだったようで、大事だと覚悟して緊張していた体に、どつと疲れが来た。大方、媚薬を見つけて俺の痴態を想像し、男に戻るのが勿体なくなった、といったところか。俺の制止も聞かず、嬉々として全身を弄っていた事を思い返すに、この展開も当然といえば当然かもしれない。

先ほどは俺の体の確認、という名目があったとはいえ、今回ばかりは許すわけにはいかなかった。

媚薬を飲んだとなると、先の身体検査以上の事に発展することは間違いない。既に十分恥ずかしい姿を晒している気がするが、仮にも男として、女の体でイク姿を彼女に見られるのは気まずいどころの話ではなかった。

俺に被虐趣味はないし、至ってノーマルな性癖しかないのである。いい加減にしろ、と口を開こうとしたが、批判の言葉は紡げなかった。至極真面目な表情の亜美を見て、冗談ではないことを察したからだ。

「……なんでそんなことを言うのさ」

「真尋。貴方は、あの日の事を覚えていますか？」

俺たちの間で『あの日』という言葉は、ある一日の事を指す。

彼女に交際を申し込み、快諾された翌日。どこからか話を聞きつけた彼女の父親に呼び出され、関係を断つよう脅しを受け、悩んだ末に別れを切り出したその日。

先程思い出したばかりの、すつと冷え切った彼女の表情が、再び脳裏に蘇る。

「当たり前だろ。亜美に告白した、次の日だよな」

「では。私が駆け落ちしようと言ったことも、覚えていますか？」

「……それも覚えてるよ。忘れるほうが、どうかしてる」

あんな父親の事を聞く必要なんてない。

二人で駆け落ちしよう。

彼女が言った言葉、そして自分がした返事は、昨日のこのように思い出せた。

「あの男の人を見る目は確かです。真尋が家族の事を大切にしている、それを盾に取れば、たとえそれが嘘だとわかっていても逆らえないことを、よく理解しています」

ギリ、と歯ぎしりをする亜美。

「あの男の考えることなどお見通しです。きっと貴方に、事あるごとに『責任』という単語を繰り返したことでしよう。会社が潰れたらどうする気だ、路頭に迷う人間にどう謝罪する気だ、などもありもしない事の責任を押し付けた挙句、その覚悟がないなら娘のためにも退け？ 私を出汁にして真尋から別れを切り出させようとするなど、言語道断です!! どうせ自分が選んだ人間しか認めない癖、もつともらしく別れさせるために小細工を弄する性格に、心底反吐が出る……!!」

当時の事を思い出したのだろう、怒りのあまり全身を震わせている亜美の視線は、壁を貫き、どこかにいる彼女の父に向かっていた。

しばらくそのまま見つめていた彼女だったが、ふっと怒気が収まると、俺へと視線を戻す。

「あの時、私が駆け落ちを提案しても、真尋はうんと言ってくれませんでしたね」

「それは……」

「いいのです。私も、うんと言ってくれるとは思っていませんでしたから」

彼女は言い淀んだ俺に対し、攻めているわけではないのだとすかさず補足する。

「そう、真尋はそんなに無責任な人ではないのです。そんなところで、すべてを投げ出すような人間ではないのです。だからこそ、真尋が自らの夢と私の願いを叶えるために、頑張ってくれていることは一番身近で見えてきた私がよく知っています。筋を通し、成果を挙げることで正々堂々と私の父に認められようとしてくれていることは嬉しいですし、心から応援しています」

でも、と目を伏せた彼女は続ける。

「その一方で、父があなたの事を認める事がないことも、私はよくわかっているのです」

「亜美……」

彼女の熱に押され、引け目のある俺は黙り込む。

「ずっと、考えてきました。どうすれば貴方と結ばれることができるのか。あの男に、私達の交際を認めさせることができるのか。散々考えてきて様々なことを実行しましたが、須らくうまくいかず、最近では見合いを強制される始末です。そうした時に、戯れにこう思った事があつたのです。どうして私と真尋は、女と男だったのか、と」

唐竹を割ったように直截な言い方を好む亜美にしては迂遠な言い回しと、目の前に差し出されたそれらが頭の中で結びつき、俺は理解してしまふ。亜美が今、何を言おうとしているのかを。

「もし私が男で真尋が女性だったなら、手をつないで、キスをして、好

きに愛し合って良かったはずなのです。そう、男児が家を継ぐべきなどくだらない事を言っているあの男ならば、結婚して家に来るのが花婿ではなく花嫁なら、諸手を挙げて歓迎されていたはず。そう、父に何を言われようと、私がもし男なら。何をしても、私がすべての責任を取れるのです」

熱に浮かされたように、彼女は言葉を紡ぐ。

「今までは、空想の中の話にすぎませんでした。IF、もしもの話でしかなかった。でも、妄想でしかなかった出来事を、実現する機会が目の前にある。今すぐ貴方と結ばれることが出来る手段が、私の手の中にあるのです」

思いもしなかったも無かった考えだが、確かにそうかもしれない。

彼女の父が俺に語っていたのは、亜美に取り入って新堂グループを手中に収めようとしている男に対し、説教や忠告をかましているかのような口調と内容だった。

幹部層はともかく、トップの経営陣は家族経営に近い形態を取っている新堂グループならば、確かにそう危惧するのも頷けない話ではない。事実、彼女の夫の座を射止めたものは、将来の総帥を約束されるところまで言われているのだから、あながち間違いではないのだ。

そう考えれば、会社を任せられると思っただ人材以外の結婚は認めるはずがなく、経営など考えたこともない俺では到底無理な話である。つまりは、いくら俺が料理の世界で台頭しようと、彼女との結婚には結びつかない、ということになる。

俺の頑張りは、俺自身の夢を実現することは出来ても、彼女との幸せには繋がらないのだ。

「俺が男に戻らないままの方が、全部上手くいくと?」

「100%そうだとは言ってません。私達が普通にセックスして、既成事実だけを作って帰っても、不可抗力という言葉が使えますし、貴方との結婚はぐっと近づくはずですよ」

瞳を通して語り掛けてくる。語らずとも、言いたいことは伝わった。



「俺が女で、亜美が男の方が、万事うまくいく、と……」  
視線を薬に戻す。

亜美の言うことには概ね同意するしかない。単純に考えれば、そうすれば世間体も何もかも全てが解決するのだから、彼女が提案するの  
もわかる。

このまま悲恋で終わる可能性がある今より、男になつても俺と結  
ばれようとする亜美の気概は、視線に宿った感情の深さで理解した。

自惚れでなければ、俺と彼女は両思いだ。彼女の父に何を言われよ  
うと、諦める気が無いのはお互い一致した意見の筈。

男としては情けない限りだが、散々待たせている身としては、彼女  
の決意に応えてやりたい気持ちはある。だが、俺個人として、どうし  
ても最後の一步を踏み出せない理由があった。

「この得体のしれない薬は、世間には流通していない物です。もう手  
に入らない可能性がある以上、これを飲んでしまえば最後、元に戻れ  
る保証はありません」

「後戻りはできない、つてことか」

そう、この質の悪い部屋にあつた質の悪い薬の出どころがわからな  
い以上、この機会を逃せば、俺が男に戻れるチャンスはほぼないのだ。  
加えて、俺だけでなく亜美まで飲んでしまえば、被害者は更に倍とな  
り、二人が元に戻る可能性はもつと低くなる。

これは、俺が男に戻るか戻らないかという簡単な二択ではなく、既  
成事実だけ持って元の人生に戻るか、性別が入れ替わった状態で戻  
り、大義名分を得て婚姻まで一気に認めさせるかという、似ているよ  
うで大きく違う二択なのだ。

ノータイムで選べるはずの2択が、2人の人生を左右する重大な決  
断に早変わりしてしまい、俺は決断できないでいた。

とはいえ、俺自身に關してはどうでも良かった。若干の心残りはある  
れど、彼女と一緒にになれるのであれば後悔はない。一番気にしている  
要因は、彼女の方だ。

「……仮に、の話だ。亜美は一生男になつて、相手が女の俺で良いわけ  
？ その、普通に考えたら、女の幸せつてやつは味わえない可能性も

あるわけだけど」

そも、築き上げた社会的地位や生活基盤で遙か上に行かれていることから、今更男としての甲斐性を振りかざす気はないが、この質問は重要な事だった。俺だって、男として彼女を満足させたい気持ちくらいあるし、彼女がそう思っていてもおかしくない。彼女を気遣ってそう尋ねた俺だったが、心配は杞憂だった。

「愚問ですね。私が生涯を添い遂げようと思う人間は、後にも先にもあなた一人だけです。それは例え、貴方が女性であっても同じこと。私の幸せは貴方と一緒に居ることなのですから、子供はどちらが産もうと関係ありません」

「普通、男が言う台詞だと思っただけだな……」

完敗だった。何の躊躇いもなく言い切った亜美に俺は降伏し、左手に乗った媚薬を手取る。亜美は嬉しそうに微笑むと、残った方の薬瓶を両手で持ち、パキリと蓋を開く。

「逆に覚悟は出来てますか？ 今から真尋は、とんでもなくイケメンになった私に抱かれるんですよ？」

「いや、覚悟はまだなだけどき。その無類の自信はどこから来るの……？」

「何故って、私の家系は美男美女ばかりですし。父方と母方、どちらに似てもイケメン間違いなしですよ」

イケメンになる事を疑いすらしていない亜美は、躊躇なく一気に身を煽った。

確かに、亜美の家は会う人会う人、美人だらけである。父母は勿論、祖母や祖父まで整った容姿をしているだけに、期待は持てそうだ。だが、心は男のつもりで俺からすれば大きなお世話である。

「イケメンは結構だけど、出来たら中性的な感じでお願いしたいな……亜美だと頭でわかってても、男に抱かれるってのはやっぱり拒否感が……」

薬がちゃんと効けば、中身は亜美であっても外見は普通の男になる。言ったからには覚悟は出来ているものの、想像するだけでも寒気が走るし勘弁してほしいのが正直なところだ。できるだけ拒否感を

和らげるためにも、元男に配慮してマイルドな感じをお願いしたいものである。

喋っている間に飲み干した亜美は、空き瓶を仕舞い込むと、何処から取り出したハンカチで口元を拭う。

「そう言われましたも、私にはどうしようもありませんよ。私のDNAに聞いてください」

「わかっているんだけど、亜美ならどうにか出来るかなって……それでどう？ 眩暈とか、どこか変な所とかは無い？」

俺の記憶通りだと、飲み終えた直後に意識がなくなっただけで作用が男女で同じならば、亜美も昏倒してしまうのではないかと心配で声を掛けたのだが、亜美は緩やかに首を振る。

「今のところは全く。貴方のように意識が遠のく気配もありませんし、体が痛むこともありませんね」

「え。まさかとは思うけど、あんな決意しといて、やっぱりなしてオチじゃないよな？」

「そんな締まらない事あります？ 私の一世代の告白は何だったんですか……」

優に一分は過ぎているのだが、未だに変化の兆候は無く、お互いに透かされた気分させられていた。

なんだそれ、まさかここにきて効果なしなのか。気合を入れて媚薬を手を取った俺の気持ちを返してほしい。しかも、単に俺が女になって終わったら、ただ結婚への障害を増やしただけで、女になり損である。

そもそも、なんで俺媚薬なんて受け取ったんだ。よく考えなくても、男に戻らない選択肢をとるにしたって媚薬を飲む必要なんて無いのである。なんでこれ渡されたんだ。

「なあ、なんで俺媚薬持たされて……って、どうしたの亜美？」

一足先に冷静になった俺が媚薬について抗議しようとする、亜美は首をかしげて自分の全身を眺めていた。

「いえ。言葉にはできないのですが、どうにも違和感があつてですね」「だ、大丈夫なのか!？」

「もしかすると、男女で効果時間に差があるのかもしれないね。効果のメカニズムはわかりませんが、精巣等の男女で違う臓器系の変成等で時間に差異が——」

遅れてやってきた変化の兆候に焦る俺とは対照的に、冷静に考察を重ねていた亜美の言葉がふと止まる。訝しんだように眉を潜めていたが、違和感の原因を閃いたらしい亜美は、突然スカートをめくりあげる。

「ふえあつ!? 何してんの、って、え……」

唐突な痴女行為に目を背けようとするが、好意を寄せている女性のエロティックな姿というのは、抗いようのない興味をひいてしまう。顔を横にそらす中で、好奇心と性欲には勝てず、ちらりと見てしまった。そこには俺が期待した通りの光景が広がっていたのだが、同時に強烈な異物感も同居していた。

「ふむ……直接見たのは初めてですが、中々にグロテスクな見た目をしていきますね」

亜美のデリケートゾーンを守護している布切れは、想像通りの潇洒でデザインの良い物であるが、その小さな衣類は今、中から出てきた物ではち切れんばかりに伸び切っていた。

勿論、亜美が今の一瞬で急激に肥えた訳ではない。僅かに見えている真っ白な肌のお腹は、ほっそりと引き締まっているし、日頃スーツを着こなしているスマートな彼女の印象を損なうものでは無かった。では何かというと、原因は股間から生えている何かだった。亜美が持っているわけがなく、俺がつい先ほど失くしたばかりの物。ありていに言えば、ご立派なペニスが生えているわけである。

「え、いや、ええ……!?」

「おかしいですね。真尋の場合変化は胸からだったはずですが、私は股間からですか。多少の差異はあるにしろ、あまりにも他の変化が遅すぎます……もしかして、私には効き目が悪いのでしょうか」

慌てふためく俺とは裏腹に、極めて冷静に考察を重ねる亜美。大規模な改修が入った俺とは違い、股間の一部だけというピンポイントな変化に留まった亜美は、生えてきた男性器を興味深そうにまじまじと

観察している傍ら、飲んだ薬瓶の但し書きを読み始めた。するとしばらくして、亜美は落胆した表情とともにああ、と納得の声を上げる。「そういうことですか……」

「何かわかったの?」

「ええ。当薬の効果には個人差があり、特にA B型の方には効果が薄く、一部変化しか現れないケースがあります。予めご了承ください、だそうです」

「つまり?」

「これ以上待とうと、私が男になることはないということですよ」

「そ、そうなの……」

事ここに至って効果には個人差がありますとは、肩透かしというか何というか。効果は非科学的なくせに、妙なところで現実的で、若干納得がいかない。

「でも、むしろこっちの方が良かったじゃないか。俺的にもそのままの姿の方が安心できるし、二人とも姿が変わってたら、帰ってから俺たちがどこの誰なのか証明しようがないだろうしね」

「それもそうですね。DNAまで変わっているのですよから、何をしようか証明できない可能性は非常に高いですし、結果として良かったのは間違いなかったのですが」

とはいえ、この方が都合なのは間違いない。

男になった亜美に抱かれるより背徳感は薄れるし、俺の精神衛生上大変よろしい。男に迫られるのと女の子に迫られるのでは、ハードルがかなり違うのだ。

少し安心した俺とは裏腹に、落胆を隠せない様子の亜美は、深い深いため息をつく。

「いささか消化不良ですね。やるからには、私がタキシードで真尋にはウエディングドレスを着せる気でしたのですが、このままでは二人ともウエディングドレスを着る羽目になります。どうしましょう、夫婦でパールツクのウエディングドレスというのは、現実的にありなのでしょうか? それとも、竿役は私ですし、私がタキシードを着るのが正しいのですかね。どれも面白そうなだけに、とても悩みます」

……」

「普通に俺がタキシードで良いでしょ。それに、お嬢様が竿役とか下品な言葉を使わない!!」

未だに俺自身の容姿がわからないために、頭の中で繰り広げられる想像図は、男の姿の俺に真つ白なウエディングドレスを当てはめたものになる。ぞっとしない光景になるのも当然で、ウエディングドレスを着るなんてごめんだった。

「そんなに可愛らしい容姿でタキシードを着るおつもりですか？ 馬子にも衣装って言葉知ってます？」

「え、そんなに子供っぽい容姿なの？ 今から見るのが怖いんだけど……」

「制服を着たら完全に学生で、ウエディングドレスがぎりぎりアウトくらい、私たちをパツと見た時、百人が百人、真尋がネコで私がタチと答えると思う、って言ったらわかります？」

「マジか、そんなレベルなのか……」

ウエディングドレスですら浮きそうなレベルなのに、タキシードなんて着た日には、完全に『背伸びした子供』になるぞ、と亜美は言っているわけである。要するに、今の俺は、新卒感丸出しの女子くらいの容姿をしているのだ。亜美が言わんとする程度を察し、俺は愕然とした。

改めて手を持ち上げ、眺めてみる。日焼けしたことのないような白い肌、男の時と比べて随分と細く、頼りなくなった四肢。触り心地の良さそうなお腹と、すっかり寂しくなった下腹部は、成熟していなくとも十分女性的で。

「そうか、今は女なんだよなあ……」

ぼろりと零れた情けない声も、これまた可愛らしく、今更ながら、本当に女になってしまったのだと自覚させられ、心中には複雑な感情が入り乱れる。

戯れで飲んでしまった事が原因とはいえ、この決断は間違っていないのか。亜美は、これで本当に納得しているのか。雰囲気は流さず、お互いに間違った決断をしてしまったのではないのか。

薬はもう無く、後戻りできない事が、思考の迷走に拍車をかける。ぐるぐると思考が堂々巡りを回り始め、鬱々とした気分以身を任せそうになる中、左手から伝わった熱に、反射的に顔を上げた。

「亜美……」

目を上げ俺の隣に腰かけた亜美は、優しく微笑みながら、両手で俺の小さな手を包み込む。

「私はどっちでも構いませんよ。私が真尋を好きになった理由は、容姿じゃないですから。貴方の魅力は、初めて会ったばかりの泣いてる女の子の為に料理を練習してくれる、真摯な姿勢です」

「あ……」

ふと、忘れていた光景が頭にフラッシュバックした。俺と彼女が出会い、俺が料理人を志すきっかけとなった、その光景を。

幼稚園の交流会で、一人お弁当を食べていた彼女。お金持ちの両親は、彼女の為に大層豪華なお弁当を用意していたが、それ故に浮いてしまい、一人寂しそうに食べていた彼女が可哀そうと、俺が近づいて声を掛け、1つ約束をしたのだ。手作りの料理を食べたことのない彼女に、俺が弁当を作って来てあげる、と。

それから仲良くなった俺達は、通う学校は違っても、会う機会を作り、俺は弁当を渡し続けた。年齢を重ねる度に次第にレベルアップしていった内容は、繰り返していく内に習慣となり、弁当から手料理、そしてコース料理にまでシフトしていき、日常的な行為となる。そのせいで俺はすっかり忘れてしまっていたが、俺の無意識は約束を覚えていたのだろう。今も昔も、彼女の喜ぶ顔が俺の夢の原点だったのだ。「どんな形であっても、真尋が隣に居てくれる。それだけで、私は幸せですから」

「亜美……」

恥じる様子もなく、まっすぐに俺を見つめる亜美に、迷いはない。彼女の言葉に答えるように、亜美の両手に空いた右手を重ねる。

「そうだな。弁当を作ってやるくらい男でも女でも出来るし、亜美が良いんなら俺もそれで良いよ」

「ふふ、あの約束、覚えててくれたんですか？」

「今の今まで忘れてたけどな」

いたずらっぽい笑みに苦笑で返す。けなげに覚えててくれた亜美には本当に悪いことをした。文句を言われても仕方ないだろう。

「でも、もう忘れないから。約束したからには、最後まで責任を取るよ」

亜美との関係は、障害が多すぎて中々発展せず、結婚どころか正式に付き合う事ですらいつか実現したい、で留まっていた。

しかし、亜美の話を聞き、彼女の思いを再度知り、性別が入れ替わっても実現したいという彼女の決意の固さを知り、俺は今度こそ覚悟を決めた。

若干話が逸れたり脱線もしたが、今度こそ。

「俺と、付き合ってくれないか。そして、結婚しよう」

「……嬉しいっ!!」

「わっ」

ぱっと明るくなった表情に、華やぐような雰囲気の亜美は、俺をベッドに押し倒した。

彼女のうるんだ瞳に、うつすらと今の俺の顔が映っている。目元のぱっちりとした、少女然とした容姿の女の子は、嬉しそうに微笑んでいた。

「やっと、言ってくれた。もう二度と聞けないかと思ってた」

「ごめん……」

「私も悪いんです。貴方は関係ない、これは私と真尋の問題だと私が断言出来ていれば、あんなことには」

「障害がある方が恋は燃えるっていうだろ？ 終わりよければ全てよしや」

「……そうですね。ここから脱出するためではなく、気持ちを通じ合った上で同衾出来るのは、とても嬉しい事です」

押し倒した状態のまま、ぎゅっと抱きしめてくる亜美。

押し付けられる亜美の柔らかな感触と、むにゆり、と押し潰れた自身の胸の感覚が同期し、奇妙な心地だった。

ゆっくりと近づいてくる亜美の顔に、俺は何をされるのか理解し、



目を瞑り……

「でも、責任を取るのは私ですからね。今から私が真尋の処女を貰って、中出しして一発で胎ませて、真尋のご両親にこう言うんです。お嬢さんと結婚させてください、ってね」

「え、なにそれ聞いてな、うむっ!？」

驚いて目を開いた隙に、亜美は俺の唇を奪い、二度目のキスを交わした。あの時は逆で、突然の彼女は積極的に舌を絡ませてくる。困惑に困惑が重なり、反射的に押しつけそうになるが、思いとどまった。

女である、ということを受け入れるとはこう言うことだ。冷静なようで、直情的な彼女の性格を知らない訳ではない。そして、けっして俺も嫌じゃなかった。

びっくりして硬直していた体のこわばりが抜ける。俺を抱きしめるように両手を背中に回してきた彼女に答えるように、俺も彼女の腰に手を添え、きゅつと軽く抱きしめる。

やっと亜美と思いを遂げられる。嬉しさに浸り、俺はゆっくりと全身の力を抜き、彼女の成すがままになるのだった。

「愛しています、真尋」

「俺も。愛してるよ、亜美……」

どちらともなく出た言葉に、俺たちは嬉しさが零れ、笑いあったのだった。

## 後編（エロ）

「真尋、真尋……」

「んあ、あつ……」

ベッドに転がった俺たちは、ひたすら唇を重ねあうことに集中していた。告白以来に味わった恋人との味はとても甘露で、人の目がないことも重なり、延々と唾液の交換を繰り返していた。いや、仮にあつたとしても、もう俺たちの間に障害はない。そう思うと、さらに行為は加速するのだった。

寝ころぶ俺に覆い被さる亜美。積極的に絡み合う舌。互いの名前をうわ言のように呼び続ける俺達。名前を呼びあうだけで幸福感すら満ちてくる気がして、行為はまだ始まってすらいなのに、胸の高鳴りは益々早くなっていく。

「んう……」

鼻から抜けた甘い声が頭に響く。それが亜美のものではなく、自分が出した声だと気づけるようになった頃には、すっかり体は出来上がってしまった。

亜美の端正な顔が離れると、つつ、とその間に橋が架かる。荒い吐息が互いの顔にかかり、亜美の興奮も伝わって来る。今この瞬間、俺たちは感情も何もかもを共有している。

「はあ、はあ、はあ……」

「ああ、真尋の雪月のように白い肌が、鮮やかなピンク色に染まっていますね。まだキスだけですのに、玉のような汗が浮き出て妖艶な雰囲気すら感じます。こうしてみるとただの幼げな少女なのに、真尋だとわかっているとこんなにも興奮してしまうのでしょうか」

頬を紅潮させ、まるで酔っているかのようにつぶやく亜美。もう我慢できないとばかりに自身の服に手をかけると、するりと着ていた服を脱ぎ捨てた。

亜美の豊かな胸は、上質なシルクを使っているだろうブラジャーに包まれており、亜美が体を動かすごとに揺れ、眼前の俺に強烈に自己主張をしてくる。仰向けに寝転がっている俺からして見ればそれは

もう絶景であり、男として滾るものがあるが、生憎今の俺にモノは無い。代わりに滾るのは、自身で触れたことのない秘奥。体の奥から滾々と湧き出る液体が内腿に伝い、見なくとも濡れているのがわかる。

「懇々と込み上げてくる、この好きな女を抱きたい、満足させたいという耐え難い衝動。これが、男の性というものなのですね……」

だが、興奮しているのは亜美も同じこと。亜美は勢いに任せるまま、ブラジャーを脱ぐことなくスカートまくり上げる。

現れたのは、先ほども見せつけられた限界まで怒張している男性器。下着から半分ほどはみ出た雄々しいそれは、女性として理想のプロポーションを維持している亜美の肉体とは全く吊り合っていない。

「やっぱり、亜美にそれは違和感があるな……」

露出させた亀頭は、ひくつきながら我慢汁を垂れ流している。膨らんだ水滴がぼたりとお腹に落ちると、触れたところからじわじわと熱が広がってくる気がして、言いようのない感覚に包まれる。

浮かべている嗜虐的な笑みも相まって、俺の頭の中にあるどの亜美ともイメージが一致しない。それでも美しいと感じてしまうのは、惚れた弱みなのか、それともこの身体の本能なのか。どのみち、無意識に生唾を飲んでしまった時点で、この後の運命は決している。

「ふふ、それを言ってしまったえば、真尋の方が凄いですよ？ あんなにかっこよかったのに、今じゃ目をとろんとさせて、期待に満ちた瞳で私を見てくる、可愛い女の子……」

「んんっ……!!」

猫にするようにつつ、と喉を指で擦られると、口から反射的に声が漏れる。にんまりと嬉しそうな笑みを浮かべる亜美に、顔が一層赤くなってしまうのを自覚するが、今の俺は俎板の鯉。抗うこともできず、亜美の良いように仕込まれるのみ。

「最後まで、しっかりとエスコートしますからね。一生忘れられない、素敵な初体験にしましょう……?」

「えあう……」

聞いているこつちが恥ずかしくなりそうな台詞は、亜美が考えてい

た理想のシチュエーションか何かなのだろうか。何か言おうとするも、しつかりと目をのぞき込まれて宣言されてしまうと、声帯は機能を失い、意味不明な言葉しか出てこなくなり、胸が高鳴り始める始末。鼓動が早まる胸の突起を、指の腹で軽くなぞられる。

先程までの触診の様に確認するような触り方ではなく、俺の性感を昂らせる為の、紛れもない前戯。

全身に走る男の時とは比較にならないほどの大きな快樂に、口は勝手に開き音を上げ始める。

「んんっ」

堪えきれず上げた声に、亜美の笑み深まり、淫らな遊びは更に加速する。

乳輪をくるくるとなぞり、突然思い出したように突起をくすぐる。むず痒いような軽い刺激を巧みに送られると、発達していかない快感神経が一から目覚め起こされるよう。

抗いようもない快感に、俺は嬌声を上げながらぴくん、と時折胸を跳ねさせる事しか出来ない。

「うつく、ああうっ」

「乳首を軽く弄って上げただけなのに、真尋ったらこんなエッチな声を出しちやって。可愛いわ、本当に可愛い」

「は、恥ずかしいからやめてっ」

馬鹿にされているわけではないのは、うっとりとした表情で一目瞭然だ。それでも、男が可愛いと言われて嬉しいわけがない。抗議の声を上げるが、指の動きは止まらないどころか、むしろ動きは激しくなる。

「んんんっ!! ひあっ」

「いえ、良いんですよ。どんな女の子でも、好きな相手とエッチする時、普段より気持ちよくなつちゃうのは当たり前です。もっと私に、私が大好きな証を聞かせてください」

「ふっ、ふあっ、ん——」

「ん、ちゅ……」

言うことを聞かない口が塞がれる。身体が密着し、吸いつくような

肌の熱と、瑞々しい唇の感触が伝わってきた。

唇を割り入ってきた舌が、こちらの口内を蹂躪し始める。快樂で自由を失った俺は、成すがままに舌同士を絡ませ、受け入れる他ない。

蜜の様に甘い唾液を流し込まれ、こくこくと喉を鳴らしながら嚙下する。鼻呼吸で取り込む空気には、二人の甘い体臭と、亜美から微かな化粧の匂いが混じり、酔ったように視界がぐらりと揺れ始める。

そこに、胸の周囲をなぞる指の動きに時折きゅ、と乳首をつまむ動きが加わった。蕩けていた意識が覚醒し、弛緩しきった体に一気に緊張が走る。

「~~~~~!!」

チカリと視界に閃光が煌めく。きゅつとであそこが締まり、背筋が弓なりに反りかけるが、上に押し掛かれた亜美の体を僅かに持ち上げるに留まる。相手の口の中にまで伸びた舌をじゅ、と音を立てて吸われると、そのまま意識ごと吸引されてしまうかのような錯覚すら感じ、心地良い余韻を引き延ばされていく。

キープされ続けた高みからようやく降りてこられた頃には、下半身からこみ上げる熱に侵され、すっかり体は出来上がっている始末。

「あ………」

つつ、と彼女との間に梯がかかると、無くなった感覚に物欲し気な声が出てしまう。

そんな俺を見て、彼女は柔らかに微笑むばかり。

「女の子の絶頂はどんな心地です？ 私はこれしか知りませんが、イクまでのもどかしさと、いった瞬間の解放感は最高ですよね」

「はっ、はああ………」

余韻に引きずられ、未だに意味のある言葉を吐き出せない口の代わりに、俺は頷き肯定の意を示していた。

亜美の体温から感じる安心感と、女の体から送られてくる未知の快感。初めて味わった絶頂は、男としてのプライドをはるか彼方に追いやるには十分なほどの衝撃を与えた。

気持ち良すぎる。性感帯を触られた訳でもなく、乳首を愛撫されただけで容易に達してしまうほど敏感な体に、俺は一瞬で溺れた。

「でも、物足りないでしょう?」

「う、ん」

前戯ですらない行為であれだけ蕩けそうに気持ちよかったのに、感覚で分かるほど濡れそぼったあそこを触られた日には、どうなってしまうのか。

好奇心と、体の奥から沸き起こる欲求に逆らえず、こくり、と視界を縦に振ってしまう。

「そうですね。だって、まだ女の子の入り口にすら立ってないですから。普通の女の子みたいにクリトリスを弄ったり、膣内を指でくすぐられたりしたら、真尋ったらどうなってしまうのでしょうか……?」

「ふぁ……」

耳元で囁かれる言葉を想像すると、耳がくすぐられるような吐息の感覚以外で、ぞくぞくとした何かが下半身からこみ上げてくる。すりと股間をすり合わせ、亜美に見えないところではしたなくおねだりしてしまう始末。呆気なく女を受け入れてしまう自分への情けなさど、これから起こる事への期待感が入り混じり、想像だけでイッてしまいそうなほどの興奮がとめどなく襲ってくる。

そんな俺に対し、亜美はまだ焦らす。

「ああんっ」

秘泉の上にある肉の芽を、場所を確かめるように包皮の上から触られると、びくびくと軽く痙攣が始まり下半身の制御が失われ始める。

何かをねだるように口は開き、そこにとろりと涎を垂らされると、喉を鳴らして飲み込んでしまう。

「ふふ、喘ぎ方もわかってきましたね。でも、まだお預けですよ。女性の体というのは繊細ですから、いきなり指で弄っては、ひりひりと痛むだけで気持ち良さなんて皆無です。だから、しっかり、たっぷり、ねっとり。もう許して言うまでどろどろに溶かしてから、頂いてあげますからね……」

「あ、あぁ……」

逢瀬の際、彼氏に体を委ねる彼女のように、俺は亜美にやることを

受け入れた。頭の中は彼女から与えられる快楽で一杯で、こくり、こくりと喉が可愛らしく鳴る。

だから、亜美がひっそりと媚薬を口に含み、口づけで俺に少しずつ流し込まれたことにも気づかなかつた。

「ん……」

「んんおっ、あぁっ!!」

徐々に熱くなってきた体。シチュエーションと亜美の手技に、媚薬による強制発情が加わり、思考は与えられる快楽一色になっている。どれだけ感じているのかは、時折跳ね、視界に入る腕の肌の色で容易に察することが出来るだろう。自分が挙げている嬌声など、最早意識する余裕などない。

「あ、あっ、はぁあぁあぁっ!! イック、いっちや……!!」

プシツ、プシュツ!!

割れ目から勢いよく吹き出す愛液。時間感覚が麻痺してきた今、ベッドのシーツはすでにぐちよぐちよで、汗と愛液の比率はとつくの昔に逆転してしまっている。

胸の突起を口に含まれ、舌で転がされながらも片方の胸を軽く揉まれる。下半身でてかてかと輝く宝石は、ずりゆずりゆと亜美の生えたての肉棒で刺激される。俺がイク度にベッドのシーツは水分を含んで重くなり、より卑猥な水音を立てていく。

俺が女の快楽の虜になっているのは一目瞭然だったが、それは亜美も同じこと。

「んんんっ……!! つはぁ、ふうう……!!」

途中までは喋りかける余裕があつたが、玉のような汗が浮かび、息を荒げて艶やかな色気を感じさせると、彼女もまた男の快楽に苛まれているのは手に取るように分かった。

下半身の方から立ち込める、雌と雄の発情臭が混じった香り。股間でぬちゃぬちゃと音を立て、泡立っている液体の正体が、俺の愛液だけではないことは明らかだ。

既に幾度となくイカされている俺に対し、亜美は必死にイクのを我慢しているようだった。

それは、俺をリードすると宣言した事に対してのプライドなのか、男の快楽に溺れるのを嫌ってなのか、それとも俺に自身の理想のシチュエーションを体験させるべく、筋書きに沿って我慢しているのか。どれが正解かはわからないが、少なくとも俺の為に我慢しているのは間違いない。

もう大丈夫だからと抗議の声を上げる。

俺ばかりが享受するばかりではダメだという思いから、何より俺自身に限界だった。

「も、もおいしいから……もう、入れていいからあ」

「ダメ、です……!! もっと喘がせて、とろとろにして、真尋には痛みのない最高の処女喪失を、味合わせてあげるんですから……!!」

「ひぎゅっ!!」

だが、亜美は聞き入れることなく攻め手が再開される。

ぐりゅっ!! と一際強く腰をグラインドされると、僅かに開き始めた割れ目の上を、亀頭が往復する。摩擦で走った衝撃に、押しつぶされたクリトリスからの快感でまた言葉が紡げなくなる。

最早意地なのか、こみ上げているだろう射精感を堪えながらも、決して俺への愛撫は止めない亜美。

ひたすらイキ続けているが、肝心の女性器には快感がやってこない。

一気に盛り上がり一気に覚める男と違い、放物線状にゆっくりと絶頂が持続する女の絶頂感。だが、一番求めている決定的ともいえる止めが来ず、脳裏をじりじりと焼かれているような焦燥感が俺の心の内を占めていく。

「はあう、あああ……」

情動たつぷりに溜息が零れた。

子宮は皮膚越しに男性器を押し付けられ、少しずつ伝わってくる熱が、もったいぶる様に俺の意思を炙ってくる。

咲いたばかりの花園はすっかりどろどろで、ちゅく、と中に入ってくる指を必死に締め付ける。ひりつく痛痒感は等に無い。心臓が下半身に移動したのかと勘違いせんばかりに脈動する子宮と、ひらすら



続くお預け地獄でもう限界が近かった。

切ない。あそこに刺激が欲しい。

頭の中はそれ一色。元男として恥ずかしい等と言う感情はとうの昔に消え去り、心の奥底からどうしようもなく亜美を欲していた。

「ふっ、ああっ!! あっ、ああっ!!」

三度、ちゅぷ、音を立てて中に割り入ってくるしなやかな亜美の指。確認するように、膣壁入ってすぐの天井を軽くなぞられると、とぶりと愛液が零れ出る。当初、快感交じりに訪れていたひりつくような痛みは既に無く、純粋な快樂だけが頭に響いてくる。

びくっ!! と背筋を反らした瞬間、チカツと頭の中に光が灯る。

求めている絶頂だが、決定的な快感ではない。まだ先がある、そう予感させる中途半端な幸せ。

「っあ、みい……」

早く、早くと俺の体と心全てが求めていた。

舌が回らない。言葉が滑り、意思が伝わらない。

慣れない快樂で余裕が無い亜美は、俺の求めに気付きもせず、目の前で下ごしらえが終わっている料理に向かって未だにその包丁を振り続ける。

限界だった。

頭の中がぐずぐずに溶けて全身から発散されてしまいそうで、もうなりふり構ってはいられない。いや、もう沸き起こる衝動のままに行動するしかない。

胸元の突起を口に含んでいた亜美を、俺は抱きしめる。

ぎゅっ

「あ、真尋？」

俺の物とは違い、柔らかで弾力のある胸部が俺のお腹で潰れ、しつとりと汗が滲み、吸いつくような肌ざわり。普段なら夢中になれる刺激も、今は太もも辺りで停止した、どくんどくと脈動する其れに意識を取られる。

我に返った亜美は、上目遣いに俺を見る。見たこともないびっくりしたような表情に、どうしようもない可憐さを抱き、とくと胸が高

鳴った。

「はやく、はやく、おねがいい……」

「んんあつ!! ま、真尋、それやめてください……!!」

嬌声で空気を吐き出しきった肺からは、囁くような声量しか出ない。止んだ刺激に、腰が勝手に蠢いてしまう。自然と、ほっそりとしたふとももで亜美の肉棒をしごく形になる。

突如やってきた反撃に、亜美も喘ぎ声を抑えきれない。

奉仕の素股という体位で奉仕したかったわけではない。それ自体は偶然の産物なのだが、何をおいても今は、股間で時折接触し、くちゅくちゅと音を立てながらやってくる刺激が、その原因が、どうしようもなく欲しかったのだ。

「切ないの、あみの入れたいって、もう、もう……」

「い、入れたいのは山々ですし、私は今すぐにもお願いを聞いてあげたいんですが。もう痛くないんですか？ あそこはヒリヒリしてませんか？」

「痛くないから、これ以上は、あたま、おかしくなるからあ……」

媚びるように甘い俺の返答に、亜美は音を立てて唾を飲み込む。

下から覗きこんでいるのは亜美の方なのに、上から見る俺の方がねだる不思議な景色。

興奮を抑えきれない様子の亜美は、すつと体を起こすと、俺の両頬に手を添えながら小さく呟く。

「本当に、良いんですか？ 充分ほぐれましたか？ 入れてから動かないでって言われても、私、止まりませんよ？ いや、もう止まれませんよ？ 我慢してるのは、真尋だけではないのですから」

荒い息を整えながら、視線を見下ろす。大粒の汗が、ぼたりと頬に落ちる。落ちた端から感じる熱量が、お腹に触れている逞しい男の象徴が、否応なしに俺の期待感をあおる。

「だって、擦ってるだけでもこんなに気持ち良いのに、真尋の中に入れてたらどうなるんだろうって、考えるだけでも射精してしまいそう。でも、目の前の真尋が可愛すぎて、愛おしすぎて、早く真尋の事をぐちやぐちやにしたいってしようがない気持ちも、あるんです」

早口にまくしたてる亜美の瞳はいつになく鋭く、犯す、という強い意志を秘めたギラついた眼光をこちらに送ってくる。

この体を貪られる、という確信を抱かせるには十分なその視線。性的知識のない女性であれば、恐怖を抱き竦んでしまうようなその欲情に満ちたその瞳も、相手が亜美ならとその瞬間の到来を歓迎してしまっている。

その想像以上にでかかった男性器を、中からごりごりと押し広げられながら挿入されたら……

脳裏に浮かんだ痴態で、ぶるり、と身体が震える。

「ふふ、想像するだけでイっちゃったんですね……」

「あ、うう……」

にこり、と笑われたところで、俺が初めてイってしまったことを自覚した。

軽くイキ過ぎて感覚が馬鹿になっているのかもしれない。顔が赤くなっているだろう事もわかったが、尊厳などどうでも良い。羞恥心よりも何よりも先に、亜美の物が欲しくて仕方が無かった。

こくこくと頷くと、もう一度すつと体を離す亜美。額から伝い落ちた汗を拭うと、改めて問うてくる。

「本当に、生でしますからね？ もう私達を邪魔する者も居ませんし、もしできたら、私が責任を取って結婚します。もし出来なくても、貴方の初めてを貰った責任を取って結婚します。ふふ、どちらにしろ、二人でウエディングドレス着て、盛大に結婚式を開いてあげますからね」

亜美が力の抜けた脚を割り広げると、期待で涙を流し続ける割れ目が露になる。

ぴとり、とその口に亀頭を当てられると、興奮度合いがダイレクトに伝わってくる。どくん、どくんと心臓の鼓動とは別に、男性器は力強く脈打つ。くぱり、と開かれた秘泉からは、とろとろと涎が垂れ続けていた。

視線が離せない。耳から入ってくる話の想像と、彼女から味合わせられる女としての幸せのスパイラル。抜け出せなくなりそうな快樂の

渦の深奥に、今正に落とされようとしている。

「行きますよ……」

「う、ん……」

俺が少女のようにか細い声で返事をする、亜美は太ももの辺りを掴み、腰をゆつくり前へと進めていく。

ずぷっ……

「んあぁっ!!」

「んっくう……!!」

甲高く上がった悲鳴が俺で、半ば苦しそうな声が亜美だ。

剛直がめりめりと音を立てながら膣壁を搔き分け中へ中へと侵入してくる。わずかな痛みとお腹に満ちる圧迫感。苦しい筈なのに、不快感をはるかに上回る安心感と充足感が快感を呼び起こし、気づけば勝手に唇が綻んでしまう。

「は、ああああ……」

「っくう、そ、想像以上にきついです……!!」

亜美によつて散々焦らされ解された花園は、おかげさまで涙を流しながら苦も無く呑み込んでいく。それでも、体のサイズに比した膣の狭さは雄としては初心者の亜美にはきついうようだ。気持ち良すぎて入れられただけで蕩けている俺とは違い、慣れぬ快感とぎちりと締めあげる蜜壺による刺激で、亜美から呻き声上がる。

「あっ、あぁっ、あっ……」

「あっくう……!!」

チカチカと頭に過ぎる閃光。びくびくと痙攣する俺の体と連動し、きゅんきゅんと収縮する下半身の穴からは、続々と快感が追いかけてくる。

中に感じる亜美の一物の大きさと暖かき。びくりと震える肉棒の一挙一動がわかるほど敏感になつている膣壁を、亜美はごりごりと傘で刷り上げながら、ゆつくりと進行していく。

コツン、と奥へとあたる音が聞こえたのは、幻聴か。膣の一番奥と先端が接触する瞬間、腰と腰がぶつかりあった。亜美の全長がすべて入りきつたのだ。

「ふっ、ふっ、ああ……」

「ぜ、全部、入りましたね」

ぎちぎちと音が聞こえそうな程詰め込まれたその存在感。下腹部から内臓を押し上げられているような圧迫感が、呼吸を浅くさせる。

不安定だった体に芯が入ったかのような錯覚が、得も言われぬ満足感や充足感を与えているのだろう。どうしようもない喜びの感情に、自然と浮かべてしまう笑み。

「真尋の中、ひだがとろとろと絡みついてきて……動かしてないのに、気持ち良くて仕方ないです」

「あ、あみい……」

「はい。ここにいますよ」

きゅ、と指と指を絡めてくる亜美に、俺は空に浮いていた視線を向ける。

快感を堪えるような表情に、俺も嬉しくなりしつかりと握りしめた。

「動きますよ……?」

「うん……」

恐る恐る腰を引くと、カリ首が内側をひつかきながら外へと後退していく。

男の外からの刺激ではなく、内側からこみ上げる得体の知れない快楽に翻弄され、頭が痺れるような心地になる。

「ふああっ……」

「くっふうふう……!!」

脱力しきつた雌の喘ぎと耐えるような雄の呻き。どちらも音色は可愛らしい筈なのに、込められた感情からはため息をつきたくなくなるような艶を感じさせた。

接合部からは掻き出された愛液がとろとろと流出し、2人の内ももを濡らしていく。抜ける直前でぐ、と亀頭が引っ掛かった瞬間に、ぱちゅん、と音を立てて抉り込まれる逸物の衝撃。たらりと口から零れた液体が、その喜びを亜美に伝えた。

「あ、あつ、ああ、んあつ」

「こ、腰が止まりませんっ。真尋のあそこが、一々纏わりついてきてっ、私を、欲しがってっ……!!」

氣遣うような最低限のピストンでも、湿り気交じりの肌がぶつかり合う音は嫌に耳に響いた。汗の滲む亜美の顔がだらしなく緩む。

止まらない。互いを求める事が止められない。

挿入するたびに握り込まれる、固く結ばれた掌。

時折髪を伝って頬を打つ汗と、ベッドに滴り落ちる涙。

中で絡み合い、締め付け感じられる、亜美の熱と興奮。

言葉に出さずとも、ようやく繋がれた喜びと喜びを、俺たちは全身のコミュニケーションで伝え合っていた。

「ああんっ!! い、いいっ」

「はあっ、はあ、んくうっ……!!」

男が想像している通りの喘ぎ声が、自分から出ている事への気持ち悪さや違和感など、とうにどうでもよくなっていた。ここにいるのは、ただの一組の女と男。見た目が違っても、役割が逆でも、俺にとっては些末事である。

亜美が相手だと思うと、全てが許された。幸せの前では、ちっぽけなプライドなど必要無い。

奥深く、ゆつくりと突きこまれたかと思えば、突然浅いところをかかりとくすぐられる。初めてにしては手慣れた熟練のような手口でどんどんと攻略されていく俺の体。奥を突かれ、その度に頭の中で走る光に意識が飛びかけるが、目の前の亜美の甘い吐息や熱に浮かれた視線で意識を取り戻す。それでも、すぐにイってしまい、また意識を飛ばしかけるのをひたすらに繰り返していた。

もう数えきれないほどイキまくった末、股間の接触部はすっかり泡立った粘液でデコレーションされ、辺りに立ち込める濃密な性臭が部屋中に充満した頃。

「も、う限界、ですっ。出ちやう、出てしまいます……!!」

一層速度が上がる腰の動き。早く浅くなるピストンからは、亜美の焦りが如実に伝わってきた。限界が近いのだろう、常に快感を甘受し

た俺とは違い、ようやく訪れる絶頂の予感に、歓喜の瞬間を期待しているのだろう。

俺は絡めあっていた指同士を解くと、亜美の背中に手を回し、ぎゅつと抱きしめた。

「ま、真尋っ」

「いいよ、そのまま、中に……」

びっくりしたような、はっとした声。

背が小さい分、彼女の胸元に顔を埋める格好になった俺は、上目遣いに彼女の顔を見つめた。

「意味、分かってますよね？ 中に出すって、事はっ……!!」

「じゃなきゃ、言わないっ。女の子のままでもいいなんて、言わないからっ。欲しい、亜美の赤ちゃん、欲しいのっ」

羞恥の極みだった。本来の欲しいの意味とは真逆で、それは俺が授かる方になってしまっている。でも、彼女とつながって以来こみ上げ続けていた衝動は、一度吐き出して言葉にしてしまうと、より強烈な思いとなって俺の中に留まり続けた。

早く、中に吐き出してほしい。それは快樂への欲望交じりだが、心がほとんど彼女から女の幸せを味合わせてほしい、と白状したに近かった。

恥ずかしくて顔を見られず、亜美の豊かな胸に顔をうずめる。

早鐘のように打たれる彼女の心臓の音が、顔を埋める様な形になった胸越しに聞こえる。

返事なんて聞くまでもない。膣の中で、ぐんと大きさと硬さが増したような錯覚。

激しく深くなったストロークに、俺は彼女の胸元でくぐもった嬌声を挙げた。

「っ!! んんんっ!!」

挿入前あんなことを言っていたって、いざその段になったら躊躇いがあったのだろうか。それが俺の言葉で取り払われた今、彼女は真正銘の獣と化した。

好きな女を征服し、自らの物にせんと、雄の威厳を示すべく行為に

耽る。

ギシギシとベッドが軋む。俺の体も、足を彼女の腰辺りに回し、より密着をせがんでいた。

より奥深くを抉るような格好となり、深い快樂電流が脳に走る。

「あつあ、もう出る……!! このまま、一杯出しちゃうと、私との赤ちゃん、出来ちゃいますよつ!? 私の奥さんになる心の準備、出来てますかっ? 私の赤ちゃん生む覚悟、出来てますかっ!」

有無を言わせないシチュエーションだが、俺は心の底からの同意を示した。女の快樂に絆されたわけではない。この姿を半ば流れとは言え、受け入れた時と同じ。幸せな未来の前には、自分の性別なんて些事だった。

こみ上げる快樂に翻弄され、とてもしゃべれない。ぶんぶんと頭を縦に振ると、鼻から抜けたような、隠しきれない喜びの音が頭上から降り注いだ。

「ふふ、わかりました。真尋の赤ちゃん子宮に、今からたっぷり子種を注いであげますからね……!!」

亜美は小さな俺の体を抱きかかえ持ち上げると、下からガンガン突きあげ始める。

「ツ~~~~!!」

「は、あつあ、ぐううつ!!」

明らかにラストスパートに入った亜美。体が持ち上がるほどの突き上げの衝撃を、しっかりと抱えられていることで全身で受け止めさせられている俺は、意識を飛ばさないようにしがみつくことで必死だった。

「真尋ったら、一突きごとに、イッてますね!? 私のお腹、どんどん真尋の愛液塗れになっていきますよ……ツ!! イってる幸せとろとろ顔、私に見せてくれないんですか?」

「!! つあ」

そんな恥ずかしいところを見られてたまるかと、首を横に振り拒絶した。だがその次の突き上げの瞬間、亜美から腰を離され、体にはわずかな浮遊感が。



「んふあっ……!!」

「捕まえました。真尋の可愛らしい顔が、よく見えます」

「う、うう……」

そしてより高い位置で抱き留められ、顔と顔を突き合わせる状態にさせられてしまう。

瞳がキラキラと輝き、雌を犯すことしか考えていない興奮しきった男の表情。見たことのない亜美の顔は、俺が捕食者から被捕食者となった証。そして、それを見て恐怖ではなく快感を覚えているあたり、今の俺はもうどうしようもなく女の体なのだ実感させられる。「真尋が、旦那さんからママになる瞬間の顔、私にじっくり見せてくださいね……」

「んああっ!! んぎいっ!!」

体が浮くほどの強烈なピストン。中から擦り上げられ得られる快感でみっともなく喘ぐ顔を、マジマジと見つめられる。

首を振っても、しっかりと両頬を抑えられ無理やり視線を合わせられる。

きゅん、とお腹の底が疼く。出来たばかりの器官だからこそ敏感で、それらと折り合う術を知らない俺は、その欲しくてたまらない衝動にあらがえない。

「あ、あみい……」

「どろどろの濃厚なスペルマ、真尋の子宮に注ぎますから。私の子種、お腹いっぱい注ぎますからね!!」

「んぐうっ!!」

一層激しくなるピストン。快感の嵐にさらされ続ける意識を、亜美の熱と触感でつなぎ留める。

「まずは真尋のぐい両親にぐい挨拶して、結婚式も上げて、ハネムーンにも行って。増えた家族と一緒にいろんなところに行つて、幸せな毎日を送るんです」

「う、うん……うん……」

とろけた視界に、幸せな未来の日々が過る。訪れるかどうかもわからなかった理想が、形は違えど確かに存在していることに、どうしよ

うもない幸福を覚える。

「赤ちゃんをどつちが生んだかとか、真尋が男かどうかなんて、私にとっては些細なことなんです。私は、真尋のことが大好きですから。安心して良いんですよ、真尋の人生、私がゼーんぶ責任取るんですから……!! だから……」

激しいピストンがぴたりと止む。耐えるのに必死で、周囲と行き来していた視線が、亜美と合う。

ぬるりと、出切る直前まで抜かれた男性器。荒い吐息と興奮で震える背中に回された両手。それらは、間違いなくその瞬間の合図だった。

精一杯、俺も抱きしめ返した瞬間。パァン!! とひととき大きな音を立てて剛直が突き入れられた。

「孕めえ!! 私の赤ちゃん、孕んで下さいっ!!」  
「イツ……くっ!!」

全開にされた蛇口から吐き出される水のように、散々我慢し続けた末にどくどくと吐き出される亜美の欲情の種。直接子宮口に叩きつけられたそれは、灼熱のマグマを流されたのかと勘違いするほどの勢いと熱量を誇った。

媚薬で発情しきった体で味わった数々の絶頂の中で、一番深く高い絶頂は、俺に言葉を忘れさせる。しゃべれないのではなく、言葉が出てこないのである。いや、思考が止まっているというべきか。

恐ろしいほどの絶頂感に頭は真っ白になり、体は勝手に暴れそうになる。だが、それでも亜美を抱きしめる手だけは離せなかった。

内外で感じる亜美の温かさだけが、快感で手足の感覚さえ失いかけている俺の唯一の道しるべだった。

互いに言葉が出ず、欲望を叩きつけあう瞬間は、優に1分以上続いたのではないだろうか。そう思ってしまうほど、引き延ばされた2人の幸せな時間は、とくとくと少しずつ送り込まれ続けていた精液の送り込みがようやくくしみ、亜美のホールドから解放された事で終わりを告げた。

力の抜けきった俺は、亜美の支えが無くなった瞬間ベッドに倒れ込

む。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

「あああ、つはあ。射精というものは、こんなにも気持ち良いものなのですね。これは、覚えてたての子供がはまってしまうのも無理ない……」

冷静に感想を語る亜美に対し、ようやく絶頂の最頂点から降りてこられた俺は、息を整えるので精いっぱいだった。繋がったままのあそこから、あふれた精液がとろとろと流れ出ている。むっと香ってくる雄の香り。もし今日が排卵日なら、間違いなく孕んでいるに違いないと確信させるほど、濃厚なそれ。

「真尋ったら、まだ抜いてもいないのに何さみしそうな顔してますね。エッチですね」

「そ、そんなことないよ。そんな顔してない」

「ふふ、いいんですよ嘘つかなくても。私たちの仲じゃないですか。時間はたっぷりあるんです、確実に赤ちゃんができるように、もつともつと注ぎ込んであげますから、安心してくださいよ」

顔の横に手を突き覆いかぶさり、目の前まで迫った亜美の顔に、照れくささからつい視線をそらしかけるも、少し考えて俺はしっかりと視線を合わせた。

「そうだよな。まだ時間はあるんだし……」

「そうですよ。この部屋をここまで情熱的な使い方した人はいないでしょう。犯人もきつと、もう少しは目をつぶってください」

いたずら気に微笑む亜美。中でぴくぴくと動いている逸物は若干萎びているものの、いまだに元気だ。亜美に体を味わいつくされるのも、悪くないかもしれない。体がまだ火照ってるから仕方ないんだ、と媚薬のせいにして、俺はもう少し楽しむことにした。

「これからも、一生一緒ですよ」

「うん……愛してる」

覆いかぶさってきた亜美の身体を、もう離さないとばかりに思い切り抱きしめた。体の間で胸同士が潰れ合う。息苦しさと同時に乗ってくる、ほんのりとした快感。止めに思い切り抱きしめ返されると、

まるで全身を亜美に支配されてしまったようで、俺は安心感で瞳を潤ませ、衝動に身を任せたのだった。

## 11 (エピソード)

ちゅんちゅんと雀が鳴いている。グレーのシツクなカーテンの間から漏れた陽光が、瞼を焼く。目の痛みと不快感に、意識がゆつくりと浮上する。

「ぬ、う……」

とはいっても、眠いものは眠い。うとうとと睡魔に身を任せようとするが、一向に眠れやしなかった。何せ、全身はだるいし、何故かあそこが痛いのだ。じんじんと響く鈍痛が常に襲って来て、睡眠どころではない。

仕方なしに目を開けて体を起こそうとすると、視界いっぱいには亜美の顔が広がった。

「ふえああっ!?!」

「おはよう、お寝坊さんなお嬢様?」

いるはずのない人物に驚きふためく俺に、にんまりといたずらっぽい笑みを浮かべている亜美。

何言ってるんだ、お嬢様ってお前の事じゃないか、とまで思考したところで、はたと気づく。

自分が出した声がいっもととは違い、随分と高めの女声であることに。何で、と考える前に、1つ思い出したことで連鎖的に昨日のことを思い出す。

意識を失う前、俺と亜美はセックスしないと出られない部屋に閉じ込められていたことを。

脱出手段を探している最中、亜美に勧められるがまま薬を飲み、冗談のつもりが本当に女になってしまったことを。

そして、最終的には元に戻る選択肢よりも亜美と結ばれることを選び、男性器をはやす薬を飲んだ彼女と致し、こうして無事に脱出できたのだ。

ようやく頭が全部思い出した時には、自身でもわかるくらい顔の紅潮を抑えられなくなっていた。

「え、あ、う、うう……」

一連の流れを思い出したのと同時に、睡眠ガスらしきもので意識を失う前に繰り返し広げた痴態をも思い出してしまったのだ。

拒んだ媚薬を口移しで飲ませられ、丁寧だが強引に舌を絡ませられると、すっかり体の力が抜け、亜美の成すがままになってしまう。

どこで覚えたのか不思議なくらい冴えわたる亜美の舌技と、徐々に効き始めた媚薬で意識も蕩け、始まったのは後は思い返すのも恥ずかしい行為ばかり。

何とかフェラだけは拒んだものの、それ以外に思いつくような行為は殆どされ、俺の体を味わいつくされた気がする。

「あんあん喘ぐ真尋お嬢様、とつても可愛かったですよ?」

「止めて、お嬢様呼びマジで止めて」

「今度から私の家に嫁入りするのですから、お嬢様で良いではないですか」

にまにまと意地の悪い笑みを浮かべている笑みは、真つ赤な俺の顔をとても楽しそうに眺めている。恥ずかしさの極みに達した俺は、ぐりりと反転して亜美の視線から逃げるが、背後から抱きしめられ、逃げ場を失う。

「嫁入りなら、お嬢様じゃなくて奥様だろ」

「あら確かに。それでしたら、お嬢様ではなく若奥様ですね。是非とも、裸エプロンで仕事帰りの私を迎えて、定番の台詞を言つて頂かなくては……」

「墓穴を掘ったあ……」

反撃の糸口も掴めず捕獲されてしまった俺は、うなじにキスを落とされるなど好き放題にいじられ始める。

「んんっ……」

「ふふ、くすぐったいですか?」

「少し……やっぱり、ちよつと敏感なのかな。今くすぐられたら、死んじやう気がする」

「死なれたら困りますね。まだ結婚すらしてないのですから、楽しみはもつと後に取っておきましょう」

大手を振つてというわけではないが、こうして堂々と彼女といちや

つけるというのは、なんとも幸せだった。それは亜美も同じようで、感嘆の声を漏らし、ほうと息を吐く。

「ああ。貴方と結ばれた暁には、どういちゃいちゃするかよく考えたものです。貴方の腕に抱き着いたりして、驚かせて反応を楽しむなど、妄想するだけで胸が躍ったものですが、こうして女の子になった真尋を弄るのも、とても楽しいですね」

「こうなるのは予想外だけど、俺も嬉しいのは間違いないよ」

女同士になるという想定外の展開だったが、普通の恋人同士のように振舞えるのがこんなにも嬉しいとは、想像だにできなかった。何せ、以前は人目がないところでさえ躊躇っていたのだから。世間のカツプル共はもう少しありがたがった方が良いぞ、本当に。

「ところで、ここ何処？ 俺の部屋じゃないのはわかるけども」

「私の部屋です。二人まとめて同じ場所に運ばれたようですね」

ふと浮かんだ疑問に周りを見回してみると、棚の上に飾られた家族写真や、小さなところに撮った小さな俺と亜美の写真が目に入る。それ以外にもクローゼットには見覚えのある彼女の衣装がかかっており、確かにここは彼女の部屋らしかった。

「そっか……無事に出られて良かったよ」

「そうですね。大丈夫だとは思いましたが、一応同一犯ではないという線もありましたし」

一度も入ったことの無かった聖域への侵入が、こんな形になるとは。内心がっかりしていたが、ひと先ずは無事に帰れたことを喜ぶべきか。

「とりあえず、警察に連絡しとかないとな。あれから何日経ってるかわらないけど、捜索願が出されてるかもしれないし、探してくれてる人を早く安心させとかないと」

「概ね同意ですが、電話するのはもう少しだけ、後にしませんか」

聞き返す言葉は出てこなかった。背中に触れた、ぬるぬるとした熱い塊に、意識を持っていかれていたからだ。

「ね？ 一回だけ、致しませんか？」

「え、あ、ここで……？」

「駄目ですか？」

「だ、駄目に決まってるだろ。起きてすぐにだなんて、発情期の猿でもしないって」

浮かんだ感情は、戸惑いよりも躊躇いと言ったほうが良かった。何せ、自分の認識では女になって幾ばくも経過していないのだから、素直にうんと言えろわけがない。しかも、初めて見る彼女の部屋で、最初にすることが犯されることなのだから、拒否感もさらにマシマシだ。

だが、嫌そうに見せかけた態度も、そう長い時間持たなかった。

「ひうっ」

「ダメ、ですか……？」

「だ、めえっ……ひあっ!!」

「でも。真尋のこころは、意見が違うようですけど、如何でしょう？」

耳を唇で食まれてふっと息を吐きかけられ、濡れ始めたあそこをくちゆりと指で触られると、男の牙城はすぐに突き崩された。

股間からの刺激は初めての性交、つまりは昨晚の逆転した処女と童貞喪失を想起させ、あつという間に頭を蕩かす。

「あ、あ、あ……」

「ほら、真尋だってしつかり準備完了してるじゃないですか。私がお猿さんなら、差し詰め真尋は猫ちゃんですかね。下のお口でにやんにやん鳴いておねだりする、エッチな猫ちゃん……ね？　良いでしょう？　一回だけ。ね？」

「あ、うう……」

クリトリスと包皮の上から触られ、蜜壺を人差し指でゆるゆるとピストンされると、一時的に取り戻していた男としてのプライドはすぐにガタガタとなり、覚えたての女としての性欲がむくむくともたげてくる。

情熱的なあの情事を思い出し、膺が亜美の指を物欲しげに締め付けだす。ふふ、と笑った彼女の吐息が耳にかかつてはもう、ぞくぞくと背筋を駆け上がる感覚に逆らえない。

「は、い……」



「良い子ね……」

疼く下腹部と衝動に、俺はもう限界で。か細い声は、本音を口走る。顔を見なくともわかる彼女の嬉しそうな声に、俺は身を任せた。

結局、一回では済まず三回も中出しされ、俺はあまりの快感に再び意識を失っていた。

亜美曰く、痛み止め代わりだと言って飲まされた媚薬だったが、まさかTS薬と一緒に永続性じゃないよな、と今更に心配になってくる。気持ち良すぎて、一度セックスし始めたら衝動が止められないのだ。亜美共々はまりすぎそうで、後々が非常に怖い。

ともかく、再び目覚めてから亜美にその事で散々弄られた後、シャワーに入りようやく通報と相成った。

警察からは例の事件ではないかと疑われてはいたものの、やはり捜索願は出されており、見つかった報が知らされ、俺達の両親は一安心だと喜んでいたようだ。だが、警察で俺達と対面した瞬間、困惑の表情に変貌した。

当たり前だ。片や息子、片や別れさせた筈の娘の恋人が女になっているのだから、戸惑うのも当然である。しかも、亜美には男性器が生えており、亜美が俺を犯して脱出できたのだと説明すると、場は一瞬で混迷を極めた。

それからすぐにDNA検査やらなにやらで俺たちは詳しく調査された。その結果、俺たちが真正正銘『新堂亜美』と『五十嵐真尋』である事が証明され、同時に、俺は完全に女性に、亜美は男性器に生殖機能があることも確認された。おかげで、世紀の大発見だと興奮した機関によってその後の検査が更に多くなり、非常に疲れたことだけは覚えている。

その後、『セックスしないと出られない部屋』による被害が世界的な事で、密かに設立された国際機関によって、今回の異常事態、つまりは俺が女になったことと、亜美に男性器が生えた事は公表しないこととなった。

理由としては、国際機関や政府側の勝手な都合である。そんな物が実在していると知ってしまえば、同性愛者をはじめとしたいろんな方々が暴走することが目に見えているから、というのが理由だ。幾年月、国際機関や警察機関が全力で捜査に当たっているのに、未だに犯人の影も形も捕まえられていないのだ。もつと頑張れと言われたところで既に限界なのに、暴動が起きてはたまらないと、TS薬の開発に目途が付くまで、事実が伏せられることとなったのだ。

とはいえ、俺たちにとつてもその話は渡りに船だったので、全面的に受け入れることになった。薬による効果ではあるが、手術をせずに女になってしまった俺の存在が世間に知れ渡ると、当然マスコミが押し寄せ、生活が滅茶苦茶になってしまうことは、火を見るよりも明らかだった。

更には国際機関の働きかけで、俺は公式に女性としての戸籍を手に入れられるし、特例により亜美との籍も許可されるなど、唯一心配していた点も解決してくれる良い案だったため、断る理由がなかったのである。

知った瞬間なんて、亜美は喜びすぎて、政府の人が目の前にいるのに、俺を抱き締めキスをしたほどだ。無論俺も喜んだが、亜美の要求が何故か認められ、亜美が夫側になったのは若干不満だった。が、結婚は可能だけマシと思いい、今回は飲み込む事にした。

俺の些細な不満など、亜美との幸せには代えられない。彼女が微笑む顔を見て、俺は間違っていないと確信していた。

まだ様々な問題を抱えつつも、各検査や関係各所との話し合いが落ち着き、事件の公表が行われてから、一週間ほどが経っていた。

ようやく日常生活に戻るぞ、と一息吐いていた俺達を待ち受けていたのは、美味しいネタを嗅ぎつけたマスコミの方々の攻勢だった。

例の部屋に関する報道は当初は盛り上がっていたものの、一向に犯人は捕まらず、被害者が変わるくらいで情報が代わり映えしない。報道はマンネリ気味となり、民衆の関心も薄れてすっかり下火となって

いた。精々、新しく出た被害者が出た事を報道するくらいだった。

そんな中現れたのは、今まで必ず異性同士を攫っていた筈の『例の部屋』事件で、(公式の発表上では)初めて女の子同士の監禁である。しかも、片方は美人で著名な女社長ということも合わさり、各紙面やワイドショーはこぞって取り上げていた。

『新堂グループのご令嬢が、あの部屋の犠牲者に!?!』

『お相手は幼馴染の女性か』

『初の同性同士の監禁に、世間は戦々恐々?!』

などと、視聴者の興味を引く見出しが様々に並び立った。

政府と国際機関の訴えかけにより、基本的に例の部屋関係の被害者への取材は禁じられているが、それが日ごろからマスメディアに露出している人間であれば話が別である。

社長という立場上拒否できない亜美を積極的に取材し、亜美の取材姿は連日連夜報道番組に流れていた。

『新堂さんは、彼女とお付き合いをされているのですか?』

『ですから、それ以上は彼女のプライバシーに関わるのでお答えできかねると何度も……』

『どのような経緯にしろ、関係は持ったのですよね? 責任を取るつもりはおありになりますか!?!』

『彼女と私の問題ですので、放っておいていただけないでしょうか?』  
「相変わらずこの局はしつこいなあ……これ以上、亜美に何を言わせたいんだか」

退勤した直後の亜美に直撃取材し、何か目玉になるコメントを取ろうとしつこく食い下がるリポーターの姿に、思わず眉を顰める。

一週間もすれば世間も流石に飽きてくる筈だが、まだ何か隠していることがあるはずと、一部の報道はしつこく取材してくるのだ。

その質の悪さと言ったら、亜美と一緒に住んでいる俺を例の相手だと断定し、禁止されているはずの取材を試みようとする程度には、悪質である。その事を報告した警察や国際機関からの警告に、本人だとは思っていなかった、などと苦しい言い訳をしつつ引き下がったマスコミだったが、分散していた矛先が亜美に向くだけで結局は変わって

いない。

マスコミに嫌気が刺し、つけっぱなしにしていたテレビを消し、俺はぐつぐつと煮立ち始めた料理へと意識を傾けた。

さて、その後どうなったのかを軽く説明しておこう。

まず、俺は先ほど言った通り、亜美の家で彼女と同棲している。理由は単純で、女性として生きること慣れていない俺をサポートできる人間が、彼女以外に近くにいなかったのである。

両親は遠く離れた田舎住まいで、来てもらうにしても帰るにしても、俺や両親の仕事が絡んで実現できそうな案ではなかった。ということ、これを機に堂々と交際宣言をした亜美が世話をするといい、俺は転がり込んだのだ。

ちなみに、同棲開始から今に至るまで、それはもう様々な困難な出来事が起きたが、それらに関してここでは言及しないでおく。

それはもう、聞くも涙語るも涙の物語があったのだ。

例えば初日、下着や衣服、その他日常生活に必要なものを買う為に出かける際、着るものが無いからと彼女のお古を着せられた事があった。

幼い顔立ちの今の俺が若干ぶかぶかの服を着ると、お姉ちゃんのおさがりを着た妹にしか見えない。そんな状態で亜美と買い物に行く、ほほえましいものを見る周囲の奥様方の視線が痛い上、ふとした拍子に自分が着ている服は下着を含めて亜美の物なのだと思うと妙に恥ずかしさを感じるし、今思い返すだけでも羞恥で死にそう。例えばスカートをはく羽目になろうとも、あんな事はもう二度としたくないと誓った。

2日目、シャワーではなく初めて風呂に入る際、洗い方の指導と称して色々勸られた事があった。

世の女性は絶対、そんなエッチな洗い方していないと男の俺が断言

できるほど、性感帯のみを重点的に洗ってくる亜美の手から逃れようとする俺。しかし、女性の扱いという意味では向こうの方が上手で、あえなく喘がされ、おねだりさせられる羽目になる。

あまつさえ、ようやく風呂に入れたかと思ったら身体の内から温まりましたよね、などと言つて、浴槽の中で挿入された時なんて、冗談抜きでイキすぎて死ぬかと思つた。

3日目、亜美が何処からか調達してきた猫耳、猫の形に穴が開いたブラジャーやパンティーなどのコスプレ一式を装備させられてのセックスを要求される。

それら単品は非常に可愛いのである。実際、どこかの量販店で売られていたであろうそのパッケージに印刷されている女性は、とても可愛らしく着こなしている。男時代であれば、息子も元気になった事間違いなしだ。

しかし、女になって今、そんなことは何の慰めにもならない。むしろ、俺がそれを着ることで、毎日散々お世話しているはずの亜美の子供さんを更に慰める羽目になった。

わざわざ4K画質のカメラで撮影されたコスプレショーとその後濡れ場は、間違いなく俺の黒歴史である。ああ見えて独占欲の強い亜美の事だから流出は心配していないが、物持ちが良いせいで将来、自分の子供にあられもない姿を見られてしまう事にならないか、今から心配である。

ちなみに、たまに着て自画自賛していることは、亜美には秘密である。絶対弄られるだけじゃすまないからな。

これがまた似合っているのだ。胸部装甲が豊かな方が向いているのはそうなのだが、幼い雰囲気猫というのは可愛いを増幅させるので、とても良い。これが自分じゃなかったら、言いよつていた事間違いないのである。

### 閑話休題。

そう、ここまで並べれば気づいたと思うが、大体の苦勞が亜美の性

欲関係なのだ。

つい昨日も、僅か二週間弱の間にこそ撮りためていたらしい映像を見せられながら、軽いボディタッチとフェザータッチで性感帯を刺激されて、最終的におねだりさせられ、晩飯の前に2回戦もこなす事になった。

俺も与えられる快樂に夢中になっている節があるのでお相子かもしれないが、流石に絶倫すぎないか。毎日最低三回は出しているし、並みの男以上の性豪である。

今まで我慢していた反動で籬が外れたのか、それとも異性の性器があるというのは性欲を掻き立てる性質があるのか。まあ俺も、普通の女より淫乱気味な気はしているし、あってもかしくないと思う。

しかし、だからと言って男に抱かれないかと言うと違うのだ。想像するだけで寒気がするし、外を歩いていると感じる品定めするような不躰な視線を浴びても、イケメンからナンパされても微塵も興味がわかない。

それは亜美も同じようで、女性を見ても、試しにAVを見てみたらしいが興奮しなかつたらしい。

真尋のだからしたいんです、だなんて殺し文句を囁かれては、俺もおとなしく股を開くほかない。

結局仲良くしているのだから、この事はもう深くは考えない事になっている。

話すとすると、後は俺と亜美の仕事関係になるか。

亜美は戻ってきたその日には職場に復帰している。俺も姿形は変わってしまったが、身内以外には伏せられている俺に関する情報規制も、特別に松永さん達職場のみんなには開示してある為、その気になればいつでも戻れるのだが、未だに復帰していない。

何故かという理由は単純で、女になることで純粹に腕が落ちてしまったのだ。

女性になったことで腕力や手先の感覚が変化し、包丁の扱いが下手になってしまっていた。それでも昔取った杵柄か、人並み以上には出

来るため、普通の家庭料理レベルならば大丈夫なのだが、飾り切りや隠し包丁等、指先の精密な操作が必要となる技術が、感覚が変わってしまったことでめつきりできなくなってしまったのだ。

だが、技術に関してはまた練習を積めば良い。年月を経て経験を積めば、いずれ解決してくれることである。

技術の低下よりもっと深刻で尾を引きずっているのは、俺の味覚である。

目の前の小鍋で煮込まれているのは、野菜の入ったコンソメスープである。レストランに入りたての頃教えられた、単純で誰でも作れそうなレシピのスープ。

各調味料を精密にメモし、いつ作っても同じ味になるように覚えたこの料理は、塩気も甘みもすべてが均等にバランスよく出来上がるように調整されている。これは俺が美味しい料理を作るための尺度、つまりは味覚のベースとなっている料理なのだ。

カチリ、とコンロの火を止めると、充分に煮立ったスープをスプーンで掬い、口元に運ぶ。

噛むように味わい、こくりと喉を鳴らし飲み込む。

「……丁度良い。けど、塩は極端に少なく、砂糖を入れすぎてる」  
自身に丁度良く作り、レシピ通りの分量になるのが最善なのだが、今の俺は塩分を強く感じ、甘みをより欲するようになっていく。明らかに、舌の感覚が変化しているのだ。

「くそ、早く慣れないと、満身に料理もできない……」  
仕込みだけなら既に復帰できるかもしれない。でも、ここが元に戻るか変化を受容出来ない、上達は見込めないのだ。

見た目は勿論、味も美味しくない限り、フルコースに採用される料理を作ることなど、夢のまた夢なのだから。

これで今日何度目だろう。ひたすらに慣らしていくしかないが、それにしても進歩が遅い。思う様にいかない現実に、苛立ちと共にスプーンをシンクに放り投げる。

頭が茹っている事を自覚しながらも、焦りから止める機会を失って

いた。

「もう一度、最初から……」

「ただいま、可愛いコックさん」

と、鍋に手を伸ばした所で、視界がブラックアウトした。

驚きで暴れかけたが、聞きなれた声に手を下ろす。

「あ、亜美!?! びっくりさせないくれよ、もう……」

「随分と煮詰まってるようですね?」

それ程長い時間やっているつもりはなかったが、随分と長い間試行錯誤していたようだ。亜美の指の隙間から窓を見ると、夕陽が赤い光で部屋を染め上げている。すっかり日が暮れ始めていた。

出迎えもせずに悪い事をしたな。後悔しながら振り返り、おかえり、と挨拶代わりにキスを交わすと、亜美は心配そうに話をつづけた。「まあ、ね。包丁は工夫次第でどうにでもなるんだけど、どうしても、味覚が鈍くてな……」

新しいスプーンを取り出し、小皿に一口救って亜美に手渡す。

いつも通りテイステイングし、琥珀色の液体を嚙下する。

「個人的にはこの方が好みですが、そういう話ではないのでしょうか?」

「今の俺もそうなんだけどな。違うんだ。これじゃ、コース料理はまだ作れないんだよ……」

褒めてくれるのは嬉しいし、亜美の好みに作れているのはそれはそれで嬉しいのだが、ちと話のベクトルが違うのだ。

「結婚はまだですが、それももう時間の問題ではないですか。私は、帰ってきたときに真尋が家で出迎えてくれて、ご飯を作ってくれるだけで充分満たされていますよ?」

「俺だって、幸せさ。まだ2週間もたってないけど、今まで損してた分を一気に取り返すくらい、な。でも、これは俺の矜持の問題だ」

かつて亜美に約束した、弁当を作つてあげるといふ話は今でもこなせるが、それでは個人的に納得がいかない。

今でこそ、俺との情事を経験し、一皮むけた彼女の威圧感や、その他諸々に押され、ついに交際を認めた彼女の父親だが、俺自身で認めさせてこそ、俺は大手を振つて結婚できると思つているわけだ。



身体は女でも心は男のままにいるつもりは俺は、シェフとして成り上がり、彼女の父親を見返すという目標を変更するつもりは毛頭なかった。

「……まあ良いです。そうやってキリつとしてる真尋もカツコイイですし、昔からの夢ですからね。私は応援していますよ」

「ありがとう」

腰に手を回しぎゅっと抱きしめてくる彼女の手のひらに、俺は手を重ねる。

こうして触れ合っているだけの何気ない行為でも、とてつもなく幸せだった。早く大手を振って婚姻出来るよう頑張ろうと、気力が湧いてくるようだ。

「でも、困りましたね。味覚の変化が、こんなにも大きな影響を及ぼすとは……もう一度変化があるかと思うと、真尋には苦労を掛けますね」

「もう一度って何？ ああ、男に戻るときって事か」

亜美のつぶやきが耳に入り、俺は勝手に納得していた。確かに、男と女で味覚の変化があるのであれば、男にもし戻れた際、もう一度この苦労を味わってしまうということだろう。それくらいは仕方ない事として受け止めるしかない。それに、元に戻るだけなら新たに試行錯誤する羽目になっている今よりも苦労は少ないだろうし、そこまでは心配していなかった。

「いや、もっと身近にあるじゃないですか。女性の方の好みが変わってしまうような出来事が」

「……？」

気にしなくて良いぞ、と口にする前に言われた台詞に、疑問符が生まれる。

好みが変わるって、戻る以外に何かあるのか？ 年取るとかか？俺は思いつかないが……

と思索していると、亜美は無言でずいっと顔を近づけて来る。

「な、何だよ」

「……もし。酔の物が食べたくなった時は、すぐにでも言ってください

いね。一緒に病院に行きましょう」

「酔の物……？ ……!?!」

酔の物、女の人、味覚の変化、そして頻繁に行われている、夜の情事。連想ゲーム的に出来事が頭に浮かんできて、最後に閃いたワードに、俺はカッと全身が火照るのを感じる。

「質の悪い冗談は止めろって!!」

「うふふ、冗談だと良いですね。では、先にシャワー頂きます。今日も暑かったですし、汗もかきましたから」

俺の怒鳴り声も何のその、柳の様に受け流すと、意味深な言葉を残し、流れるように手を振って風呂場へと向かって行ってしまふ。

「ああもう……うん、いってらっしゃい。その間に夕飯作ってるよ」

まあなんだ。俺も別に、子供が欲しくないと思ってる訳じゃない。悪い気はしないし、積極的に拒むような事ではないだろう。一回コンドームを試して、やっぱり中出しの方が気持ち良いなあ、などと考えた訳じゃないからな、マジで!!

すっかり毒気が抜けた俺は、忘れていた夕飯の準備に取り掛かるべく、再び台所に向き合ったのだった。

そう遠くない日に子供を授かるだろう。その日を待ち遠しく思いながら、俺は笑みを浮かべてしまっていたことに苦笑するのだった。

「あ、今子供を愛でる母みたいな顔しましたね。やっぱり欲しいんですね子供!! 良いでしょう、ならば今から子作りを……!!」

「いいから先にお風呂に入ってきてなさい!! ご飯と俺はその後で、つてあー!!」

と油断した所で、風呂場の扉からこちらを覗いていた亜美が、こちらに突進してくる。

勢いだけでも思いきや、しつかりコンロの火を消してから俺を抱きかかえ、ソファに優しく横たえる亜美に、俺は半ば抵抗しなかった。こうなった亜美に抵抗するのは無駄だと、今までの生活でわかったからだ。

「飯が遅くなっても、文句言うなよ……」

恨みがましく睨んでいると、彼女のスカートを押し上げる逸物の存在を認識する。俺で興奮していくれている、と否応なく示すそれは、俺にとっても興奮を駆り立てるものだった。嫌じゃない。むしろ、望むところだ、と俺は迎え撃つ気満々だった。

「ねえ真尋。あのおねだり、聞かせてくれないでしょうか？」

亜美が何を要求しているのか理解して、俺は若干の恥ずかしさより、この後の満足度を取ることにする。

若干シチュエーションは違うものの、エプロンを付けた女性に、男が要求することなんて決まっていた。

亜美の趣味で選ばれたスカートを捲り、亜美の趣味全開の下着を露出させる。

「お帰りなさい、貴女。ご飯にしますか？ お風呂にしますか？ それとも、わ・た・し……？♥」

「返事は決まってるわ。私が選ぶのはいつも、貴女よ……」

最初こそ声が震えてリメイクを食らっていたが、今の俺は違う。顔が赤くなるのは仕方ないが、噛む事なく最後まで台詞を言えるようになったのだ。いや、別に誇るようなことでは無いが。

以前の要望通り、語尾にハートマークが付きそうなくらい、甘く蕩けた声色で、彼女を誘う。舌なめずりする亜美の姿に、ふるりと全身に震えが走る。下着からたらりと太ももを伝う露で、俺自身も興奮しているのがわかる。

夕日の差し込む部屋で、熱い吐息が重なった。ひと月前は想像だにしなかった幸せの形に、俺は身をゆだねた。

## おまけ作品集

### 男の子の日（幸平&美衣） Draft ver

幸平さんは、私の自慢の夫である。

どんなに忙しくても私の事を気遣ってくれるし、料理も上手いし家事も手伝ってくれる。全部そつなくこなせるようで、たまに砂糖と塩を間違えたりと、ちよつと抜けたところもあつて可愛いのだが、それとは裏腹に真剣な表情をしている幸平さんはかっこいい。

他にも良い点を挙げていけばキリがないのでこれくらいで自重するが、私にとって幸平さんとは、非の打ち所がない完璧な夫なのである。

いつだったか、幸平さんは私の事を自分には勿体ない程の女性と評してくれたが、その言葉は私のセリフだ。

私が好きになったのは幸平さんの見た目のカツコよさではないし、例え幸平さんの姿形が変わってしまったおうちとも、私の愛情は変わらない。だからこそ、幸平さんが可愛らしい背の小さな女の子になろうとも、私は全力で愛するし、私の思いは微塵も揺るがないのだ。それに、少女になったのはただのご褒美だし。

そんなわけで、とある事件がきっかけで女の子になつてしまった幸平さんに対し、私と幸平さんの仲は遠ざかることなく、むしろ以前よりも中睦まじくなったのであった。

あれから大分時間がたち、幸平さんも女性の体に慣れてきた。当初はかなり戸惑っていた髪の毛の洗い方など、今では私が洗つてあげなくても自分でできるほど成長した。私としては幸平さんとのスキンシップの時間が少し減つて残念だったが、喜ばしいことだ。

そんな幸平さんは今朝、どんな状態なのかというところ……

「うづうづうづう……」

布団に包まり枕で頭を隠したまま、不機嫌そうにうめき声をあげていた。普段は高めのソプラノボイスを放っている声は、その機嫌の悪

さを表すかのように低く鳴動している。

まるで起きることを拒否しているかのようで、寝起きの良い幸平さんらしからぬ光景だった。以前であれば珍しいを通り越して体調を心配するレベルの出来事なのだが、「彼女」になつてしまつてからは、定期的に起こつている出来事だ。具体的には、月に一度ほど。そういうえば、察する人も居るだろう。

「幸平さん、朝ですよ?」

「うぐうううぐ……」

本日はお休み。早起きする必要はないが、規則正しい生活を送っている私たち夫婦にしては遅い目覚めである。しゃがみ込み、耳元で囁きかけるが、幸平さんはいいやと枕の下で首を振っていた。容姿と相まつてむずがる少女のようで愛らしくて仕方ないが、心を鬼にして起こす。

「ほら、今日はデートするんでしよう? 早くしないと映画の時間来ちゃいますよ?」

「んんん……」

その言葉でようやく決心がついたのか、幸平さんは乱暴に枕を投げ捨てると、むくりと起き上がる。ぼさぼさに乱れた髪の下で、座った眼がこちらをこちらを見つめている。

「おはよう、美衣ちゃん……」

「おはようございます、幸平さん」

微笑むと、軽く唇を重ねる。幸平さんも逆らうことなく受け入れるが、いつもとは違い、積極的に舌を絡めてくる。為されるがままの普段とは違う、強気な幸平さんが垣間見える。

「ぶはっ。ふふ、今日の幸平さんは、積極的ですね?」

「そうだよ。僕は、男だもん」

いつもと雰囲気の違い幸平さんは、そう言つて男らしい笑みを浮かべた。

女性で月に一度といえ、女の子にとって避けられない日を想像する人が大半だろう。今の幸平さんは女性の体だし、ある意味間違っていない。だが、少し意味合いが違うのだ。

今日は月に一度やってくる、男の子の日。かっこかわいい幸平さんが見れる、唯一の日である。

幸平さんの体は今、完全に女性の体になっている。ということは、内臓も全て女性のものと置き換わっているわけで、当然生理も来てしまいうらしい。だが事はそう簡単ではないらしく、幸平さんを始め、今回の事件に巻き込まれた”男性”の中で生理が訪れたのは、たった一人。それは、精神構造が男性と女性で根本から違うことが関係しているらしく、男性としての自意識が強いと、機能としては存在しても動作はしないんだとか。生理が来たというその男性は、女性としての性別を受け入れた結果であり、幸平さんをはじめとするそれ以外の被害者に訪れていないのは、自分はあくまで男なのだという認識が強く残っているおかげなのだそう。

慣れない女性の体に困惑していた幸平さんは、そう説明するお医者さんの言葉に安心していた。私だってそう。女の子の体になった幸平さんは可愛らしくて、時間さえ許せばいくらでも愛したいと思うし、嫌うだなんて有り得ないが、私が夫にしたいのはあくまで男の幸平さん。かわいい幸平さんを見てるとつい忘れそうになるが、妻としては、幸平さんの中の男を尊重してあげるのが本来の役目ではないだろうか、と常々思っている私である。

生理が来ないということは男という性意識がまだあるということ、将来的に子供は欲しいと思っっている私としても、男に戻る気があることが証明されたのは良かった点だ。だがしかし、いずれ元に戻る薬が出来た時、やっぱり戻りたくないなあ、女のままだが良い、と言われないためにも、もっと幸平さんを立て、男として自覚を持ち続けてもらわないといけないわけだ。

さて、その話と幸平さんの生理が何故結びつくのかということ、実は、幸平さんの生理は完全に来ないわけではないからなのだ。

今回の事件に巻き込まれ女性化した人々は、月経という女性の生理現象は来なくとも、ホルモンバランスの乱れからくる体の変調自体は訪れる。本物の生理と同じ苦しみが来る人もいれば、性欲が増大する

という変わった出方をする人もいるのだとか。そして幸平さんの場合、自身は男だという性意識の増大化、という方向で現れる。

私や知り合いの前など、プライベートではともかく、事情を知らない相手と接する仕事上でなら、一時的にでも女性として振舞える幸平さんをして、強烈に女性を意識させられて、今の自分に対する嫌悪感を隠せなくなる。例えば、朝のように不機嫌になってみたり。

「ほら幸平さん、ブラジャーくらいは着けましょう？　見えちゃったら恥ずかしいですからね？」

「嫌だよ。僕男だし……ブラジャーなんて着けたら、変態みたいじゃないか」

今のように、女性用の下着をつけることに対して限りない敵愾心を抱いてみると、女性らしい行動を取る事を極端に嫌がるようになるのだ。

むすつと膨れっ面をしている幸平さんは可愛くて仕方ないのだが、見た目はともかく妙齢の女性が下着をつけていないのは大変よろしくない。私にとつてもよろしくない。なので、下はトランクスで妥協し、せめてブラジャーは、と無理矢理着せてあげるのだが。

「むう……」

上はTシャツ下はパンツルックの格好で椅子に座り、不満そうにっーんとそっぽを向いてすねる幸平さん。そう、優しい普段の幸平さんでは中々ありつけない、ツンツンした幸平さんの出来上がりである。可愛くて仕方なくて、つつい毎回映像に収めてしまうのだが、私はこれを、幸平さんの男の子の日、と呼んでいる。

「朝ごはん出来ましたよ」

「うん、ありがと。いただきます」

「はいどうぞ」

どんなに拗ねても、手を合わせていただきますは言ってくれる幸平さんはとても律儀だ。そして、男の子の日の幸平さんは、いつもとは一味違う。

「今日は、僕がエスコートするから」

ぽつり、と零す言葉は、可愛らしい声とは裏腹に、男としてのプラ

イドに満ち溢れている。予め、男の子の日は私からデートに誘っている。でも、今日は男として僕がリードするんだ、という理論で毎回宣言してくれるのだ。

女の子になつてからは、女の子同士で行ける場所も選択肢に入るようになったこともあり、私がデートの計画を立てることも少なくなかった。男としての自意識が高まっている今日、幸平さんとしてはそれに甘えるのは嫌なのだろう。

「うふふ、わかっていますとも。お願いしますね、私の旦那様？」

私も最初からそのつもりで、何のプランも立てていない。今日は、男の幸平さんに甘えて、彼の男の子成分をたっぷり補充してもらおう日なのだ。

可愛らしい上に男らしい今日の幸平さんは、黙ってこくりとうなずいて見せる。頼った事にご飯を食べる速度が上がり、勢いあまつておかわりするも、以前とは違い量が入らないので、私に謝りながら残してしまう所までが、今日の幸平さんである。



## エピソードのその後（アキ& a m p ; 風咲）

アバターが女になってしまった事が世間に知れるだけでも、セキュリティ管理が問われ政府高官の首がいくつか飛びかねない大事件である。だというのに、そこに現実世界での体まで女になってしまった事が加われば、世界を巻き込んだお祭り騒ぎになるに違いない。

性別が変わるなんて、治らない病気は殆ど無くなったと言われていた現代においても、明らかに異常事態である。そんな騒動の当人である俺も、突然扱い慣れない女の体になり、さぞかし驚き戸惑っているかと思いきや、意外とそうでもないのが実情だった。何せ。

「お前が、散々、犯しまくって!! 困惑する間もなく慣らしてくれたからなあ!!」

「いやあ、当然の事をしたまでだよ」

「ちつとも褒めてないの!! 警察が来るまであまり時間無いつてのに、誰のせいでシャワー浴びる羽目になってると思ってるんだコラア!!」

一日のほぼ10割を仮想空間の中で生活している昨今、現実世界に滞在することは少ないため、家は基本的に生活しやすいようには作られていない。シャワールームなんて、人1人入るのが精一杯なほどコンパクトに収まっている。そんなスペースに2人で入った日には、振り返ると風咲の胸につつかえるほど手狭なのだが、洗い方も何も知らない俺はそれでも主犯に頼るしかなく、こうして洗い方の手解きを受けざるを得なくなっているわけだ。

仕方なしに、鏡越しに今回の事件の主犯格を睨む俺だったが、犯人は俺の怒声で反省した様子もなく、むしろだらしない喜色満面の笑みを浮かべている。

「だってえ、あれだけ良い思いで、まさかデザートまで出てくるなんて思わないでしょ? そりやもう食いつくに決まってるじゃん、えへへ」

「開き直るな!! ああもう、何回口を濯いでもザーメンの味がするわ、いくら洗っても奥からザーメン垂れてくるわ、散々だ……」

あの後、仮想空間ではやり足りなかったとばかりに、精巢の中の精子という精子を出しまくった風咲。中出しにフェラに種付けプレスに、やりたい放題出し放題の絶倫ぶりを発揮していた。

お蔭さまで、いくらうがいをして喉の奥にまだへばりついている気がしてならない。とはいえ、そんな不快感も相手が風咲だとわかっている、受け止めようが違う。自分でこれだけ興奮してくれるのは嬉しい、などと考えてしまうのは、この体に毒されてきた証拠か。

「そんなこといったって、気持ち良いから仕方ないんだもーん。それに、アキも最後はラブラブちゅっちゅ状態だった癖にい」

「いいから忘れろ」

「背中に手を回してぎゅーって抱きしめてくる所なんてもう、尊すぎて心の中で拝んだねマジで」

「言うな、マジで恥ずかしいから」

「イキすぎてふにゃふにゃの口調でにやぎしゃあ、ってとろけながら私の名前呼ぶところなんてもう、録画してたら無限にシコれるよね。脳内に永久保存したよ」

「いつそ殺してくれえ……」

照れ隠しで悪態をつこうと、内心は見透かされているのか、風咲のニヤニヤ顔は止まらず、カアツと顔が火照るのが鏡を見なくともわかる。

VR世界で感じる五感は、あくまで脳内信号に直接入力する疑似五感による再現でしかない。痛みも気持ちよさも何もかも、現実世界と比べると若干不鮮明に感じる、という事実は、現世に生きる人としては常識だったのだが、その事を改めて味あわされた形だ。

マジで半端じゃない。体の中に恋人を受け入れるという行為の、何たる心地よさ。風咲がハマるのもわからんでもない、自分で制御できない快感の嵐。やってる最中完全に頭おかしくなつてた俺は訳の分からない事を喋り、我に返った時にはこれである。誰かこの公開処刑を止めてくれ。

「やだなあもう、こんな愛らしい恋人離すわけないじゃない。もうこのまま結婚決めちゃうしかないよねえ？」

風咲は俺を背後から抱きしめると、もふもふのペットにするようにぐりぐりと身体を押し付けてくる。むにゆりと柔らかい感覚も伝わってきて役得なのだが、尊い雰囲気とは裏腹な個所が一点あるのだ。

「じゃあせめて、俺の背中に当たってる固い何かを収めてみ？ 心の中で、このオナホ、絶対離さないからな？ って言ってるだろ今」

「……えへっ」

「せめて否定しろっ!! この淫乱娘が!!」

「ええー。アキの一回挿入れたら最後、満足するまでおちんちん離してくれない淫乱ボディがいけないんじゃない？ えっち大好きな体に生まれたのが運の尽きだよ、大人しく私に貪りつくされるといいと思うんだよ」

「誰の!! せいで!! そんな淫乱な体になったと思ってるんだ!!」

てへぺろ、とでも言いたげないらっとする表情を浮かべている風咲。それでもかわいいのが余計腹が立つのだが、風咲の性欲に関しては何を言っても糠に釘、暖簾に腕押しである。

仮想空間で連絡した時点で、警察には後3時間程で向かいます、と返事をされた。俺が連絡をしたのが17時で、今は19時45分の回ったところ。つまり、現実世界に戻ってから、俺と風咲は2時間以上やりっぱなしだったわけだ。受け側が物足りない、というならまだわかる。出せば賢者タイムが発生してしまう男とは違うしな。だがしかし、入れる側で2時間ノンストップでやりつづけたこいつは、冗談抜きで性欲の化け物に違いない。今も俺の背中にずりずりと物を擦り付け始めている始末で、萎えるということを知らんのかこいつは。

だがしかし、こいつの質の悪い所は、性欲に正直なようできて、しっかりと俺を見ながら責めてくる所だ。何度も何度も求めてくるいつもとは違い、身体が軋むような激しいピストン繰り出し暴走しているように、その実こっちが痛くない様に絶妙に手心を加えてくるし、痛い素振りを見せたら胸やクリを愛撫しながら快感をキープする手腕は、実質童貞卒業初日とは思えない技術力。対するこっちは、快感で思う

様に身体がコントロールできないし、一旦交尾が始まると、翻弄され流されるがまま、風咲のいいようにされるしかないのである。

「もういいよ……兎に角もうすぐ来るんだから、早く洗ってしまつてさっさと準備するぞ」

「じゃあその前に、また元気になった私の我儘ちゃんを一発抜いて頂

——」  
「くわけないだろ、さっきので満足したろ!!」

「そんなあ!! じゃあ手コキ!! アキちゃんの小っちゃいおてで手コキでいいからさあ!!」

「するか!! おててとか気色悪い言い方をするんじゃない!!」

「じゃあ見抜き!! 見抜きいいっすか私!!」

「良くないです帰ってください」

「そんな殺生な……これでヌキ納めかもしれないじゃん……」

正直な所、色んな意味で絆されて、付き合つてやるのも悪くはない気分であるのは事実。それに、風咲の言う通り、問題が解決すればもう味わえない、いわば期間限定とも言える今の状態を堪能しようというのは、ある意味間違つてはいないし、俺も若干ではあるが乗り気である。とはいえ、自分から通報しといて無視つてのは流石に体裁が悪いのも事実。

「どう考えても、警察読んだからつてすぐ戻れる代物じゃないだろ。警察帰つたらもう一回付き合つてやるから、今は我慢しろつて……」

「やったあ!! アキ大好き!!」

身長差のせいで、抱き着いてきた風咲の胸の谷間に俺の後頭部が埋まる。男なら悶絶物の興奮ポイントだが、生憎俺の身体は今女である。むしろ、背中にあたる硬い何かで情事を思い出して濡れ始める股間の感触に気付いた俺は、流れるシャワーに紛れてそつとため息をつくのだった。

そんなこんなで、俺達が長い長い準備を終えたのとほぼ同時のタイミングで、玄関のチャイムが鳴る。ギリギリ間に合つて迎え入れられたのは警察……ではなく、何故か白衣を着た研究所の博士だった。し

かも、風咲と同じくらい美人。

「私、国際技術復興研究所の高波と申します」

「はあ、それはどうもご丁寧に……」

何で博士？ と首をひねりながらも、一先ずリビングに通し、お茶とソファアールを勧め、テーブルをはさんで着席する。

相対したその博士から差し出された名刺には、聞いたこともない研究所の名前と目の前の人の名前。そして、『人類再興プロジェクト技術部門リーダー』、という意味不明な肩書が書いてある。どう見ても警察の類ではない。

「ねえアキ、知ってる？」

「知らない」

「知らないのも無理は無い。うちの研究はメジャーではありませんから」

風咲が首をかしげながらこちらに話しかけてくるが、俺も知らない。学がある方ではない俺達だが、この研究所がメジャーではない事くらいはわかる。

そんな声が聞こえてしまっていたのか、冷静な声で返されて思わず気圧された俺は、反射的に謝りの言葉を入れた。

「うっ、聞こえてましたか。すいません」

「お気になさらず。内容が内容なだけに、敢えて名前を広めてない部分もありますので」

「へえ、そうなんですなえ」

「あの、私達って、こう……とある問題があつて、警察を呼んだ筈なんですけど。貴女は一体……？」

気のない返事を返す風咲は、何も考えていなさそうである。

如何にも裏があると聞いたげな口調に、妖しく思った俺は、内容を微妙に伏せながら訝し気に尋ねてみると、目の前の博士っぽいなるほど確かに気になりますよね、とあっさりと答えを教えてくれた。

「端的に言えば、貴方たちの身に起こった事は、私達が原因です。ですので、私が知っているのは当然です。まずは、今回このようなことになり、本当に申し訳ありませんでした」

「……へえ!？」

高波さんとやらそういうと、深々と頭を下げた。

「どうやら、警察が調査するまでもなく原因は明瞭だったようである。察するに公的機関の一種である研究所が引き起こしたことだから、警察ではなく、その原因たる研究所の偉い人が直接説明しに来た、ということか。」

「え、じゃあ貴女が俺を女にしてこいつに……まあその、うん。兎に角、現実世界の身体ごとアバターを変更したのは、貴女方が何かやっただからってことですか!？」

「結果的にはそうなります」

『結果的には』。引つ掛かる言い方をした目の前の美人博士は、顔を上げるとそのまま話を続ける。

「私の所属する研究所は一旦置いておくとして、私が参画しているプロジェクトの名前は覚えていますか？」

「ええと、人類再興プロジェクト、でしたっけ」

大層な名前だったから、良く名前は憶えていた。興味がなさそう、というか早く俺とセックスしたい、とばかりに身体を引っ付けてくるアピールしてくる風咲を無理やり引きはがしながら、然り、と頷く博士の言葉を聞く。

「そうです。旧世紀、飛来した隕石が原因による汚染と遺伝子の変異により、人類の営みは変調をきたしました。それは例えば、大気の汚染による屋外での活動制限であったり、人間の生殖機能の損失であったり、影響は様々です。技術のブレイクスルーにより、仮想空間に生活の基準を置き、個人のDNAマップから精製した精子と卵子による人工授精により人口を維持することで生き永らえた我々人類。今となっては当たり前ですが、やはり今の生活様式は正常ではないのです。我々のプロジェクトは、人類の営みを本来のあるがままの形に戻す事。それが目的です」

「はあ……」

恐らく、素人にわかる様に丁寧に説明してくれているのだろうが、半分くらいしかわからなかった。まあ、旧世紀レベルで外を出歩け、

現実世界で普通に子供を産める生活を取り戻そうとしているらしい、  
というのは何となく伝わった。

「要するに、高波さん達は人類の為に頑張って研究してるってことで  
すよね？ それがどうして、アキがこんな可愛い女の子になっ  
て、私にでっかい絶倫のおちんちんが生えちゃうだなんてことに繋が  
るんですか？」

「余計な情報と言いつつア!!」

直截で阿呆な言い方に風咲を引叩くが、高波さんはこちらを意に  
介さず淡々と話を進める。

「元の生活様式を取り戻すことが我々の最終目標ですが、その足掛か  
りとして、まずは人間の遺伝子の修復……つまりは、生殖機能の復活  
を試みたのです。その結果が、今の貴方方なのですが……」

「何でか、俺が女になってこいつに男性器が生えた、ってことですか  
？」

「いいえ、原因は明瞭です。半分は我々のせいであり、半分はあなた方  
の不運が原因です」

「不運？」

俺達に落ち度なんて考えうる限り無いと思っただが、何かあったか  
な。

「我々が開発したのは、五感VR装置に没入したままに遺伝子治療と  
体の改変……つまり、アバターを現実世界に適用する技術です。貴女  
達も知っての通り、VR空間に入り込む五感VR装置には、人間の生  
命維持に必要なライフラインが、可能な限り搭載されています。その  
中には勿論、病気を患った際に必要になる外科的な治療が可能な機能  
も搭載されているため、この機能を利用し、遺伝子の治療に使おうと  
したわけです」

「へえ、それはすごい」

語彙力皆無な返事を返してしまったが、正直に凄いとしかいいよう  
がない。言われるまで忘れていたが、そういえば俺たちは、現実世界  
では童貞で処女のままなのである。

遺伝子に異常をきたした人類は、男の精巣や女性の子宮や卵巣は存

在するだけで機能を停止している。更には、快感を感じる機能すら死んでいるため、勃たないし濡れず、仮に射精できても精子なんていないし、仮に生きた精子を含んだザーメンを中出ししたところで卵子も死んでいるため、子供が出来る確率は0。

今この世の中で妊娠して子供を産むまでの流れは、まずVR空間上で互いに妊娠する／される事に同意した状態で中出しした場合、一定確率で受精の成否を判定される。そこで受精の確率に当選すると、採取されたDNAマップを参考に製造された、人工精子と人工卵子を人工授精させ出来た受精卵を人口胎で保護し、子供が生まれる、という流れになっている。何せ、皆射精出来ないし生理も来ないから、子供を作るにはこれしかない。昔で言う不妊治療と一緒に、先ほど博士の言った、存亡の危機に追い込まれた人類が生み出した、重要技術の1つである。

人工的なその手段を無くすことが出来るとすれば、仮にも結婚を考えている身としては喜ぶべきことだ。やはり、自らの腹を痛めて産んだ子、というのやはり意味が違ってくる。どちらも尊ぶべき命だし、差別はしないが、本来あるべき流れに戻す、という意味では大きな意味を持つだろうし。

「そこまでは問題ありませんでした。ただし、生殖機能を修復するだけでなく、アバターを現実世界での姿に適用することで、行き来する際の違和感の低減を計ったのですが、それが間違いでした」

「間違いって?」

「セキユリテイです。生活の一部に利用されていただけの昔とは違い、電子情報の中で生きていくといっても過言ではない現在では、電子情報はその人の命をも握る重大で重要な生命線です。つまり、セキユリテイはそれ相応に嚴重になっており、人類の存亡を握る重大な研究とはいええ、そう簡単に解除の許可が下りなかったのです」

「はあ」

「一度例外を認めれば、バックドアを仕掛けられ情報流出の原因にもなりかねません。ですが、かと言って人類の未来が掛かった我々も譲るわけにいかず……」



「普通に俺達に許可を取ればよかったのでは？ 事情を最初から聴いてれば、普通に協力してましたよ。そもそも、よく考えれば俺達、承諾してないのに治験させられてませんか？ これ」

よくよく考えれば、これでは何が起こるかわからない実験体にさせられているようなものじゃないか。無事だったからいいものの、これで死んでいたらどうする気だったのか、と怒りが湧くが、博士のтонでもない言葉で一気に怒りの感情は吹き飛ぶ。

「治験ではありません。私自身で試しましたから。男から女になり、尚且つ子供を産むという、現状考えうるケースの中でも最大の負荷を3回繰り返し、私の寿命の問題も、生まれる子供の異常がないことも、それ以外の異常がないことも全て確認済みです。ですから、あなた方が受けるのは最終テストでしかなく、現実世界で子供を妊娠し、無事に出産していただくだけの簡単なテストのはずだったので。本来ならば」

「……ええええええええ!」

当然の様に発せられた言葉に、俺と凧咲は思わず立ち上がって叫ぶ。

この胸はでかくて背も高くて、見惚れるような美人が元は男で、3児の母というのはあまりに衝撃すぎた。

信用させるためか、これが子供の写真です、なんて差し出された写真には、博士ともう一人、揃いの結婚指輪をはめた女の人が、3人の子供に囲まれて幸せそうに笑っている姿が映っている。

「わあ可愛い。奥さん似で美人さんに育ちそうですねえ」

「ええ。私の自慢の娘たちですよ」

「高波さんも奥さんに生やしたんですか？」

「ええ。その方がどちらのパターンも確認できて効率的でしたし、私の妻も研究所務めでしたから許可もいりませんでしたからね」

「大きいんですか？」

「まあその。私はどちらでも良かったのですが、妻が大は小を兼ねる、と」

隣では、和やかに見せかけて段々淫猥になっていく不思議な会話が

繰り返り広げられているが、俺の方は色んな情報が一気に攻め寄せてきすぎて、頭がパンクしそうだった。

「つてえ？ 俺、妊娠するんですか？」

「え、させていいんですか!？」

「させなきゃダメです。こうなつたからには、してもらわないと困ります」

俺の困惑を、三段活用で肯定されてしまった。

見なくてもわかる。やったぜ!! これで心置きなく犯しぬける!! という喜びのオーラが、隣の女からひしひしと伝わってくる。具体的に、子宮の辺りに視線を感じる。何をされるのか考えるだけで、ひたすらに怖い。

「え、いや、元のアバターに戻してもう一回身体を変えればいいじゃないですか!?! 何でこのまま!？」

いやいや待つてほしい、と俺は一縷の望みをかけて、高波さんにもう一度説明を求め。

「今回の実験に際し、アバター情報を抜き取るのに必要な許可は、一回限りしか得られていないのです。しかも、そこで出た許可というのがまた特殊でして……くしくも、それがあなた方の性別が入れ替わった理由にも繋がるのです」

「理由、ですか」

だが、帰ってきたのは無情にも諦めてほしい、という諦観の念を俺に抱かせるような言葉。

「ええ。今回はVR空間の開発段階で利用していた、管理者権限を用いたのです」

「管理者権限?」

オウム返しに聞き返した言葉に、頷く高波さん。

「そうです。今回貴女達のアバター情報だけを抜き取る為に用いたのは、個人情報を保管するサーバーを統括する者に付与されている、サーバー管理者権限です。貴女達の個人情報を一時的に例外処理に区分することで、セキュリティレベルを維持したまま、我々がアバターデータの情報だけを引っ張ってくるのが可能になるのです。

ところが、その権限の内には、デバッグで使用した開発者専用ツールが残っており、使用できるようになっておりました。そのうちの1つが、音声でのアバター改変機能といってですね……」

「え。まさかあの時……」

「そのままかです。凧咲さんがおつしやられた通りに貴方のアバターが変わったのは、データ回収の真っ只中、たった5分足らずという限定的な時間で、彼女が偶然にも願望めいた事を言ってしまったことが原因です」

「じゃあ何ですか、後五分こいつの戯言がずれてたら、あれは戯言のままで済んだってことですか？」

「その通りです」

「マジか……」

「ほえー」

その日一日どころか、今までの人生において、女になればいいのに!! なんて会話を繰り返り広げげたことなど、今回が初めてである。よくもまあそんな偶然が起きたものだど、最早悲しむよりも先に感心が勝る。

「二応、このようなことを想定していなかったわけではありません。ですから、最終テストの人員選考には、VR世界統括コンピューターを使用し、今回の検証に適する二人……結婚しているか、もしくは将来結婚を考えており、子供を将来産む事を希望している2人を選別し、更に、その中で最も身体の変化について言及しない可能性の高い二人を選別しました。その一組が貴女達であり、だからこそ何事もなくアバターのデータの引き抜きは終了するはずだったのですが……完全に予想外でした。最悪のケースを想定し、自分で検証しておいてよかったです、心の底から思いましたね」

「……」

「成程。つまり、めっちゃラッキーだった、ということですね？」

「まあ、考えようによってはそうなります……かね？」

「なりません!! 嘘だろ……マジかよ……」

統括コンピューターといえば、一台で全世界のVR空間を維持して

いる最先端のスーパーコンピューターの事を指す。そんな大物まで利用して万難を排したはずが、コンピューターにも読めないこいつの突飛な行動により、あえなく計画は途中で変更にせざるを得なくなつたというわけだ。

絶句するしかない俺に対し、真面目腐つた顔でふざける風咲。高波さんも困惑した顔で返答するしかなく、俺は隣で頭を抱えるしかない。つまりは、あの時いらんこと風咲を煽らなければ、ただ現実世界に拠点を置くだけ済んだということである。後悔先に立たずとはまさにこの事か。

こほん、と仕切りなおすように咳払いを一つ入れる高波さんに、視線を上げる。

「聞き取り調査によれば、ご友人に結婚について相談していたそうです。事ここに至つては仕方ありません。ここは開き直つていただいて、関係を一歩進める良いきっかけになればと思います」

「貰う方と貰われる方じゃ随分違いますよ……」

「誤差です、結局相手は一緒なんですし。子供を産むのはきついですけど、産んだ後の達成感というか、子供を取り上げてもらう瞬間になると、辛い事なんてきつと吹き飛びますよ」

「そして私は気持ち良くなれますよ？」

「風咲には聞いていません。ああもう……」

嫌ではない。風咲の子供を産むという事自体は、決して嫌な事ではない。だが、妊娠出産するのが確定路線というのも解せないし、男としては複雑な心境にならざるを得ないのはわかつてほしい。

「世界で唯一同じ立場に立てる私としても、貴方が納得できていないのは重々承知ですし、このような形でお願いするのは私達にとつても大変不本意でした。しかし、今回の実験は、この研究と技術が認可されるか否かの最終確認を兼ねています。もし問題ない事が確認できれば、我々人類がかつての姿を取り戻す為の、初めの一步に繋がるのです。お子さんを妊娠し、無事出産された暁には、報酬をお約束します。勿論、断られたとしても、出来るだけアバターは元に戻せるよう尽力は致しますが、確実に戻らねたいのであれば、承諾していただい

た方が早いのは間違いありません」

「戻れないんじゃない、わかりましたって言うしかないと私思うんだけど……アキ、どうする?」

「まあ、普通に考えて承諾するしかないよな……」

「半ば強制する形になってしまったのは、私としても誠に遺憾なのですが……」

高波さんの言う通り、これでは同意する方向へ誘導されているようにも感じる。

しかし、申し訳なさそうにこちらを見ている高波さんとやらを見るに、故意ではないのは何となくわかる。だって、俺が女になってなければ、今回の依頼は美味しい事しかない訳だし。風咲と子供を作るだけで報酬までもらえる上、中々踏み出せなかった結婚に踏み切るには良いきっかけになっただろう事は間違いないからだ。わざわざ断られる理由を増やす意味はない。考えるに、こうなってしまったのは、研究所とやらが狙ったわけじゃなく、本当に事故なのだろう。

「もし承諾していただけるのであれば、今回の実験の意義もありますので、これからお二人には主に現実世界で生活していただきます。勿論、必要になる住居や生活物資などは全てこちらで用意させていただきますし、実験期間休むことになるであろう今の務め先にもこちらから丁寧に説明をさせていただきます。お二人に子供さんが出来るまで、こちらで全面的にサポートさせていただきます」

「四六時中監視されてたり、はしらないですよね?」

「当然です。一部どころか、まったく行いませんよ。今回の実験はあくまで、我々の開発した新技術によって、貴方方の身体に生殖機能が戻っているかの確認ですから、生活を管理するわけではありません。最低限、子作りだけはしていただく必要がありますが……」

元々断る気など皆無の風咲は、自分が気になるところを確認するだけして満足したようで、後はアキだけだよ? と言いたげにこちらを見ていた。

「どうする?」

「どうする、ったってなあ……」

「私は得するだけだし、大変なのはアキの方だよ？　いくら私でも、本当にアキが嫌だったらやらなくていいし……だから、アキが決めて？」

「う……」

さつきまでノリノリだった癖に、最後は俺に決定権を委ねてくるあたりが本当に風咲だ。さつきまでの攻めもそう。決定的に嫌がるラインは超えてこないし、普段はノリと勢いと快楽で生きてるくせに、重要なことは何だかんだ俺に決めさせてくれる。それが俺の彼女、風咲という女だ。

地味に待たせている自覚はある。これはもう、あらゆる意味で覚悟を決めるしかなさそうだ。

「わかりました。その話、受けます」

「本当ですか!!」

勢いよく立ち上がった高波さんに、俺は苦笑い。

「正直話がでかすぎて、人類が云々ってのはよくわかんないですけど。愛する人との子供がちゃんと産めるって、今の世の中得難い経験だと思いますし……俺が産む側ってのは、解せないですけど」

「ありがとうございます……!!　これ以上の方が一が無いよう、私共も全力でサポートさせていただきますので、宜しく願います」

「こちらこそ。よろしく願います」

テール越しに握手を交わした高波さんの表情には、安堵の感情がぬぐい切れていなかった。

初対面で抱いた無表情で淡々としてそうなイメージの割に、説明は丁寧かつ誠実だったし、同じ立場にしてしまった俺のことを心配してくれていたのだろう。

変な人が担当じゃなくてよかった、と思うと同時に、これから具体的に何をすれば良いか話をしようと、着席を進めようとした所で、隣から衝撃が。

「じゃあ一先ず座っていただいて、この後のことを――」

「アキィ!!」

「どああ!!」

途端、ぐるんと視界が回ると、天井を経由して凧咲の顔がドアップでカツトインしてくる。

「もう話終わったでしょ？ 早く子供を作ったほうが高波さんも助かるだろうし、早速お仕事再開しようね？ えへへ、アキとの子供を作るのが仕事だなんて、私幸せだなあ」

「おいおい待って待って!! ステイだ凧咲、まだ日は高いし高波さんもいるし話は終わってない!!」

俺をソファに押し倒されたらしい凧咲は、そんなことを言いながら俺の上着に手をかけ始める。ボタンに手をかけようとする凧咲と抗おうとする俺が攻防を繰り返す中、唾然としてる高波さんに向かつて凧咲が問う。

「高波さん、後の話は後日でも?」

「え、ええまあ……細部のご説明は、また明日にでも来ますかね……?」

「そうしていただけると、助かります!!」

「いや、助けてください高波さん!! このままじゃ、一日と立たずこいつに孕まされそうなんですけど!」

「いや、けど、ああ、うーん……」

目の前でおっぱじまろうとしている痴態に、高波さんは複雑な表情を浮かべていた。確かにそのほうが早い、という冷徹な研究者としての判断と、倫理的にも同じ立場にある人間としても、それは流石に……という常識的な判断の狭間で葛藤しているのが、眉をひそめた顔からも読んで取れる。しかし、悩むこと10秒ほど。無情な結論は出た。

「……では、また明日ご連絡しますね。後ほど、メールでアポイントを取りますので。本日はお邪魔しました」

「高波さん!」

「またきてくださいねー」

研究者としての判断が勝ったか、凧咲は自分には止められない、と諦めたか。どちらでもいいが、今俺が見捨てられたのは変わりようのない事実であった。

高波さんは、呑気に手を振る風咲に手を振り返すと、同情した瞳でこちらをみつつ、ペこりと頭を下げ、視線で俺に謝ってから部屋を辞したのだった。

「……やつと、二人きりだね？」

「それ、全然ロマンチックなセリフじゃないからな？」

キリツと決めた表情の風咲に突っ込みを入れるが、俺の服を脱がそうとする手は止まらない。見境なしの性欲の化身は、玄関の閉まる音と同時にキスをかましてきた。

「んんっ……」

舌を入れられ、味わう様に嬲られるがまま、甘く感じる体液を流し込まれると、こくこくと嚙下するしかない。手慣れた手つきでパンツをずらされると、閉じた蕾を花開くべくそつと指を差し入れ、くちゆくちゆと湿った音を立て始め、受け入れる準備を始めてしまう。今までは逆の、リードされる愛撫。性欲を煽るような攻めに、上にも下にも集中出来ず、中途半端に火を付けられる。

「んくっ、あつ」

密着する体から漏れ出る熱気と、口から零れる喘ぎ声。どちらが鳴いているかなど、言うまでもない。

「ぶはっ……もう、ちよつと待てなかつたのか？ んあつ」

「我慢できないよ。だつて、アキが可愛すぎるんだもん」

口は話しても、指の動きは止まらない。ぞくっ、ぞくっと背筋を這う快感に、言葉尻が震える様を見て、風咲は興奮からか顔を赤らめる。

「男に、それは誉め言葉じゃないぞ……」

「でも、今は女の子でしょ？」

「そう、だけど。いきなり慣れるのは、無理だろ」

「そうだね。でも、赤ちゃん作るなら、少しずつでも慣れていかないと、ね？」

「んぐ……」

子供を産むなら、少なくとも一年の間はこのままということ。多少なりとも慣れる必要があるだろう。

「わかってるつもり、なんだけどなあ……」



「大丈夫だよ。女の子の先輩として、分からないことは教えてあげるし。最終的には、嫌でも慣れさせてあげるから」

「俺とは違って、最初から『男』を使いこなしてるやつは言うことが違うなあ」

「へへ、そんなこと褒めると照れるぜ」

「褒めてねえよ」

いつものじゃれ合いに、男の振りをし始める凧咲というエッセンスが加わる。凧咲の可愛らしい声でイケボを出そうとしても、似合っていない上に俺も別に求めていない。だが、不思議とこんなこと言われてもちつとも腹が立たない。皮肉なことに、イラつとすることのやり取りが、こいつを本気で好きになってるんだなあ、俺が実感してしまう瞬間なのだ。

「でも、お前を受け止めきれるのは俺しかいないしな。お前が満足するまで、一生付き合ってるよ」

「お？ アキのツンデレ台詞とか、貴重も貴重じゃない？ 今のアキちゃんの容姿だと可愛くて仕方ない……でも、嬉しい!!」

「あぎゅっ」

胸に抱かれると、むぎゆりと顔に胸が寄せらる。喜んでるようで何よりだ。

「男に戻ったら、また改めて告白するから……それまでは、これで勘弁してくれ」

「ふっふっふ……果たして、戻る暇があるかなあ？ 産んだらすぐ次の子供作れば、永遠にアキちゃんのままってことだよねえ？」

「え、嘘だろ？ 冗談……だよな？」

「私、子供は5人欲しいんだよね。うちの子供だけでバスケットチーム作るのが夢なんだ」

「お前がバスケットやってるとか聞いたことないんだけど？ やめっ、あっ……」

聞き捨てならない言葉と共に、ずぶつ、と割り入ってきた巨大な存在感のそれに、思考は沸騰し一瞬で爆ぜる。反射的に背中に手を回し、ぎゅ、と抱きしめ返すと、凧咲も嬉しそうな声色と共に

「私も!! 大好き!!」

「あつ、うんっ!!」

大好き、の声で中を締めてしまう。思考も肉体も、もう止まらなかつた。気持ち良さと、嬉しさを共有する。風咲の愛を全身で受け止めると、俺達は行為の没頭するのだった。

現実世界でやれることなど殆どない。生活空間が仮想現実に移っている今、娯楽どころか暇つぶしの手段すら現実世界に存在していないからだ。そんなこんなで、あの後中出しを5回も喰らい、互いの汗と体液でどろどろになった全身をシャワーで洗い流した後、VR空間に戻った時の事。

何だかんだ、やっぱりこつちの方が落ち着くよな、などと同棲している自宅にて喋っている時、ふと何かに気付いたように風咲がこちらに話を振ってきた。

「ねえアキ、なんか凄いメール届いてるんだけど」

「あん? 凄いメールって、どうせしようもない迷惑……メール……」  
俺のアカウントに転送されたメール。その差出人は、件の管理統括のスパコン様から。タイトルには、ご懐妊おめでとうございます、と一言。

「まさかの、『おめでた』だねえ……」

流星にびつくり、と風咲も唾然としていた。今の世の中、子供が出来たという報告は、医者からではなく国から伝えられる。つまりは、毎回中出しする度に自動でお互いの体調から産出された受精確率に当選していた場合、その事はこのVR世界を管理している、スパコンを通して送られてくるのだ。ここまで言えばお察しである。高波さんとの一件での話ではなく、今の世の中の的に常識的な出来方の方で、子供が出来てしまったのだ。

だが、ここまでなら然程驚く事ではない。何せ、俺と風咲は随分と前からお互いに妊娠同意の状態で致していた。つまり、いつそのメールが来てもおかしくはなかったのである。今回俺達が驚いたのは、その中身の問題である。

「え、嘘だろ!? あの一回で、孕まされたの俺!」

メール文には、父の欄に風咲、母の欄に俺の名前があった。そう、普通の逆。性欲の権化たる風咲のペースに付き合っ、幾度となく中出ししても出来なかつたくせに、その何千分の一の確率に達するであろう、あの騒動の何回かで当てやがったのだ。

「凄いなあ。私もしかして、雄としての才能があるのかも」

「否定したいのに、納得してしまう俺が居るのが悲しいわ」

精のつくものを摂取しまくってもついていけなかつた俺以上のペースで出しまくる風咲の絶倫具合を見ると、否定材料が全くないために思わず頷いてしまひそうだった。解せんが、認めざるを得ないかもしれない。

ともかく、これで期せずして一人目が生まれてしまう事になった訳だ。マジで意味が分からない。まさか、俺のDNAも女の方が向いているとでも言いたいのか。

「そっか、赤ちゃんかあ……ふふふ、女の子かなあ、男の子かなあ」

「楽しみだな……風咲似なら美人確定だから、そっちよりだといんだけど」

「今はアキも女の子じゃない。きつと、どっちに似ても美人さんに育つよ」

実感はいまいち沸いていないが、折角なら良い人生を送ってほしいと思うのは、いつの世も共通の親の性だろう。微妙な容姿の俺に似るより、天然記念物みたいに恵まれた容姿の風咲に似た方が生きやすいに違いない、と思うのは、少々気の早い親心というかなんとか。

とはいえ、風咲に言われた通り今は俺も女。この合法ロリガリアル容姿になってしまっただけに、後は風咲の底なしの性欲を継承しないかだけが心配の種だ。

まあ、それももう少し先の話。明日の高波さんとの話し合いもあるし、目の前のことを片付けることが先だ。

「それもそうかもな。未来のことは置いて、まずは明日の事を考えるか」

「そうだね。まずは、アキに種付けすることを考えないと」

「あつてるけどあつてないな、それは。さりげなくそのでかい物を擦り付けてくるんじゃない。徐々にベッドの方へ誘導するんじゃない。我慢しかねてお姫様抱っこで抱えるんじゃない!!」

小さくなつた体は風咲の腕力でも容易に持ち上がり、ぼふり、とベッドに投げこまれてしまう。

ベッドに寝転んだ俺に、四つん這いで這い寄ってくる風咲。嫌がるふりをしているのはもうばれていいのか、前みたいに馬乗りになつたり腕を抑えられたりはしていない。

「だって、アキの事大好きなんだもん。好きな人と一杯エッチして、その人との子供を残したいと思うのは、自然の説に適つてると私は思うわけですよ。いくらしても足りないくらい、私の愛はでっかくて深いんですー」

「言つてろ。俺の方が、お前よりお前の事を愛してるからな」

代わりに、手と手を絡ませ握りこんだ。しつとりと汗ばんだ手のひらの感触。伝わる感情と体温。二人して、同時に笑いあつた。

「私、一人っ子だつたんだ」

「知ってる」

「お父さんとお母さん、いつも仕事でいなかつたし、お姉ちゃんか妹できかないかなーつてずつと思つてた。私もアキもそんなことはしないとは思うけどさ、心配だし。早く、この子にも兄弟作つてあげようね」  
打つて変わつてらしくもない真面目なトーンで言われては、からかうこともできない。

「ああ。何なら、出産予定日同じにして双子にしてやるか」

「おお、それいいね!! それなら、絶対寂しくない」

思つていたことを正直に口に出すと、途端に伸し掛かつてきた風咲に、そのまま唇を奪われる。

すぐに離れると、しつかりと目と目を合わせて俺は言葉を発する。

「結婚しよう」

「うん。待つてた」

すぐに抱きしめられ、唇を再び重ねた。遠慮なく蹂躪される舌に、俺は風咲の背に手を添える。

雰囲気もなくそもない、散々考えていた理想のそれとは程遠い、流れに任せた乱暴なプロポーズ。すでに現状からして立場は逆だし、信頼できそうな高波さん個人の思惑はともかく、政府やそのほかの団体がすんなり元の体に戻してくれるかも怪しいところ。今後の見通しもどうなるかわからない。それでも、風咲と一緒に悪い未来は想像できない辺り、俺が風咲を運命の相手に選んだのは間違いではないと証明しているようで嬉しかった。

ぐ、つと一気に押し込まれた押し込まれた風咲の雄の象徴に、くはつと空気が漏れる。どくん、と胎動したのは、きつと心臓ではなく、もつと別の体の芯の方。

ぶるり、と体の震えが向こうに伝わる。きゅつと締まった膣の感触で、びくんと震え返してくる風咲の物に快感を伝達する。

性欲を受け止めるのとぶつけられる事の違い。らしくもなく、風咲に愛されているという実感が俺を包み込んでいた。

後はもう、言葉などいらなかった。風咲が満足するまで、俺たちは互いに溶け合っていた。

「お母さん、お腹すいたー」

「冬華、お父さんに向かってお母さんはやめなさい。飯は出来てるから、ママが起きたら食べようか。今夏姫が起こしに行ってるから、それまで待っててね?」

「ねえママ、何言ってもお母さん起きないんだけど」

「夏姫、パパに向かってママはやめなさい。いつもの事だろ、面倒くさがらないでもう少し粘り強く起こしてこ……」

「ママ! パパそっち行った!!」

「アキいいいい!!」

「うおおおおお火使ってるから危ないだろタツクルしてくるな朝から盛るなあああ!! そして春香呼び方が逆うむう!!」

「あはは、お母さんとママ仲良しー」

「冬華、見ちゃいけません。春香、なんて言っただけのこと」

「ママの耳元で、キッチンでパパが裸エプロンで待ってるよって言っ

た」

「何してんの……一度ああなつたらお母さん長い、春香だつて知ってるでしょ」

「えへへ。だつて、パパに蹂躪されてふにやふになるママ可愛いんだもん。夏姫だつて、ディープなキスでされるがままのママを動画にとつておかずにしてるの、私知ってるんだからね?」

「……先にご飯にしようか冬華。待つてたら長くなりそうだし」

「あー、逃げたな夏姫!!」

「うっさい!! 可愛いママが悪いの!!」

「ねえお姉ちゃん、お母さんつておかずなの?」

「……そうじゃないけど、そうなの。いずれわかる話だから、冬華はまだわからなくて良いよ」

「変なお姉ちゃん達」

## エロ挟めなかったし分けなくていいよね？なエセ魔 法少女編

彼女とのデートと言えば様々な選択肢があるが、映画というのも定番の行き場だ。よっぽど偏った趣味があつたりはずれ映画を引かない限り、無難に盛り上がる定番スポットだ。

かく言う俺も、彼女が媒体を問わず物語好きということもあり映画館には良く行く。今日も例にもれず、彼女の見たい映画に付き合つて訪れているのだが、今日は年に何度かある、非情に気が進まない日だった。

「わぁ……!!」

小さな声で歓声を上げているのは、俺の彼女であるゆかり。バレー選手と間違われることも多い高身長にもかかわらず、顔立ちは可愛い系の美人で、更には気立ても良く友人も多い、自慢の彼女である。幼馴染だからこそ縁があるものの、吊り合いを考えれば平凡な俺とはまらず合わないタイプの人間である。

そんな女性が彼女で、嫌いになる人が居るだろうか。いや、いない。気後れくらいはするだろうが、むしろ妬みの視線を燃料にして、ひそかに優越感に浸れる瞬間が俺はとてもしきである。ちゃんと幸せにできるかどうか、という意味では不安はあるものの、見た目に関してはどうしようもない事と割り切り、俺なりに彼女につくせればいいなと思っっている次第だ。

俺の話はいいとして、今彼女とのひと時を楽しめない原因は、目の前で繰り広げられているスクリーン上の映像にある。

ぱっちりとした目をキラキラと輝かせながら映画を見ている彼女。視線の先には、キラキラという擬音が正に合う、パステルカラーで眩しい色合いの服で着飾った少女たちが、画面狭しと暴れまわっていた。

そう、毎週日曜日の朝にやっている、変身ヒロイン物の劇場版。梓が始まって以来、毎週欠かさず見ているゆかりの一番好きなシリーズ

である、

『世界の平和は、私達が守る!! 行くよ、皆!!』

『マジカルペンライトを振ってミミを応援してほしいっぽ!!』

「〜!!」

ステッキを持って、如何にもマジカルな格好をした主人公と、如何にも相棒ですよ感を醸し出すぬいぐるみのような何かは、映像越しに視線を合わせ、視聴者に語り掛けてくる。入場特典で貰った変身アイテムを模したペンライトを振って無邪気に応援している、周囲の子供たちに違和感なく混じるゆかり。

カップルで見に来ている人間は皆無に等しいので、非常に目立って仕方がない。無言ではしゃぐ彼女は可愛くて何よりなのだが、周囲の保護者からの『ああ、付き添いなのおね』、という同情的な視線が居たたまれない。

「……」

とはいえ、ゆかりは一日に4本の映画をはしごする事もある程の映画好きだ。ジャンルはラブコメからサスペンスまで、年齢層も子供どころか幼児向けからR指定のエログロまで幅広い。何でも見るゆかりに付き合ってきた俺は、耐性がつきすぎて冷ややかな視線を浴びようとも物ともしない神経が備わっている。伊達に、小さなころからゆかりからお供として駆り出されていけないのだ。今年の劇場版はストーリーがまだマシだな、などと考える余裕さえある。

そんな俺が、どうしてもこの手の魔法少女もの漫画や映画に苦手意識を持ってしまう理由。それは、俺が今しているバイトに原因があった。

「今年も面白かったよねえ。皆キラキラしてて、衣装も可愛かったし」「お祭り映画にしてはストーリーも良かったしな。ゆかりが満足なら良かったよ」

3本連続干渉のメだった”劇場版プリズムプリシラ”を見終わった俺とゆかりは、映画館の近くで晩飯を食べていた。映画を見た後は、ゆかりが満足するまで映画の批評に付き合っただけなのがいっつも



コースだ。

前哨戦二本も面白かったが、特に本命のお気に入りの映画の出来が今年も良かったためか、いつにもましてニコニコと笑顔を絶やさないゆかりの姿を見ると、頑張つて胃を痛めながら見た甲斐があるというもの。自然と俺も笑顔になる。

「えへへ。プリズムを1人で見るのはちよつと勇気要るし、伊織君には感謝してもしきれないよ。いつもありがとうね」

「今更そんなことで礼なんて言わなくていいから。やっぱり家で見るのとはまた味わいが違うしな」

「うんうん!! 他のもそうなんだけど、映画の大きなスクリーンで、可愛い衣装を着たキャラクター達が動き回る姿を見るのが、本当に幸せなんだ……自然と頬が緩んじやうよね」

「そりゃよかった」

フォークでペペロンチーノを巻き巻きしつつ、熱心に語るゆかりを苦笑しながら見つめる俺。

映画鑑賞や読書が趣味のゆかりだが、可愛い物を集めたり鑑賞するのも趣味の1つ。キャラクターやアイドルのグッズ、はたまたアニメなど、収集物は媒体を問わない。中でも、ヒラヒラとした衣装を着た女の子の姿を見るのが特に好きなようで、彼女のタンスの中にはコスプレ衣装なども眠っている。裁縫が得意なので自作の物もあり、コスプレイヤーに提供した事もある程の筋金入りの愛好家だ。新しい衣装を作るたび、彼女の姪にさせてきやつきやと喜んでいる姿を見る他、彼女の作った衣装を着ているコスプレイヤーの写真を見せてきたりするので、以前よりも趣味の深度は進んでいることだろう。

プリズムシリーズだけでなく、今日見た映画の話でも盛り上がる俺達だったが、頃合いを見て、遠回しに定期的に聞いている質問を投げかけてみる。

「いつも思うけど、ゆかりはそういうの着ないの？ 集めるのが趣味なのはわかってるけど」

「うん、勿論着ないよ。柄じゃないし、私は見る専だからね!!」

「お前がそういうの着ても、普通に似合っつてそうなんだけどな……今

のプリズムシリーズも、上級生が二人くらい混ざってるじゃないか」「そうだけど、似合う似合わないじゃなくて、私は見る方が好きなんだよ。コスプレも衣装はあるけど、姪っ子ちゃんを着る用だしね。あーあ、伊織君が女装コスプレ似合う容姿だったら、プリズムシリーズ全部の衣装着てもらおうのになあ……」

「……仮にそんな趣味があっても、お前には絶対言わない」

「えーそんなあ!! 伊織君のケチ!!」

ゆかりは所謂魔法少女物のコスプレ衣装を集めるのは好きだが、自分で着る趣味はない。彼女の持っているコスプレ衣装は、専ら趣味を同じくする彼女の姪っ子専用である。

だからこそ、俺はこの話題に触れるのが怖い。似合わないから諦めていると言っている俺への女装行為も、口ではそう言いつつ隙あらば実行しようとしていることを、俺はよく知っている。だからこそ、俺のバイトの詳細がこいつにばれる訳には行かないのだ。

心の中の気まずさに視線を反らすと、壁時計の長針が二周していた。知らず知らずのうちに、二時間近くも話し込んでいたようだ。

「その話はもういいから、そろそろ帰ろう。悪いけど、俺この後バイトだしな」

「あ、もうそんな時間なんだ。盛り上がりすぎてちよつと忘れてたね。伊織君のバイト、給料も良いし上司さんや同僚さんもいい人達みたいだし、遅れて迷惑かける訳にいかないからね!!」

「……ああ、そうだな」

話を逸らしたい不純な気持ち半分、バイトまで時間があまりない焦りが半分。会計の紙を持って、俺は先にレジに駆け込んだ。

急かした甲斐あって、バイトが始まる30分前にゆかりの部屋の前につく。時間は危ないが、急げば間に合わない事は無いだろう。

「今日もありがとね、伊織君!! また明日、いつもの所で待ち合わせね」

「ああ、また明日な」

「バイト、頑張ってるね」

こちらを振り帰り、二言三言言葉を交わすと、さつと流れるように唇を重ねる。

昔からの幼馴染だ、他人に見られて恥ずかしがるような初心な間柄ではない。部屋の前でゆかりと軽くキスを交わすと、ゆかりは手を振って部屋の中に入っていった。扉が閉まつてからしつかり10秒待つて、俺は小さく呟く。

「……行つたか？」

『行きましたよ。ちゃんと部屋の中に入りました。以前の様に、忘れ物をして鉢合わせる事は無いでしょう』

「周囲はどうだ？」

『監視カメラの類や人の気配もありません』

「そうか」

ブレスレットから聞こえてくる電子音声の返答に、俺は静かにため息をつく。以前このパターンでやらかしかけた事があるため、注意するに越した事は無い。

『いいですかマスター。そもそも、このような人目につくような場所で私に話しかける事自体、彼女に発覚するリスクを無暗に増やしているのです。そろそろ学習して下さい』

「返す言葉も無い」

『恋人との時間を大事にするのは結構ですが、こんなところで変身しないと間に合わない程ぎりぎりまで一緒にいるのはやりすぎです。何度も説明していますが、身バレの危険性をマスターはよくわかつて――』

「わかった、わかったから。俺が全面的に悪いしあとでしつかりお説教は聞くから、今はとにかく急いでくれないか？ 空飛ばないともう間に合わないから!!」

金属製のブレスレットから聞こえてくる、電子音声特有の無感情な声に言い募られると、内容以上に心に来る。勿論、時間を忘れてゆかりと話し込んでいた俺が悪いのだが、今はそれどころじゃない。

バイトに送れる以外にも、このままでは、アパートの廊下で独り言を喋っている怪しい人間でしかない。知っている人間が見ればハン

ズフリーで電話していると思ってくれるかもしれないが、メカメカしい音声相手に喋っている時点で怪しきは同じ。

『……まあいいでしょう。何かあっても、困るのはマスターだけですからね。私は新しいマスターに貸与されるだけですし』

「怖いって!! 本当に、次から気を付けるから!!」

『……光学迷彩展開、音声承認どうぞ』

ため息が聞こえてきそうな無言の後に、ようやく使って貰えたステルス機能に、俺は場所が場所なだけに、控えめな音量で叫ぶ。

「ゆかりの次に愛してる!! Wiz57、装備着用要請!!」

『——本部より承認確認。装備を展開します』

事務的なやり取りの後に、ブレスレットを中心に眩い光が溢れる。全身に走るむず痒いような感覚と、アパートのフロアを包み込むような光が一瞬で収まった後、その場には一人の少女が出現していた。

背丈はようやくジェットコースターに乗れるようになったくらい。肩まで伸びた陽光を反射して輝く金髪に、宝石と見紛う澄んだ碧眼。そして、派手な色遣いで、フリフリの装飾がつきまくったスカート付きの、愛らしさ全開の衣装を着込み、それっぽい宝石のついたステッキを持っている。

正に、ゆかりが愛好している魔法少女の例題のような存在に俺は変身していた。残念ながら、中身は俺なんだがな。

「……よし」

『全兵装オールグリーン。いつでもどうぞ』

ステッキを握る頼りない小さな掌や、子供アイドルのような可愛らしいソプラノボイスもいつも通り。何処からどう見ても、好きなアニメのコスプレをした女の子である。違いといえば、らしからぬミリタリー用語を喋る機械の存在と、魔法少女なのは側だけではないことくらいか。

「ここから飛ぶぞ、補助頼む」

『既に飛んでいます。You have control』

「そうか、じゃ、出発!!」

言うが早いか、もこもこのブーツを吐いた足は既にコンクリートか

ら浮いていた。

操縦桿があるわけではないが、意識すれば浮力は自在に操作できる。最初は戸惑っていた飛行も、今じゃマツハ以上のスピードが出せるまでになった。今回の集合予定にギリギリだった俺は、出力を全開にしながら目的地まで急ぐのだった。

過程を大幅に省略するが、俺は時々魔法少女になって世界の平和を守っている。

省きすぎ？ いいんだよ、これくらいで。変身するお題目こそ、人さらい目的の敵対組織の手から人々を守ることと、とても壮大で尊敬されるもの。だが、俺個人としては別に、世界平和の為に！ とか、御大層で高尚な理由でやってるわけじゃないので、胸を張ってそうですね!! とは言えないのだ。そもそも、あんな女の子になってる時点で細かく話したくもないし。

きつかけだけ話すとすれば、このバイトは求人誌に乗っていたわけではなく、あの機械の開発元からのスカウトが始まりだった。魔法少女とやらに変身するには、おおよそ50人に1人くらいの適正が必要らしい。健康診断や様々な情報を非公式に提供されているその組織は、適正者の中から当人の事情や組織の都合を勘案して厳選し、更に長く続けられそうな人材を選んでスカウトに来るといふ。

話を持ち掛けられた当時は大学に入学直後だったということもあり、非常に金銭面で困っていた。仕送りなどもないので、バイトをぎつちり詰め込んで何とか生活費を捻出していたからだ。

そんな折に持ち掛けられた話は、一回の出動で一万円、出勤頻度が多かった場合、場合により手当やボーナスあり。怪我をすれば治療費も出るし、事情によつては出動要請を断る事も出来るという、普通のバイトよりはるかに好条件好待遇な仕事だ。

正直、家に特派員が訪問してきた時は頭のおかしい奴か、もしくは変な宗教の勧誘かと思った。金銭などの見返りがあるとはいえ、突然魔法少女になって平和を守ってくれと言われるなんて、女兒向けアニメの主人公だけで充分である。

厄介な奴に絡まれた、と話を聞いたことを後悔していた俺だったが、目の前で実演され、次に実際に自分の身で技術の粋を味わわれ、そのまま細かい待遇について説明され始めると、いよいよ本当っぽいなど流石に信じざるを得なくなってきた。

折角の大学生活、ほぼ一人暮らしの開放感と、世間的に希少な可愛い幼馴染と念願の交際に漕ぎつけた事もあり、金と時間の余裕というのはあるに越したことはない。

金銭面は当然のこと、このバイトを引き受ける事によって今の多忙なバイトを減らせ時間面も都合できるとなれば、この仕事を断る理由が無かったのだ。

何せ、一回一万円だ。多少の危険は勘案しても、福利厚生がしっかりとれていることもあり、問題はない。また、勤務中はとんでも技術で女になってしまいうデメリットも、迷彩機能によつて一般人に見られることはないため、エロゲーにありがちな展開になることもなく、俺が勤務中だけ我慢すれば良いだけ。正に良い事尽くめで、誘惑に負けた俺は、その場で魔法少女となることを承諾した。それから、俺のエセ魔法少女ライフは始まったのだった。

不都合があれば辞めれば良いと気軽に始めたバイトは、何だかんだと続いて3年目に突入した。金髪碧眼でパステルカラーのふりふりドレスを着た魔法少女姿にも流石に慣れ始め、変身する度に羞恥で顔を真っ赤にすることも無くなった。人員の入れ替わりが割と激しく、現在のメンバーでは最古参になっている俺はその日、コンビニのバイト帰りに出勤要請があり、そのまま家に帰る最中だった。

生身であれば、目を開けられなくなるくらいに速度で空を飛んでいく魔法少女らしき何かは、いかにもなステッキを手にしながら、わき腹に手を当てて苦しそうな表情を浮かべていた。他でもない、仕事帰りの俺の事である。

「あー、マジで痛え。久しぶりに被弾したからかな、腹の奥まで響く感じが……」

『大丈夫ですか？ ログによると、耐衝撃スーツは貫通していないはずですが』

「感覚的には打ち身くらいのはずなんだけど、妙に痛いんだよな。体がだるい気もするし……」

俺が「こんな姿へ魔法少女」に変身できている理由である、手元のステッキを模した機械のAIが、幼げな見た目とは裏腹に、ハスキーな今の俺の声に反応する。

この杖、正式名称は忘れてしまったが、普段は何の変哲もないブレスレットだが、一度使用すれば、一般人には認識できない敵の戦闘員を認識できるようになり、その戦闘員に有効な武装や攻撃行動ができるようになるという、オーバーテクノロジーな超兵器である。

いわば、ヒーローものの変身アイテムのようなもの。先ほども述べた通り、この機械を起動している最中はこちらも一般人から認識されないようになるという、アニメや漫画にありがちなご都合主義満載の機械で、世の中に公開されていないとんでも技術の塊だ。

俺が魔法少女とやらに変身するのは、俺や開発者の趣味ではなく、一応ちゃんとした理由がある。

というのも以前、戦闘員がこの機械の認識阻害装置の効果を無効にしたことがあり、使用者の正体がばれて大騒動が起きた事が過去にあるらしい。地球ではなかったらしいが、その時は惑星どころかその星系を巻き込む大騒動となり、最終的には銀河規模の記録・記憶改変をする羽目になったとのこと。規模が大きすぎていまいち想像がつきにくい、その対策として、億が一、再び同様の事が起こっても問題無いように追加されたのが、この変身機能である。

年齢、性別、体格、果ては容姿まで、条件問わず設定通りの姿になることができるという、スパイなら欲しがること請け合いの便利機能の1つだ。仮に正体が露見しても、変身した人の身を守るという意味で使用される、プライバシーと安全確保のためになくはならない、重要な機能である。

ちなみに、この杖はバイトで使用する備品扱いであり、私事での使用はできない。じゃないと、女湯を覗いたり盗難してみたり、これを使って悪事を働くななんて馬鹿な真似をする阿呆が現れるからな。実際、それが原因で代替わりした同僚もいたし。

キュイツ……

『簡易探查完了。バイタルサイン標準値以上ですが、異常数値到達は確認できず。原因は判明しませんでした。異常ありと判断し、精密検査が必要と判断。ドクターに連絡を提案します』

「要するに、お前から見て異常はないって事か」

『そうなります』

俺達が相手をしている人々を異空間に攫っていく戦闘員共は、武器も持たず素手で襲ってくることが多い。とはいえ、戦闘員と名がついていることからわかるように、動きは素早くまともに殴られると、人体でも100m吹き飛ぶことも珍しくないくらいの戦闘力を持ち合わせている為、油断はできない。

そのため、よつぽど近接戦闘に自信がある者でもない限り、遠方からちまちまと遠距離攻撃を敢行するのが推奨されている。格闘技や武道などを納めていない俺はそれに倣い、魔法少女よろしく遠くからファンシーな見た目の砲撃を繰り返し撃退するのが常なのだが、今日は戦闘員が珍しく武器を持っていたのだ。それも、人々を攫うわけでもなく、現れるだろう誰かを狙って、銃を持ち待ち構えていた。

「なあ、どう思う……？」

『どう考えても、マスターを襲撃するのが目的だと思いますが。いずれにせよ、周囲に人が居ないのならば好都合です。広範囲砲撃でやれるだけやってしましましょう』

「それもそうだな」

AIと相談し、開幕不意打ちをして半分に数は減らせたが、残りとは市街地を舞台にFPSも顔負けの銃撃戦を繰り広げる羽目になり、その結果、何発かまともに食らってしまった。

保護機能は4重に存在しており、仮に核爆弾に巻き込まれても死ぬことは無いらしいが、上位の保護機能が働かないぎりぎりの攻撃を受



けてしまうと、ダメージがそのまま生身に伝わり非常に痛いのだ。

例えば、単純に殴られたり、剣で切られたりする攻撃を加えられると、1つ目の耐折衝・貫通シールドでほぼすべてを吸収し無効化することができる。

だが、八極拳の発勁のような、表面ではなく衝撃を中に伝える類の攻撃は、1つ目の耐折衝・貫通シールドで殺しきれないのだが、ある程度は軽減されてしまうせいで逆に2つ目の防衛機構が働かず、生身に衝撃が伝わってしまう。

今回の場合も似たようなもので、弾丸の貫通は防いだが、受け止めた衝撃は多少軽減されたとはいえ、弾丸が衝突した際に発生する衝撃は生身に届いているのである。

骨まではいってないだろうが、変身を解けば脇腹には青々とした痣が出来ているだろう事は間違いない。病院に行くにしろ、貧乏学生にとってはかなりの出費になるので、こちらで治療してもらえるのであれば非常に助かるのだ。

「わかった、このままつないでくれ」

『了解。管制センターへと接続スタート』

俺の了承に、機械らしく愛想の欠片も無いステッキのAIは、淡々と事務的に手続きを踏み通信を開始する。

可愛らしいマスコットなどおらず、機械音声丸出しのAIと会話している魔法少女の姿をもし目撃されれば、本来の対象年齢であろう年端もない少女たちの、夢と希望ははかなく打ち砕かれるだろう事は間違いない。

姿形がこれでも、中身は男で技術はSFの完全な別もの。もし目撃しても魔法少女に罪は無いので、夢と希望は捨てずに持つていて欲しいものだ。こんな見られたら見られたで、今度は俺が変わりに恥ずか死ぬが。

『はいはい、こちらドクター。その姿で話すのは久しぶりね、Wiz。貴方、戦闘以外じゃ頑なにそれ使わないものね。いいのよ、もっと気軽に変身してくれても。女の姿でオナニーしてみたいだなんて、男ならちよつとは想像したことあるでしょ?』

「個人情報詮索はお互い無しなんでしょ？ 用件だけでいいです」

AIが音声会話で繋げたのは、このバイトの雇い主でも組織で、ドクターと名乗っている人物だ。ドクターとはいいつつこれらの装置を開発した人なので、どちらかといえば技術者である。何故エンジニアとかディベロッパーと名乗らないのかは、聞いても答えてくれない永遠の謎だ。

ちなみに、Wizとは変身後の俺の事を指しており、他にはAnd、Hero、Psyの計4つのコードネームが付いた同様の装置を持つ同僚がいる。それぞれ魔術師、アンドロイド、英雄、超能力者の単語からとられていて、見た目は名前に沿ったものになっている。俺が魔法少女チックな姿に変身してしまうのも、これが理由である。

前者2つが女性モデル、後者2つが男性モデルの姿で、どれも端正な見た目をしており、これらがドクターが言うようにオナニーだとか変身したままの姿でナンパしたりされたりして、追放処理をされる筆頭の理由となっているらしい。

「そもそも、プライベートでの使用は禁止でしょう？ 自分としては、割りの良いバイトって中々見つからないので、長く付き合っていきたいと思ってるんですがね」

『君が真面目にやってくれるのはわかるし、組織としてはありがたいのだけれど、個人的には面白くないわねえ……やりすぎなければ少しは黙認してるんだから、もつとはっちゃけて良いのよ？ 歴代のWiz、Andは貴方が想像してるよりもつとやりたい放題だったし』

「そこで女性モデルの名前しか挙がってこない辺りが、男って奴の悲しきですよ」

『男の割合が多いこと自体は否定しないけど、女がいないこともないのよ？ 変身すれば素性がばれないからって、毎日浮気三昧の奴もいれば、乱交パーティーに参加した女もいたわ。こういう時、本性が出るって本当ねえ』

「……何も聞かなかったことにします」

出勤要請を連絡してくれるオペレーターさんの場合は、極めて事務的に対応してくれるのでこちらとしても非常に助かるのだが、けがや

技術的な問題が発生した時に出てくるこのドクターという女性は、扱いという意味では非常に厄介だ。プライバシー規約など気にせず、面白そうだと思ったらガンガン踏み込んでくる。俺をからかうと面白いと学習してしまったのか、ドクターは事あるごとにセクハラ紛いの事を積極的に言ってくるのだ。

女でのオナニーだとか、諸々に興味があるのは否定できないので、良い反応をしてしまった俺も悪いのだが、余波で夢も希望も無い女の内情とやらまでは知りたくない。魔法少女の存在を信じる女の子の同様、俺にも女性に幻想を抱かせたまままで居させて欲しいものだが、現実にはあらゆる意味で非情である。

『まあいいわ。それで、銃で撃たれたんだって？ 戦闘報告で見ただけ、戦闘員が武器を持つてくる事は珍しくないのだけれど、貴方を待ち受けてたつてのはちよつとひっかかるわね』

ため息をつきながら話を流そうとする俺に、不満そうなドクター。俺のつれない反応は常の事なので、からかうのはもう諦めたのか話を進め始める。

「ええ。AIとも話しましたがけど、自分が急襲したから応戦したというより、こちらを襲うのが目的ではないかと感じました」

『間違っていないでしょうね。今までの解析の結果、あの戦闘員には単一の命令しかインプットできないことがわかってるわ。襲われたから命令を一時無視して応戦、くらいはできるけど、臨機応変に動ける優れたAIは搭載していないはず。今回は、最初から貴方たち4人をターゲットに攻撃行動させるのが目的だった、と考えるのが普通ね』

「俺達の排除に本腰を入れてきた、ということですか？」

『そうじゃないわ。あいつらが地球に来るのは侵略目的ではなく、あくまでも人的資源確保のため。本気で攻勢行動をとる時は戦闘員じゃなくて向こうの人間を出してくるし、いくらでも替えが効く使い捨ての戦闘員しか送ってこない辺りがその証明。戦闘員を増やしたわけでもなく、本当に武器を持たせただけなら、何か別の目的があるんでしょうけど……』

「こちらを舐めてる、つてことは無いんですか？ わざわざ上位の人間を送るまでも無い、的な」

実際問題、こちらから防衛に出ているのはこの機械のアシストありきでしか戦えない素人だ。わかる人が見れば、大した実力もない事はすぐ見抜けるだろう。

だが何か悩んでいる様子のドクターは、それはないとはつきり否定する。

『うーん、それも無いわね。あつちの思考回路には1か0かしかないから、貴方達を本気で排除しようと思つたら地球事吹き飛ばすでしょうし』

「マジですか……」

『マジマジ。実際、今までも星をいくつか吹き飛ばされてるし。10年前なんて、銀河丸ごと爆破しやがって。そのせいで、私達がどれだけ大変だったか……まあ、貴方達以外に攻勢行動専門の別動隊もいるし、私達がいる限りそうはさせないけどね。貴方は安心して魔法少女ライフを満喫して頂戴』

「しませんよ、誰がこんな恥ずかしい……」

普通の人間なら取り合いもしない話だが、こちらと敵組織の圧倒的なテクノロジーを見せつけられ、実感させられている俺からすると、この話も本当なのだろうと信じざるを得ない。

想像以上に怖かった話に、今はふざけてくれるドクターの性格がありがたかった。

『話が逸れてしまったけど、怪我だったかしら。戦闘データとバイタル情報だと、脇腹？ うーん、今はそこまで痛くなくても、変身を解くと触るだけで叫ぶくらいには痛そうね。医療用ナノマシンを転送するから、変身を解いた後に摂取しておいて』

「わかりました、よろしくお願ひしま、ツつあ……」

『ちよ、ちよつとWiz!』

ずきん、と痛んだ脇腹に、一瞬意識が途絶え、空中でぐらり姿勢が崩れる。意識でコントロールしている飛行が、痛みで意識が遠のき制御を失ったのだろう。ふらりと落ちかけた俺だったが、ドクターの慌

てた声で何とか持ち直した。

『マスターの異常を検知、I have control』

『ちよつと大丈夫？ そこまでダメージはないはずんだけど』

『す、すいません。ふわつと、意識が遠く……』

AIがコントロールを奪って制御してくれたおかげで落ちずに済んだが、自分の想像以上にダメージがあるのかもしれない。

『銃で撃たれるなんて、一般人じゃしょうのない経験なものね。意識せずとも精神的にダメージがあるのかもしれないわ。こちらから“緊急対応”を申請しておくから、今日は戻ったらナノマシンを摂取したら寝ていなさい。いいわね？』

『わかりました。後はお願いします……』

緊急対応とは、要するに変身者の職場や学校に、公的な休みが取れるよう連絡と手配をする事を指す。勿論ドクターは俺が大学生ということすら知らないので、組織の情報を一手に引き受け管理している情報管制官（という人がいるらしい）に話を通し、諸々の手続きを踏んで休んでいいようにしてくれるというわけだ。

ゲームで見る狙撃のイメージと、現実に弾丸が迫ってくる感覚というのは随分違う。今までの仕事で慣れたつもりでいたが、知らず知らずのうちに、ちよつとしたPTSDにでもなっていたのかもしれない。

吐き気すら感じてきた俺は、有難くその申し出を受けることにする。

『それじゃ、また何かあれば連絡してちょうだいね』

『ありがとうございます』

『コントロールは私が行います。マスターは到着するまで気絶しない様にだけお願いします』

『了解、頼むわ』

通信を切断すると、操舵はAIに任せて静かに飛行を続けた。

痛みをこらえるので必死で景色を楽しむ余裕などなく、現在位置を考えればそれほど遠くないはずの飛行距離が、いやに長く感じた。風を切る音がやけに頭に響く。太陽の光がやけにまぶしく感じ、シール

ドで防がれているはずの風圧を感じる錯覚と、高熱が出ているときの  
ような関節が痛む感覚。五感が敏感といった方がいいのか。

不思議な感覚と、痛む脇腹と疼く下腹部を押さえながら行う一人  
の単独フライトは、見覚えのあるマンションが見えてきたことであ  
やく終わりを告げた。

「やつと、ついた……」

『お疲れ様でした、施錠解除』

自室のベランダに降り立ち自らの足で立つと、体の重さを余計に感  
じる。小さな体でもパワーアシストがある為、自分の体以上に軽い  
はずの体が、今日は鉛のように重かった。いつも人目につくと怒られる  
ベランダからの侵入も、今日だけはおとがめなしだった。何とかドア  
を開けると、狭いワンルームに足を踏み入れる。ベランダ近くの日当  
たりの良い場所に引かれた薄い布団と足の低いデスクに、家具がいく  
つか。見慣れた俺の部屋だ。安堵から、どっと疲れが押し寄せてく  
る。

「疲れたな……」

変身を解くこともせず、ステッキを机の上に置くと、薄い布団に向  
かい、少女の綺麗な髪の毛を散らしながら倒れ込む俺。痛みは収まる  
どころか断続的に襲ってきており、襲ってくる眠さも合わさってそれ  
に体を委ねてしまおうかとも思ったが、無感情な機械音声の声で我に  
返る。

『気持ちわかりますが、変身を解除し、早急にナノマシンを摂取しま  
しょう。後を考えれば、そちらの方が楽になりますよ』

「そう、だな……それも、そうだ」

動くことも億劫で仕方なかったが、AIに諭され仕方なく体を起こ  
す。一度放り出したステッキを右手に握ると、キーワードを声に出  
す。

「Wiz57、装備解除要請」

『——要請承認。装備を解除します』

形ばかりの声紋認証があっさり承認されると、ぱっと狭い室内が  
光に包まれる。

このステッキが備える装備や防御機構が解除され、不細工ではないがかつこよくも無い、平均を地で行く見慣れた俺の姿に戻った感覚があった。

疲れからか、込み上げたあくびはふ、と噛み殺すと、心なしか腹部からの痛みが増した気がする。

「ッ、俺は飲み物取ってくるから、お前はドクターの言ってたナノマシンを頼む」

『……？ 待つてください。バイタルデータが変です』

ナノマシンといっても形態は錠剤型で、見た目も使い方も普通の飲み薬と変わりはない。水を取りに行くため、痛みを振り切って何とか動こうとしていると、AIに疑問符交じりの声色で話掛けられた。

「なんだ。振り返るのもつらいんだから、あまり俺に無理を……？」

机の方に振り返り、AIに文句を言おうとして、ふと違和感を感じた。

視点が低いのだ。部屋の方が大きくなったというか、まだ変身を解除していないかのような。

手違いか、と思ったが、今俺が来ている服は魔法少女の衣装ではなく、何故かぶかぶかだが、返信前に着ていたジーンパンとTシャツ。

変身は解除されているのになんで、と疑問に思った所で、やっと致命的な事に気づいた。

「あ、れ……!?!」

部屋の中で響いているのは、20数年間聞きなれた自分の声ではなく、先ほどと変わりのない、見た目の年齢に反して意外とハスキーな、可愛らしい声。慌てて喉に手を当てようとして、手指の余りの細さに気づき、俺の脳内に嫌な予感が走る。

痛みに意識が行き過ぎて気になっていなかったが、そもそもを言えば、変身を解除しているというのに視点が低いままなのだ。

視線を上げると、混乱している俺に止めを刺すように、ベランダのガラスに反射した今の俺の姿が視界に入る。

触れると折れそうな細いシルエット。

低い背丈に対し、腰ほどまで伸びたサラサラで陽光を反射せんばか

りに輝く金髪に、海のように澄んだ深い色の碧眼。

疲労感の隠せない呆然とした表情は、幼い少女性を全開に感じられ、ぶかぶかの上下を着ているせいで、そこはかとなない背徳感を感じさせる。

ガラスの中の世界、もとい俺の部屋には、魔法少女の衣装脱いだ状態の、“仕事着”ならぬ”仕事姿”の俺がいたのだ。

慌てて手元を見ると、杖の待機状態であるブレスレットが手首に収まっている。

『マスター、各種装備は展開されていません。私はオフラインです』

「……これは、現実か？」

『私のセンサーでは異常を検知できません。残念ですが、99.978%の確率で現実かと』

手元から聞こえた残酷な言葉に状況を察し、だからだと汗を流し始める俺に、追い打ちをかけるように報告を重ねるAI。

小さな手を開いたり閉じたり。ぶにぶにの二の腕をつまんでみたり、触り心地の良い髪の毛に触ってみたり。

脳に伝わる五感全てが、この少女が今の俺なのだと全力で伝えてきた。

「お、お、女になってる……!!? 変身解除してるのに!!?」

『そのようですね』

思わず叫んだ声も可愛らしくて、俺に非情な現実を突き付けてくる。

ガラスに反射していた、幼げな少女の顔がさつと青ざめる。

「そうですね、じゃないよ!! 何でそんな冷静なんだ、一応とはいえ、お前のマスターの危機なんだぞ!？」

『そう言われましても。バイタルに異常はありませんし、早急に命の危険はないかと。それに、私に感情などありませんし、慌てようもありませんが』

「兎に角ドクターに連絡するんだ!! 一刻も早く!!」

『異常事態と判断し既にコール中です。応答次第通信を開始しま—  
—』



『もしもし？ 随分せっかちねえ、ナノマシンならもうちよつと待ちなさい。催促しても、自動生成なんだから早くはならないわよ？』

無味乾燥な返事しか返さないAIに腹を立てるが、機械なだけあって仕事は早いのだ。それがまた腹を立てさせる要因なのだが、こいつに怒ったって仕方ない。

「それどころじゃないんですよ!! AI、映像通信許可!!」

『了解。映像を転送します』

『へ？ どうしたの急に、ってあれ、そういえば声変身後のままね』

つながったドクターに迅速に状況を伝えるべく、プライベート保護の為に普段はオフになっている映像通信の許可を入れ、こちらの映像を送るようにした。

『あら可愛い。さすが私デザイン、相変わらず超絶美少女に仕上がってるわ。それで何？ 私服姿みたいだけど、やっぱりコスプレでもしたくなったの？ 私にアドバイスでも欲しい？』

「そうじゃなくて、これ、装備展開してないんですよ!!」

『……はい？』

「女になってるんです!!」

ぽかんと表情が分かりそうなくらい気の抜けた声が聞こえた。いつも飄々とした態度を崩さないドクターにしては珍しい声を上げているが、今はどうでもいい。

『報告。兵装解除後も、容姿偽装機能使用時の姿が維持されています。戦闘が原因と思われるバイタルの低下以外、通常のマスターとの差異は確認できず、当機では原因の解明には至りませんでした。ドクターに緊急対応を要請します』

『……ええ!?!』

『データを転送します』

慌てて立ち上がったのだろう、通信越しに、ガタガタ!! と何かが倒れる音が続けざまに聞こえた。

しばらく何かを操作する音だけが聞こえていたが、深いため息が聞こえると、元々あった嫌な予感が加速していく。

『……なるほど、あっちの狙いはこれだったのね。すまないわねW、こ

これは私達の落ち度だわ。原因は、ナノマシンよ』

「ナノマシンですか？」

『ええ。今回、貴方が相手した戦闘員の武器に込められていたようなね。銃撃を受けた腹部を中心にナノマシンが全身に広がっていて、容姿偽装機能だけをピンポイントでシャツトアウトしてるわ。プライバシーの保護と後処理緩和の為だけにつけられた機能だから、他の兵装よりセキュリティレベルを落としたのが仇になったわね……』

シャツを捲つて、多少は筋肉がついていはずのお腹を見ると、見た目の年相応なぶにぶにお腹になっていた。右の脇腹の弾丸が当たった箇所は青あざになっており、そこを中心とうっすらと光る物が見えた。動作中光るとい特徴は、経口摂取か打ち込まれたかという違いはあれど、俺の知識にあるナノマシンで違いなさそうだった。「シャツトアウトって……」

『簡単に言うと、機械の認識を狂わせているの。容姿偽装機能は、登録した容姿に対象を書き換える機能。兵装展開時に貴方の容姿を読み込み、解除時にその姿になるように再び書き換えてるのだけれど、ナノマシンは貴方が元からその姿だったようにAIに認識させてるのね。つまり、元々貴方がその恰好の女の子だったことになってるってこと』

「え、女子だったことについて……元に戻るんです、俺?!」

その手の事象に詳しくない俺でも、大問題に発展していることくらいは理解できる。女になったという戸惑い以上に、男に戻るのかわからないという状況に焦る俺に対し、いつになく冷静な声でドクターは話掛けてきた。

『安心しなさい。簡単に解析した感じだと、投与されたナノマシンの効果で容姿偽装機能が一時的に遮断されてるだけだし、恐らく私達にこれが通用するかの機能テストのようなものね。貴方の登録情報自体はバックアップがあるから、ナノマシンを除去すれば、すぐにでも元の体に戻るから安心しなさい』

「それなら、良いんですね……」

『2、3時間の辛抱よ。出来たらすぐにでも連絡するから、しばらく横

になって休んで下さい。申し訳ないけど、状況が変わっても困るから治療用ナノマシンの摂取はダメよ』

「いや、一気に痛いどころの話じゃなくなったんで、それは大丈夫ですが」

『それと。これは真面目な話だけど、激しい運動とか興奮するようなことしちやだめよ？ ランニングやスポーツは勿論のこと、オナニーなんてもつての他だし映画やポルノ動画を見るのもアウト。わかっているとは思うけど、ナノマシンは血流にのって全身をめぐるから、変に興奮して心拍数を上げると、ナノマシンが定着して、下手をすれば元に戻れなくなる心配もあるから気を付けなさい。まあ、そこまで高性能なナノマシンではないから大丈夫だと思うけれど、一応念の為にね』

「わ、わかりました」

後半に関してはまずしようとも思わないが、あのドクターが言うのだから本当なのだろう。いつものようにふざけたからかいではなく、大真面目に注意されては頷くしかない。

『ならお願いね。AI、何かあれば彼のフォロー宜しく。対応は一任するわ』

『了解しました』

通信が切れると、テーブルの上にとっかかと座り込む。人暮らしを始めてから買ったこのテーブルだが、床に座ってもまだ低いくらいの高さなのに、小さくなった身体には丁度良い座り心地なのがまた悲しい。

「……なんか、大事になったなあ」

『ドクターは普段からかっておいですが、長時間性別の違う身体で過ごすというのは、普通の人間では精神衛生上大変良くありません。実際、本機を別性で利用する場合、懲戒解雇を除けば、約3割の方はストレスで異変を来し退職されています。ドクターの助言通り、今は何も考えず休んだ方がよろしいかと』

「まあ、なあ。大学に連絡もしてくれるだろうし、今日はおとなしく寝とくか……」

普段からサボるほうではない為、仮に公欠が付かなくとも大学の出席日数には余裕がある。

行ったところで、こんな姿ではまず俺が出席したとはならないだろうし、そもそも全身の痛みが酷くて講義どころではない。大人しく、痛みをこらえながらドクターの連絡を待つしかないようだ。

ぶかぶかのジーンズを脱ぎ捨て、布団に体を投げ出した。

「災難だ……」

ずきずきと痛む患部に手を添えながら、思わずこぼれ出る愚痴。

顔を向けた先にある全身鏡には、いつもと着ている服が違う女の子の姿が映っている。

「変に美少女で絵になるだけ、嫌になるな……」

サイズのでかいシャツ一枚にトランクスを履いた状態で寝転んでいては、彼シャツを着た彼女にしか見えない。

男としては一度くらい見てみたい理想のシチュエーションだが、それが自分自身だと考えると途端に憂鬱になる。

部屋に、少女の深い深いため息が木霊する。

「折角、今日は講義の後デートの予定だったのにな……」

『マスター、その姿でそのセリフですと、恋焦がれるただの女の子になつてますが』

「……煩いな、言った後に後悔してるからほつといてくれ」

可愛らしい声にはよく似合っているが、中身は俺。言った後に恥ずかしさで消えてしまいたくなった。

彼女であるゆかりとは、学科が同じこともあり講義はほとんど同じなのだが、お互いバイトなど用事が重なりここ何日かは講義以外で顔を合わせる機会がなかった。今日は久しぶりに映画三昧に浸った後、良ければホテルにでも行こうと思っていたので、猶更落胆がひどい。

純粋に彼女とイチャコラしたいという欲求もあり、溜まっている夜の欲求を開放したい気持ちもあり。夜に関しては、現状溜まっている物自体消え去っているのだが、それはともかく。

こんな姿で会うわけにもいかないの、予定はデート含めて中止せざるを得ないだろう。

「ゆかりに悪いことするな。連絡しとかない、と……」

机の上に放り出した携帯に手を伸ばそうとするが、手が届くよりも先に瞼が自然と降りてくる。

ただでさえ出撃するのは精神的に疲れるのに、戦闘でダメージを負った上にこんなことになっては、中々に堪えるのも当然だった。無事家に到着したことへの安心感に、身体の痛みと気疲れも相まっても、急激に耐え難い睡魔が襲ってくる。

「だ、めだ……ね、む……」

『マスター、マスター？ ……これはダメそうですね。おやすみなさい』

ぶるぶると筋肉のない腕を必死に伸ばしていたが、横たわったままではテーブルに手は届かない。彼女への不義理と、面倒くささに眠さをかけ合わせたものを天秤にかけ、あえなく誘惑に負けたところで、俺の意識は力尽きた。

『マスター、マスター』

うとうとと夢見心地の所に、無粋な機械音声が耳につく。

「ん、むう……」

『マスター、幼女のような眠そうな声を上げている場合ではありません』

「なんだよ、煩い、なあ……」

AIの問いかけに返事をするが、自分の思った通りの言葉を喋るふにやふにやとした声に強烈な違和感を覚える。おかしいな、と思いかけたところで、そーいや女のままなんだったな、と半分寝たままの頭が思い出す。

「大学、休みなんらろお？ ドクターからの連絡なら、兎も角……」

『確かに、まだドクターから連絡はきておりませんし、無事マスターは本日公休となりましたが』

「だったらこのまま、寝かせろお……」

どうせ大学は休みになったのだ。素直に寝かせろよと、寝起きで呂律が怪しいせいでますます子供っぽい声色で抗議の声を上げる。

『ふむ。私が機転を利かせただけですし、本当にマスターが起きなくて良いのなら、別に私は構わないのですがね』

「なんだよ、そんな意味深な……」

睡眠を妨害されたことに加え、迂遠な言い方をするAIにいらだちを隠せず、ぶつきらぼうな言い方になる俺に対し、AIはさも困った、と言いたげに、聞こえないため息が聞こえんばかりの呆れた口調で告げた。

『現在時刻11時32分18秒。待ち合わせ時刻の11時を優に過ぎています。マスターの携帯にも、ゆかりさんから数度電話が入っていましたよ』

「……連絡？ ゆかりから？」

ゆかり、俺の彼女、待ち合わせ時間、休みの連絡に、電話。

意味不明なAIの言葉に首をかしげていたが、ぼーつとしていた頭の中で、少しずつ点と点がつながる。徐々に甦る、眠る前の記憶。徐々に飲み込めてくる現状。

『早く連絡しないと、心配してゆかりさんがこちらに来てしまうのでは？』

「……ゆかりに連絡、してねえ!？」

ピンポーン

「……はうあ!？」

約束をすっぱかした事に気づき、極めつけに部屋に響くチャイムの音を聞いて、眠さでぼけていた頭は完全に覚醒した。

がぼつといつの間にかかけられていた布団を剥いで立ち上がると、携帯を手取る。ロック画面にはゆかりからの着信履歴が3、4回、こつちを心配するメッセージが複数残っていた。

「な、なんで起こしてくれなかったんだよ!! 一体全体何のためのAIなんだ!!」

『対インベーター防衛用AIですが何か。6回は声をかけたのですが、ナノマシンの効果もあってか眠りが深そうでしたので、全く効果はありませんでした』

「いやうん、そうかもしれんが!! 目覚まし時計じゃないんだから、そ

こを何とか起こしてくれないと困るだろ!!」

ガチャ、ガチャリ……

「伊織君？ 居るのー？」

玄関にカギが開く音と同時に、ドア越しに聞きなれたゆかりの声が耳に入った。

同棲こそしていない俺たちだが、お互いの部屋の合いかぎは持っている。幼馴染であることもあり、部屋に上がることに躊躇いはない。ごそごそと靴を脱いで上がっているだろう音がする。

「ほら、入ってきちやっただろ……!!」

『ですから、彼女に合い鍵を渡すのは反対したのです。初めに説明したように、恋人関係にある者同士では、容姿偽装機能等のプライバシー保護機能の安定性が……』

「その話はあとで聞くから、まずはこっちだ!! どうするんだよこれ。今の俺、よその家に不法侵入してる怪しい幼女じゃないか!!」

『幼女が不法侵入は現実的に考えてないでしょう。元のマスターが誘拐犯扱いされ、今のマスターが攫われてきた被害者とされるパターンの方が濃厚ではないでしょうか』

「くそ、一理あるな……」

冷静に考えて、子供もいない独身男性の部屋に幼女がぽつんといれば、危ない想像をする人間は少なくないはず。しかも、着ている服はぶかぶかの男物。完全にアウトだ。

「どうする、何処かに隠れるか!? あ、クローゼットとかどうだ!!」

『確かに、今のマスターの体格なら隠れられるでしょう。ですが、マスターが自宅内にいる事は確信してらっしゃると思うのですが、どうでしょうか。靴はあるな、ですとか、いるじゃない、とゆかりさんが小さな声で発言しているのは聴覚センサーに反応がありました』

「じゃあ駄目じゃないか……す、ステルス!! ステルスとかどうよ!」  
『ですから、対象と恋愛関係にある者には効果が——』

靴を脱ぎ、とすとすと軽い足音を立てながら接近してくる音が、焦燥感が掻き立てる。

小声で話し合う俺達だが、一向に良い案は出ず、AIは打開策どこ

ろか厳しい現実を突き付け、追い詰めてくる始末。

「伊織君ー？ 入るよ？」

「ほうあ!？」

ドアノブが回る。出したことない情けない声が出てしまうくらい焦っている俺は、あたふたと慌てることしかできない。

『……仕方ありませんね』

気のせいかな、ため息が混じっている気がするAIのつぶやきが早いかな、扉が開くのが早いかな。

すりガラス越しに見えていた人影は間違いなくゆかりだったようで、困った顔で部屋に入ってきた。

「もう、いるじゃない伊織く……」

室内に人影を見つけ、俺だと断じ困り顔で叱ろうと言葉を紡いだところで、ようやく異常に気付いたようで動きがピタリと止まった。

「……」

ゆかりは見下ろし、俺は見上げる形で視線が交錯する。どう言い逃れしようか冷汗をだらだらと流しながら言い訳を考える俺と、ぽかんと、現状を理解できていなさそうな表情のゆかり。

恐ろしく静かな時間がしばし流れる。何とか通報は避けなくてはと、頭の中はフル回転させているが、そう簡単に現状を打破する案が見つかるわけもなく。

「あ、あの……」

じつとりと嫌な汗を掻いている俺が、当てもなくとりあえず口を開いてみると。

「ういふら」

怪訝そうな表情をする間もなく、満面の笑みを浮かべ、ぽんと手を打つゆかり。何故か彼氏の部屋にいる少女の姿を確認して、何故か何かに納得した様子の彼女。途端に笑顔になるとそのまま、こちらと向きあいながら後退していき、ぱたんだアを閉めた。

部屋の中には、間拔けな表情を浮かべた彼シャツ状態の俺と、役立たずのAIが残った。

「……え？ 出てったの？」



『そうですね。今玄関を出ました』

「リアクションは!？」

昼前の静けさ漂うマンションに、俺の虚しい突っ込みが無駄に反響した。

困惑するわけでもなければ、驚くわけでもない。警察に連絡されるなどいろいろな反応が頭に過っただけに、無反応で撤退されるのは流石に想定外だった。

「普通、一人暮らしてゐるってわかってる人間の家に謎の少女が居たら、何か反応しない!? 何でニコニコ笑いながら出て行つたんだあいつ!？」

『恋人が少女を誘拐しているかもしれない、という現実を受け止めきれなかったか、とりあえず一回外に出て冷静になりたかったのか。はたまた、マスターに刺激を与えないよう一回外に出て、通報する為という可能性もありますが、順調にここから遠ざかっているのですその線は無いかと。私としては、可愛らしい今のマスターに着せる為のコスプレ衣装を取りに行った説を押しします』

「いや、いくら何でもそれはないだろ……コスプレさせ甲斐がありそうだからって、誰彼構わず着せるようなハチャメチャな性格じゃないぞ? お前が俺に興味ないからって、あまり適当な事を言うとは解体するぞ貴様!？」

スペックの1%も使っていないだろうAIの雑な予測に、怒り狂った俺はAIが収まっているブレスレットをブンブンと振り回した。

確かに、ゆかりはコスプレを作ったり着せたりする熱量に関しては凄惨なものがある。とはいえ、見知らぬ女の子に対していきなりコスプレを強要するような倫理観の無い奴ではないのだ。

感情のぶつけ先を失い八つ当たり気味の俺に対し、AIはやれやれと言わんばかりに、はあ、と大きなため息をつく。

『失敬な。どんな状況だろうと、私は常にフルスペックで稼働しています。そこらの唯々諾々と命令に従うしかない化石のような機械群と比較されては、無いはずの腸が煮えくり返るといふものです』

「ほお? じゃあそのハイテクAI様が立てた予測の根拠を聞かせて

もらおうじゃないか」

『構いませんとも。とはいえ、別に難しい話でもないですが』

言い終わるが早いかどうかのタイミングで、目の前に画面が表示された。謎技術特有の、空中に浮かび上がるホログラムで出来たウインドウである。当初はおっかなびっくり使っていたこれも、長いバイト生活ですっかり見慣れたものだ。

「これは……」

表示されているのは、このAIが管理している兵装のモニタリングだ。ビームの出る重火器や、核兵器すら防ぐらしいバリアなど、このブレスレットにAIと一緒に搭載されている兵器の全てが、ここに網羅されている。

当然、現在は展開されていないので全てオフラインの赤表示になっている、はずなのだが。

一点だけ、緑表示になっている項目があった。

「は？　今ステルス効いてるの？」

『マスターが煩かったですからね、ゆかりさんが入室する前に、認識障害機能だけはオンラインにしておきました。私が再三警告していた通り、ゆかりさんには通じていなかったので、全くの無駄でしたが』

「はあ!?!」

先に説明した通り、ここでいうステルスとは、同じ装置を使っている同僚以外の以外の全てから認識されなくなる機能の事を指す。つまり、これが発動している限り、透明人間に等しい。その効果は折り紙つきで、戦闘中に生放送中のカメラを横切ったりしたこともあるが、騒ぎになる事もなくSNSに拡散されることも無かった。

一般人でしかないゆかりに、最先端どころかオーバーテクノロジーを使った状態の俺が見える訳がないのである。

『あのですね。認識障害機能は確かに、対策されていないとどんなものも認識できないという、我々が誇る隠匿性の高い技術ですが、特性上克服出来ない、唯一にして最大の欠点があります』

「欠点……?」

動揺を隠せない俺に、AIは勿体ぶって前置きを語りだす。

そういえば、契約時に受けた説明の際、電化製品の説明書くらい分厚かった注意事項の中でも、特に念押しされて説明された項目があった気がする。

『そう、欠点です。初めにしっかりと説明したはずなのですが、反応から察するにマスターは忘れていたのでしようね。どうせそんなことだろうと思いました』

「ぬぐっ……」

言い返す言葉の無い俺の目の前にポップアップしたのは、契約時に読まされた注意事項だった。とある一文に線が引かれ強調されている。その一文には、こんなことが書いてあった。

「認識障害機能は、利用者の姿や声など全ての情報をあらゆる媒体から遮断しますが、利用者と相互に恋愛感情を持つ人間に対しては、効果が無い事があります!?!」

『ですから、私はゆかりさんに目撃される恐れのある自室のベランダからの離着陸や、時間が無いからと彼女と分かれた直後に、近場で兵装展開して飛び立つなどの行為は自制してください、と私は再三進言していたのです。やはり覚えていませんでしたか、そうですね』

「ぬ、ぬぐう……」

身に覚えがありすぎて、冷や汗が止まらない。

時間にルーズな方ではないのだが、出退勤時は何かとこいつの便利機能に頼る事が多い。AIの言う通り、ギリギリまでゆかりといて、別れた何秒後には変身して空を飛んで言たなんてことは、わりとざらだった。自宅に戻っている最中のゆかりの上空を飛んで行ったことも、数えきれないほどある。目線が合ったような気がしたことも、幾度となくあった。気のせいだと思っていたあれが、本当にこちらを見ているのだとしたら……

『そのままかだと思えますよ。今の姿をきちんとマスターだと認識していたと仮定するなら、あの謎の笑顔の理由も理解できます。普通の少女相手なら遠慮するところでも、マスターが相手なら気兼ねなく着せ替え人形に出来ますからね』

がちやり……

「!!」

『お早いお帰りですね。何か大量の荷物を持っているようですよ、マスター』

乱暴に玄関が開く音に、思わずびくりと肩を跳ねさせた。どちらかといえば大人しい性格のゆかりらしからぬ荒れた様子は、その興奮度合いを音だけで俺に知らせてくる。

数秒後、リビングのドアが開くと、息を切らしたゆかりが大きなキャリーケースを両手で抱えていた。慌てて詰めたのだろう、締め切りと切っていないファスナーの隅からは、パステルカラーのフリルがちらりと覗いている。フリルの端には、見覚えのありすぎる意匠のワッペンがついていた。状況証拠から、ゆかりの好きなヒロイン物のアニメが頭を過ぎる。

「ごめんね、遅くなっちゃって……まさか、今日お披露目してくれるだなんて思ってたなかったから、準備してなくて」

「え、あの……?」

「? どうしたの、伊織君」

えへへ、と汗を拭って恥ずかしそうに笑うゆかりは大変可愛らしいが、問題はそこではない。

よいしょ、とキャリーケースを下ろし、荷解きを始めたゆかりは、あつさりと今の俺を自分の彼氏と認識したのである。

「俺の事、何で伊織って……」

「え? だって、何度も見たよ? 伊織君が魔法少女に変身するところとか、空飛んでるところ。表立っては見せられないから、私にこっそり見せてくれてたんじゃないの?」

「――」

「可愛かったよ? 見た事ないオリジナルの衣装で、可愛らしいポーズ決めてるとこ!!」

『ほら言ったじゃないですか。私の進言を聞かないマスターの自業自得ですよ』

折角写真に撮ったのに、残らなかったのは残念だったけどね、としよんぼりしているゆかりに、俺は思考停止状態だった。

今までの姿を、全部見られていた？

あんな恥ずかしい服を着た姿を見られただけで顔から火が出そうなのに、初めの頃、気の迷いでそれっぽいポーズと決め台詞を言ってみたあの瞬間を、よりにもよって見られていた、だと？

頭の中で、走馬燈の様に過去の記憶が再生され、それが逐一みられていたのかも、と想像が駆り立てられる。

全身を掻きむしりたくなるようなむず痒い感覚が込み上げ、頂点に達した時。

「ヴ、ヴああー!!」

「え、伊織君?」

羞恥にかられた俺は、思わずその場で頭を抱えてうずくまった。

ゆかりは心配して俺の顔を覗き込みに来るが、真つ赤な顔を見られたくない一心でブンブン頭を振って回避していた。

「その、もしかして伊織君、私に秘密にしてるつもりだった……?」

「やめろお、そんな目で見ないでくれえ……」

言いづらそうに小声でささやくゆかりと、ぷるぷると震えることしか出来ない俺。

死ぬほど恥ずかしかった。穴があつたら入りたいとは、きつとこのことだ。

この反応、きつとばれたのは近々ではない。俺が気の迷いで変身ポーズをしたのは、バイトを始めた初日の事である。つまり。

「最初っから、知ってたって事かよお……」

『手遅れだとは思ってましたが、まさか初めからだつたとは。99%マスターが悪いとはいえ、管理AIとして私も反省すべき点が大いにありますね。あ、どうも初めましてゆかりさん。私は三笠伊織さん担当の兵装管理AIです。わかりやすく言えば、喋る変身アイテムと思っただいて構いません。どうぞごひいきに』

「あ、どうも初めまして、新田ゆかりです。伊織君がいつもお世話になっております」

絶望の淵に沈む俺をよそに、暢気に挨拶を交わす1人と1台。

男に戻れないという大問題は、一氣にどうでもよくなった。このバ

イトを始めるにあたって、家族よりも友達よりも誰よりも、ゆかりにばれたくなかった理由。

「ゆかり、1つだけ聞かせてくれないか……?」

「なあに?」

「今年のプリズムシリーズ見た感想、本音で言ってみろ」

見上げたゆかりの表情は、それはもう華が咲いたような笑みだった。

「私の彼氏の方が可愛いなって思ってた!! えへへ!!」

「やっぱりなあクソが!!」

予想通りの答えに、俺は頼りない拳を床に打ち付ける。

「だってだって、天然物の魔法少女なんだよ!? コスプレなんかじゃなくて、ほんとに空を飛んだり魔法使ったりする、本物!! しかもそれが伊織君だなんて、もう自慢でしかないよね!!」

「そう言うと思ったから、ばれるのいやだったんだよ……」

『そう思うなら細心の注意を払ってください。彼女に合鍵を渡している時点で、室内での変身はリスクを伴うとわかるでしょうに……』

「大丈夫だよ伊織君。伊織君が魔法少女になってるだなんて誰にも言ったりしないし、一生秘密にするから!!」

AIしか聞こえないくらい小さな声で呻く俺に対し、ゆかりは俺の肩にぽん、と手を置きながら、安心して!! と心強い言葉をかけてくれる。

ただし。

「写真沢山撮るけど、1人で楽しむだけだし!!」

誰から見て心強い言葉なのか、というのは意見が分かれる所である。

コスプレ衣装をもう片方の手に持ちながら言われては、俺としてはどっちもどっちなのだ。

SNSなどもそれほど好きではなく、ネットリテラシーもしっかりしているゆかりのことだ、情報流出などの方面は全く心配していない。それよりも、こんな衣装を着た姿を写真に撮られる事が問題である。

「こんな可愛い女の子になった伊織君を皆に共有するなんて、勿体なさ過ぎてさ……私ね、始めてその姿を見てからずっと、似合いそうな衣装考えてきたんだ。そんな自然な感じの金髪なんて中々無いし、キュートなお顔の作りも考慮して、映えそうな衣装を厳選してあるんだよ!! そう、着て欲しいのがたくさんあるの!!」

「待て、待て待て待てよゆかり、怖い、いつになく目が怖いって……!!」  
妄想に花を咲かせているのか、とろんとした表情とは裏腹に、今の俺に注がれる視線は、突き刺さるというよりも串刺しにされそうな勢いである。まず間違いない、俺の話聞いてくれない時のゆかりである。

「駄目だよ伊織君、今から着るプリズムブライトちゃんは、常に笑顔の明るい子なんだから、もつと笑顔にならないと!! あそうだ、まずは下からしっかり準備しないとイケないよね。大丈夫、可愛い下着もしっかり用意してるから!!」

「まだ、何も言っていないんだけど……」

忘れてた忘れてた、といいつつ彼女が取り出したのは、これまた可愛い少女が着るようなデザインの下着の上下。今の身体には似合いそうだが、男の尊厳など一発で吹き飛びそうな仕上がりになること請け合いだ。

その圧力に気圧され、四つん這いになったまま後ろに下がる俺に対し、それらを両手に構えたままじりじりと迫ってくるゆかり。

「もう一年以上もお預けされてきたんだよ、伊織君が嫌がっても、今日は着てもらおうもんね……!! 一日くらい、講義休んでも問題無いし、今日はいっぱい楽しもうね!!」

「い、いやああああ!!」

AIのアシストが無ければ、俺は見た目相応の筋力しかないと、唯の少女である。

欲望ブーストが掛かった由香里に叶うわけもなく、まるで女のような叫び声をあげながら、呆気なく素っ裸に剥かれてしまう。満を持して差し出される子供用下着に、ごくりと嫌なつばを飲み込む羽目になる俺。

「あ、一眼レフは持ってきたけど、ビデオカメラ忘れちゃった……勿体ない……」

『ああ、それなら私が録画しておきましょうか。4Kどころか、細胞まで見通せるような、地球上ではありえない超高画質でマスターの痴態を保存しておきましょう。あとでデータをお送りしますね』

「助かります!!」

「俺は助からない!! ああ、わかった、わかったから、自分で履けるけるから!! そんなぴちつとしたパンツを履かせるんじゃない、せめて自分で履かせ……ひあぁッ!」

俺を着飾り堪能することで頭が一杯の為、話を全く聞いてくれないゆかりと、止める気0のAI。止まるどころか加速し続ける暴走に、俺の尊厳はいつまで持つのか。そもそも、このコスプレショーは、果たしていつまで続くのか。少なくとも、用意された大量の衣装は、着ざるを得ないだろうことは、間違いなかった。

「はぁ……はぁ……」

ぐったりとベッドに倒れこむ俺。軽く施された化粧がシートに付くことも考えず、今は兎に角横になりたかった。

全エネルギーを絞りつくした俺の燃料タンクには、ガソリンの一滴も残されていない。指一本動かす気力もない、死に体のような状態だった。

「はぁぁぁ!! 伊織君可愛すぎる……もつと衣装用意しとけばよかつたなあ」

精魂尽き果てた俺に対し、肌がツヤツヤなゆかりは大変元気が良かった。

そりやそうだろう、とつかえひつかえ着替えさせ、着ている衣装のヒロインのポーズと台詞をキメ顔で要求し、SDカードを2回変えるほど撮りまくってくれたのだから。挙句、まだ足りないと言わすのだから、本当に大概にして欲しい。

SDカードを何度も入れ替えながら、俺の痴態を満足そうに眺めるゆかりを見る俺は、きつと死んだ魚のように淀んだ眼をしているに違



いない。きつとハイライトは消えている事請け合いだ。

『マスターの動画は容量が大きかったため、ゆかりさんがお持ちのオンラインストレージに直接転送しました。変身ポーズ事にファイルは分けてありますが、本家を意識したエフェクトを追加した編集バージョンも同梱しておきますので、良ければご覧ください』

「うわあああ!! 凄いよAIさん、伊織君がリアルプリズムだあああ!!」

「……」

見た事の無いテンションで楽しそうに叫んでいるゆかりを見て、いよいよ意識が霞みだす。余計な事をするなどAIを叱る元気もない。今更掻く恥も残っておらず、つーつと流れ始める涙はとめどない。

訪れる眠気に従うがまま、俺は今度着せるコスプレ衣装の相談を始めたゆかりとAIの会話を子守歌に、夢の世界へと誘われるのだった。